
インフィニット・ストラトス 鏡映しのイレギュラー

横山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 鏡映しのイレギュラー

【Nコード】

N9517U

【作者名】

横山

【あらすじ】

女性専用の機動兵器ISが誕生してから数年。女性優位の社会へと変貌する中で、男にして唯一ISを起動しえた織斑一夏が表舞台に立った。それから数ヶ月、ISを起動できる二人目の男、井ノ上誠が織斑一夏に続いてIS学園へと編入した。一夏や他の生徒たちと次第に親しくなる誠だが、ISという超兵器の水面下で起こるうとしている異変に気付く。

プロローグ（前書き）

おそらくプロローグだけ読むと「作品間違えた」とか思われそうなので、一応の注意だけ。間違ってはいません。本編からISっぽくなる……はずです。

プロローグ

カイル・ノーマッドの物語はアメリカの有する大都市の一つ、ラスベガスから始まった。都市そのものが巨大なカジノで出来ているようなここは、昼夜を問わずネオンの眩しい光と活気に満ちている。いや、夜である現時刻こそその本性が現れ、もっとも騒がしくなっていた。人々が群がるのは、何もギャンブルだけではないのだから街の至るところで行われる、売春婦たちの誘惑と、より危険なドラッグの密売。神が実在するならば間違いなく鉄槌を受けるであろう、しかし今のところそんな予兆は微塵も無い都市には、夜空をかき消す人工の光と同等あるいはそれ以上の数におよぶ危険が潜んでいる。もっとも、カイル・ノーマッドにとつてはその危険も存在しないものと同じで、別段に興味も無い。隙を見せれば途端につけ込まれる誘惑は、逆にいえば隙を見せなければ意味を成さないのだ。それは隙を見せないのではなく、隙どころか完全に意気消失した男にとつても同じこと。

都市の中心部、カイル・ノーマッドは自分の車に乗り込んだままぼんやりと周囲を眺め、すでに一杯の灰皿へさらにもう一本を擦じ込む。指先が助手席を探り、また新たな一本を口元へ運ぶ。ジッポ―を取り出し火をつけるまで、ほんの少しの停滞すら無い。もはや習慣となった喫煙が作る、流動的な動作。対して、煙を吸い込むカイル・ノーマッドのほうは、まるで麻薬（もちろんニコチンもそれに含まれるが）をキメたように虚ろだった。

ほんの少し開けた窓より溢れる煙。そして外界の喧騒。届く音色はヘヴィメタルであり、テクノであり、ポップミュージックであり、狂気に当てられたデスボイスだ。もともと、こんなところに用事などなかった。休暇を利用した旅行、といえば聞こえは良いものの、ギャンブルに興味は無い。むしろ嫌悪を抱く。ではなぜ来たのか、とカイル・ノーマッドは自問し、だが答えは出ない。わからないま

ま、彼はアクセルを踏み込んで車道に戻る。

目指す場所などどこにも無い。そもそも、目的が存在しないのだから。ただ気ままに、いつそ強盗が自分を襲ってくれないかと馬鹿な願望を抱きつつ、目に悪い光の下を気ままに走った。

時間にしておよそ数十分のことである。どういった街にでもある、郊外の酒場へカイル・ノーマッドの車は止まっていた。エンジンは止まり、鍵はかけられ、持ち主である彼は酒場のカウンター席、その一番奥へ腰掛けている。しゃがれた声を出す、皺だらけのいかつい顔のバーテンダーに注文を述べ、老人の不機嫌そうな顔と共に差し出されたウイスキーを飲み干す。立て続けに五杯。頭がぼんやりとし、地震でも起きたように体が揺れる錯覚を覚えた。

「もう一杯くれ」

六杯目ともなると、さすがに老人も躊躇いを見せた。それはカイル・ノーマッドの体調でなく、その財布を心配する様子だ。この飲んだくれは、本当に金をもっているのか。もしかすると飲むだけ飲んで酔っぱらい、暴れた後に車で逃げるのではないだろうか、と。

何か言おうとした老人に、カイル・ノーマッドは鋭い視線を送って繰り返した。

「もう一杯くれ」

ややして、しぶしぶといった風に六杯目のグラスが置かれた。それが利口だろう。不確かな予測で無用なトラブルを買うより、大人しく従って気の済むようにさせるべきだ。支払いさえ無事ならそれでいい。それに老人の味方もいた。店内にいる客は、カイル・ノーマッドを除いて六名の男たち。彼らはこの常連で、大柄な体躯をした海兵隊員であった。何度か話もしたことがあり、見かけは粗雑だが信用は置ける。自他共に認めるタフガイが六人。いざとなったら、彼らがカイル・ノーマッドに支払いをさせてくれるだろう。そういう機会は実際、過去に何度かあったのだ。

不意に店のドアが開いた。新たな来客である。老人と六名がそちらに目を向けるが、カイル・ノーマッドは自分のグラスへ集中して

いた。その人物が隣へ腰掛けても、まったく気付かなかったのだから。

「一番安いバーボンを」

声が発せられて初めて、カイル・ノーマッドは隣に視線を向けた。眼鏡を掛け、小奇麗なフォーマルスーツを来た中年男性が一人。痩身なのに背が高いため、座っていても脆そうな印象だった。いや、それ以上にこの酒場と似合わない。もっと高級で金のかかるバーのほうで、違和感なく溶け込むだろう。

「飲みすぎじゃないのかい？」

男が言う。カイル・ノーマッドに向けて。一瞬、視線が交差した。男はカイル・ノーマッドのグラスを見たあと、表情を窺う。どこか医学的な光を帯びた視線だった。診察でもされているような感覚。こいつは医者だろうか、とカイル・ノーマッドは考える。

「君はアルコール依存症には見えないがね」

「そうかい。あんたに関係あるかね？」

無視すればいいものを、自然と答えてしまっている。男は言う。

「さあ、どうだろうな。それを確かめるのに会話というのは役立つんだ」

「俺は会話なんてごめんだよ。少なくとも、派生物を飲むような奴とは」

まただ、と胸中に呟く。

「派生物？」

「バーボンはウィスキーの派生物、というのを前に何かで聞いた。真相は知らないがね」

「知らないのに信じているのか？」

「信仰の自由はこの国の基本だろう」

苦笑と共にカイル・ノーマッドは述べる。しかし、不審でもあった。この男との会話は、どういうわけか嫌な感じがしない。かといって、なぜ自分に話しかけてきたのか、という疑問はある。相反するかのような二種の感情は、いつだって総じて懐疑心へと変貌した。

今回もその一つというだけだ。

「信仰か、なるほど。そう来るとは思わなかったよ、ノーマッド大尉」

一瞬、カイル・ノーマッドは驚きを露わにしてしまい、それを隠すより先に男を見た。

「会ったことが？ 失礼だが、覚えていない」

今のカイル・ノーマッドは私服を着ている。軍服でなければ、当然ながら階級章もない。であるからして、大尉という彼の身分と知っているのは面識のある人間に限られるはず。いや、それ以前に名乗っていないのだ。初対面の人間が知るはずのない情報が、二つ。

だが、男は静かに首を振った。

「いいや、直接は会ったことは一度も無い」

「ならあんたも軍人か？ 同じ部署で、俺の名前と顔だけ知っていたとか」

「軍人には違いがないがね、部署はまったく異なる。君は空軍、私は陸軍で所属はNSAだ」

NSA、その単語を舌の上で転がした。この国に存在する国家安全保障局、その略称。ただし信用できる組織ではない。前進ともいえる組織は軍保安局。つまりは軍部の一部であり、今なおその色は濃く残っているという。似たような情報組織のCIAと違う点は、彼等は人間を駆使した戦術を行うのに対し、こちらは高度な電子機器を主力として任務を行なう点だ。

これをカイル・ノーマッドはたちの悪い冗談と受け取った。酒の場で、現在は不要同然の軍人を前に話しているのだから、そう取られるのも当然。

「NSAのお偉いさんが、はるばるラスベガスまで何の用事だ？ それも必要とされなくなつた技術屋に」

「君を勧誘しに来た、とでも言えればいいかな」

大真面目に、自称NSA所属の男は言う。いつの間にかバーボン入りのグラスを持っていて、それを一口飲みながら続けた。

「君だけでは無い。大勢の人間が、今は必要とされなくなってしまった。多くの、それも極めて優秀な技術者たちが、だ。ただ一人の女の所業によって、太陽の下から遠ざけられてしまった」

刹那、それまでカイル・ノーマッドの顔に浮かんでいた嘲笑が消える。ひどく無感情で、冷たい瞳。その視線をもってして再び見た男は、穏やかな微笑をしていた。

「あんたがISなんてふざけた兵器を造らせるつもりなら、今すぐここからいなくなってくれ。そのバーボンの勘定は俺が支払ってやる。だから二度と俺の前に現れるな。すぐ腰を上げて、回れ右をし、そのドアから出ていってくれればいい。そうすればあんたが俺に殴り殺されることはなくなる」

表情と同じ、無感動な言葉。押し殺された怒りがそうさせた。グラスを握る手に力が入る。

だが、冷徹な宣告も男にとっては意味がなかったらしい。彼は微笑のまま、カイル・ノーマッドに言った。

「いやいや違う、そうではないよ。君を侮辱するつもりは毛頭無いんだ。聞いてくれ、大尉。私は君の兵器開発思想を読んだ。次世代戦闘機における光学ステルス技術を。いやはやまっとく、大した発想、設計と理論だった。あれが実現されれば、我らがアメリカ空軍は世界で最も優位に立てる、最高の航空機を誕生させていただろうに。敵はレーダーも肉眼も使えず、我々は一方的な攻撃を可能とする。私見だが、ISという得体のしれない技術より遥かに実現すべきものだ」

「大げさなご託だな。あんたはこう言いたいんじゃないのか？ そのステルス技術をISへ転用し、開発途上の第三世代すら凌駕する第四世代機を製作してくれ、と」

「なるほど。君の上官はそう言ったのか」

「ああ。断った結果が今の俺だ」
皮肉げに吐き捨てる。

「だが——」

と男は言う。

「先述のように、君を侮辱するつもりはない。私は君や君のような技術者にISの開発を行わせることは、それだけで星条旗に火炎放射を食らわせるようなものだと思うが、違うかね？」

じつと、カイル・ノーマッドは男の顔を凝視する。その腹の底を確かめようとするかの如く。だがどうあっても微笑の下の実態は拝めそうになかった。

「あんた、名前は？」

と、代わりに訊く。

「クリスチャン。フランク・クリスチャンだ」

「キリスト教徒らしい名前だな。あんたに神のご加護を、ミスター・クリスチャン。それで、あんたの目的は何だ？」

「君と同じだ」

にやりと、フランク・クリスチャンの口の端が吊り上がった。

「私は、ノーマッド大尉、この世界はISというものが存在した瞬間、つまりあの一人の女によって狂ってしまった、と考えている。

あの女が天才というのは認める。しかし、ISの力は巨大だ。有り余るほど、危険なのだ。数機で核に匹敵する抑止力となる兵器。それはたった一人の搭乗者の手に委ねられて良いものではない。そして同時に、今この世に誕生すべき存在ではなかった。いや、この段階で存在してはならなかった。未来兵器とでもいうかな。便利すぎるおもちゃは、その分だけ危険でもある。あれが引き起こした二次的被害については、君も重々、承知だろう」

「もちろん」

知らず知らず、カイル・ノーマッドはその話へ聞き入っていた。もしかしたら自分に興味を向けさせる建前かもしれない。そうは思ったが、しかしあの女とIS対する侮辱というのは、この上なく最高の肴となった。

「ミスター・クリスチャン、あんたはまさか、ISに対抗する戦闘機を作れ、とでも言うのかね？」

面白がった、単純な問い。冗談ともいえた。しかしそれに対し、フランク・クリスチャンはやはり微笑を崩さずこう答える。

「少し違う、大尉。私もそれは不可能と思う。いかに格闘戦^{ドッグファイト}に特化した戦闘機であっても、もはやISは航空機、いや現存する兵器で太刀打ちできる代物ではない」

「では、俺に何をしろと？」

するとフランク・クリスチャンの笑みは、より一層深くなった。

彼は言う。

「私は、大尉、君にISに対抗する兵器でなく、ISを凌駕する兵器の開発に携わってもらいたい。そこでは必ず、君の力が必要となる」

言い終わると、彼は懷を探って財布を出した。呆氣に取られたカイル・ノーマッドを尻目に、二人分の勘定を終える。それから向き直り、やはり穏やかに述べた。

「続きは車の中でどうだ、大尉？　ここから先の話は、アルコール抜きの方が良いと思うんだが？」

口元に妙な力がこもって、カイル・ノーマッドはようやく自分が笑っていることに気づいた。それは皮肉でも、ましてや嘲笑でも無い。自分の手でもう一度戦える。このしばらく続いている苦渋で怠惰な日々から抜け出せることを知った、歡喜の笑みだった。

「もちろんだ、ミスター」

そう答え、カイル・ノーマッドは席から立ち上がる。先導する男の後ろに続いて、郊外の薄汚れた酒場を後にした。少なからず胸に抱いた感情は、希望だっただろうか。

プロローグ（後書き）

前書き失礼しました。普段、おっさんばっか書いてる銃狂いの作者です。資料がアニメ版の知識とウィキしかありません。なんで、細部で適当に解釈したり付け加えたりしてます。ご指摘ありましたお気軽にどうぞ。

二人目 1

廊下に響く二人分の足音。無数の大部屋と外界を望む窓との間にできた通路に、それは心地よく響いた。早朝の日差しが差し込む中、汚れの一つすら見当たらない綺麗なここは、だがその二人以外に誰もいなかった。時間を考えれば当然のことである。ここは学校で、大部屋というのは教室だ。そこで毎日行われる事といえば、ホームルームの他にない。その重要性は差し置いて、教師が連絡する時に歩く生徒が居るわけはなかった。

とすると、この二人は何者か。先頭に行く一人目は、スーツ姿の女性だった。黒髪に、皺一つない服装としゃんとした背筋は、涼しげで凜とした印象を否応なく与える。教師と見て良いだろう。普段から見慣れている廊下になど目もくれず、無言で先導する。だがもう一人は違った。

女性の後に続く二人目。こちらは男性で、まだ若かった。むろん女性のほうも若い。だが、それより遙かに幼い印象。率直に表現するなら青年。別段、童顔というわけでもないのだが。

青年が着るのはこの学校のものらしき白い制服に、背丈は女性よりもやや高い。長身と称して過言でないだろう。邪魔にならない程度に切った黒い短髪は、肌の色と相まって日本人もしくは中国か朝鮮人そのもの。ただし、両目の色彩は濁った青色だった。その青い瞳は忙しなく周囲に巡らしては、興味深そうに、ほう、と息を漏らしている。廊下や建物の構造、というより学校という施設に対して珍しそうだった。そしておそらく見当違いでもない。制服を着慣れていないのか、どこか首周りが苦しげだ。ここの生徒であるなら、そんなことはまずありえない。

「そんなに珍しいか？」

「え？」

不意に女性から声をかけられ、青年の口から驚きに似たものが漏

れる。それほど集中していたのか。

女性が続けた。

「職員室を出てから、というかこの敷地に入ってからというもの、まるで子供だぞ。学校が珍しいのか、それともここの生徒に興味津々ということか？」

無感情な声音に、どこか冗談めかすような響き。青年は苦笑と共に返した。

「まあ、両方ですよ。今までこういう学校は通ったことが無いですし、生徒にしても興味はあります」

「異性としてか？」

あからさまに面白がるような口調ではない。取り方によれば、真面目に言っているようにも聞こえる。しかし青年はこう考えた。自分の緊張を和らげようとしているのか、と。

「どうでしょうかね。そこまで飢えている自覚はありませんが。：

…ありがとうございます、織斑先生」

後半、どこか真摯な感情が混ざった。唐突な感謝に、女性——織斑千冬はその足と止めて振り返る。別段、意外そうでもない視線。むしろ冷たいと言ってもいい。

青年は続ける。

「状況が状況とはいえ、俺はまともな学校を初めて見えました。先生のおかげです」

「何を馬鹿なことを。お前が初めてではない。私の弟もお前と同じだ。それに井ノ上、見れました、とはまるでここの部外者のようだぞ」

「では、まともな学校に通える、と訂正します」
穏やかな微笑。温厚な人柄をそのまま出した表情で、井ノ上誠は言う。

フン、と千冬は鼻を鳴らした。不満とも嘲笑とも取れる。あるいは感心とも。再び歩きながら言った。

「どうにもお前はあいつと似ている気がしてならない」

「弟さんですか？ 確か、一夏^{いちか}という名前の」

「なんでわかる」

「そりゃ、少し見てればわかります。先生がそういう口調で話すときは大抵、弟さんのことでしょう」

「口調を変えて話しているつもりはないがな」

「そうですか？」

洞察力に半ば呆れるような千冬に対し、呆れられた当人はあっけからんと述べてみせる。

「けっこう違いますよ。こう、普段だと少し冷たい感じなんですけど、それが嬉しげというか誇らしげというか、そんな感じの口調に変わるんです」

「……訂正する。奴はそこまで察しが良くない。むしろ逆だ」

「自己中心的？」

「いや、稀に見る朴念仁、唐変木だな。会えばわかる。——ここだ」
不意に一つの教室で立ち止まる。やはりホームルームは始まっているようで、ドア越しで室内の声が聞こえる。教師らしき女性の声だ。会話の内容までは聞き取れないが、だいぶ柔らかな口調だった。
「ここで待っている。名前を呼んだら入れ」

端的にそう述べた千冬は、返事を待たずして教室に入ってゆく。扉が閉まる音と共に、誠はこの事実を実感した。自分は一人の生徒として生きてゆく。少なくとも、卒業まで。

壁に背をあずけ寄りかかる。ふと見た教室の名を示す札は、一年一組。

——見事に一が揃ってるなあ。

特に意味も無く感慨。右腰のポケットに手が伸び、止まった。さすがにこの状況ではまずい。それも初日からでは。少なくとも寮の部屋までは待とう、と思いとどまった。まさにその時である。室内から千冬の声が届いた。

「井ノ上、入れ」

扉を開く。一步目を踏み入れた瞬間、部屋中からどよめきが生ま

れた。思わずそちらを見てしまう。

——すごいな。

意図せず独りごちる。教室いっぱいには、それでも支障や快適さを考えられた間隔で押し込められた生徒。その大半は、というか全て女性だった。彼女等はほとんどが日本人。ちらほらと外国人らしき人物が窺えたが、それも少数である。日本の女性だけで構成されたクラス、学園。——いや、違った。約一名、同胞を発見。

その男は意表をつかれたような目で、他の女生徒と同じく誠を見ていた。あれが千冬の弟、織斑おりむら一夏いちかだろう。しかし、誠本人の関心はやはり彼よりも周囲の生徒たちに向けられた。

——さすが日本、じゃない、さすがIS学園。やることが極端すぎて、俺の日常は肩身が狭くなりそうだ。

声を伴わない感想は、この男女比を見れば当然だったろうか。正面、向かう教卓のほうを見ると、やはり千冬とは違うもう一人の女教師。眼鏡をかけた彼女は、見た目からしても厳しさの一片すらない。

生徒だけでなく教師まで女性なのだ。その中で、男は誠と織斑一夏の二人きり。世の中にはこれをハーレムと呼ぶ輩もいるそうだが、そこまで言い放てるほどの度胸は誠に無い。むしろ性別の違いでコミュニケーションにどんな苦労をするか、と先を思いやられることで限界だ。

「えーと」

教卓まで来て、言葉に詰まる。何を言えばいいのか。その間にも視線は絶えず誠に注がれ、否応の無いプレッシャーを感じさせた。好ましい感覚とはまかり間違っても言えない。

と、

「はい、いまお話した転校生の井ノ上君です」

横から和やかな声。例の教師だ。千冬と対照的に、ずいぶん子供っぽい印象。童顔のせいだけではないだろう。とはいえワンテンポ遅れた助け舟に、ひとまずは感謝する。そうなっても生徒たちの

ざわめきは消えない。いや、悪化していた。大声を出して騒がないのが、逆に怖い。

「それじゃあ井ノ上君、自己紹介とかお願いしていいかな？」

「あー、はい」

自分までテンポが遅れそうになりながら、曖昧に頷いて正面を向く。

「井ノ上誠です。アメリカから来ました。よろしくお願いします」
軽く一礼。すると、

「あの」

一人の女生徒がおずおずと言う。日本人ではない。長髪の髪色はブロンドとクリーム色のちょうど中間あたり。その先端は綺麗に巻かれていて、頭には青いヘッドドレスらしきものを付けていた。

ふと、どこかで見たような気がする。デジャヴともいえない不確かな感覚。だが少女の問いはそんなものを吹き飛ばしてくれる。

「男、ですの……？」

「は？」

呆気にとられ、間拔けな声を出してしまう。その女生徒の妙な口調が、では無い。質問のほうだ。それほど意表をつく質問だった。

——どう答えりゃいいんだよ。

別段、女っぽい自覚などないし、他人からも中性的とはお世辞にも使われたことがない。というか、自分が女だったらさぞかし気味の悪い光景になるだろう、と思う。

「オルコット」

冷水のような呼び掛け。千冬だった。途端、誠は気づいた。あの少女、どこかで見たと思ったが、そのはずである。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。先日、ここに来る前に送られた資料には、クラスメイトとなる一覧が顔写真付きで送られてきていた。このクラスの候補生は、セシリアを含め三人。この三名に限っては特に詳細を与えられている。候補生には目を光らせておけ、ということだろう。

誠の目の前で、そのイギリス人は訴えるように言う。

「い、いえ、先生、だってその以前にも……」

セシリアが別の方向を向いた。と、彼女だけでは無い。クラス中の目が誠を離れて、ある一点に集中する。

「へ？」

妙な声。誠は先ほどの自分を思い出し、新たな標的もとい注目となった人物に同情を覚える。

全員の視線の先、座っていたのはブロンド色の髪をした少女だった。やはり日本人では無い。彼女も知っている。セシリアと同じく資料で見た顔。その名前を思い浮かべ、唐突にこの集中砲火の理由を悟る。

もつとも、

「ちよ、ちよつと！　なんでボクなの！？」

当の本人——シャルロット・デュノアはまるでわかってない。顔を赤らめ狼狽する姿から、過去の所業を想像することは難しい。確か、彼女はある意味で自分と同じような立場にあった、と誠は記憶を探る。

ISという化け物じみた女性専用兵器が誕生し、その中で発見されたイレギュラー。それが織斑千冬の弟、織斑一夏である。男にして唯一ISを扱える人間。当然ながら、各IS研究企業もとい国家はその情報を探りたがった。シャルロットは、以前にシャルルという偽名を使い、男としてこのIS学園に入学したらしい。彼女の父がトップに立つフランスはデュノア社からの指示なのは当然だが、なぜそれに背いて女として生活しているのかは不明。

「当然ですわ。前科がありますし」

と、セシリア。

「前科って、あれはだからその——」

「そういえばそんなこともあったらしいな、シャルロット。私の嫁に何をした？」

また別の乱入者。小柄な少女だった。どう見てもセシリアやシャ

ルロットより小さい。だが存在感もとい風格というものがあつた。その正体は彼女自身か、もしくは長い銀髪と左目を覆う眼帯だろう。もう一つの赤い右目、唯一の視界であろうそれは細く研ぎ澄まされていた。どこことなく千冬に似た印象。

彼女だけは資料を見る以前から知っていた。ドイツ軍所属の同国代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少佐だっただろうか。ISの配備された特殊部隊で、最年少メンバーであり指揮官を務めている。その筋では有名人だ。

「いや待つて、何でラウラまで!？」

「嫁の安全を守るのは私の責務だ」

少佐は豪語する。自然と述べられるのは、普段から口になっている慣れだろうか。そんな予想をしつつ、誠はある点に気づいた。

——嫁、って言ったのか……？ 旦那の間違いだよな。

確認しておこうかと思つたが、雰囲気がそれを許さない。

「……一夏あ」

言葉どころか反論も見つからず、彼女が助けを求めたのはイレギュラーの男だった。織斑一夏。もう一度、その名前を噛み締めてみる。ISを起動させた最初の男。今では専用機も所有しているという。

自分に向けられた懸念へ、彼は気づいていない。むしろ誠も表情に出していなかったため、当たり前ではある。シャルロットに誤魔化すような苦笑を浮かべて言う。

「嘘じゃないしなあ。……悪い」

「一夏あ!」

裏切られたような叫び。いや実際そうなのだろう、彼女にしてみれば。半分涙目になっている。

と、誠の横で鋭い咳払い。千冬だ。場の空気を一転させる。やや、というかほとんど騒いでいたクラスは、途端に静寂を取り戻す。冷凍庫並みに温度の下がった教室で、最初に口を開いたのはその弟。

「あー、えーと、とにかく男ってことでいいんだよね？ 井ノ上…」

…だったか？」

「そういうことにしてくれ。女になった自分なんて、想像したくもないよ」

肩を竦めて苦笑。向こうも同じような表情を返した。どこか同情的。

「てことは——」

誰かが言う。その相手を探すことは不可能だった。刹那、

『本当に男！？』

「！？」

何重にもなつた少女たちの叫び。誠が背筋を硬直させたのも束の間、矢継ぎ早に個人の大声が飛び出す。

「なになに、じゃあ二人目？ 織斑君だけじゃなかったの？」

「しかも結構かつこいいよ！ なんていうか、織斑君と似てるけどまた違った感じで」

「あ、わかる。遅しいのに凜々しいっていうか、頼りなくなる感じ！」

「井ノ上君、でもさっきアメリカって言ったよね？ なんで日本人名？ あ、帰国子女ってやつなのかな」

口々に勝手な評価を推測混じりで述べてくれる。聞く限り、第一印象は悪いわけでもないようだ。そこは救いだろ。誠の抱いていた第一の不安材料は、ここに馴染めるか否か。同性の一夏とはどうにかなるだろうが、問題はその他大勢の女生徒。九割以上が異性なのだ。放り込まれた男の気苦労は、相当なものだろう。現実 to 今の誠がそうだ。すでに胸中では「帰りたい」と何度となく呟いている。一夏に対し、尊敬にも似た念が生まれた。

「し、静かに！ まだホームルーム中ですよ！」

隣でおろおろしながら呼びかける眼鏡の教師。責任感はいっかりしているらしい。それに効果があるかは別として。あきらかに気圧された声が、届くはずもない。

「皆さん、いい加減に——」

「静まれ、馬鹿ども！」

言いかけた同僚を遮り、一括。落雷の如き衝撃が教室を揺さぶる。雷を落とした人物。いくなれば雷神は苛立ちを露に顔をしかめていた。むろん千冬である。今に限り、雷神そのものより凶暴で恐ろしい存在だ。これは誠だけの印象ではない。クラス中がそう認識したからこそ、騒ぎは一瞬で静まった。

静寂を確認し、千冬は淡々と告げる。

「織斑、井ノ上を案内がてら先に準備に行け」

「は、はい。けど、ちふ——織斑先生、ISは……？」

「井ノ上は専用機持ちだ。さつさと連れて行け」

弟にも容赦が無い。私生活でもこうなのか、それとも公私の境界線ができていただけなのか。若干、気になるところ。

千冬は誠へと向き直り、

「井ノ上、クラスには追って紹介してもらおう。次はISの実習だ。

お前には必要ないだろうが、大半はほとんど操縦経験が無い。他の専用機持ちと一緒に手ほどきしてやれ。その前に、余裕があるようだったら織斑と模擬戦をやってもらおう。軽い運動程度に」

「わかりました」

気を取り直して首肯。千冬は小さく頷き返すと、目で一夏を促した。先導して歩く一夏に続いて、やや足早に教室を出る。ドアが閉じた瞬間、二人は静かに嘆息した。

井ノ上誠。一夏の興味はまずその名前へと向けられた。アメリカ出身で日本人の名。当然といえばそうだ。女生徒の中にも同じ質問があつた気がする。

「ハーフなんだよ、親父は日本人で、母さんはアメリカ人」

更衣室で二人揃って着替えながら、誠は言う。

「じゃあ、親父さんが日本人名にしたかったのか？」

「いや逆だ。むしろ母さんのほうが日本好きだったらしい。フジヤ

マ、ゲイシャ、って具合に。親父はアメリカ名にしたかったらしいけど、結局は押し負けたんだ」

「へえ。国籍もやっぱり日本なのか？」

「それがなんていうか、ちょっと特殊でな。一応、軍属で市民権があるからアメリカ人になるらしい」

他愛の無い雑談。スーツに袖を通す。

「それじゃあ、ラウラと同じような？」

「似たようなもんだらう。彼女、少佐だったよな。俺はただの少尉で、少し前までは上等兵だ」

「何か、すごい昇進してるな」

「ああ。本当は紛争国派遣軍の末端にいたんだよ。朝から晩までドンパチばっかだ。それが偶然、ISなんて動かしたもんだからな。階級上げて、ここに来ることになった。仲間にはカマダの何だのと笑われたよ」

思い出し、苦笑する。

「それってつまり、戦闘とかも……？」

「ドンパチばっか、って言っただろ。いつまで経っても慣れないけどな。ほら」

自分の肩、そこにある刺青を見せる。描かれた部隊章は、

「レインジャー連隊……？」

呟くように一夏。どうにか文字列を読み取ったらしい。察するに、あまり英語は得意でないのか。

「我が最愛で馬鹿な友人たちだ。戦争より芸人でも目指したほうがいいような連中だよ」

第75レインジャー連隊。その部隊名に思いを馳せる。あそこにいたのは僅か一年程度。それでも多くを学び、友人を得た。おそろく二度と合うことの無い友人は、脳裏に焼き付いて笑いかけてくれる。

着替えを終えると、一夏がこちらをじっと見ていた。

「アメリカって、ISに独自改良でもしてるのか？」

「なんで？」

「いや、それ」

誠を指さす。正確には、着ている服を。一夏のスーツは胸部と下半身のみを覆い、つまり腹部は剥き出しになる。通常、このタイプが主流だ。

対して誠のほうはというと、全く異なる形状。首元から足までを覆う、黒い艶消しの全身服。肘と膝の関節部にはプロテクターがあり、胸部と脇腹はやや分厚い。防弾目的のパッドのせいだ。貫通性の高いライフル弾は無理でも、拳銃弾ならどうにか守ってくれる。

「ああ。……まあ、そういうことになるか。例えば、お前や他のISって装甲の隙間が多いだろ？」

小さな首肯。誠が続ける。

「俺のは最初から実戦性能、というか兵器としての性能だけに特化してるんだよ。シールドのエネルギーが少なくても別に回せたり、シールドが無くても戦える。その延長線でこれだ。ISが起動できなくても、ある程度の戦闘が可能。任務放棄は最終手段にできる」

「……人使い荒いんだな」

「軍はそういうもんだ。というか、俺からすれば他がおかしい。専用機を持った時点で、国家なり軍なりに所属しなきゃならない。野放しにできるもんじゃないだろ。組織に管理されない力は驚異でしかない。管理されるなら、その特性を最大まで引き出す必要がある。シールドが切れて弾受けるのが怖いです、なんて理由で戦線離脱して、そのせいで味方が何人も死ぬなんて冗談だけにしたいさ。依存するにもほどがある」

言い終わり、気付く。こちらを呆然と見やる一夏の表情。陰りを垣間見せたそれに、原因は自分にあるのだと悟る。こんな話題が楽しめるわけもない。楽しめるとすれば、それは戦争狂か死にたがりくらいだろう。まして誠と一夏はまだ会ってから一時間と経っていない。

「悪い。気にしないでくれ」

表情を曇らせるクラスメイトに言った。しかし心のどこかでは、違和感もある。彼もいずれば戦争の道具となるはず。それがこの程度の自覚で良いのか。

もつとも、それは遠い未来の出来事だろう。疑念を押し殺す。命のやり取りは、その覚悟ができてから考えればいい。年齢を考えれば自分のほうがイレギュラーなのだ。

「さて――」

気を取り直し、口調を明るくして言う。

「どこから出ればいいのか案内してくれよ、織斑先輩。俺は来たばかりなんだ」

「ああ。一夏でいいよ」

「そうか？　じゃあ俺も誠でいい。ともかく、よろしく頼むよ、一夏」

互いに微笑みを交わし、右手を差し出す。一夏の右手がそれを握り返した。気が合うかどうかは別にして、彼との仲は円滑にしておきたい。ここまで来て友人の一人も作れないとは、それこそ悪い冗談だ。

空にいる。これまでも数回、味わったことのある感覚を一夏は感じていた。航空機は機体を押さえつける重力と抗力に対抗するため、常に移動し、揚力と推力を獲得しなければならない。この二つが無くして空を飛ぶことはできず、静止状態を維持できるヘリコプターも実際は動き続けているわけだ。

これが通常の飛行。完全な静止は不可能とされた、航空機の現実。一見すると自由な空は、実のところ制限が多い。飛んでいる間、絶えず消費される燃料もその一つだ。それらに縛られない唯一の例外がISである。燃料の概念自体を持たず、完全な静止を可能にした存在。移動範囲は全方位に渡り、戦闘機より素早く機動性に富み、戦車並みの火力を備えた最強の兵器。

一夏にとってこれが兵器であるという実感はなかった。今、彼にあるのは己の手にある力、という確かな感覚のみ。守るべきものを守れる力。これまで味わった無力をぬぐい去り、他者を救うために与えられた力だ。胸中に沸き立つ充実感と、空を自由に動ける開放感。二つの感情を抱き、そっと仕舞いつつ前方の機影と対峙する。

自機、白式びやくしきという名を体現したかのような白いISに、チャンネルを受信。前方のISからだ。

『準備はいいか、一夏？』

誠の声。気さくな口調だった。あの機体、あれに誠が乗っている。それは更衣室で聞いた通り、白式やその他のISとはまったく異なる外観をしていた。通常、ISは搭乗者の顔が剥き出しになる。これはシールドによって空気抵抗など、その他多くの力から防護されるからだ。実質、ISには最低限の装甲しかない。その分だけ性能を上げてはいるが、誠の指摘したシールドへの依存もあるのだろう。

対して誠のISは、足元から頭頂まで全てを装甲で覆われている。

直線的なフォルムをした外観は全体に繋がり、顔にはフルフェイスのマスク。両目の辺にセンサーらしきカメラが収められているが、右目だけでも一つ、斜め上に三つ目のカメラがある。補助的なものだろうか。昔見た戦隊ヒーローやロボットアニメを思い出す。両者が混同すると、きつとこんな風なのだろう。いささか凶暴なのは、誠の言うとおり純粋な兵器だからか。シールドを防御手段でなく、空中機動戦における一つの役割とした、まったく新しいISだ。

「もちろん」

笑いながら答えて、誠の装備を見る。右手にライフルが一丁。両腕には、外側へ膨らみがある。内蔵式の武器だろう。次いで左腰の辺に、棒状の物体が下げられている。それが見た目通りの代物なら、日本刀。妙な感じた。量子化しない標準装備なのかもしれないが、それでも現代風の銃器で武装しながら刀を持つというのは、どこかおかしい。

——なんか、似てるなあ。

声に出さず呟く。思い出したのはラウラだ。少し前、シャルロットと共に編入してきた彼女は、初対面でいきなり張り手を食らわしてくれた。あの頃、といってもほんの少しの期間だが、それでもラウラはもつと冷たい人間だったのを覚えている。見た目が軍人なら、中身もそのまま。いや、人間というよりどこか兵器の一部のような少女。唯一の人間味は、一夏の姉、千冬に対する敬意とプライドだけ。

誠はまったく違うが、それでもあの頃のラウラと似ている気がする。表立って冷徹に見せるのではなく、胸の底に剥き出しの牙を隠しているような。必要になるそのときまで決して晒すことのない、殺意の刃。そういうものを感じた。もつとも、会ったばかりで確信することもないだろう。思い込みかもしれない。いや、思い込みのはずだ。

『二人共、準備はいいな』

千冬の声が響く。アリーナの塔、そこから届くものだった。他の

生徒たちは、観客席で模擬戦の見学となっている。

「こっちはいつでも」

「同じく。——あー、待った。一つだけ」

思い出したように誠が述べる。

「どうしたんだ？」

「俺はお前の機体、白式だったか、それについての概要程度は知ってる。けど、お前はこっちの情報を知らないだろ。模擬戦だからってわけじゃないけど、フェアじゃないのは性に合わないんだ」

「？」

首をかしげる。

「自分の機体の情報を、自分が白式について知っている程度に教える、ということか？ 井ノ上」

と、千冬。

「そういうことです。構いませんか？」

「構わんが、手短にしろ。それと後悔するなよ」

「了解」

苦笑混じりに誠は答え、それから続けた。

「それじゃあ一夏、手っ取り早く説明するから聞き逃すなよ」

「わかった」

「頼もしい返事だ。俺の機体はブラックウイドウ。アメリカ空軍の実験機だ。実験目的もあるが、ちよつと特殊な機体の性質上、世代分けは難しい。とりあえずは三・五世代と考えてくれ」

「第三世代と第四世代の間、ってことか？」

「そうなる。あくまで分類は。性能としては、現時点で第三世代機と同等だろう。主兵装は今持つてるアサルトカービンガウスライフルの他に、特殊ショットガンと軽機関銃、対地攻撃用の電磁加速砲フレンチトランチャー。背部の翼の辺と両肩には対空ミサイル。こいつは二種類あつて、自律追尾とアクティブ・ホーミングだ。副兵装、というか近接戦用に、右腕には五ミリのチェーニングガン、左腕には四〇ミリの針散弾砲を装備している」

「全距離に対応する多目的型……でいいのか？」

『そう思ってくれ。本当は奇襲用なんだが、これじゃあ奇襲も何も無いからな』

「その腰の刀は？」

先ほどから気になっている点を訊く。

『ああ、これか？ 今のところは飾りだよ。開発者が俺の母さんみたく日本好きだったらいい。何も切れないナマクラだ。カービンの銃剣のほうがいやすいしな——さて』

最後、語尾の調子を僅かに落とし、言う。

『こんなところか。始めるぞ、一夏』

あくまで調子を崩さず、飄々として告げる。余裕すら感じられた。リラックスでもしているようだ。

「わかった」

携えた長刀を構える。名を雪片ゆきひろ式型。白式の有する唯一の装備であり、かつて姉の千冬が使ったISの装備の後継。これを手に取る度、感じるのは同じこと。姉は一線から離れた。今度は自分の番なのだ、と。

雪片を右下段へ。ブラックウイドウは全距離に対応可能。対して白式は近接戦のみ。間合いを置かれては不利だ。一気に距離を詰め、斬り上げて倒す。注意すべきなのはカービンやミサイルよりチェーングンとランチャー。射線を掻い潜り、間合いを取らせない。肉薄したまま勝負に出る。

薄く息を吐き、吸い込む。静かな呼吸を二度繰り返して、視線を定めた。

カービンを確認。セレクターはバースト位置にある。フルフェイスマスクの内部に出力されたディスプレイへ、視線入力で操作。FCS（火器管制システム）を呼び出して、全兵装の安全装置を解除。次いでマスタースタームをオンへと切り替える。戦術システムは高機動戦闘に設定し、アサルトカービンを構えた。機体連動のレーザ

照準装置に、目視射撃のための光学照準器が取り付けられている。銃身下部には銃剣を収めた金属ケース。

白式を見る。戦術補助システムは白い機体を敵機として認識、特性ロックオンにより全方位リーダーへ記憶させる。解析された距離は三〇〇メートル。カービンの有効射程範囲は七百メートルだが、空中での機動戦闘だ。誤差を含め、ぎりぎり戦闘中の命中範囲といったところ。容量二百発のドラムマガジンのため弾幕を張るのもいいが、それはやりたくない。戦術的問題でなく、性に合わない。

一夏はどう動くだろう。間合いを詰めようとするのは確実だ。問題は左右から回り込むか、正面か。むろん上下も考えられたが、構えを見る限り可能性として高いのは右か正面。白式は唯一の武器である実体剣を右斜め下に構えている。速度、威力を活かすのであれば、先述の二択だろう。もしくはフェイク。下段と見せかけ、上段もしくは八相か。視界を遮る上、被弾面積を増す正眼はありえないや、それならば八相も同じはず。脇に構える八相から繰り出せるのは、突きか袈裟斬り。ISの機動性を考えれば突きによる対応は難しい。袈裟斬りにしても隙が多いはず。とすると、やはり下段からの斬り上げ、上段からの斬り下げの二択。

選択兵装を確認。特殊ショットガンを最優先で使用可能にしておく。榴弾から散弾、スラッグ弾までを放つセミオートの散弾銃だ。場合によっては、カービンからそちらに切り替える。軽機関銃は中距離向きだし、ガウスライフルは威力こそ強大なものの取り回しと連射性に欠ける。そもそも空対地攻撃の兵装なのだ。今回、出番はないとして間違いない。

カービンの照準装置を起動。ディスプレイの白式に着弾点が重なった。刹那、模擬戦開始のブザー。

白式が動いた。最大速度で接近。正面からだ。

トリガーを絞る。マズルフラッシュと共にカービンから弾丸が放たれた。五ミリという小口径ながら重金属弾頭を使用した徹甲弾。それが三発。ワントリガで三連射を放つバースト機構。立て続けに

それを三セット撃ち込んだ。計九発の弾丸を、白式は縦横へ移動して回避、なおも向かってくる。

次の一手は決まっていた。誠はバク転するように回り、地表へ向かう。ブラックウイドウが垂直に降下。三次元レーダーを確認。白式はそのすぐ後ろを追っていた。

「シヨルダーオープン、オートサーチミサイルASM、六。通常弾頭、ペネイド」

音声入力により両肩の上部装甲が浮き上がる。内蔵された小型のミサイルが各三発、姿を晒す。火薬量を減らし、機動性を重視した誘導弾。最後に付け足したペネイドとは、赤外線追尾ミサイルを惑わすフレアなどへの対抗手段だ。白式にそういう装備は無いようだが、危険は置かせない。確認と状況分析のために選択した。

「ファイア発射」

六発を同時発射。ミサイルはブラックウイドウを先導するかのよう
に前方へ飛び、二秒を置いて一斉に反転。誠とすれ違って後方に
向かう。同時に誠自身も百八十度、向きを変える。降下に急制動を
かけ、カービンを白式に。

『くっ……！』

一夏の呻き。トリガーにかかったブラックウイドウの指が、操縦
手に生じた一瞬の驚愕に止まる。

——回線を閉じてないのか？

馬鹿な、と耳を疑う。模擬戦といえど仮にも戦闘なのだ。通信チ
ヤンネルを開いたまま戦っているなど、信じられなかった。油断か、
それとも力量ないし経験不足。

「甘く考えすぎじゃないか、一夏」

囁きかける。もっとも、こちらは送信していないため聞こえてい
ない。

ミサイルから逃れるため、白式は機動を変える。上方へ退避。そ
こに誠は六発を撃つ。最初の三発は直接、残りは回避した先を読ん
だ見越し射撃。その判断は正しい。

『くそっ！』

三発を避けた直後、次の弾丸が白式を直撃。体勢が崩れ、速度が落ちる。一夏が立て直すより先に、ミサイルは追いついていた。

終わった。そう悟る刹那、だが誠は己を過信したことに気付く。

一夏に逃げ場はなかった。六発のミサイルに囲まれ、それらはすでに撃発位置の寸前まで来ている。おそらくは思考による選択ではない。瞬間的な判断だった。白式は一発のミサイルへと逆に接近し、長刀雪片を振るって飛び去る。半ばの位置で分断されたミサイルは一コンマ遅れて爆発し、それが残る五発を誘爆させたのだ。

空の一点に誕生した粉塵より、白式は姿を見せる。

『強いな、誠』

まだ開きつばなしの回線から語りかけてくる。まるでスポーツでもしているかのように、軽く息が上がって楽しげな口調。応じるか迷った末、送信。

「お前もなかなかやるよ。最も、戦闘中に敵と会話するなんてのは、馬鹿のやることだ」

『お前に言われると、何ていうか重みがあるなあ』

互いに笑う。カービンを構え直した。アンダーバレルより銃剣が現れる。片刃のそれは、刃渡りおよそ三〇センチほど。ついで戦術システムを変更。高機動戦闘から格闘戦へ。

「一夏、仕切り直した。この後、実習があるならあまり時間もかけられない。格闘戦で終わらせよう。その方が得意だろ？」

『いいのか？ 俺の専門だぞ』

「やれるものならやってみる。言っておくと、この銃剣はちよつと特別な材質でな。劣化ウランの刃がシールドにどれくらい効くか、試してみたいんだ」

『誠、ちよつと怖いぞ。……でも、俺も負けないからな』

「負ける気だつたら許さねえよ」

白式が降りてくる。そしてブラックウイドウも上昇した。互いに同じ高度となり、対峙する。距離は僅か十メートル足らず。

——なんだ？

不意に、誠は自分が笑っていることに気づいた。しかし、何故？ この模擬戦が面白いのは確かだ。それにこの織斑一夏という奴は、話していてなかなか楽しい。だからといって、戦闘を楽しんでいるのか。

——そんなわけがあるか。

言い聞かせ、目を閉じる。再び視界を戻したとき、笑みは消えていた。左手を銃身にやる。同じくして白式が下段へ構えた。剥き出しの一夏の表情は、こちらを見据えて動かない。

仕掛けはほぼ同時だった。最初に動いた誠に、一夏が追いつがる。肉薄し、銃剣を振り上げた。狙うは首筋、右頸動脈。突き出された刃は、しかし割り込んだ雪片の刀身に阻まれる。瞬時に刃を退き、胸部へ。だがこれも防御された。

白式が攻勢へ転じる。横なぎに振るわれた雪片を、誠はバク転めいた動きで回避。体勢を戻す寸前、足払いをかける。

『うつ………！』

一夏の声。これだけ近いと無線を介さずとも聞こえただろう。体勢を崩したところで後ろへ回り込み、カービンの銃床をその背へ叩きつける。

『………！』

押し殺された呻き。仰け反るような格好になった白式だが、それは敗北ではなかった。誠が振り向くより先に、機体ごと回転させ雪片を振るう。その刃を寸前で受け止めた誠は、後退しつつ三度の突きを繰り出した。右肩、右胸、左頸動脈の順に狙った切っ先だが、どれもより分厚く精練された刀身に邪魔される。突きの分だけ鳴る金属音。頭部を狙った回し蹴り、それを一夏は身を沈めて回避した。刹那、雪片式型は青白く発光する。

——ワンオフ・アビリティ！

瞬時に理解するも、手遅れだった。雪片が形を変える。刀身は実体でなくレーザーのような光体へ。淡い光が目^{れいらく}に焼き付いた。零落^{びやく}、白夜、白式の有する特殊能力。シールドエネルギーを消費する代わ

り、相手のシールドを無効化する剣。それがブラックウィドウへと迫る。

「クソっ！」

寸前の回避。だが遅い。胸部装甲が切り裂かれる。その瞬間、デイスプレイのシールドメーターが激減。損傷のなかったシールドが、たった一撃によりゼロへと変わる。直後、終了のブザー。

『勝者、織斑一夏』

短い宣告。それが全てだった。

『か、勝った……？』

やや遅れた一夏の声。半信半疑の事実を確認するように。思わず、呆れたような苦笑が漏れる。

「なんでお前がびびってたんだよ」

『いや、まさか勝てるとは……。俺のシールド、あと二〇パーセントも無かったんだ。そこに零落白夜が発動したから、一気にシールドは削られるし、もう無我夢中で……』

「要するに偶然だったのか？」

『たぶん、そうだと思う。勝ってこんなに疲れたのも初めてだ』

「負けた俺にそれを言うかね」

わざとらしく言ってみせる。すると一夏は笑った。その顔を見ていて気付く。先ほどと同じ。自分も笑っているということ。

——どうしてだ？

フルフェイスマスクに隠れた微笑のさらに下。精神の奥底で自問する。

——どうして笑っていられる。これが実戦ならば死んでいたかもしれないのに。……戦いを楽しんでしまっているのか？

どうにも納得がいかない。しかし精神は明らかに昂揚している。

心地よい満足感。

戦闘に感情を持ち込んではいけない。それはレインジャー入隊以前、幼い頃よりの戒めだったはず。怒ってはならない。憎むことも許されない。ただ戦い、生き延びることを考えろ、と。でなければ

死ぬだけ。自分がではなく、隣にいる仲間が。戦争そのものでなくとも、戦闘や兵器を道楽とした時点でそうなる。まして楽しむなど言語道断だ。——そのはず。

『誠？』

怪訝そうに一夏の問いかけ。我に返る。

「なんでもない。——胸張ってくれよ、一夏。偶然だろうが、お前が勝ったんだ」

『ああ、もちろんそうするよ』

戦闘モードを解除。マスターアームをオフ、セイフティを全兵装にかける。ブラックウィドウが緩やかに離脱した。白式と正反対の方向へ向かいつつ、空を仰ぐ。

一緒に来い、お前は俺たちの仲間だろう、と。遠い太陽よりさらに彼方、記憶の淵に霞む古い友人から言われたセリフが、おぼろげに蘇った。

午前四時半。いつもと同じその時間に、誠は目を覚ましていた。場所は学生寮の一室。隣から聞こえる寝息は、同室である織斑一夏のものだ。二人しかいない男子生徒なのだから、相部屋になるのは当然。まだ寝ているのも当たり前。少なくとも、誠以外の人間にとっては。

ベッドから起き上がり、タオルを取って軽く顔を洗う。それから水を一、二杯。それから荷物を確認する。昨夜、この部屋に到着した時点で、持ち込んだ荷物は全て運ばれてあった。着替えがいくつか、金属ケースに日用雑貨品。それと写真立てが二つ。両方ともベツド脇に立ててあった。一つはレインジャー時代の写真。陸軍のACU迷彩服を着て、M4やM16ライフル、M249SAWを携えたレインジャー隊員がおよそ十名。どれも笑顔で、若い。活力溢れる有能な若者を欲するレインジャーでは、十代の兵士も珍しくなかった。その中に誠もいる。ただし、アメリカ製の銃器でなくロシアのカラシニコフ小銃を持って。

連中はどうしているだろう。不意に思う。まだ生きているか、死んでいるか。生きているなら戦場か、故郷か、あるいはフォート・ベニングかグリーンベレーの訓練課程。できれば生きていて欲しいと願った。いつか風の噂で戦死を知っても、嬉しいはずがない。

もう片方の写真立てにも、やはり中身がある。そこに写っているのは兵士でなかった。男が三人と、少女が二人。男の一人は誠だ。もう二名は体格の良い大柄な人物と、白衣に眼鏡という典型的なインテリ系の人物。少女のほうは誠と同年代ほどだろう。一人はショートカットの活発そうな姿で、もう一人は大人しそうな長髪。対照的な二人だ。どういう経緯でこの五人が集まって写真を撮ったのか、当人たち以外では首を捻ってもおかしくない。それほどおかしい組み合わせである。

しばらく二枚の写真を見つめ、目を移した。金属ケースへ。射撃に心得のある人間なら、これがどういうものかわかるだろう。誠はケースを開き、中を確認した。金属と木材とが組み合わさったカラシニコフことAK47小銃が一丁。これは写真で持っていたものだ。どういうわけか、この銃が気に入っている。その脇で、鈍く光る自動拳銃が二丁。シグザウエル製P226に、コルト・ガバメント。後者にはレインジャーの刻印があった。除隊の時、友人が記念にくれたものである。

別段、これらの銃器を使って何らかの特殊作戦を敢行するわけではない。IS学園には射撃場もあると聞いており、そのために持ってきただけだ。むろん万が一に備え、実弾もあるにはあるが。

カラシニコフへ手を伸ばしかけ、だが寸前でシグを掴む。ケースの中敷きを押し上げ、クリーニングキットを取り出した。ベッドの上に布を引き、シグを分解する。ペイント弾を詰め込んだ弾倉を抜き取り、チャンパーを確認。装填済みの初弾がある。それを取り出して、安全装置を下方に動かす。と、フレームが外れた。物音を立てないよう慎重に抜き取ると、バレルとスプリングとを外して点検する。

これはもう日課だ。一度、目の前に飛び出してきた敵兵が、暴発した自分の銃に顔を引き裂かれるという光景を見てからというもの、欠かさず行なっている。本当は三丁ともやりたいが、時間がかかってしまう。なので一日に一丁。

グリースを塗った布切れで磨き終わると、組み立てを開始。油臭さが無いのは換気扇のおかげだろう。その後、シグに安全装置をかけてベルトに挟み、窓の方へ向かう。開け放つと、やや暖まった夜気の、しかしそれでも涼しい風が通り過ぎてゆく。

誠はズボンのポケットへ手を伸ばした。今の彼は、レインジャー時代と同じACU迷彩の上下。使い古した物はどこか安心感があり、着心地も良い。これはそんな一着だ。そして取り出されたのは煙草とジッポー。胸にはペンダントよろしくかけた携帯灰皿もある。窓

から顔を突き出し、一本を吸った。昨日、教室前で留まったのがこれだ。寝起きにはこれをやらないと落ち着かない。

赤とも紫とも、ましては夜の藍色ともいえない鮮やかな朝焼けを眺めながらの一服。昨日、ほとんど吸っていなかったせいか頭がぐらりと揺れた。それが心地よい。部屋のドアが僅かに音を立てたのは、その時だ。

身についた経験とは時に厄介なもので、こういうあからさまに不審な時、即座に対応してしまう。煙草を灰皿に押し込み、振り向くドアへ向き直った頃、誠の手には安全装置を解かれたシグがあり、人差し指がそのトリガーを僅かに絞っていた。

「誰だ」

問いかけ、右へと移動する。ドアから死角となるように。

「もう一度訊く、誰だ。三秒以内に出てこい」

若干の脅しを含ませて告げる。といっても本当に脅した。先述の通り、シグに装填しているのは実弾でなくペイント弾。相手が本物の敵ならば、ケースまで行って実弾を取り出さなければならぬ。

しかし、それは取り越し苦労だったらしい。ドアが開く。現れたのは不満顔をした小柄な少女。長い銀髪と、黒い眼帯。それほどわかりやすいクラスメイトもいないだろう。

「ボーデヴィツヒ？」

名を呼ぶ。ラウラ・ボーデヴィツヒはまず誠を見て、その出で立ちと手元の拳銃を確認。それからまだ寝ている一夏に視線を映し、嘆息した。

「……相部屋だったのか。考えてみれば当然だな」

「悪かった。何か用か？」

シグを戻しながら答える。すると二度目の嘆息。

「貴様にではない。私の嫁に、だ」

「嫁？」

不服を全面にだし、ラウラは一夏を指さす。

「夫か旦那と間違えていないか？」

「そんなことはない。井ノ上、だったな。日本では好きな人物のことを“私の嫁”と呼称するのだぞ」

「そうなのか？ いや待て、いつから日本は恋人の呼称で性別の壁を超えるようになった」

「知らん。私はドイツ人で、ともかく一夏は私の嫁だ」

堂々と言う。どうだと思えばかりに胸を貼られては、何も言えない。昨日、聞き間違えと思っていたが、それこそ違ったらしい。

「ところで、いつからここは米軍キャンプになった？」

「気にしないでくれ。着なれた服のほうが寝れるし、動きやすい。これから走りに行くんでな」

ラウラは意外そうに目を見開き、

「お前も軍人なのか？」

「知らなかったか。まあ、部隊からは抜けたよ。在籍だけしてる」

「原隊は？」

「ガソリンスタンド。いや、ペトロスタンド。違う、ジャッカルかな」

「ふざけてるのか？」

「いやいや、大真面目だ。俺の最終目標はジャッカルかドンガメなんでね」

「貴様、階級は？」

「少尉」

「私は少佐だ」

「……米陸軍第七五レインジャー連隊、第一大隊。当時は上等兵。ほんの一年足らずだが、アフガン東部のQRF（即応部隊）として駐留部隊にいた。IS適正を認められたため、尉官まで昇進してここに来た」

ほう、と関心したような声。

「そうか、どうりで。昨日の模擬戦は見事な射撃だった。銃剣術にしても相当だな。まったく、銃口を向けられた相手に親しみを覚えたのは初めてだぞ。だが勘違いするなよ？ あくまで友人としてだ。」

私の嫁は――」

「一夏だけなのは知ってるよ。その肝心の嫁さんは寝てるが、用があるなら出直したほうがいいんじゃないか？ まさか、夜這いだの朝駆けだのじゃああるまいし」

笑いながら言う。むろん誠は冗談のつもりだ。しかし、

「……」

顔を伏せ、ラウラは黙り込む。誠も黙る他無い。とりあえずシグをケースに戻し、鍵をしてから言った。

「……本当にそうなのか」

「……」

何も言わない。非常に気まずい。どうにか言葉の架け橋を作ろうと、投げかけてみる。

「いや、気にしないでくれ。今から走りに行くと言っただろ？ しばらくは戻らないから。まあ、なんだ、ゆっくりしていけよ」

「……るか」

「は？」

小声で何事かを呟かれる。聞き返した瞬間、伏せていた顔が突然に誠を睨む。赤面した必死の表情、そして一応は声を落として叫ぶ。「嫁の寝込みを襲って問題があるか！」

部屋が静まった。一夏の寝息と、窓から聞こえる鳥のさえずり。穏やかな朝の風景に出現した前代未聞の発言に、誠の脳は理解力の上限を超える。

「……」

何も言えない。ラウラも同じく。二人は互いを見据え、静かに誠がドアの方へ向かった。外に出る寸前、その肩を叩いて静かに告げる。

「幸運を、少佐」

「ありがとう、少尉」

短い言葉。この瞬間、二人の軍人には奇妙な絆が生まれていた。長く苦境を共にした戦友のような絆。軍に属する者だけが理解しえ

る、純粹な友情だった。双方が双方に最大限の敬意を示し、背を向ける。

部屋を出る。ドアが静かに閉じられた。その隔たりがあっても、誠には背中合わせにラウラがいるという確信を得ている。彼は胸中で新しい友人へと呟いた。

——いざとなったらモザンビーク・ドリルを。

そして自身の部屋を後にする。しばらくは少佐の健闘を祈って、と、

「井ノ上？」

数分後、曲がり角のあたりで声がかかる。見ると知らない顔の女生徒がいた。少佐もといラウラと違い、日本人の顔立ち。髪も黒い長髪で、ポニーテールに縛っている。どういうわけか袴姿に竹刀を携えているが。

「あー、悪い。クラスの人か？」

「ああ。直接話すのは初めてだな。篠ノ之^{しののけ}の^{ほし}、よろしく。昨日の模擬戦、なかなかよかったぞ」

「ありがとう。改めてよろしく、井ノ上誠だ」

握手を交わしつつ、冷静にその名を覚える。

——篠ノ之……IS開発者の妹か。

「どうかしたか？」

顔に出ていたのか。怪訝な表情の筈が見ている。

「いいや、なんでもない」

「そうか？ その格好からして何でもなくは無いと思うのだが」

「またもや同じようなことを言われる。若干の乾いた笑いと共に答えた。」

「気にしないでくれ。一応、アメリカの軍属になってるんだ。このほうが落ち着くし、動きやすいんでね。早朝のランニングにはこれがいい」

「早起きしてトレーニングか。感心する。一夏にも見習って欲しいものだ。ああ、そうだった。一夏は起きているか？ そろそろ鍛錬

の時間なので、迎えに行こうと思ったんだが」

「一夏なら——」

言いかけ、口を嚙む。どう説明すればいいのか。今、部屋には間違いないラウラがいる。彼女の決意から察するに、この眼前にいる少女に見せてはいけけない光景が繰り広げられているはずだ。いやしかし、ラウラはあれだけきっぱりと嫁を公言している。むろん箒も知っているだろう。むしろ知らないほうがおかしい。であれば——。

「井ノ上、本当に大丈夫か？」

「あ、ああ、もちろん。一夏か。そうだな……その前にものすごく聞きにくいんだが、一つだけ質問してもいいか？」

「まあ、私に答えられるのなら……？」

頭の上に疑問符を浮かべている。誠は静かに深呼吸をして、同じく静かに尋ねた。

「お前は、一夏のことを好きだったりするのか？」

「なっ!？」

瞬間、箒の顔が紅潮する。周囲の温度が五度は上がっただろう。

瞬間湯沸かし器も彼女には敵うまい。そんな無責任な感想を抱く誠に対し、箒は矢継ぎ早に述べた。

「ば、ばば馬鹿なことを言うなっ! 貴様、わ、私はただ幼馴染として一夏と共に過ごす責務があつて——」

「わかった、もういい、落ち着け、大丈夫だ。友達以上恋人未満なんだな、オーケイ。それでいいと思う。オーライ、それでみんな丸く収まるところから」

半狂乱の箒を必死でなだめる。数秒して彼女が落ち着きを取り戻すと、改めて誠は言う。

「悪かったな、変なことを訊いて。大丈夫か？」

「まったくだ……! お前は一夏とまた別の意味で危険人物だぞ!？」

「そうか。わかった、自覚しておく。一夏ならたぶん起きてはいると思う」

「……起きているのだな？」

「ああ、起きてはいる。起きてはいるよ。いろんな意味で起きてる」
「何故そこを強調する」

ジト目で睨まれる。その理由が言えるはずも無い。まだ息の荒い
箒へ、彼は告げた。

「とにかく、急いだほうがいい。まだ間に合うかもしれない」
「何にだ？」

「気にするな。忠告しておく、たぶん少佐は強いぞ」
「何の話だ？」

「気にするな。とにかく急げ。ただもう息が上がってることは自覚
しろ？ 過呼吸は程度によるが危ないからな」

「誰のせいだと思っている」
「わかった。ちょっと待ってろ」

とりあえずは呼吸を戻さなければ。その場を離れつつ懐を探る。
幸運なことに財布は今日もそこにあって、日本の金が入っていた。
通路脇の自販機。そこに駆け寄ってコインを投入。飲み物を買いか
けて、気づいた。何を買うべきか。

——緑茶でいいよな。日本人だし。
率直な意見。そのままボタンを押す。ガコンと音がして、よく冷
えた緑茶の缶が落ちてきた。それを持って箒の所へ戻り、

「ほら、飲んでけ」
と差し出す。

「良いのか？」

「ああ。せめてもの謝罪だ。それと健闘を祈る証」

「さっきから何を言っている」

「気にしないほうがいい。知らぬが仏、南無阿弥陀仏」

「今度、病院を紹介したほうが良さそうだな」

半ば呆れ顔で、ようやく緑茶を受け取る。飲み干すまで数秒。

「缶は捨てとくよ」

「すまない」

どうにか元の調子になっている。誠に空き缶を渡すと、彼女は向き直って言った。

「それでは、また後で会おう」

「ああ、また後で。……健闘を」

「最後までそれか」

苦笑を通り越して完全な呆れ顔だった。変人と思われるだろう。彼女が部屋にたどり着くまでの間は。歩き去る筈の背をしばらく見た後、誠も当初の目的を思い出して歩を進める。途中でゴミ箱を探さなければ。

ややして背後から聞こえた筈の怒声を聞きつつ、先ほど自分で述べた言葉を思い出して一人呟く。

「知らぬが仏とは、日本人はうまいこと言ったもんだ」

ふと通路脇にゴミ箱があった。アルミ缶と書かれている。緑茶の空き缶を投げ入れ、日本人名のアメリカ人は玄関へ向かった。

ほとんど女子校のようなこの学園でも、やはり兵科学校とまったく違うわけではないらしい。訪れた射撃場で、誠はその事実を実感した。五〇メートルから二〇〇めでの射撃レーンが十二あり、さらに狙撃訓練用の仮想一キロレーンが二つ。その隣には小部屋が三つほどあって、そちらはCQB（近接室内戦闘）用の専用部屋だった。これが誠には意外で仕方ない。てっきり、IS戦闘だけに主眼を置いて操縦手そのものの技量は重要視されないものだと思っていた。だが軽く見て回ったCQBルームはどれも実践的な作りで、小さいながらも対テロ部隊のそれと遜色ない。キリング・ハウスを参考にでもしたのでだろうか。

ついで、ここは心遣いもよかった。無料のドリンクバーが置かれていて、財布の中身に考慮することなく利用できる。二十四時間、開いているのも良い点だ。銃や装備、模擬弾を借りるにはコンピューターに学生証を提示し、選ぶだけ。立て続けに二杯のコーラを飲

んだ誠は、紙コップをゴミ箱に捨てた後、そこで使える得物をざっと見た。

射撃レーンもやってみたが、まずはCQBルームだろう。となると、必然的に取り回しの良いサブマシンガンか、短銃身のカービン。しばらく操作していると、さらに素晴らしいことに気付いた。ここで借りる銃は、カスタムまで選択できるらしい。ダットサイト一つ、その外観から光点までを吟味できる。一体、この機械の中はどういう仕組みになっているのか。

ややして誠は七インチ銃身のディアブロ・ライフルに、チェコスロバキア製のCZ75自動拳銃を手に行っている。予備弾倉はディアブロが四つ、CZ75が二つだった。ライフルはスリングにダットサイトだけだが、後者の拳銃は面白いカスタマイズになっている。銃口部分にスパイク付きのマズルガードが追加された、俗に言うストライク・ガン。凶悪な外観のこれは、近距離、特に出会い頭の揉み合いで役立ち、さらに銃口を押し付けた際の発砲不可を防ぐ。

追加でベルトキットとホルスターを注文。しばらくして出てきたそれを身に付け、ベルトキットに予備弾倉を詰め込んだ。ホルスターは右腰に、CZ75をコック&ロック（初弾を装填してハンマーを起こし、安全装置をかけた状態）で収める。ホックは外し、拳銃とホルスターの間へ挟み込んだ。

ディアブロを点検。ダットサイトは倍率の無い筒型だった。右上のスイッチでオン・オフを切り替える。警察や準軍事機関であるIS学園のような場所は、これよりも視界と見栄えの良いオープンスクリーンを好むらしい。ただ、そちらは見た目が脆そうで、実際に壊れやすかった。過去の経験から言うと、古臭いながらも堅牢で信頼できる筒型に限るのだ。カラシニコフを好むのも、同じような理由である。

ペイント弾を満載した三十連マガジンを込め、初弾を装填。セイフティをかけて手近なCQBルームへ入った。セイフティ一体のセクターを単発位置に。ダットサイトの電源をオンにしていざ始め

ようとした瞬間、左腰で振動が起きた。携帯電話に受信。マナーモードのため、音はせずバイブレーションのみ。

嘆息してディアブロを傍らに置く。それから電話に出た。

「早起きしてんのは誰だ？」

『俺とお前、それに何人かだろうな』

電話の相手は言う。誠の日本語に対して英語での返答。返しからして聞き間違えはない。日本語を喋れるなくとも、聞き取れるらしい。

「できればもう少し寝たかったよ」

と、今度は英語で合わせてやる。

『お前がこの時間に起きないわけないだろう』

「あんたのおかげだ、ドク」

ドク、と。誠はそう呼んだ。それは対する男の名前なのか、それとも職業、ドクターを示しているのか。

『そうだな。こちらもお前のおかげだ。——それで、学校生活を楽しんでるかね？』

「それなりに。驚いたことにまだ二日目だが。はるばる海の方こうから俺のために電話してくれたのか？」

『半分正解、半分不正解だ。お前のためでもあるし、ブラックウィドウのためでもある。概要はモニターしているが、詳細は昨夜のデータリンクの分しかない』

「直接訊きたいと？」

「まず、と電話の方こうで何かを囁る音。コーヒーでも飲んでるのか。」

『そういうことだ。教えてくれ、井ノ上。一体どんな使い方をしたんだ。シールド出力は問題ないが、コンデンサ容量が著しく落ちていたぞ。自己修復で回復したようだが、それでも相当数のバグが出ている』

「具体的には？」

『一番ひどいのは三次元レーダー。特性ロックオン機能に異常が起

きている。それと、ブラックウイドウ自体のシュミレーションが恐ろしく早い。補助AI（人工知能）の推奨では、CQC（近接格闘戦）兵装の見直しが出ている。とりあえずはデータを反映して、関節部の接触と反応速度を向上させた。五パーセント増しだな」

「さすが対応が早いね」

『世話好きのだけさ。それで、何をした？』

誠はCQBLームを出て、教員用の喫煙室へ入った。煙草を取り出して一つ吸ってから言う。

「織斑一夏っているだろ」

『なるほど。何も言うな。察しはついた。近接専門の機体と銃剣で立ち向かったわけだ』

呆れたような口調でドク。恐ろしく鋭い推測、洞察力に誠は内心で舌を巻いた。

『うまくやっていけそうか？』

「学園で？」

『というより、織斑一夏と』

「わからんね」

もう一度吸う。

「悪い奴じゃない。けど、どうにも理想論でしか動いていない気がする。現実と夢の区別がついてない。あるいは――」

『現実を知らない、か』

続く言葉を先に言われる。

「その通りだよ、ドク」

『あまり気にしないことだ。お前の気持ちはわかる。そういう場所でそういう物を見て育ったんだ。けれどな、井ノ上、年長面した子供ほど見苦しいものも無いぞ』

「俺は子供か？」

『子供だ。その連中に比べれば遥かに大人だろうがね』

沈黙。最後に二度、煙草を吸って備え付けの灰皿に放り込む。子供。その単語を胸中で反芻させた。自覚を持ったために。

「向こうの足取りは？」

別の話題。若干、声音が低まった。喫煙室を出る。

「わからん。NSAからは何も無い。同じだよ。俺とお前以外、内部告発の騒ぎで死んだと言ってる。ただし何かは掴んでるようだ。近いうちにお前へ会いに行くと」

「教えてくれると思うか？」

「返答はニード・トウ・ノウ。必要だと思えば知らされる。まあ、半分は様子を知りたいんだろう。自覚が無いと思うがな、お前を気にかけている人間は意外と多いぞ」

「子供として？ それとも——」

「両方だ」

遮られる。僅かにドクの口調に強さが増した。一拍置き、彼は言う。

「俺も織斑一夏の資料を読んだよ。ずいぶんと人気らしいな」

「そうみたいだ。少なくともドイツの少佐は骨抜きにされてる」

先ほどの出来事を思い出し、笑いが漏れた。茶化するような口調で、
「お前も見習え？ いつまでも昔を引き摺るなよ。女の一人でも作ってみる。癒されるぞ？」

「機会があれば。でも、その前にケリはつけたい。篠ノ之束にしろ、NSAにしろ」

「両方を敵に回したいか？」

「それは御免だね。計算だよ。……大勢助かるほうに味方する」

どこか疲れたような響き。ため息。それから言った。

「ありがとう、ドク。あんたがいてくれたおかげだ」

「ああ。感謝ついでに一つ頼みをきいてもらいたい」

「なんだ？」

「馬鹿な真似はするな」

ふっ、と短く笑う。

「わかった」

「本当か？ ……まあいい。とりあえず、このへんで失礼するよ。」

では』

「了解」

電話を切る。大きく息をついた。電話をポケットに戻すとき、手に硬い金属が当たる。ディアブロ・ライフルだった。そういえば、準備を整えたのにまだ一発も撃っていない。

壁の時計を見た。朝食まで一時間を切っている。着替えとシャワーの時間を入れ、ちょうど良い頃合だった。名残惜しさを切り捨て、ディアブロとホルスターのストライク・ガンを返却口に押し込む。次いでベルトキットも外して同じく返却した。焦ることは無い。在学中はいつでもこられるのだから。

——子供、か。

再びその言葉を噛み砕くように呟く。ゆっくり、じわじわと浸透させるように。煙草をもう一本吸いたかったが、自制心が働いた。カチリ、と。壁の時計の分針が音を立てる。

昼休みの屋上には色鮮やかなビニールシートが引かれていた。そこにあぐらをかいて座る誠は、無言の緊張を感じ取って周囲を眺めた。ここにいるのは誠以外に六名。一夏と篤、セシリアとシャルロットにラウラ、そして彼等とは別のクラスである生徒。名前は鳳鈴^{フアンリ}音^{イン}といった。中国の代表候補生である彼女は、ツインテールの髪に小柄な少女。一見すると可愛い美少女だろう。ただ、その周囲に渦巻く活発な雰囲気は誰でもわかる。見た目に反して、ずいぶんと行動的なようだった。実際、誠は会って間もないがその印象で固まっている。

しかしずいぶんと奇妙な光景だった。学食で買ってきたホットドッグ二つにコーラのペットボトルを置いた誠に、周囲では自作自煮料理を持ち寄った少女たちがいる。自分で食べるわけではないらしい。一夏の昼食が無いからだ。つまり五人の少女は、五人ともが彼の食事を作ってきたということになる。この場で誠は場違いな感を否めないが、そもその原因を作ったのは一夏だった。

遡ること三限目の休み時間。まだ止まない質問責めの嵐の中心にいた誠のところへ、一夏が来たのだ。

「悪い、誠。少しいいか？」

「何だ？」

「いや、ちよつとな」

どうにも場所が悪いという素振りの一夏に、逃げ場が出来たと考えた誠は先導されて教室を出た。たどり着いたのは階段の踊り場。

「それで？ 愛の告白でも聞かしせてくれるのか？ 俺にその趣味は無いぞ」

「俺も無いよ。いや、そうじゃない。昼休みって予定あったりするか？」

「昼飯を食べる」

「知ってるよ。じゃなくて、誰かと一緒に食べるとか」

「いや。学食のつもりだけど、注目されるのは嫌いだからな。適当に買って静かな場所で食べるよ」

さすがに食事の時まで質面されたくは無い。それに今まで花のない軍隊にいたのだ。突然すぎる環境の変化で、このまま行くと多少の女性不信になりそうだった。

「それじゃ場所とかは決まってるんだよね？」

「ああ。何だ、一緒に食いたいのか？」

「そうなんだけど、少し協力してくれ」

「協力？」

首を傾げる。不審そうな誠に、一夏は述べた。

「いい場所があるんだけど、お前も来てくれないか？」

「俺も、つてのは俺たち以外にもいるってことだよな」

首肯が返る。

「五人いる。前もそのメンバーで昼飯を食べたんだけど、場が持たなかったんだ。特にサンドイッチが……なんというか独創的な味で」

「酢豚は？」

「酢豚は美味かった」

どこからか来た声に答える一夏。彼は言ってから誠を見た。俺じゃない、と首を振り、

「彼女だよ」

「は？」

誠が指差し、一夏が振り向いた先。そこにいたのが鳳鈴音である。

「おーす、一夏」

太陽顔負けのまぶしさで鈴音。対し、顔を青くするルームメイトがいた。

「……いつからいた？」

「そっちの人が昼飯を食べるって言ったところから。ねえ、ていうかあんたが井ノ上って人だよな？」

「ああ。井ノ上誠だ、よろしく。……初対面だよな？」

見覚えが無いものの、もしやクラスメイトだったかと不安げに訊く。すると鈴音は楽しげに笑う。

「うん、そうそう。あたしは二組だから。鳳鈴音、よろしく」

一夏を通りこし軽い足取りで近づいてくる。その手が差し出された。握手か、と思った刹那、鈴音の指先は誠の胸板へ触れる。

「おー、すごつ。けつこう鍛えてるんだ。うわっ、腹筋めちゃうくちや割れてる。あんた何？ 筋肉オバケ？」

「それは馬鹿にしてるのか？」

「まさか、そんなわけないじゃん。褒めてんの」

「そうなのか。でも鳳、あんたもすごいと思うよ。初対面の人間によくここまでできるな」

半ば呆れる。胸から腹部までをぺたぺたと触られていた。くすぐったいような、もどかしいような感覚。

「あー、なに、あたしにも触らせろって言つの？」

悪戯っぽい口調。

「人を強姦魔みたいに言わんでくれ」

「冗談。それはそうと一夏、あたしの酢豚、美味しかったのよね？」

「あ、ああ、美味かったぞ」

やや引きつった笑顔。一体、前回の昼食会とやらで何があったのか。喜ばしい出来事ではないようだが。

「うおっし、とりあえずセシリアには勝ったわけだ。んじゃ、今日のお昼も楽しみにしてなさいよ」

「そりゃもちろん楽しみだよ」

顔が真逆の感情になっている。鈴音は気付いているはずだが、何も言わなかった。やたらと高いテンションに上機嫌をプラスして去ってゆく。

「そんで、鳳の他には？」

鼻歌混じりに遠ざかる背中を見送り、訊く。

「……箒、セシリア、シャルロット、ラウラ」

「……」

泥沼だった。特に箒とラウラはまずい。今朝の決戦から半日足らず、どれほどの修羅場になるのか。いや、そもそも二人以外の女子、鈴音を入れて三人も一夏に好意を抱いているのだろう。最も、一夏本人に自覚はなさそうだが。昨日、千冬が評した唐変木という言葉が蘇る。

「とりあえず、だ。一夏、学食はお前の奢りでいいか？」

力無い頷き。微かな同情を覚えた。

それから現在に至る。五名の女子による無言の睨み合い。膠着した状況が五分ほど続いていた。誠の隣に座る一夏は、果たしてどんな心境なのか。

「……まあ、なんだ」

どうにか状況を打開すべく、誠が口を開いた。

「早くしないと昼休みも終わることだし、そろそろ食べないか？」

「そ、そうだね！　いつまでこうしても仕方無いし……」

助け舟に乗ったのはシャルロット。別名、前科持ち。誠が見る限りでは一番話がわかる人物だが。

「そうだな」

「……確かに」

「時間ばかり流れますもの」

「最もではある」

それぞれが一言ずつ述べる。しかし相変わらずだ。とりあえずはホットドッグの包みを開けた。

「う、うわあ、美味しそうなホットドッグだね！　自分で作ったの？」

シャルロットが言う。混乱してるのは明らかだ。ビニール袋にはメーカーの名前と商品名がでかでかと描かれている。だが、これに乗っかるしかない。

「いやいや、学食の購買だよ。自炊の経験なんてないから。軍でもいつもレーションばかりだったし。自炊ってどうも難しそうなんだよ」

「そんなことないよ。やってみるとけっこう楽しいし」

「あー……じゃ、じゃあデュノアのそれって自作なのか？」

手元の包みを指さす。

「う、うん。そうなの」

「やっぱりフランス料理？」

「そうしようと思ったんだけど、日本の料理も勉強しようと思ってやめたんだ。今日は肉じゃがとかハンバーグとか、そういうのを作ってみたの。あ、でもデザートだけは作りやすいのだけど」

「へ、へえ。どんなの作ってきたんだ？」

「えーと、苺のムースとか。ほんとにちっちゃなやつなんだけどね」

「そりゃすごいな。な、一夏！」

バシッ、とやや強めに肩を叩く。彼はこちらを向き、

「そ、そうだな」

と引きつった笑顔を向ける。まるでトラウマが蘇ったような顔だ。本当に前はどんな惨劇が起こったのか、いよいよ気になる。

しかしそんな余裕も無かった。会話は進んでいる。誠とシャルロットの間だけは。それもかなりぎこちない。シャルロットに目配せする。すると声に出さず、口の動きだけでこう伝えてきた。

『どうにかして』

——いやこっちのセリフだよ。

とにかく話題を探さなければ。ホットドッグを一口かじり、思考をフル回転させる。だが何がある。まだ今日で二日目だ。普通、新しく来た奴には向こうから質問が来るもの。クラスにいるとき、質問責めにしてくる連中がともてもありがたい存在だと思った。

そして気付く。シャルロット以外の人物に振れる話題があることに。

「し、篠ノ之！」

「な、何だ？」

突然の呼び掛け。篝の身がびくりと縮こまる。

「今朝、うちの部屋であつたあれは——」

例えるならば疾風、あるいは雷だった。猛然と箒が膝を上げた、その刹那。誠に見えたのはそこまでである。胸ぐらを掴む腕は鬼神に捻り上げられた拳が喉に食い込む。呼吸ができない。そして誠が宙へ浮いた。投げられたのか。現実感の伴わない判断は間違いである。箒が彼を引き摺っていた。あらゆるレーズ記録を塗り替えるが如き速度、それも片腕だけで誠を掴み。一瞬で階段まで連れて行かれ、壁に叩きつけられる。

「貴様はあ……！」

ゆらりと箒の顔がこちらを向く。両目に宿る光。殺人を覚悟した者の目だ。

「お、落ち着け！ 話せばわかる、わかりあえるはずだ！ まだ手遅れじゃない！」

「黙れ馬鹿者！ なぜあの時にさっさと言わなかったのだ！」

「言っただろ！？」

「あれでか！ 貴様はあんな忠告でわかるか！？」

「それは……」

今朝の会話を思い出す。数秒かかる。しばらくして、

「あれじゃあわからねえよ」

真顔で首を振った。胸ぐらの拳に力が込められる。

「何だと？」

「わ、わかりません」

気圧され、訂正。久々に死を実感する。

「いいか？ 次からはもつと直接的に言え。余計な捻り入れるとその口を縫い合わすぞ」

「大丈夫だ、大佐。まだカル口にはなりたくねえ」

「面白い奴だ。斬るのは最後にしてやる」

最後まで中盤で殺されそうな宣告だ。それを言ったら文字通り消されてもおかしくはない。きっと屋上から尋問された拳句に落とされるのだろう。

「とにかく！ ……わかったな、井ノ上」

「アイ・コビー
了解……」

拳が離れる。殺気めいた雰囲気を漂わせる筈の後を追ひ、自問する。これが馬鹿なことなのか、と。

黒い炭酸を飲み干す。誠と篤が席を外している時、膠着状態の戦場は緩やかに終戦を迎えていた。シャルロットに鈴音が協力、そこでラウラを味方に付け最後にセシリアを懐柔、シャルロットが残る一夏を気遣うような形で幕を下ろしたらしい。どことなく府に落ちないながらも、誠と篤は自分の位置に戻って食事を終え、現在に至る。

「コーラだけじゃ体に悪いよ」

飲み干したペットボトルをホットドッグのビニールとまとめているとき、シャルロットからコップが差し出される。香り豊かな緑茶だった。日本料理を勉強しているとは言っていたが、これもその延長戦と判断すべきか。

「悪いな」

「気にしないでよ。さつき無茶ぶりしちゃったし」

——まあ、確かに。

その言葉は心の中だけに留めており、受け取った緑茶を啜る。

「そういえば、一夏」

「ん？」

まだ食べ終わっていない唐変木は疑問符を浮かべて見返す。顔色が戻っているということは、トラウマは一先ず姿を隠したらしい。

「午後からのIS実習って、あれはまた模擬戦やらされたりするの
か？」

「いや、無いだろ。だよな」

周囲の少女たちに確認する。まずシャルロットが言う。

「無いと思うよ。たぶん、あれは自己紹介みたいな感じだったと思うから。井ノ上君って、専用機も持ってるし」

「そうですね。一夏さんの時はわたくしがお相手しましたけど、あれは成り行きでしたし。織斑先生としては、生徒の実力を知っておきたいのだと思いますわ」

と、セシリア。

「え、何？ あんた模擬戦なんてやらされたの？」

意外そうな鈴音の問い掛け。

「運動程度に一夏と。ほんの少しだけな」

「へえ。どうだった、勝った？」

「負けたよ」

と、もう一口啜る。

「いや、でもあれは半分運みたいなもんだし」

一夏が言う。食べ終わったようだ。こちらはセシリアから差し出された紅茶を飲んでいる。

「運も実力の内だ、一夏。お前の勝ちだよ。運の無い奴は死ぬだけだ。俺は死んで、お前は生き残った」

「死んだって……模擬戦だぞ？」

言い過ぎだろ、というような苦笑。

「それも運だ。実戦で負けず、模擬戦で負けることができた。敗因を見直して死亡率を減らせるチャンスになる。それに、模擬戦だって事故があるだろう。結局は運次第なんだよ」

「そんなもんかなあ」

納得いかない。そんな気持ちを全面に出して言う。

「そんなもんだよ。デユノア、ありがとう」

コップを返す。一夏が口を開いた。

「でも心配すんなよ。もしそうだったら俺が助けてやるから」

「そうかい？ そりゃ頼もしいよ」

笑って言う。と、一夏の表情が僅かに不満を現す。

「何だよ、信じてないのか？」

「信じてるよ。お前の気持ちはさ。けど人の命を助けるっていうのは、それほど簡単じゃない。誰かを助ける時は大抵、そいつ一人分

より多くの人間が危険に晒される。何の犠牲も出さずに助けるなんてのは、都合の良い理想論だよ、一夏」

冗談めかした真実、いや現実。笑い話のように語るのは、もちろんこの場の雰囲気崩したくないためであるが、もう一つの理由もあった。いずれ一夏もそれを知ることになる。それまで夢を見ているわけにはいかない。だが、少なくとも準備ができるまでは意見程度に留めておこうと。

思いながら、誠はこれが傲慢だろうかと感じる。電話の男、ドクの言った“年長面した子供”になっているのか、と。しかし違うと確信できる。これは押し付けがましいが、誠の希望だ。自分は現実を知って育った。しかし一夏たちはそうでないのだ。少なくとも、理想は捨てずに、現実の中でその理想を追って欲しい。そう考えていた。

「そんなことねえよ、誠」

だが一夏にそんな思惑が伝わるはずも無い。彼は朗らかに笑って言う。

「俺はもう無力じゃないんだ。守れる力がある。だから、犠牲を出さずに助けることだってできる」

「守る力？」

何のことだ。率直に疑う。守れる力、そんなものがあるはずも無い。しかし、思い当たる節はあった。

「一夏、お前まさかISのことを言ってるのか？」

「ああ。当然だろ？ 白式のおかげで、俺はもう守られるだけじゃなくなった。誰かを助けられる。千冬姉の代わりに戦えるんだ」

何かが生まれる。嫌な感情だ。無言で押し殺すと、静かに告げる。「ISは……ただの兵器だ。兵器に意思は無い。信用しすぎた時、危険になるのはお前じゃなくお前の周りにいる人間だぞ」

「そんなことないさ。白式は答えてくれる。あいつは兵器じゃない。本当の平和だつて作れるかもしれない。ISはそういう希望の——」

落ち着け、と。何度となく言い聞かせた。アフガンの砂の上。銃

声と爆音、砲撃の地響きと砂埃、そしてむせ返る硝煙の中でそうした時のように。だが叶わなかった。

ISは希望だ、と。その言葉を聞いた瞬間、誠の中で別のスイッチが音を立てる。御し得ない怒りだ。気がついた時、状況は一変している。立ち上がった誠と、彼が胸ぐらを掴んで引き起こした一夏の足元に飲みかけの紅茶がこぼれている。セシリアの紅茶だった。

「今、何て言った？」

「誠——」

言い募ろうとしたその喉首に、拳を押し付けて黙らせる。

「余計なことはいい。何て言った？」

「井ノ上——」

「黙ってる！」

最初にこの現状を認識した少女、ラウラへ叫ぶ。彼女は身をびくつかせ、言葉を殺した。

「ISが希望だと？ 夢物語もほどほどにしる。現実を知らない青二才が、自分勝手な理想ばかり語るなよ。——デュノア」

瞬間的な豹変。それに対応することができず、ただ表情を凍らせて見ていた少女の一人に呼びかけた。

「お前はデュノア社社長の一人娘だろう。ISでこの世界がどう変わったか、知っているはずだ」

「ボ、ボクは子供って言っても、愛人の娘、だから……」

言いにくそうな口調。実際、そういう内容だ。感情の奔流が押し寄せている誠の頭でも、それを訊いてしまった恥を覚える。

「すまない。ならボーデヴィツヒ、お前はドイツの軍属だ。あの国も無関係じゃあなかった。今どういう戦場が繰り広げられているかわかるだろう」

「……私はまだ実戦経験が無い。見たことは——」

「見たことが無くても、知識としてはあるんじゃないのか？」

問い掛け。答えは返らない。無言の肯定か。

誠は舌打ちし、一夏の体を突き飛ばす。屋上に転がったルームメ

イトの前へ立ち、見下ろした。そして言う。

「ほんの少しでも世界情勢を知ろうとは思わなかったようだな、織斑」

何人かは気付いただろう。誠がいつものように一夏でなく、織斑と呼んでいる。他人行儀な口調。おそらく、わずかながらに芽生えていた友情は、すでに一片と残っていない。誠にとつて、もはや織斑一夏とは敵であつた。

「ISは強大だ。強大すぎる。時代にはふさわしい兵器とその流れがある。だがあれが登場してから全てが変わつた。その流れが壊れた」

「どういう——」

「ISの登場以前、資源国が運用していた航空兵器や戦車、そういう金のかかる兵器がどうなつたかわかるか？」

しばしの間。一夏は答えなかった。答えられなかった、というのが正しい。

「それも知らないか」

明らかな軽蔑。誠は続ける。

「日本、アメリカ、イギリス、中国……世界で有数だつた力のある国家は、そのどれもがISの開発に力を注いでいる。実際、一機のISで十数機の戦闘機や攻撃機に勝る結果を残すことができ、その火力は重戦車にも匹敵するからだ。ではISの登場で使われなくなつたそういう兵器は、いったいどうなつたのか。お前にはわからないだろう」

傍らに膝を付き、また胸ぐらを掴んで顔を引き寄せる。

「ブラックマーケットだ。維持費すら済むようになった有力国家は、その保有するほとんどの兵器を裏の武器市場に売り出した。それも開発費より遥かに安い値段で。そういうおこぼれを買うのは、いつだって紛争地帯の小国や武装集団だ。だが連中が持つのに、そんな兵器は強すぎる」

「物だけがあつても、使えなきゃ——」

「使えなければ意味がないか？　そのとおりだ。だがな、そんな国家でパイロットや技術者が必要とされるか？　されないよ。国は大金をかけて育てた人員をあつさりと解雇して、その大勢は傭兵のように生きている。兵器のアドバイザーとしてだ。理解できるか？

迫撃砲がせいぜいだったアフガンで、今は精密爆撃や重戦車同士の戦闘が続き、上空じゃあ最新だった戦闘機が自分たちの不可視安全領域を巡って空中戦を繰り広げている。アフガンだけじゃない。今の紛争は、局地的な第三次大戦そのものなんだよ。国民が飢え、殺され、救援に來た国の軍は高度な科学技術によるテロで返り討ちにされる。ISの登場でミリタリー・バランスは完全に崩れた。その根底にあるのは、ISと篠ノ之束という女なんだよ」

地面に押しつけ、突き放す。再び立ち上がった。

「これが現実だ、織斑。お前が知ろうとしなかった、血とクソしかない現実だ」

立ち去りかける。一瞬、箒が気になった。故意ではなかったにしろ、彼女に関係のある点もあった。しかしそれを本格的に気にかけるより早く、一夏は再び言う。

「なら——」

振り返った。織斑一夏は立ち上がって、真正面からこちらを見ている。その口が言葉を紡いだ。

「ならその兵器だって俺が壊してやる。その力がある。それが無くなれば、お前の言う現実も——」

言い終わる前、その頬を殴りつけている。あまりにも馬鹿げたセリフ。誠にはそう感じられた。

「織斑——」

「よせ、井ノ上！」

追い打ちをかけようとした瞬間、左右から誰かに押さえつけられる。箒と鈴音、それにラウラだった。それでも尚、三人を振り払って殴りかかろうとする。

「一夏！」

「一夏さん！」

シャルロットとセシリアの声。二人が一夏へと駆け寄り、抱き起こす。

「落ち着け、井ノ上、やめろ」

「さつき黙れと言っただろう、ボーデヴィツヒ。——織斑！」

怒鳴る。喉を痛ませる絶叫だ。もう抑えは効かなくなっていた。

「お前が壊すだと？ ふざけるのもいい加減にしろ！ お前が幼稚な理想をほざいてる間に、どれだけの兵士が死んだと思ってやがる！ 俺たちはガキの妄想のために殺して、殺されたんじゃない。仲間を助けるために戦ったんだ！ 俺たちは必死で生き延びた、必死で生きようとした！ それをお前は今、侮辱したんだよ！ 俺は、いやあいつらは絶対にそんな下らない理想を掲げなかった。誰一人自分を無力だなんて嘆いたりしなかった、力があると溺れたりもしなかった！ 現実を見て、生きて、そして死んだ！ それを侮辱するな、あいつらを無力だったなんて言うな、俺の仲間を二度と侮辱するな！」

絶叫が終わる。耳鳴りがした。息が荒い。ともすれば泣きそうな気持ちだった。いや、もしかしたら泣いているのかもしれない。

「もう一度、模擬戦を申し込む」

掠れた弱々しい声。誠は静かに言う。

「次は手加減も何も無い。俺はお前を殺すつもりで撃つ。いや、お前の周りの人間も」

ゆっくりと押さえつける三人の手を振りほどき、この場に背を向ける。足が震えた。今度こそ一夏は何も言わない。階段を降りて踊り場に到着した瞬間、誠は膝から崩れ落ちた。両手で顔を抑える。そこから涙と鳴咽が漏れる。

「湊……」

その手を離してしまった親友を呼ぶ。何度も、呼び続けた。悲痛な鳴咽と共にその姿を探し、顔を涙で汚した。そうすればもう一度だけ会える気がしたのだ。だが現実はそうならない。そのことは誰

より誠が一番理解している。だから泣き続けた。誰の目にも止まらない階段の踊り場で、親友の姿を探して泣き続けたのだ。

跳ね上がる銃身を抑え、スコープの視界を正す。十二倍率の十字線から目を離さずに、構えたボルトアクション・ライフルの薬莢を排出、次弾を装填。糸に似た吐息で心拍数を落ち着かせ、人差し指がトリガーへ触れた。照準を微調整、目標は一一〇メートル。計算で無く“カン”で着弾点を予測する。元より今の誠は複雑な計算などできなかった。まだ心がざわめき、波立ち、苛立っている。

発砲。レミントンが作り出したモデル700が、その衝撃を露わにした。手の内で跳ね上がる。ぶれた視界が元に戻ったとき、遙か一キロを超える的には右端に一点の着弾跡ができていた。命中、しかし成功ではない。

ここは今朝訪れた射撃場で、むしろ本当に一キロ狙撃をしているわけではなかった。レミントンは朝に手にしたディアブロやハンドガンと違い、限りなく実物同様に製造された精密なレプリカである。撃っているのはペイント弾で足りない空砲で、射撃目標の的もスクリーン上に出力された幻影にすぎない。銃口部に取り付けられた、弾道を再現する特殊なレーザー照準器によって架空の弾を撃ち出す。

再び排莢。弾丸を装填しようとして、今のが最後だったのだと知る。何も無い空間をロッドが動いた瞬間、誠から舌打ちが漏れた。ベルトキットを探る。今朝と同じ格好だ。制服はシャワールームのロッカーに置いてある。つまりレインジャー時代と同じACU迷彩の上下。一度、部屋に戻って取ってきた。昼間の騒ぎからすぐのことだ。それ以来、部屋どころか教室にも戻っていない。つまり授業放棄。

音と衝撃以外に何も無い偽の弾丸を数発、つかみ出す。射撃場の自動ドアが開いたのはその時だった。反射的に振り向く。ブロンドの髪をした少女がこちらを見ている。シャルロット・デュノアだった。

「……ここにいたんだ」

一瞬、不安と驚愕の入り交じった表情を見せたシャルロットは、すぐに微笑を浮かべていう。どこかぎこちない。原因となっているのは昼間の恐怖か。

「みんな、心配してたんだよ」

そつと近づいてくる。

掴んでいた弾丸を一発、薬室へ送り込んで装填した。再び構え、口を開く。

「狙撃は良いもんだよ。どういう状況にあっても、ただ命中させることに集中できる。余計なことを考える必要がない」

乾いた発砲音。狭い、それも夜の射撃場に甲高く響いた。びくりと身を硬直させるシャルロット。誠は深く息を吐き、的から目を離さずに言う。

「すまなかつた、デュノア」

「え？」

「嫌な質問だったろ。それにあの場をぶち壊しにした。悪かった」

「別に、それは……」

口ごもる。誠から乾いた笑い。

「軽蔑しただろ？」

「そんなこと——」

「ないか？ それこそ有り得ないよ。目の前で惚れた男を殴られたんだ。理由はどうあれ、むかついて当然だよ」

そう言つてベルトキットを脱ぎ、レミントンと一緒に返却口へ放り込む。横目で見ると、シャルロットの顔は僅かに赤みがかつていた。怒り、というより羞恥心だと判断した。

「あいつに惚れてるって、まさか自覚も無かつたわけじゃないだろ？」

「そうだけど……正面から指摘されたのは初めてだったから。あの、いつから？」

「普通、お前等を少し見てればわかると思うけどな。今日なんて俺

が行かなかったら五人であいつを取り囲んでたんだろ？ 誰だつてわかるさ。……さて」

煙草を取り出す。一本を口に擦じ込んで火をつけると、一瞬遅れてシャルロットが咎める。

「ここは禁煙……ていうか未成年は——」

「ここはあらゆる国家に拘束されないんだろう？ 法律は国のもので、国の中に存在しないここじゃあ未成年なんて制度は無い。まあ、気にするなよ。もう行く」

踵を返した。怯えたシャルロット、その脇を通り過ぎようとし、

袖を掴まれる。制止の呼び掛け。予想外の行動と力強さに、煙草が落ちた。

「何だ？」

ようやく出た言葉はそれだ。正面から、それも至近距離で。それまでもシャルロットは誠を恐れていたのだ。脅しになっても不思議なかった。

「その……今日は部屋に帰れないんじゃないかと」

「野宿は慣れてるよ。慣れたくはなかったけど」

自嘲気味に笑い飛ばす。

「ボクの部屋で良ければ——」

「やめろよ、おい」

咎める物言い。袖を掴んだ手が離れる。数瞬、彼女を見据え、それから屈んで煙草を摘む。

「お前はいい奴だよ、デュノア。けど誰にでも親切になろうとするな。嫌いな奴は放っておけばいい」

「……無理だよ」

か細い声。

「あの時、井ノ上君が言ってたことは正論で、ボクだって薄々は気付いていた。ラウラだって、もしあの言葉が嘘だったら黙れなんて言われても止めてたと思う。けど……」

少女は俯く。すでに誠は立ち上がったいた。

「一夏はボクを助けてくれたから。だから好きになれた。こんなこと言ったら怒るかもしれないけど、ISのおかげで好きな人ができたのなら、ボクはISに感謝してる。でも井ノ上君はボクたちよりもずっとよく世界を知ってて……ごめん。うまく言えない、けど……でもボクやラウラは井ノ上君のことを嫌いになったりしてないから。だから……」

本当に思いつきで喋っているのだろう。両肩が震えていた。

ため息が漏れる。半ば呆れたように。あるいは根負けというべきだろうか。

「部屋の隅に入れさせてもらえるか？」

その言葉を聞いた瞬間、シャルロットが顔を上げる。後悔の欠片も無い嬉しげな表情。刹那、誠の網膜に映ったのはシャルロットでない誰か。夕焼けの滑走路、見送る人々、その中で手を振る自分とどこかに向かつてゆく姿。彼女は寂しげにこちらを見て、小さく手を振っていた。あは——。

「井之上君？」

上目遣いで覗き込んでくる瞳。記憶の中の人物とは似て非なる輝きだった。これが別人と気付いて我に返った。

「いや、なんでもない」

平静を装って首を振る。むろん内心は違った。先ほどの苛立ちとは全く別の意味で、ざわめいている。

過去は過去だ。変えられないし、取り戻せもしない。ひどく物悲しい気分を払いのけるべく、誠はそう言い聞かせた。それからシャルロットを見て、やはり困惑した顔に出会い、言い聞かせて誤魔化すことでしか正気になれない自分に嫌気を覚える。

ドアを開ける。そこには今朝と何ら変化の無い部屋があった。開られたカーテンと閉じられた窓。ガラスから差し込む月光の薄明

かりに、ぼんやりと青白い空間を得た自室が。そして一步を踏み込んだ一夏の顔を照らす。左頬にはガーゼが貼られ、下にある炎症の膨らみを隠している。

「一夏……」

後ろから来る控えめな声は箒。教室からここに至るまで、ずっと付き添ってくれていた。振り向き、一夏は笑う。

「大丈夫だ。それより、もう十時だぞ？　そろそろ部屋に戻ったほうがいいぞ、箒」

「だが……」

言い募ろうとした少女は、だが言葉が続かなかった。強がりにした一夏の微笑。いや、強がりですらない。呆然として何も無い、虚空の笑顔だ。それを見て何も言えなくなったのは、箒のせいではない。例え成人であっても彼に何と声をかければいいのか、戸惑うだろう。まして彼女は年齢的にも精神的にも成長途上なのだ。ただかける言葉を知らなかっただけ。あるいは井ノ上誠というもう一人の男子生徒が、箒や一夏より遥かに大人であったというだけで。

「……おやすみ、一夏」

静かにドアが閉まる。ぎしりと、ささやかな軋む音が耳に残った。一人になった小さな空間。数歩を進み、それから自分のベッドに倒れ込む。なんのことは無い。元々、一人の部屋だったのだから。またそうなったに過ぎない。

シーツの隙間からそつと目を上げると、正面に誠のベッドがあった。枕元に置かれた二つの写真立てがわかる。何気無い、おそろしく自然的な動きであった。一夏は立ち上がり、その写真立ての一つを手にとった。薄暗い月明かりの下に出し、映されたものを浮かび上がらせる。

写真の中にいるのは、兵士たちだった。約十名ほどの集団、その中には今この場にいないルームメイトの姿もある。誰もが微笑んでいた。誠が経験してきた時間の中で、切り取られ保存された一瞬。『それをお前は今、侮辱したんだよ』

頭痛のように彼の言葉が蘇る。背筋よりかけ登る感覚が手足を震わせた。奥歯を噛み合わせる。怖い。

『俺はお前を殺すつもりで撃つ』

消耗しきった誠の宣告。すでに枯れ、疲れはてた言葉に秘められた殺意は、半日を経た今なお鮮明だ。それから写真を見て思う。この中の何人が、誠の言う“ISに狂わされた世界”で戦死したのだろうか。

写真立てを元に戻し、もう片方を見た。今朝、そこには写真があったはず。しかし今は無い。誰かに抜き取られていた。その誰かとは、当然ながら一人しかいない。ルームメイトの不在以外にある、今朝との相違点だ。

自分のベッドへ座り込む。窓を眺めて。

「クソ……」

髪をむしった。こみ上げるのは屈辱。現実を知らなかった悔しさ、現実を知らされた悔しさ。それを拳混じりに教えられた人物に對しては、不思議と憎しみどころか怒りすら無い。完全に打ちのめされたという敗北感が、漠然と漂う。

ドアがノックされたのはその時だ。

「一夏」

凜とした、聞き様によつては無感情とも思える声。いつもは一夏でなく織斑と呼ぶ肉親の声だった。

「一夏、入るぞ」

返事が無いのも当然と悟つてのことか。千冬は無造作に部屋へと入り、ドアを閉める。入口に立ったまま弟を見据え、それから述べた。

「さっき、井ノ上に会った。お前との模擬戦をもう一度行ないたいと、そう言っていた。お前が受け入れるのなら、明日の午後から始める」

「……わかった。戦うよ」

意気消失した言葉。千冬は軽く息を吐き、一夏と背中合せになる

ように座る。

「嫌々やらされる、というような感じだな。お前らしくもない。…何があつた？」

「言ったら、たぶん俺のことが嫌いになるよ」

「私としては今のお前が充分に嫌いだ。いいから言ってみろ」
まるで突き放すような物言い。しかしそれが救いになった。

「俺は——」

と、ゆっくり口を開く。

「もう守られるだけじゃなくなつてたと思つてた。千冬姉や、周りの人たちに守られるだけじゃない、逆に守れるんだつて。けどそんなのは自分勝手な思い込みだった」

嗚咽が漏れる。聞かれたくなかつた。必死で止めようとするも、できない。言葉だけが区切りなく流れ出た。

「俺は守るなんて言つてても、何も知らなかつた。どういう現実が起きてて、どれだけの人たちが犠牲になつてゐるのか、まるで知らなかつたんだ。けど誠はそういう場所にいて、現実を知つてゐる」

ISは希望じゃない、と。真正面からの物言いにはそうするだけの根拠があつた。ただ掲げられた理想や夢とは違う。変えられてしまい、自分たちにはどうやっても変えることのできない現実。それがあつた。

「一夏、お前と井ノ上は別人だ。井ノ上がそういう経験をしているのなら、お前はそれとまた別の経験を背負っている。世界の全てに目を向けるなんてことは、誰にもできない。お前も、井ノ上もそれは同じだ。ただ歩んだ経験が違ふだけだろう」

「けど！」

意図せず大声となる。数瞬、間を置いてから一夏は続けた。

「けど、俺は知ろうともしなかつた。ISに勝手な期待をして、自分に酔つてたんだ」

口調が沈む。しばし流れるのは静寂だつた。背中合わせにいる千冬が、ため息を漏らす。

「まさかそんな理由で井ノ上に負けてもいい、などと思っているのか？」

「だって、俺はどうすれば——」

突然、後ろ首を掴まれ引き倒された。一瞬だけ喉が絞まる。見下ろしているのは上下逆さまの、目に怒りを収めた千冬。

「甘えるな。一夏、お前は決めたんじゃないのか。それをこんなことで諦めるつもりか？　ここまで来て覚えたのは、言うだけ言っただけの口先だけの生き方か？」

正面から注がれる視線。今までに見た厳しさとは似て非なる。

「いいか、よく聞け。お前は子供だ。世間を何も知らない子供にすぎない。だがな、井ノ上も同じだ。お前は平和を知っていて、奴は戦争を知っている。それだけのことだ。戦争を知ったあいつは希望を抱けない。だから世の中を見る目も自然と違ってくる。だが知らないお前は、まだ希望を抱けるはずだろう」

力強い物言い。胸の奥で何かが音を立てる。ドアの軋みに似ていた。

「千冬姉……」

ここしばらく全く使っていない呼び名。それを口に出した瞬間、嗚咽がひどくなった。そして見下ろす表情がふっ、と和らぐ。

「世話をかけさせるな、一夏。次は私がお前に世話をかけるものだと、期待していたのに」

「ごめん。ごめん……」

泣き声混じりに何度も呟いた。そつと額に手が置かれる。暖かい手だった。

「明日は期待させてもらうぞ。お前は自慢の弟なんだからな」
立ち上がる気配。手が離れる。

「千冬姉」

ドアのところまで向かった肉親に、尋ねた。

「もし誠に勝ったら、自慢の弟になれるかな？」

「馬鹿者。もう自慢の弟だと言っただろう。お前が目標に進み続け

る限り、ずっと変わらない」

優しい声。心を落ち着かせる響き。ここ数年、聞いた覚えの無い声だ。僅かに開いたドアから差し込む光。それに照らされた千冬は、夢げに微笑んでいた。

案内された部屋に入った瞬間、目に映ったのはベッドに腰掛けたラウラだった。つまりシャルロットの相部屋は彼女らしい。というとなるほど納得もいく。シャルロットは、自分とラウラが誠に嫌悪を抱いたりはしていないといった。その場しのぎの嘘とも取れるが、どうやら違つようだ。連れてきたのはその真偽を確かめさせるためだったのか。

ラウラは読書中だったらしく、手元にはブックカバーのかかった文庫本。彼女は先導して入室したシャルロットに気付き、その後ろにいる誠を見た。

「ボーデヴィツヒ、昼間は——」

原因がどうあれ詫びねばならない。言わばけじめだ。しかしそれより早く、ラウラは立ち上がって誠の前まで足早に近づき、

「どうかし——」

問答無用、平手が右頬を叩く。固まる空気。目を丸くするシャルロットに、無表情のラウラ。驚くでも無く当然のことだと顔をしかめさせた誠は、じんわりとくる鈍痛を感じる。ややして向き直り、

「すまなか——」

再び叩かれる。今度は左頬。

「ボーデヴィ——」

右頬。

「本当に——」

また左頬。

「ちよつと待——」

再び右頬。沈黙。

叩かれた状態のまま押し黙った。平手は飛んでこない。喋ったら叩くつもりか。そう疑って横目で見る。と、

「よし、満足した」

真顔で胸を張られた。心なしか表情も充実している。理由はわかるが、腑に落ちないこと甚だしい。

「ラウラ、いくらなんでも……」

「いや、いい。むしろ安いくらいだ」

咎めかけたシャルロットを制止、誠。

「でもボーデヴィツヒ、謝らせてくれ。すまなかった」

「もう気にしていない。今ので全部すつきりした」

全部、とはどういうことだろう。昼間の騒ぎでそこまで迷惑をかけただろうか。と、ラウラは手を上げて指折りに数える。

「私の嫁を殴ったこと。階級的に上官の私へ暴言を吐いたこと。食事の場を壊したこと。それ以来、授業にすら来なかったこと。今朝、篠ノ之を戻らせずしかけたこと」

「最後のがおかしくないか？」

反射的に問う。ラウラが決行した攻勢作戦を知らないシャルロットは首をかしげている。

「まだある」

「まだあるのか」

「むろんだ。一夏に言ってくれたこと、その感謝、とでも言うのかな」

「感謝？」

ラウラの表情に初めて感情が揺れた。悲しみ、あるいは哀れみ。そのどちらも他者でなく己へ向けたもののようだった。

「お前の言ったことは正しい。今の世がどうなっているのか、それは私もわかってるつもりだ。だが私は一夏に助けられた。お前の言う青二才に命を助けられ、信頼していた」

ため息とも笑みともいえない吐息。どちらにしても物悲しさに変わりはないかった。

「だから、というのもおかしいかもしれないが、私は信じていたんだよ。一夏なら世界も救えるんじゃないか、なんてな。もしかしたら、それは信頼じゃなく昔見た英雄願望を一夏に重ねていただけかもしれないが」

「英雄……」

その単語を自分で口にすると、ひどく滑稽な道化のように思えた。実際、英雄と呼ばれる人間は存在する。軍であれ民間であれ。しかし彼等のほとんどは英雄になりたくてなったわけではない。仕立て上げられた、とも称せるだろう。例えば軍ならば、この時世にもまだ本物の英雄がいるのだとして、他の兵士を奮起させるため使う。効果的なプロパガンダの一種に、物語は常套句だ。

しかし目の当たりにすればそんなものがないとわかる。英雄は夢物語の存在で、この世に生き、存在している英雄とはただの人間だ。そうでない人々とさして変わらない。個人で世界を丸ごと変革させる力など、持ち得てはいないのだ。

現実にそれほどの力がある人間とは、権力と富を持ち合わせた複数の人物たち。要するに政府やそれに匹敵する企業である。いや、現代では後者のほうが強大だ。いまやPMC（民間軍事会社）のよくな私兵集団すら有し、ISを始め軍に供給されるあらゆる兵器産業を担うのだから。アドバイザーとして特殊部隊出身者を雇うことも多い。大規模企業グループの戦力は、米軍の一個軍に相当するとも言われている。

こつこつ裏社会の闘争をくぐり抜けたものが、本当に力のある存在だろう。英雄とはお世辞にも程遠い。

「お前はまだ信じてるんじゃないか？」

「たぶんな。私だけじゃないさ」

目でシャルロットを促す。彼女は肯定を示して、切なげな微笑を浮かべた。

「なるほど。奴はずいぶんと疎いようだ」

「ホント、馬鹿らしくなるくらいに」

誠の指摘にシャルロットが同意し、笑う。先ほどまでの不快感は消えていた。こういう談笑もあるのだ、と誠は知る。平和の内での和やかな空気。昼間もあったはずだが、それよりずっと暖かだった。そこでふと思い出す。明日、自分が行なうことを。行ないを許してくれた二人を、裏切る形となる。

「しかし」

不意にラウラ。自分のベッドへ戻って腰を下ろし、それから続ける。

「一つだけわからない。井ノ上、お前はISが嫌いなのか？」

「なんだ、いきなり」

「昼間の話だ。お前は直接的な表現こそしなかったものの、まるでISが狂気の根源のように言っていた。自身もISの操縦者だというのに」

「まあ、嫌いか好きかで言われれば嫌いだな」

半ば冗談口調で言う。

「茶化すな」

真面目な視線。気圧され、嘲笑を消した。隣を見る。

「あ、えと……ボクは少し外に出てから」

「やめろよ、デユノア。邪魔してるのは俺なのに、お前が遠慮するなよ」

言っただけからため息を漏らし、閉じられたドアに寄りかかった。短い黒髪の頭をなで上げる。

「ISが嫌いなわけじゃない。俺はISがこの上なく憎くて、怖いんだよ」

「……その理由は言えないか」

「いや、構わない。たぶん知ってるよ、お前は。“プリムストーン”の悲劇」だ」

不可解な名詞。しかしラウラの表情には驚愕が過ぎる。

「あれは反IS技術者の流した噂だろう」

「公にはそつだ。当事者には箝口令が敷かれていた。一応、注意し

ておくとそいつはまだ解除されていない。これはアメリカ・イギリス両軍の機密になる」

「その当事者がお前だというのはか？」

「そうだ」

一つ返事で述べる。軍属の二人に流れた奇妙な緊張。だが一方で聞き慣れない単語に頭を捻る者もいた。

「あの、“ブリストーンの悲劇”って……」

「説明するよ」

言って懐へ伸ばした手は寸前で止まる。女子の部屋で煙草も無いだろう。

「昼間、俺が言ったことを覚えているだろう。ISはあらゆる兵器に勝っている、と。だが一つだけ、明らかな欠点がある。操縦者の肉体を保護することだけに集中した結果かもしれない。実戦を知らない篠ノ之束は、気付くはずもなかったことだよ」

「どういうこと？」

シャルロットの不安げな顔。それを見ると、彼女がISを纏って実戦に赴く様を想像してしまった。おそらく、同じことが起きるだろうと誠は思う。

「ISの欠点は搭乗者が自分の目で状況を認識しなければならないことだ」

この答えを、しかしシャルロットは理解できなかった。当然といえる。

「戦闘機や戦車、攻撃ヘリ、それに無人機なんかは最たる例だと思う。ああいう兵器はモニター越しに敵を認識し、スイッチ一つで片付く。強力な兵器をゲーム感覚で操ることによって、自分の行なっている大量破壊と殺人の現実味が薄れるわけだ」

発達した科学技術により、現代では肉眼よりも鮮明かつ確実な映像をリアルタイムで受信し、攻撃できるようになった。数キロ先、本来なら人間が感知できないはずの距離で行われる戦争だ。空中で長距離ミサイル、地上で野砲というように。

もつとも、これらの兵器は本来ならここまで頻繁に活用されないはずだった。数機の航空機や爆撃装備の無人偵察機ならまだしも、燃料と輸送に手間のかかる重戦車が多様される戦争。昼に誠の述べた局地的な第三次大戦という表現の理由である。

「人殺しを認識しないのが良いのか悪いのか、それは賛否両論がわかれるが、精神病を患う兵士が少なくなったのは事実だ。けれどISの場合、状況認識のほとんどを肉眼で行なう。たった一人の人間にできるはずのない、それこそ戦車や航空機とは比べ物にならない虐殺を、自分の所業だと認めなければならぬ」

「そうして起きたのが“ブリストンの悲劇”か」

続く言葉をラウラが引き継ぐ。誠は静かに頷いた。

「デュノア、ブリストーンが何かわかるか？」

「え……と、どこかの地名？」

「ハズレだ。まあ、そう聞こえなくてもいいかな」

薄く微笑む。一拍置き、

「ブリストーンは対戦車ミサイルの名称だ。元々はイギリス空軍に配備された航空機搭載のミサイルだけど、今じゃあ改良型が同じ名称でISに装備されてる。イギリス第三世代機が完成・量産化されれば、まず間違いなく搭載されるだろうな」

「じゃあ、その悲劇っていうのは？」

「誤爆、っていうのが一番近い表現なのかな。レインジャーに入ってから半年が過ぎた頃だった。俺のいた小隊は偵察から帰る途中、山岳部で機甲部隊の強襲を受けたんだ。相手は静電砲搭載のメルカバが二輜と支援のストライカー装甲車が四輜、こっちは五〇口径機関銃がせいぜいのハンヴィーが六、乗員二十四名。どうあがいても勝てる相手じゃなかった。必死で無線に叫んでようやく繋がった味方の航空基地からは、制空権を得ていないって理由で支援を断られた」

遠く懐かしみ、しかし色褪せない恐怖に悪寒を感じつつ、誠は目を細める。こちらの火器は全く歯が立たず、機甲部隊は携行口ケツ

トランチャーの対戦車榴弾ですら跳ね除けて猛然と向かってきた。

メルカバの主砲が火を吹いた瞬間、ハンヴィーの一輦が吹き飛ぶ衝撃。金属片と共に降り注いでいた赤い物体は、車輦と運命を共にした仲間の肉だった。一度の攻撃で五人が死んだ。文字通り木端微塵となつて。立ち込める火薬臭に、負けず劣らず強烈な血と肉の焼ける匂いを覚えている。

「どういうわけか、あの時はひどく落ち着いていたよ。もちろん怖かったけど、でもそれ以上に納得してたんだと思う。ああ、ここらが潮時なんだ、ってな。大げさな棺桶に入れられた葬式より、砂漠の片隅で消えちまうほうが気楽でいい、なんてことも考えた」

その時の自分を思い出し、喉奥を鳴らせて笑った。絶望するわけでも、ましてや希望を抱くわけでもない。迫る死に納得してしまうとは、あまりにも情けないことだ。

「そこに奴が来た。一瞬だったよ。まず戦車が両方とも吹き飛んでそれから姿が見えた。空中の一点で立ち止まって、こっちを見ていた。そのすぐ後、彼女は装甲車に襲いかかって殲滅した。文字通り殲滅だ。車輦を壊して、逃げる敵兵を残らず殺していったよ。まあ、あの時はずいぶんと嬉しかったけどな。ざまあみろって感じだった」

実戦で初めて目にするISの性能。百聞は一見に如かずと言うが、まさしくそのとおりだ。圧倒的な機動性、火力。うるたえるストライカーを数秒で全て破壊し、逃げる敵兵をロケット砲の連発で薙ぎ払った。

「みんなが歓声を上げた。俺もだ。俺は小隊長に言われて、礼を言うために通信回線を繋いだ。けど向こうから聞こえてきたのは、ずっと同じことを繰り返す呟きだったよ」

「呟き？」

ラウラが訊く。

「そう、呟きだ。こんなはずじゃない、こんなはずじゃない、ってな。こっちが話しかけてもそればっかだ」

PTSD、戦争疲労、戦闘神経症……呼び方は様々で多岐に渡る。

だが根底にあるのは同じだ。戦場での急激なストレスが原因で精神が壊れてしまう症状。

「そのすぐあとだ。無線機から目を上げると、彼女と目が合った気がした。そんな気がしたただけだと思う。実際、距離は五〇〇メートルはあったからな。けどわかった。こいつはもう駄目だ、やばいつて。直後、警告する暇もなかった。俺がやめると叫んだ瞬間、彼女は残ったハンヴィーにロックオンして、プリムストーンを全弾発射した」

急速に接近するミサイル。対戦車兵器はただの車輛に対して威力が強すぎたのだ。爆炎と苦痛に呻き立ち上がった誠を待っていたのは、火の海に変わった砂漠。漏れた燃料が砂に染み込み、そこへ爆炎が引火したのだ。たった一人の女によって、小隊は全滅となった。「生き残ったのは俺を含めて三人。その内の一人は、次の日に死んだ。彼女共々、狂っちまったんだろう。ライフルの銃口を口に突っ込んで……」

パンツ、と撃つ真似をする。卑屈な笑いが漏れた。それからシャルロットを向き、

「これが“プリムストーンの悲劇”だ。たった一人でできるはずのなかった大量殺人を認識しなければならない、ISの欠点。性能面しか考えられなかったIS推進派の、どうしても隠したい汚点だ。もっとも俺にとっては幸運でもあったかもしれない。昼間、ISに自我は無いと言ったが、ある意味で嘘だ。波長、とでも言うのかな。俺はあの事件がきっかけでブラックウイドウとそういう波長が合つて、ここに来た」

——違う。

心の奥底で生まれた本心。これも嘘だ、という自己嫌悪。波長などあるわけがない。いやそもそも、ブラックウイドウを扱えたのは精神的理由からではないのだ。あの機体は――。

「その人は軍人だったの？」

「ああ。後から聞いた話じゃあ、彼女はイギリス空軍試験部隊の一

人だつたらしい。偶然、俺たちの無線を聞いて駆けつけたわけだ。安っぽい正義感と英雄願望で、無許可離脱までして。……誰かに似てるな。彼女もあるいは予防対策訓練を受けていれば違ったかもしれない。けどこの学園にそんなプログラムはないだろう」

「今は……？」

「精神病院にいるらしい。また同じことをやらかすよりはそのほうがいいさ。ああ、誤解しないでくれよ。別にイギリス人を恨んじやない」

オルコットのことだ。あの代表候補生に抱くものなどない。いや、そもそも“プリムストーンの悲劇”を起こした試験部隊員にしても、恨んではいなかった。憎むべきは彼女たちではない。むしろ自分と同じ被害者だ、と誠は考える。唯一、彼が復讐と憎しみを抱く相手はただ一人。

「じゃあ、一夏を殴ったのは――」

「ありや公私半々だ。正直、適当に聞き流すつもりだったんだけどな。むかついたのと、馬鹿にされた気がした。それにまた同じことを繰り返されるなんて、エイプリルフールのネタにもならない。血で汚れる覚悟も無い奴が背負っていい兵器じゃないんだよ」

シャルロットは俯く。むしろ一夏を始め、ここの生徒が“プリムストーンの悲劇”を繰り返すとは限らない。しかしたった二日ではあるが、過半数の人間が同様の末路を辿るだろうと思わざるをえない。特に今日の昼間、一夏でなくあの場の面子からしておかしいのだ。いつか何かがきっかけで互いが敵同士になるかもしれない、他国の人間。それが親しくしているとはまるで信じられなかった。

もしも殺し合う立場になったとき、彼等はどうするのか。おそらく話し合いで解決を求めるはずだ、と誠は思う。それこそ映画のよう。だがそれが成功するとは思えない。個人と国との違いはあれ、話し合いで解決できなかった結果が戦争なのだ。あとに残るのはやりきれなさ、任務達成のための排除だけ。

「井ノ上」

不意にラウラが言う。

「横槍かもしれないが、お前は殺人認識をISの欠点だと言った。だがそれは本当に欠点なのか？」

「どうということだ？」

意図が読めず聞き返す。

「私にはそうは思えない。確かに使用者の効率性で考えれば、通常兵器と比べ遥かに劣ったものだろう。ワンオフ兵器を扱う人間が、そう何度も戦闘を拒んでは意味がない。だがむしろ、それは篠ノ之束が意図的に行なった設計ではないのか、と。私にはそう思える」

「戦闘、ひいては殺人を認識させ、忘れさせないための措置だった、と言いたいのか？」

「そうだ」

彼女は頷く。まっすぐに誠を見て。

「兵士は駒だが、人間だ。同じ人間を殺した感触を、忘れてはならないはずだろう」

「それは軍人としての意見か？」

「公私半々。お前が一夏を殴った理由と同じだよ」

ふむ、と頷く。

「デュノア、お前はと思う？」

「え？ いや、ボクはそういうことあんまり詳しくわからないし……」

「専門的なことじゃない。もし自分が実戦に出て人を殺すとして、それが任務だから仕方ないと割り切るか、それとも殺人を認めていくか、今わかるか？」

「殺人を……」

小声で呟く。彼女も、他の大勢と同じく実戦で人を相手にすることとはあまり考えなかったのだろう。それは仕方の無いことだ。出来ることならこんなことを考えず、平和な世で生きたいのが人間なのだから。

「ボクは……まだわからない。自分の立場も、いつかそういう選択

をしなくちゃいけないってこともわかってるはずだけど、でもまだ……」

「それでいいんだよ、シャルロット」

言ったのはラウラだ。

「言い訳か、向き合うのか。それはどちらも正解で、不正解の無い選択だ。だがそれだけに難しい。ゆっくり決めてもいいはずだ。違うか、井ノ上？」

「同感だ。少なくとも卒業までに決めればいいと思う。悪いな、デユノア。急かすようなことを訊いた」

素直に詫げる。すると彼女は慌てて首を振った。

「いや、全然そんなことないよ！　なんていうか、井ノ上君が同じ年とは思えないくらいにいろんな経験してて、すごく覚えておかなきゃって思うし」

「同い年？」

誠は奇妙な顔になった。きょとんとして、今聞いた単語の意味を確かめる。それから、

「何言ってるんだ。俺は十七だ。お前らと同い年じゃないぞ」

「……は？」

間を置いたラウラの声。そちらを見ると、呆気にとられたようなドイツ軍少佐の顔がある。

「自己紹介の時に言ってなかったか？」

「聞いてないけど……」

シャルロットの疲れたような声。先ほどとはまるで別の困惑に満ちている。

「そうか？　何人かには確実に言っただけだけど……まあいいか」

「井ノ上、お前まさか留年——」

はっとしたラウラを言葉を遮り、

「何でだよ。軍でどうすりゃ留年するんだ」

「古参兵とかいるだろう」

「おい、ちょっと全世界の古参兵に謝ってこい」

ジト目で睨む。

「いくらなんでも十五でレインジャーに入れるわけがないだろう」

「私は十五で特殊部隊指揮官なのだが」

「歩兵かISかの違いだろ。いやでもまあ、気にしないでくれ。たった二歳の違いだ」

飄々と煙にまぐ。それでも沈黙する二人に対して、苦笑を浮かべつつ言う。

「そんなに意外か？」

「そりゃそうだよ」

とシャルロット。半ば呆れたような口調だった。

「まあ、いいだろ別に。仲良くはできないと思うけど、よろしくやつてくれよ」

「仲良くできない？ また何かやらかすつもりか？」

「たぶんそうなる」

やや誤魔化し気味に言った。少女二人分のため息。

「言っておくが、私は何のフォローもしないからな」

「ボクもさすがに」

二人して疲れた声。誠は笑った。

「心配するなよ。明日の今頃は、たぶん俺を軽蔑してる」

夢を見る感覚、というのが一番近いだろうか。アリーナから地表二〇〇メートルの上空、そこで一点だけ白昼の青空と異なる色彩が浮いている。いくつかの直線的なフォルムをしたパーツが集い、一個の人型を形成した塊。光を反射しない黒い艶消し加工の外装は、おそろしく滑らかでいて無機質。金属特有の冷たさを持たない、例えるなら車のタイヤに似た質感を見せる。顔面のフルフェイスマスクに収まった二つの多目的カメラという両眼に、右目の斜め上へは補助となる第三の瞳が存在した。

三眼の人型機動兵器。冠された名はブラックウィドウ——クロゴケグモ。それに収まるが如く纏った誠は、静かに目を閉じている。大地の感触が無い空、制止して視界を遮断すると、足元のおぼつかない夢の中にいるようだった。ひどく曖昧な意識。ともすれば、兵器の中にいることを忘れ、眠りへ落ちかねない。裏を返せばそれはリラックスしていることだ。この上なく落ち着き、薄刃の如き呼吸弛緩した筋肉が、適度な脱力感を与えてくれた。

不意の電子音。ディスプレイが何者かの着信を知らせた。送信者の情報を確認。回線は米軍の通信衛星を介した秘匿通信である。住所までは特定できない。もっとも、誠はその住所どころか、相手の顔も知っている。昨日も話したばかりだ。

「ドク？」

回線を開き、問う。返ったのは皮肉げな言葉だった。

『いったいお前が何を考えているのか、いよいよわからなくなってきたぞ』

「何の事だ？」

『つまらんとぼけ方だな。その機体は二十四時間、休み無しでこちらがモニターしているんだ。どうしていま起動している。学園の予定には無いはずだろう』

「模擬戦だよ。これでも人気者でね」

『よくそんなことが言えたものだ、井ノ上。俺は馬鹿なことをするなと言わなかったか？』

「ドク、すまない。それについては謝る」

平静のまま告げた。感情がこもらないため、本当に詫びているのかわかりにくい。

『そう思っているのなら、今すぐに停止しろ。わかっているのか？そこはお前にとっての隠れ蓑なんだ』

「さしずめ学園全体がギリースーツみたいなものかな？」

『そうかい、レインジャーの次はS A Sに入隊したいらしいな。相棒の少尉だか大尉だかの代わりにそいつを持って行けよ。超国家主義者だろうが一キロと言わず十キロ先から狙撃すればいい』

たっぷりの嫌味。ドクにしては珍しい、と誠は思った。よほど今回の模擬戦が気に食わないようだ。

『なあ、誠。真面目な話、お前はまだ安全じゃないんだぞ？ 予定外の起動はするなと何度か言っただろう。いつ起動するのかかわっているのなら、そいつのシグナルだって秘匿処理できる。正直に言えば、一昨日の模擬戦だって織斑千冬からこちらに連絡が無ければやらせなかった』

「連絡があつたのか？」

『ああ、N S Aに。彼女にはある程度の事情を知らせてある。だが今回、どういうわけかそれもなかった。誰の差し金かは目に見えてるがな。……言っているのはそんなことじゃない。お前たちの機体は痕跡を残す。それが現状でどれだけ危険なことか、わからないお前じゃあないだろう』

ドクはお前ではなく、お前たちと呼称した。複数人を指す。その意図はどこにあったのか。話の流れから察するに、機体とはブラックウイドウであるのは確実である。だが同時に、ブラックウイドウが他のI Sとは異なると述べているようにも聞こえる。機体コンセプトなどではなく、もっと根本的な部分で。そしてお前たちという

表現は、誠以外にブラックウィドウを使役する人物ないし集団がいるということか。

「危険は慣れてるよ」

『お前はそうだ。だが他の生徒たちはどうなる。お前を編入させたのは、その学園に危険を及ぼせるためじゃない。木を隠すには森、というが、お前のやっていることは隠れるべき森を焼いて自分の存在を主張するようなものだよ。まるで駄々をこねた子供だ』

「釣りには餌が必要だろう？」

『つい先日まで他人だった学友を撒き餌にすると？ 恐れ入ったよ。お前がそこまで馬鹿だとは思わなかった』

苦々しげに吐き捨てられる。ため息が聞こえた。

『いいか、もう一度だけ言っておく。お前は子供だ。経験、年齢、技術、そんなものはどうでもいい。ただお前がそういう日々を送ったというだけで、子供じゃない証明にはならない。むしろ逆だよ。自分は戦争を知っていると、主張して何になる？ お前は自分で決めた道で勝手に後悔して、他人に八つ当たりしているようなものだよ。いいか？ これは俺たちの問題でお前の問題じゃない。大人が解決しなければならぬことだ。その模擬戦が終わったら、身勝手な行動は絶対に慎めよ』

「……わかったよ」

心無しか沈んだ声。しばしの間が空き、

『話はこれだけだ。何か言いたいことは？』

「無い。あんたが正しい。……いや待ってくれ。一つだけ」

『言ってみる』

「どうしてレインジャーに入隊させてくれたんだ？ あんたなら反対すると思ってた。今もそうだ」

『反対するつもりだったさ。でもお前も二十歳に近いんだ。自分の道くらい自分で決めたほうがいいと思っただ』

誠の口からせせら笑いが漏れる。

「そんなに信用してくれてたのか」

『冗談だ。それと、正しくはそれだけ信用してみたいだな。本音を言うなら、それが最善の策だと思った』

「最善？ 反対するつもりだった、と言ったじゃないか。本当はもっと早く学校に行かせたかったんだろ」

『状況が違った。国内にいるより、外国へ送ったほうが安全だった。レインジャーと言えたあの歩兵、そいつを情報の錯綜した最前線から見つけ出すのは難しい』

「なるほどね」

代わりに何度となく殺されかけたが、というのは口にせず飲み込む。

『それともう一つ』

「何だ？」

『当時のお前は、普通の学校で普通に暮らす、なんてことは絶対にできなかった。周囲の危険性がじゃない。お前自身が危険だった。不相応な戦闘技術を持った子供は、平和な世界じゃあテロリストと変わらない。お前は今以上に戦争を捨てられなかったよ』

「……ひどい物言いだな」

『ああ、ひどい話さ。お前のせいじゃないのにな。……他には？』

「何も無い」

『わかった。忠告、くれぐれも忘れるなよ』

通信が終わる。首を左右へ動かした。どうにも肩が重い。

戦争を捨てられない、と。その言葉が無言になったスピーカーよりループ再生されている。薄々、自覚はしていた。だがどこかで否定する気持ちもあったのだ。それが信頼している友人に指摘されたことで、否応にも認めなければなくなった。胃に氷の塊が落ちてゆくような感覚。軽い吐き気を伴うこれは、恐怖だろう。自分の欠点を認識することへの恐怖だ。

深呼吸を繰り返す。目を閉じた。暗い世界。だが完全な闇ではない。目蓋の向こうから伝わる、ディスプレイとカメラ映像の明かり。目を眩ませ、惑わせる光があった。

不意に通信システムが二度目の受信を示す。ドクではない。相手は衛星通話でなく、短距離無線から接続していた。ただ気になる点の一つ。そのコードは音声を暗号化し盗聴による情報漏洩の可能性を低める、秘匿回線のものだった。

「どちらさんで？」

『私だ、井ノ上』

低いハスキーボイス。それだけで相手が特定できる。感情の希薄な、というより押し殺したような口調は、織斑千冬の代表的な特徴だった。

『予定通りに行なったぞ。すぐに始める。観客はお前の指定した生徒だ』

顔を動かし、観客席に視線を巡らせる。複数の人影。望遠モードで確かめた。シャルロット、ラウラ、セシリア、そして箒。

「どうも、先生。手間を取らせて。他の生徒は？」

『自習にしてある。これはお前と一夏、あの四人の問題だ。本当なら鳳も必要だっただろうが』

「クラスが違うなら、仕方ありませんよ。……監督要員は先生だけですか？」

『もうじき山田先生も来る。進行は予定通りにやるぞ』

「了解。ところで、本当に協力していいんですか？」

『良くはない。が、必要だ。あの馬鹿も、多少は成長してくれるだろう。自分を利用すればいいと、そう提案したのはお前だ。私はそれに乗らせてもらう』

「わかりました。なら、乗った船が沈まないように気を付けてください。これは泥の小舟ですから」

『沈む前に止めるさ。いざとなったらな。それと——』

「何です？」

『私の弟をあまり侮るなよ』

脅迫めいた口調。誠は短く笑う。

「肝に銘じます、先生。では」

通話を終了。きつく目を瞑り、開いた。

武装を選択。最初の模擬戦同様、カービンを取り出した。マスターアームをオンに、セイフティだけかけておく。同時にディスプレイが変化した。マスターアームへ点火したのをきっかけに、主要システムが戦闘モードへ切り替わる。短距離レーダーと、レーザー照準が起動。ブラックウイドウが自動で全方位索敵を開始する。そして敵機を補足――。

その影は正面、約十メートル下方でこちらを見上げていた。ブラックウイドウと違い、全身装甲を持たない標準的なISの外観。白を基調とし、一振りの剣を携えている。

「織斑……」

オープン回線で呟く。呼応するように、白式を纏ったルームメイトは同高度まで上昇、十五メートルほどの距離を挟んで対峙した。

「先に行っておく、お前に詫びる気は無いぞ」

『俺もだよ、誠。昨日、ずっと考えてた。お前が正しいんじゃないかって。でも決めた。最初にそれを言っておく』

雪片の切っ先が持ち上がり、誠を向いた。

『俺は自分の考えを曲げたりしない。お前から見たら傲慢なんだろうと思う。けど決めたことだ。お前に言われたくらいで諦めるほど、甘い覚悟で挑んできたんじゃない』

「……覚悟、か」

口の端が吊り上がる。兵器の仮面の下に浮かんだ、歪な嘲笑。

「吐くだけなら誰にでもできるさ。俺はお前の意見なんて興味が無い。その英雄願望でまた死人が出るのが嫌なんだよ。この考えを撤回させたいのなら、俺を殺してみろ。――始めよう」

後退。さらに間合いを取るべく、ブラックウイドウは僅かに上昇を加え後方へ。ディスプレイではダイヤモンドマークが白式をしつかり捉えている。両手が雪片を握り、こちらへ急接近しようと身構える寸前。僅かに早く、誠は呟く。

「ステルス、起動」

飛びかかるうとした刹那、突然に起きた現象は一夏の中で理解しえなかった。誠の機体、ブラックウイドウの輪郭が揺らぐ。さながら蜃気楼のように。黒い装甲が色彩を失い、存在を希薄なものへ変化させる。攻撃かと身構えるのと、ブラックウイドウが完全に消失するのとは同時だった。

比喩ではない。それは文字通り、完全な消滅である。初めからその場にいなかった、遠隔出力のホログラムか何かだと。そう告げられれば疑いようもなく納得しそうなほど。レーダーにはまったく反応が無い。アクティブ、パッシブ、ついでに熱源探知も。いったい何がどうなっている。頭の中はすでに半分ほど混乱していたが、雪片を強く握り無理やりに緊張感を生み出した。

周囲へ目を凝らし、状況を確認。やはり何の姿も見えない。それから自問を始めた。

これはブラックウイドウが有するワンオフ・アビリティと見るべきなのか。第三世代から、ISには通常の戦闘機能とは別に特殊能力が備わっている。それがワンオフ・アビリティ。白式で言うところの零落白夜がそれだ。だが、これはいつでも発動できるわけではない。波長やテンションなど、呼び方は人によって様々。要するにISとの同調が最高レベルに達した時にのみ、初めて発動が可能となる。ある程度の戦闘の末に発動するのならまだしも、戦闘開始と同時に起きるはずがない。

——落ち着け。

言い聞かせる。一度の深呼吸の後、視線を定めた。正眼に雪片を構え、体ごと動かし周囲を見渡し——レーダーに反応。真下、五〇メートル。

「っ！？」

反射的に退避。同時にレーダー反応のほうで複数の銃声、弾丸がそれまでいた空間を飛び去る。向き直り、視認。ブラックウイドウ

がこちらを見ている。その両肩が持ち上がり、ロケットらしき物体が四発、放たれた。

——違う！

自分でロケットと認識したそれを、瞬時に否定。反転して急降下。あの機体にロケット砲は無いと、誠自身が述べていた。あれはミサイル。

刹那にレーザー照準。数は四。弾頭に照準システムを搭載した自動補足ミサイルか。自分の判断が正しかったことに喜びを覚える反面、どう回避するかに思考を巡らせる。不意に気付いた。また、リーダーからブラックウイドウの反応が消えている。振り返って確かめたかった。だがそんな余裕は無い。

と、誠の言葉が蘇る。先日、一度目の模擬戦で彼は言っていた。

『本当は奇襲用なんだが、これじゃあ奇襲も何も無いからな』

奇襲用とは、ブラックウイドウのコンセプトでなく能力を述べていたのか。そして彼が愛機を三・五世代機と称したのも思い出す。不可視となるのはワンオフ・アビリティではないだろうが、それは別にワンオフ・アビリティを搭載していることになるはず。

リーダーを確認。ミサイルはこちらを追っている。どう回避するか。

『おい』

聞こえるはずの無い声。嫌な悪寒が背筋を駆け登る。真正面で空間が揺らぐ。消える様が屋気楼ならば、出現も同じ。ブラックウイドウは何の構えも無しにこちらを向いている。

「くっ……」

咄嗟に雪片を構える。左へ刃を落とした下段。

対して誠はまるで無防備だった。カービンをぶら下げたまま、じっと見つめているだけ。その姿に覚えるのは屈辱。

「ふざけるなよ、誠！」

真一文字の斬撃。狙ったのはブラックウイドウの上半身だ。絶叫に怒りを乗せ、雪片を振るう。刃はまっすぐとその装甲へ。それで

も動じない誠に、微かな恐怖を戸惑いを感じる。

僅かに鈍った一瞬の隙。それこそが最大のミスだった。雪片が切り裂かんとする直前、ブラックウイドウは上体を沈め、白式の懐へと潜り込む。虚しく空を斬る雪片を引き戻そうとした時、すでに遅かった。カービンの銃身が、白式の右腕を叩く。衝撃で雪片が離れた。刹那、黒い機体の左足が白式の上半身へ絡みつく。

『ふざけてはいない』

落ち着きを払った誠の声。左腕が突き出される。一夏の眼前へ現れたのは、腕部に搭載された四〇ミリ径の銃口。奥で装填済みの弾丸らしき物体が、銀色に輝きを放っている。

『殺すときはいつだって真面目だ』

言い終わるや否や、一夏は目前へ迫った死を悟ると同時に、それを受け入れようとはしなかった。顔を背け、銃口から逃れる。轟音。顔面の真横を、射出されたものが空気を引き裂いて飛ぶ響き。そして銃声。いかにシールド越しとはいえ、音までは防げない。

いや、それ以上にある心理的衝撃が一夏を襲った。至近距離、放たれたのは紛れもない大口径の針散弾。対人兵器としては最高レベルの殺傷力を秘める。それを聞いたということは、威嚇や単なる模擬戦で行なう戦い方ではない。発砲間際に誠の放った台詞が、何よりの証拠となっている。彼は、殺すつもりなのだ。

「誠、お前——」

『しぶとい』

間近の発砲により、脳は揺さぶられたままだった。怯んだ神経、反応も同様に遅れる。ブラックウイドウの左手が一夏の顔を掴み、己の後方へと放られた。後ろを取った、と。あるいはそんな解釈もできたかもしれない。正面、こちらへ迫ってくる四発のミサイルが無ければ。

最初の出現時、発射されたあの誘導弾だ。まだロックオンは解けていなかった。白式もとい一夏は、そのミサイルが殺到する眼前へ投げ出された形となる。

考えるより先に体は動いた。白式は反転、上下逆さまになり振り返る。すぐ背後にいるブラックウイドウは、再びその姿をばかしていた。手が伸ばせば届く距離。そこにあるのか不確かなブラックウイドウの左足を、白式の両手が掴んだ。霞む輪郭が出現。

『何を……！ 織斑——』

「逃がさねえからな」

微かな驚愕を示す誠に、不敵な笑みを浮かべて言う。

『クソが！』

カービンが動く。銃口はミサイルへ。密着した状態であれば、ブラックウイドウも必ず損傷を受ける。この機体の能力は不可視になるだけであり、消滅するのではない。今、一夏がその足を掴んだことで証明された。であれば、誠は自身が助かるために、己で放ったミサイルを撃墜しなければならない。

乾いた破裂音が連続する。三点バースト射撃で数セット。吐き出された弾丸は違えることなく四つの弾頭を潰し、暴発を引き起こした。約十メートルほど手前で一瞬の炎と視界を遮る煙。爆音の最中、再び雪片を呼び出し手に取る。背面へと周り、斬りかかった。

避けられるはずのない一撃が、しかし金属に遮られる。ミサイルの迎撃を終えたカービンが背中へ回され、曰く劣化ウランの材質という突き出た銃剣が雪片を留めた。

『邪魔だ！』

苛立ちを乗せた罵倒。銃剣に弾かれ、体が崩れる。その直後、ブラックウイドウは間合いを取るべく瞬時に離脱、上昇。苦し紛れに雪片を振るうも、空を切った。

「させるか！」

すでに五メートルほど距離の空いた黒い機体を、叫ぶと同時に追う。内心、一夏は焦っている。一度目の模擬戦で、誠は銃剣を用いた格闘戦で一夏と切り結んだ。それが今回は違う。断じて格闘に持ち込もうとはしない、明確な拒絶があった。そうさせるのはブラックウイドウの能力。距離を保ち不可視となり、一対一での奇襲を仕

掛ける。そうならば、射撃兵装を持たない白式は圧倒的不利に立たされるのは明白だ。

距離を空けてはならない。焦燥に駆られる中、だが一つ謎が解ける。ブラックウイドウは姿を眩ませられる。あらゆる索敵カメラ、およびリーダーからも。だが、それなら何故その状態から近接攻撃を行わないのか。そして何故、先の二度の攻撃時に姿を現したのか。おそらくブラックウイドウは、不可視のまま攻撃を行なうことができない。いや、攻撃以外に外部接触も含めるべきだろう。先ほど足を掴んだ際、半ば透明化していた機体はそれを中断した。考えてみるに、誠の意思ではなく強制的なものだったはず。

レーザー照準を知らせる警告音。前方のブラックウイドウからだった。少なからず驚く。一夏は、ブラックウイドウに三次元リーダーが搭載され、それを用いることによる全方位ロックオンが可能だということを知らない。

ブラックウイドウがミサイルを発射。白煙は二発分。しばし前方を飛翔した誘導弾は、そのどちらも反転、垂直降下の形で白式に迫る。

「クソ」

毒づき、雪片を構えた。対ミサイル能力の無い白式に、今できる一番早い対処方法は二発の誘導弾を斬ることだ。斬ると同時にすれ違い、そのまま誠を追う。衝撃波による多少の損害は覚悟しなければならぬが。

左の一発目に狙いを定めた。斬り上げてあれを仕留めた後、上段からの袈裟で右のもう一発を斬る。その光景が頭に浮かび、実現させるべく明瞭とさせた。ミサイルとの距離、残り五メートルを切る。一夏は短い呼吸を吐き、一瞬の斬撃に構え――。

「な……！」

爆発。雪片の範囲へ入る手前、突如としてミサイルが起爆した。爆風に仰け反る。

――近接信管！

不意に悟る。間髪入れずに二発目が迫り、一夏の背後で爆発。ミサイルだけでなく、ロケット弾や砲弾にも存在する近接信管。命中ではなく目標手前で起爆し、標的にその爆風と破片とでダメージを与える。考えてみれば、ブラックウイドウに搭載されて当然の兵装。手ばかりは一夏だ。

二、三回転しながらの落下。どうにか体勢を立て直す。上空を仰ぎ見るが、すでにブラックウイドウの姿は無い。レーダーも異常無しを知らせている。

——どこから来る？

正眼を構え、周囲に視線を巡らせた。出現の瞬間、姿を表した一瞬が決め手となる。カービンの射程はそれほど長く無いはず。狙撃は有り得ない。

——狙撃……？

カチリ、と。頭の中で思考の空いた隙間に歯車がはまった。最初の模擬戦の際、誠は何と言っていた。ブラックウイドウの兵装はカービンとミサイル、腕部のランチャーとチェーンガン、他に特殊ショットガンと軽機関銃。まだもう一つあった。彼はそれを対地攻撃用と呼んでいたが、しかし——。

レーダー反応、真上、三〇〇メートル。仰ぎ見た先に静止して佇むブラックウイドウは、こちらに銃口を向けていた。カービンではない。それよりも一回りは巨大で、無骨。さながら対物ライフルをさらに肥大化させたような形状。銃身上部、陽の光を反射して煌めくのはスコープか。その銃が周囲で迸らせる青白い電流を目にして、一夏は全てを悟った。対地兵装、電磁加速砲。ガスライフル

「っ……誠！」

真正面から駆ける。そして電磁加速砲が光を放った。狙われたのは顔面。光速で射出された弾丸は、僅かに逸れて顔の真横、左方向をすり抜ける。刹那、左頬に激痛が走った。弾丸が近すぎたため、シールドはその風圧を防げなかったのだ。頬の肉が僅かに抉られ、擦り傷に似た痕を残す。

飛散した血が左目に入った。一瞬、押し留められそうになる。だが、構わず白式は上昇を選んだ。喉を裂く絶叫。三〇〇メートルの距離を埋めるべく、最大速で向かう。雪片は右脇に体と並行して構えられている。刺突の一撃にのみ絞った形。この速度のまま、正面から接近して刃を突き立てる。狙うは肩。と、ディスプレイに新たな表示。零落白夜、使用可能と知らせる。間髪いれずに起動、雪片がその形状を変えた。実体ある刀身は、青白い光へ映る。

ブラックウイドウまで、二〇〇メートル。

「終わりだ」

絞り出すような声音。オープン回線で囁く。残り、一五〇メートル。

『いや』

妙に落ち着いた響きが返った。よもや返事があると思っていなかった一夏は、驚愕に目を見開く。

『まだ終わらない』

カメラのフラッシュに似た、しかしそれより遙かに強烈な光が網膜を焼く。反射的に目を瞑った直後、左肩に衝撃。電磁加速砲より放たれた一撃が着弾した。シールドにより貫通はされられ、外傷は無い。それでも威力はすさまじい。一方向への前進にのみ注いでいた速力は、それにより妙な方向へ逸れ白式を横回転させた。

『まだ終わりはしない』

脳髓に浸透するような声。さながら、言い聞かせるように誠は言い、再び光が焚かれた。反射的に一夏が行なったのは、零落白夜の解除。それまで消費していたシールドエネルギーは停止、そして腹部に衝撃を感じた。重い拳を食らったような感覚。肺から酸素が絞り出され、一時的だが呼吸も不可能となる。仰け反り、頭から落下していった。意識が朦朧として、ひどくぼやけている。

右手にはまだ雪片の感触があった。まだ手にある。それだけで、何もできない。上空からこちらを見下ろすブラックウイドウを眺めた。黒い機体はしばし戦果を確認するように観察した後、また空へ

溶けて消える。

地上まで五〇メートルとなり、白式は衝突警告を発した。機体を引き上げなければ。だが、頭でわかっていても体は言うことを聞かない。シールドエネルギーを確認。三十四パーセント。まだ余力はある。墜落にもどうにか持ち堪えるだろう。他人事のように考えていると、やがて砂埃に包まれた。電磁加速砲の最初の一撃、あの逸れた弾丸が着弾して巻き上げられたのだろう。シールドに緩和され、それでも全身を痛める墜落を経験したのは約二秒後のことだった。

暗転しかけた意識が戻り、目を開ける。落ちてゆく時と同じ砂埃の中で。一夏はうつ伏せに倒れていた。白式の右手は、まだ雪片を掴んでいる。レーダーを確認、反応無し。傷を負って肉が剥き出しの左頬に、土が触れてひりひりと痛む。

何度か呼吸を繰り返し、それから雪片を地面に突き立て支え変わりに膝を立てる。息が荒い。穏やかな風が次第に土埃を晴らしてゆく。視線は定まらず、地面をじっと見つめた。不意にその景色が歪む。一夏は始め、脳震盪でも起こしたのかと思った。だが違う。ぐにやりと形を変えた大気から黒い装甲の足が見え、気付く。顔を上げた時、同時に電磁加速砲が突きつけられた。青白い、迸る電流。こちらは膝立ち、むこうは直立。まるで処刑するかのように、ブラックウィドウは一夏を見下ろしていた。

ステルスを解除、電磁加速砲を突きつけてから誠は残弾を確認した。放ったのは三発。弾倉は十発装填のため、残り七発。再充電は完了しているが、問題は銃身冷却だった。電磁加速砲はあくまで試験兵器であり、その域を出ない。砲と呼称されながらも、六ミリという口径から銃に分類されているものそれが原因である。いわばおまけで搭載されたようなものだ。銃身冷却に時間がかかり、連射は不可能。先ほど、空中で放った二連射はFCS（火器管制システム）にアクセスし、セイフティを強制解除させたからできた。

あと何発撃てるだろう。充電時は冷却機能が効かない。熱は蓄積されている。また同じような連射をすれば、銃身自体が歪み暴発してもおかしくない。

そんなことを考えながら、誠は銃口を突きつけている相手を見下ろす。織斑一夏を。

「……大体、想像はつくさ」

吐き捨てるような侮蔑混じりに、言う。焦点の定まらない一夏へ。「肺に土が入って息が苦しい。その頬に埃が入って痛む。頭じゃ俺を倒せと思ってるのに、体が動いてくれない。まだ動けるのに、どうやっても言うことを聞いてくれない。心配するなよ、織斑。別に脊髓やらを痛めたわけじゃない。どうやっても逃げられない死に直面すると、大抵は頭の奥で諦めがついちまうんだよ」

「諦めが……」

一夏は呟く。無線を介さない肉声。それが可能なほどの至近距離だ。

「俺を殺すつもりなんだろ？」

「どうか。……正直、光速弾に二発も耐えるとは思わなかった。まったく、ISは面倒な相手だ。でもそろそろ限界だろう？ ミサイル、光速弾、墜落。おまけに零落白夜で大分、シールドを減らしたはずだ。もう十パーセント以下だろう」

答えはない。沈黙の肯定。誠は続ける。

「これが戦場だよ、織斑。俺の戦い方、お前の友達は卑怯だと思うかもしれない。特に篠ノ之や鳳なんかは。だが戦闘なんてのは、とことん卑怯になった奴が生き延びる。英雄にさせられることはあっても、英雄になれる奴はいない。いつかお前の一人よがりで周りが死ぬなら、今ここで殺しておくのもいいかもしれないな。そのシールド残量で、いったい何発耐えられるか……」

「俺は死なない」

若干だが強い口調。まだ雪片を支えに、どうにか膝立ちをしている一夏は、誠を睨む。

「死ぬんだよ。俺が引き金を絞れば、それだけだ。死なない、死にたくないで生き延びられるなら、誰も殺すための訓練なんて受けない。殺さなきゃ生きれないんだ。逆に言えば、死にたくなくても死ぬ。お前が遊び場程度に考えてた現実だ」

「なら撃てよ、誠。撃ってみろ。お前が殺したいのなら、そうすればいい」

しばしその顔を見つめる。奥底に隠れているであろう真意を探そうとして。だが、睨む瞳からわかるのは何もなかった。

「よく言う。強がりもほどほどにしろよ」

「強がりさ。否定はしない。でもお前は仲間だ。俺は信じてる」

不意に発せられた単語が、フェイスマスクに隠れた誠の眉を吊り上げる。一夏が続けた。

「昨日のこと、俺がお前の仲間を侮辱したって。そのとおりだったと思ってる。俺が力に溺れてたのも認める。でも、お前はもう俺たちの仲間でもあるんだ。俺は信じる」

「俺がお前を撃つ訳がないって？ 仲間だからか？」

「ああ」

自身に満ちた声。カメラ越しにその瞳を見た。こちらを向いて微動だにしない視線は、真剣な光を帯びている。この男は本気で言っているのだ。それがわかった瞬間、誠の口から薄い吐息が漏れた。嘲笑という形を成して。

「俺がお前の仲間なら、お前の友達にこんな真似はしないだろう」

一夏に疑問符が浮かぶより早く、銃身がゆらりと動く。新たな獲物を求めてさまよい、数秒後に発見した。電磁加速砲は静止する。その銃口を観客席の人影、模擬選前に千冬の述べた四人の少女たちに向け。誠は視線入力にてブラックウイドウから電磁加速砲にある指示を出した。すると突然、電流の迸る頻度が増す。銃というより、さながら避雷針のようだ。青白い光が周囲へ飛び散り、地面を焦がす。同時にいくつかの警告が表示される。誠が目を見らせたのは、うち一つだけだ。

「誠、何を――」

「いまこの銃は最大出力で射撃待機となっている。お前を撃つたような通常射撃とは違う。銃身強度やコンデンサ容量から考えて一発撃つのが限界な主力だ。この状態ならシールドエネルギーが万全であつても貫通できる。つまりここに張り巡らせたバリアも無意味だ」

観客席を見る。銃身上部、直接・間接の両方で照準可能な複合スコープがあつた。選択しているのは間接照準。ブラックウイドウの射撃システムに接続され、フェイスマスク内部のHUDに照準情報ヘッド・アップ・ディスプレイを投影する。

誠は望遠カメラにて四人を確認した。箒、セシリア、シャルロット、ラウラ。四人は固まって座っている。その表情まではわからないが、動きから狼狽しているのは理解できた。微かに銃口を動かしてシャルロットとラウラに近づけた時、昨夜二人に述べた言葉が蘇る。

――軽蔑してる、か。

本来なら言うつもりはなかった。言葉の彩、というよりあれはもう一種のノリだ。その後も適当に誤魔化したが、二人が怪訝に顔をしかめたのは言うまでもない。

突然、誠は自分の感情に驚く。後悔でもしているのか。それも今この時になつて。そんなはずは無いと言い聞かせるように、唇をきつく噛む。それから銃口を四人の中心に戻し、一夏へと視線を戻した。

「さっきの説明だと、まるで一撃必殺を使って四人のうち一人しか仕留められないような感じだろ？ でもな、違うんだよ、織斑。こいつは試作品で、あちこちが未完成のままだ。銃自体の限界出力となると、今度は弾丸が耐えられない。それまでもギリギリで形を保つてるからだ。バリアに着弾した瞬間、スプラッシュ現象ってやつが起きる。簡単に言えば、弾丸が潰れて弾けるんだよ。ちょうどお前の友達に散弾が襲いかかるようになる」

「いったい何を――」

緊急回線によるノイズが紛れ込む。一夏も遮られたということは、ブラックウイドウだけでなく白式にも伝わっているのだ。というより、受信先を細かく限定しないオープン回線によるものだ。

『井ノ上、何のつもりだ』

「黙っててください、織斑先生」

あくまで平静に、千冬へ言う。返ったのは無感情の冷たい声音。

『貴様、自分が何をしているのかわかっているのか？』

「こちらの台詞です。今、この場の主導権は俺が握っている。あなたじゃない」

言いながら、誠はディスプレイの端へ視線を走らせた。ISの強制停止信号を受信、と。そう示されている。万が一の事態に備え、模擬戦を監督する教師陣には強制停止コマンドへのアクセス許可が存在していた。千冬や、それとも副担任の山田真耶^{やまだ まや}か。どちらかがそれを使用したのだ。強制停止はIS自体に大きな負荷がかかるため、最終手段でしかない。いまそれを使わなくてはならないと、二名の教師は判断している。

――やりすぎてるな。

ほんの一瞬、誠の中で罪悪感に似た思いが生まれる。だがそんなものはすぐに姿を消し、彼は音声認識によってブラックウイドウへ命じた。その場の誰にも聞こえないような小声で。

「エシロンへアクセス、機体認証コードを使用。当機を合衆国IS登録覧から一時的に隔離」

数瞬の間が空き、命令実行の表示。すぐさまそれは成功へと切り替わった。同時に信号受信の表示は消失。無線の向こう側、千冬が息を呑むのがわかった。

「無駄ですよ、先生。そいつはISであることが根底の信号なんですから。……こいつには意味がない」

『井ノ上――』

怒声を回線ごと遮断。再び一夏を見る。

「あまり時間も無いだろう。今に教師連中がここに来る。現状でどうあがいても俺の負けだ。だから、織斑——」

トリガーを僅かに絞る。それだけで脅しとなるのは当然だった。

一夏の表情から読み取れるのは戦慄の一言のみ。

「俺はあの四人を撃つ。お前と交渉はしない。問答無用で撃つ。止めたいのなら俺を殺すしかない」

「お前は仲間だろ、誠！」

「まだ信用するか？ それとも説得のつもりか？ どちらにしても意味は無いぞ。話し合いで解決できないから殺しあっている。口喧嘩で終わる段階はもうとつくに終わったんだ。……さて、どうする？」

不意に、自分が何かを期待しているのがわかった。それは死だ。

一夏が雪片を取り、こちらへと突き立てる。そして己の死を持つて一夏を同類へと堕とすこと。すなわち殺人者へと。そうさせるのはかつての仲間や過去の出来事からではない。ただ単に、気に食わない。それだけだった。この上なく幼稚で、理性の欠片もない幼稚な発想。例えば死んでも、それでこの男が血に汚れ破滅するならば構わない。

なので一夏の返答は、誠を嘆息させることとなった。

「俺は信じてる」

先ほどから微動だにしない主張。一言を返す。

「そうか」

四人を一瞥し、続けた。

「せめて手向けの言葉でも送ってやればいいのにな」

微かに笑い、彼はトリガーを引いて発砲を——。

視界の端で何かが動いた。白い影、白式。下段から斬り上げられた刃は電磁加速砲を叩き、発砲直前でその射線を狂わせる。衝撃でトリガーが絞られた。発砲。銃口は空を向いている。発せられた光もまた上空へ飛んだ。上下逆さまの、地上から空に駆ける雷か。

眼前で上段から二撃目へ映る雪片の刀身。降り下ろされた瞬間、

電磁加速砲を斬撃とブラックウイドウとの間に割り込ませた。だが、銃身は先述の通り強度の限界に達している。雪片を止めることなく、半ばから両断されて金属片を撒き散らした。

「この馬鹿野郎が！」

一夏の絶叫。続く三撃目は再び下段からの斬り上げ。回避はできない。迫る刃がスローモーションで映った。認識が追いついていない。

しかし体は違う。ブラックウイドウの左手が、不意に下げられた。武装を求めて。行き着いたのは銃器で無い。今まで機体の左腰にずっとぶら下がり、誠自身もナマクラと称した刀の鞘。そして口が思いつくより先にブラックウイドウへ命じている。

「CQC！」

ブラックウイドウは発せられた単語を即座に検索、戦闘モードの一つにそれを見つけ起動する。同時にHUDが切り替わった。全兵装、カービンなどの銃器から腕部のランチャー、チェーンガン、さらにはミサイルまでが使用不可と表示される。ただ一つの武器を除き。だが異変はもう一つあった。九〇と表示されていたシールドエネルギーが瞬時に低下、その余力を僅か三パーセントに変える。

雪片が装甲を切り裂く直前、ブラックウイドウの右手が刀の柄を握り、抜き放った。現れた刀身は人のサイズからすれば大振りな野太刀に相当するも、体を一回り以上は大きくさせる機動兵器同士の戦闘では、並みの太刀と変わりはない。二つの刃が切りあった瞬間、変化が起きた。ブラックウイドウの刀、その刃が青白く発光する。数瞬の鏝迫り合いに互いを弾いて飛び退く。着地の瞬間、刀身は鞘の内へ回帰した。三メートル弱の距離で白式と向かい合ったブラックウイドウは、左足を半歩ほど退かせ、柄にそっと右手を添えた居合いの構えをしている。

誠は深く息を吐き、それから笑う。

「やればできるじゃないか、織斑」

「……ふざけるなよ、誠」

苛立ちを押し殺すように、一夏。白式は正眼の構え。正面から誠を睨んだまま、彼は続ける。

「お前みたいな馬鹿はいくら言っても聞かないんだな」

「同感だね。まあ、それでいいさ。理由はあれこれあっても結局、原因は一つだけなんだ。織斑、俺はお前が嫌いではない。率直に言って、お前だけじゃない。ここにいる連中、全員だ。どれも平和ボケしたような顔してやがる。それが気に入らない」

「ならどうして軍隊に入った？ お前自身が選んだんだろう」

「ああ、そのとおりだ。そうしなければいいと、散々思った。軍に育てられただの、仲間が残ってるだの、そんなものは俺の勝手な思い込みで、俺が残る必要なんて無いって。でも生憎、理論で片付けられるほどできた人間じゃないんだよ。——無駄話が過ぎたな」

ブラックウイドウは身を沈める。ほとんど手を使わない四つん這いのような格好になり。傍から見れば、さながら二本足のクロゴケグモだった。

呼応するように一夏は言う。

「馬鹿だよ、お前は、誠。本当に馬鹿だ」

「結構。なら尚更、本物の一騎打ちといこうじゃないか。日本じゃ馬鹿につける薬は無い、とか言うんだろ？」

卑屈な笑いが漏れる。対する一夏は正眼から下段へと構えを移し、述べた。

「まったくだな。この馬鹿野郎」

携えた太刀を下段に構える。その刃は抜刀から一分半が過ぎた現在もなお、青白い輝きを失っていない。一夏たちの言葉に合わせるならば、これがブラックウイドウのワンオフ・アビリティ。少なくとも誠の認識はそうだった。

「お前の剣に零落白夜、いや雪片式型の名前があるように、これにも名前がある」

誠は言う。目の前に立つ敵を見据えて。

「銘を井上和泉守国貞、げんしきしんがい“現式真改”」

「真改……？」

眼前、正眼に雪片を構える一夏が首を傾げた。予想外ではない。戦闘中につけ込む隙を見せる立ち振る舞い共々、そうなるだろうと考えてはいた。現実にとここまで無防備を晒されては、呆れるを通り越して苦笑するしかないが。

「知っているか」

「少しは」

やはり、と胸中に呟く。入学前、送られた生徒のプロフィールを思い出さずとも、模擬戦で手を合わせていればわかる。一夏の技は少なからず剣道を基本にしてなりたっていた。ISは空中戦がほとんどとなるため、そこに少なからずのアレンジを加えているようだが。格闘戦での間合いの取り方は、剣道そのものだった。そして彼のように上昇志向が強い、つまり理想を求めるような人間は、総じて過去の技術を知ろうとする。そこに剣道という嗜みが合わさって、真改の名を知っているというのも納得できる理由だ。

井上真改とは、遠い過去の一六三〇年から八〇年前後まで日本に生きたという刀工である。その作風は大阪の刀工の中でも最高峰に数えられ、日本刀の世界では名刀、宝刀もしくは聖剣の代名詞たる正宗に匹敵、それ故に大阪正宗とも称された。初期には同じ刀工で

あり国貞の銘を使った父の作風、技法を継承した作りであり、その後から独自の作が現れる。そうしてできた彼の作は父のそれを遙かに凌ぐと言われ、現在でも重要文化財に指定される品が存在した。

「これは単に名を肖った太刀じゃない。親父が家から持ち出し、IS用装備として改良、打ち直しを行なった本物の真改だ」

「親父さんがつて、お前……」

察したのだろう。一夏の目が僅かに細まる。

「転校してきた日、言っただろう。親父は日本人だと。井ノ上は親父の家の名前だ。それ自体は珍しくもないし書く字も違うが、井上真改は俺の遠縁に当たる」

一瞬、誠は笑みを浮かべた。歪んだ笑みだ。同時に跳ぶ。地を這うような超低空飛行により、白式へ到達するまでは僅か一秒に満たない。一夏の顔に浮かんだ驚愕を見ると同時に、すれ違いざまの斬撃を見舞う。金属音と衝撃。胴を狙い振るわれた真改は、雪片の刃に阻まれる。そのまま十メートルほどを飛び、反転。再び向き合った。

「親父は立派な人だった。単身でアメリカへ赴き、母さんと共に空軍の航空機開発で名を上げた。作る物に違いはあっても、そこには真改の刀に似た煌めきがあった。現用されていた米軍機の最新型は、あの人の設計だ。だがそんなものはすぐ踏み躪られた。……お前にはわからないだろう」

接近、二度目の低空飛行。遠目では滑空にも思えただろう。構えは同じ下段。一夏が身構え、間合いを図った。瞬間的に踏み込んだ誠は、しかし刃を振るわない。いや、それどころか直前で急停止した。

「っ！」

一夏のタイミングにずれが生じる。踏み込みかけた足を無理やり留め、それにより体勢が崩れた。

全ては計略通り。誠はそう自負し、一夏が体勢を取り戻そうとしているときには、八相へと構え直した真改を横薙ぎに一閃させてい

る。青い軌跡。これを間近で見守れていれば、達人であっても誠の間に合いに疑問を抱いただろう。狙ったのは首筋、それも切っ先が届くかどうかの距離で。危険を減少させるため、あるいは臆病風に吹かれたとも見える。武器に関わらずその間合い、効果範囲に入るというのは自らも敵に身を晒すことを意味した。誠はこれをレインジャー時代に叩き込まれた教訓で理解している。

——スコープに狙撃兵を見つけたら、向こうもお前を見つけていると思え。

この法則はおよそ全ての兵器に当てはまる。銃も剣も、さらには弾道ミサイルであっても、だ。一方的に攻撃できる距離というのは、その状況はさておき性能面に絞ると意外なほど少ない。

誠の行動はそうした相打ちの危険に怯えたようにも見えたのだ。不意打ちで体を崩しても尚、保身を優先したのだと。しかし違う。彼は最初から切っ先でもって首の頸動脈を断とうとした。不必要に踏み込むより、そうしたほうが速度と威力で勝っていると考えたからである。最も、これが装甲面ならいざしらず、生身の首を狙ったのだから後者はあまり意味が無いだろう。いや、むしろ必要以上の斬撃を加えないような、そんな印象だ。

反射的に一夏は上体を引いた。そのせいで、的確に切り裂くかと思われた斬撃は、しかし鋭く空を切るのみ。ただし掠りはしたらしい。無様に倒れる白式から飛び退くとき、その首に細く赤い一線を確かめる。

「あの日だ、織斑」

口調に僅かな怒気を含ませ、誠は言う。立ち上がる一夏を眺めながら。追撃を留めたのは何かしらのカウンターを警戒したことと、正面から打ちのめしたいという願望に逆らえなかったため。

「白騎士事件。あのふざけた戦闘でISが全世界に知れ渡り、そして開発競争が始まった。多くの技術者と一緒に、親父もIS開発へ参加することになった」

開発者である篠ノ之束を除き、当時は世界中のどこを探してもI

S 専門の技術者などは存在しなかった。当然だ。いきなり湧いて出たイレギュラーは、つまるところの宇宙人に等しい。その技術・構造を解析するにも、まずどうすれば解析できるのかわからないのだ。軍部はこの状況に対して、ある分野の技術者たちを集め篠ノ之束にノウハウを教え込ませた。集められたのはISの特徴に近い兵器の専門家。火力ならば戦車を、飛行能力なら航空機を、と。そのためIS専門の技術開発者・研究者というのは歴史が浅い。それ以前は何らかの別分野に上乘せする形で存在していたため、専門とは言えなかったからだ。純粹にISのみを絞った技術者というのは、そういった人々から得た知識を縫い合わせることで、数年前からようやく誕生した。

「あの日だ。あれが始まりだった」

誠は続ける。先の台詞を反芻するように。話していて楽しいものではない。だが真改の存在を語るため、それは避けてはならなかった。あるいは語らないというのもありえる。戦略面で見れば、自分の手の内を晒すなど特殊な状況下でなければ無意味であり、無価値だ。しかしそれもできない。織斑一夏は全てを知らせた上で斬り伏せる。

「あの人はIS研究に着手したその日から、何かがおかしくなった。ISを恐れ、その上で無力を痛感していた。それまで築き上げた成果を一蹴する兵器を、作りながら憎んでいた。母さんも同じだ。二人は俺を見ないようになった。だが、それだけならまだ良かった」
構えを解く。右手の真改を逆手持ちへと変えた。そして地面に突き立てる。

「拳句、あの人はこんなものまで作ってしまった。真改の名刀をナマクラへと変えたんだ！」

絶叫。八つ当たりのような怒りを、誠は感じていた。

「ナマクラ……」

一夏はその単語を反芻する。疑うように。

「嘘だと思っか？」

「……嘘かどうかはわからない。でも俺には、ナマクラには見えな
い」

フルフェイス・マスクの下、誠は口を歪める。

「ああ、そうとも。今は違う。今だけは」

再び真改を手にとった。切っ先の土埃を払うため一振りし、先端
を一夏へ突き出す。

「どれほど名刀であつても、旧時代の武器をISに持たせることな
んて出来はしない。だから作り替えた。刀身を溶かし、新たな金属
を混ぜ、刃の代わりに機械を埋め込んだ」

現代戦に対抗できる日本刀。それは底辺まで落ちることとなった
愚者の思いつきだったのか、それとも他国へ住まいながらも持ち続
けた日本人のプライドと見るべきか。現代に存在するあらゆる物と
渡り合え、斬り捨てる。故に現式真改。果たしてすでに別の太刀と
なったような代物に、真改の銘は必要だったのか否か。

誠は言う。

「この現式真改には刀身がある。だが刃が無い。いま現れているこ
れは、ある条件下によってのみ出現する。ブラックウイドウのシー
ルドエネルギー、その九〇パーセント近くを吸収することによつて
できる、高出力・高密度のレーザーだ」

「……吸収」

一夏は気付いたらしい。その表情の変化を、誠は感じ取った。

「そうだ、織斑。お前たち姉弟の零落白夜と同じ発想だ。あらゆる
物質を断ち切れる非金属の刃。違うのは物質を斬るかシールドを斬
るか、それと時間経過で吸収するのではなく、先にほとんどを吸収し
て発動する点だ」

シールドの九割を失って初めて形成される刃。それは、かつての
航空機開発で高い地位を得た父とは思えないほど、非実用的なもの
だった。おそらく、ISでは扱えなかつただろう。いや、扱えても
決して装備されなかつたはずだ。これは非シールド戦闘を想定され
たブラックウイドウだからこそ、搭載可能とされた“おまけ”に過

ぎない。これを初めて手にした瞬間を、誠は覚えている。最早、面影の欠片すらない兵器に抱いたのは、父親の絶望と父親への失望。

現式真改はその存在を知る一部の人間から“幻式真改”と囁かれる。装備を可能としても実用性の無い、つまりほとんど陽の光を浴びることのない刀への侮辱だ。もはや真改の銘すら必要の無い代物となってしまうた、紛れもない業物への。誠にはそれが落ちぶれた父を指差す嘲笑にも聞こえた。

「あの人の失脚も、こんな兵器を作った愚行も、お前に当て付けようなんては思っちゃいない。いつかあの女に支払わせる代金だ」

あの人、と。いつからか誠は父親をそう呼んでいた。他人行儀な台詞。親父と呼ばなくなったのは、その背中を思い出したからだろ。うか。自分から遠くなるだけならまだしも、尊敬した姿さえ失った父の末路を。彼の中で、父親とはIS開発に引き抜かれた時点で死んだものなのかもしれない。

だが、と誠は言う。

「それでも感情は抑えきれない。俺もガキってことだろう。ろくに訓練もしないで平和に生きてるお前たちのような奴等が、ISを扱うということ。お前たちが訓練を積んだ大勢の精鋭より重要視されていること。その精鋭を、お前たち程度の人間が一瞬で殺したこと」

真改を振るう。上段から縦に一閃。青い燐光が尾を引く。素振りのような動作の後、誠は右下段へと構えた。

「お前が殺したんじゃない。けれどお前を見ているとそう思えて仕方がない。そう思い込む。親父も仲間も、殺したのはISだ。わかっているのに、それでも……」

思い込む、と誠は言う。違えることのない自覚の証明だ。彼はわかっていながらも、感情を抑え込み理性を働かせる術を知らない。殺すのは人であって兵器にあらず。何度言い聞かせたわからない言葉は、未だに浸透していなかった。

「俺はお前を倒す。この上なく惨めに、圧倒的に……傲慢に。ただの八つ当たりと逆恨みで、叩きのめす！」

踏み出した左足で地を蹴る。ブラックウイドウの脚力はそれだけで機体を地面から離し、さらに勢いを与えた。誠は飛行の途中、真改を鞘へ収める。停戦の申し入れではない。その逆、徹底抗戦の表明だった。形成されたのは居合いの構え。

誠にとつて、これは奥の手でもあった。彼が日本の剣術を学んだのはそう長い期間でない。そんな短時間で会得した技の中では、これが一番と称して良い自信を持てる。練度もさることながら、重要なのはその威力と確実な致死性。名を“虚空渡し”という。

本来、居合いとはこちらから踏み込んで斬る技ではない。抜かずして斬る、というように、その極意は力を使わず相手を制することにある。太刀を露にする場面は、総じて相手が斬り込んできた後。その刃が届く前に一瞬で斬り捨てるか、受けと返しの技を一連で叩き込む。

虚空渡しはそういった居合いにおいて、人によつては邪道とも思える攻めの技であつた。いや、それよりも尚悪い。これは騙し討ちの技だ。多くの居合いがそうであるように、これもまた右手で太刀を抜き放つ。異なるのは抜いたその後で、右手に保持したまま斬らないのだ。抜き放たれた瞬間、右手はその役目を終えて代わりに来るのが鞘にあつたはずの左手。要するに左右の手を入れ替える。そして踏み込みの瞬間、横薙ぎと思わせ左の逆手に持った刃で、すれ違いざまの胴を斬り抜く。遣い手からすれば虚像の居合い。受け手からすれば虚偽の太刀。後者には己の振るう刃が、読み違いから空を斬るという意味も含まれる。故に虚空渡し。

まともな居合いを、というよりまっとうな剣術を学んだ人間ならば、まず間違いなく嫌悪するであろう技だ。これが実戦で使えるかというと、それも難点。踏み込みと同時に斬るはずの動作を、わざわざ長引かせているのだから。使用者に不利な隙を強いることとなる。これを好み、最も自信があるとする誠は、やはりどこかが歪んでいる証拠なのか。

「……？」

——なんだ？

斬り込みにいった直後、誠は一夏の行動に眉をひそめた。構えを解き、雪片を右手に提げているだけ。つまり無防備な格好。まるで斬るならば斬れと言わんばかりの立ち振る舞いだった。あるいは挑発と見るべきか。しかし考えるより先に体は動き、また距離も充分に縮まっていた。

前方から接近する黒い影。まさしく影、いや蜘蛛だ。先の二撃と同様に、これも地面より数センチだけ浮いた位置を維持し、向かってくる。違うのは構えだ。左腰を僅かに退き、右手でもって鞘に収まった太刀の柄を握る。居合いの形。

疑問は多かった。誠はどこで剣術を習ったのか。なぜ居合いという並みの剣術より遥かに技量を必要とする技を会得しているのか。彼はいったい、どれほどの執念を持ってISを敵とするのか。どうして敵と認識したISを使用できるのか。現式真改はブラックウイドウのワンオフ・アビリティではないのか。いやそもそも、あれは本当にISか。

一夏は諸々の疑問を抱き、忘れた。思考の外へ追いやる。いや違う。もっと自然に、流し出した。軽く息を吐く。雪片を逆手に持ち替えた。刹那、眼前に黒い機体が現れる。鋭く空気を吸い、肺を半ばほど満たした。

両者は共に刃を突き出す。駆け抜けようとするブラックウイドウの横倒しになった真改を、一夏の雪片は受け止めた。打ち合いの一瞬、それは十字架を形成したようにみえる。救いと非暴力の象徴が、刀剣という真逆の存在によって誕生してしまう。

「っ！」

耳障りな金属音の中、誠が息を呑むのがわかった。防がれると思っていなかったのか。そこで一夏は気付く。真改が右手で無く左手に、それも逆手へ握られていたことに。いつ持ち替えたのか、一夏

にはわからない。奇しくも両者は共に逆手の刃でもって挑んだことになる。殺すため向けられた凶刃に、受け止めるべく向けられた護剣。一夏の胸中に僅かな、だが確かな怒りが生まれる。なぜこの男、井ノ上誠ばかりがこれほどまで背負わなければならないのか。

誠の呼吸が崩れる。こういう手合いにおいて、呼吸とは心身のバランスへ直結した。必殺の一撃を阻まれたのが原因か。

「誠！」

動揺にブラックウイドウの動きが鈍ったその一瞬、白式の左手が肩を掴んで押し倒す。いかに強固な装甲を全身に纏っていたようと、内部の操縦手が筋肉を弛緩させていれば意味がない。黒い機体はあつけなく倒れた。一夏はその顔へいまだ逆手に持ったままの雪片を突き立てる。

ブラックウイドウの頭部。その真横へ突き刺さった雪片を持ち、

一夏は見下ろす。

「なんでだ、誠」

一夏は言う。憤慨とも同情とも取れる表情で。硬いマスクの下、誠が困惑しているのがわかった。

「どうして一人で背負う。どうして俺たちを頼らない！」

「……なんだと？」

これがISを使った模擬戦であることを、一夏は煩わしく思った。そうでないなら、胸ぐらを掴んで揺さぶってやりたい。

「八つ当たりも、逆恨みも、それがわかってるなら俺に言えよ！」

どうして一人で片付けようと思うんだ、お前は！」

「戯言を……」

歯ぎしりに似た音を聞く。自分の奥歯か、と一夏は錯覚した。しかし違う。誠だ。そして気付く。ブラックウイドウはまだ、現式真改を手放していない。

「ほざくな、織斑！」

青い閃光にも似た刺突。二発食らった電磁加速砲の銃口炎を彷彿とさせる。左へ転がり真改を避ける。足場も何も無い仰向けからの

突きだ。速度は遅く、回避もたやすい。誠もそれはわかっていたはずだ。それでも繰り出したのは、速度を得ずとも真改だけで充分な斬れ味があると判断したからだろうか。

ブラックウイドウより離れた瞬間、左手をバネにして白式は立ち上がる。右手には雪片。正面で、誠はゆっくりと身を起こしていた。「頼れだど？ 一人で片付けるな、背負うなだど？ どうしてお前に頼る必要がある。お前の何を頼れというんだ」

「仲間はそういうもんだからだ、誠」

「まだそれを言うか」

静かな口調。違う、静かなのではない。無機質な声だ。憎悪も苛立ちも、人質や騙し討ちを使った自己嫌悪も。総じて全てをかなぐり捨て、目の前の敵にむける極めて純粋な言葉。裏どころか表もない無気力と生命力の狭間にあたる声だった。そこまで追い込んだのは自分だと、一夏は思い、それが自己満足で傲慢な思い込みだと理解し、正面から聞く。

「訊かせてくれ、一夏。ここまで来てどうして、俺が仲間だと思う？」

僅かな違いがわかった。誠は織斑でなく、一夏と呼んだ。

「同じ部屋に住んで、一緒に飯食べて、皆で笑った。仲間になるなんて、それだけで充分だ」

「……俺は人質を取ったぞ。あいつらの眉間に銃口を向けたぞ」

「わかってる。幕にセシリア、シャルにラウラ。ここにいない鈴音だつてそうだ。お前はあいつらを脅かした。殺そうとして、脅しに使った。でも殺さなかった。だから怯えさせた分だけ、お前を許さない。けどな、それで仲間の縁を切ったなんて思うなよ。仲間になることはできても抜け出すことなんてできない。お前一人を抜け出させない。それが俺の仲間だ」

短い、乾いた笑いが耳に響く。誠の本心を表したものだろつ。

「迷惑な奴だ」

ブラックウイドウが太刀を構える。幻式、いや現式真改。右斜め

に刀身を落とした下段だった。

これが最後になる、と。一夏は確信する。目に分かる確証などなかった。もし持ち合わせていたとしても、必要ではない。あったところで意味など無いのだ。

そして一夏も構える。誠と同じ、右の下段。剣道で習ったものではなかった。いや、そもそも今回の模擬戦で基礎的な動きはそうであつても、剣術は全て我流といえる。斬り込みの予備動作を少なくし、速度を上げる。そのためだけに下段を選んだ。

似て非なる構えをした両者は、しばし互いの姿を焼き付けるが如く沈黙する。数瞬、数秒、あるいは数分。単に踏ん切りがつかないのではない。己の呼吸を計り、相手の呼吸を計り、来るべき最上の瞬間を待ち構える。

ほんの一瞬、真改がその向きを変えた。青い光刃をこちらに向けられる。来る、とそう直感したとき、一夏は地を蹴った。一撃で仕留める。その信念の下、雪片は舞い踊り、眼前ではブラックウィドウが振るう一閃が光を曳いていた。

現式真改のレーザー刃が白式を切り裂かんとする直前、誠は過去に出会った気がした。いや、既視感と述べたほうが的確だろう。この瞬間は以前にも経験したと、思い出す。それは錯覚とは程遠い、明確な記憶だった。

誠は覚えている。ブラックウィドウに乗り現式真改を振るう己と、対面で大型の杭にも似た物体を装備した右腕を突き出す敵機。そのフォルムはブラックウィドウに似て非なる直線的な形状で、全身を覆い、しかし無数の複眼カメラを収めたフルフェイス・マスクと灰色をしたカラーリングが異なっている。誠は知っている。あの機体あの少女に自分は一度として勝つことができなかったと。同じステルス強襲型の機体、猛禽^{リフター}。そして正村湊^{みなと}。いや彼女だけでは無い。当時を監督していた人物が、今になって蘇る。部隊長、情報分析官、

同僚の仲間たち、ドク——カイル・ノーマッド。

その時点で、誠の本心は悟っていた。あくまでも本心は。敗北の記憶と同じ状況。つまりこの先に待つものも同じ——。

真改が薙ぐ。雪片が振るわれる。永劫と思われた追憶の時間は、その瞬間に崩れさった。互いに一度きりの斬撃。二撃目をかけるという考えは、誠だけでなく一夏にも浮かばなかっただろう。これが両者の限界だった。もはや再び真改もしくは雪片を振るう力は、残っていない。

ブラックウイドウは数歩を進む。右手に現式真改をぶら下げて。いや、今はもうその名で呼ぶに相応しくないだろう。マスクの内部HUDに表示された“CQC OFF”の文字が、全てを語った。レーザーの消失した現式真改は、この瞬間を持って以前のナマクラへと回帰する。そして何度目かを踏み出した時、ナマクラはブラックウイドウから滑り落ちた。耳障りな金属音。誠の頭には、反響するはずの無いそのそれが延々と繰り返された。物悲しさと未練とが混ざり合った響き。あるいは父の姿を思い出したのだろうか、とも思える。彼には判断できなかった。刃の無い太刀を手放した時、ブラックウイドウは膝から崩れ落ちる。そしてそのまま、うつ伏せになって倒れた。何より身体が地面に横たわる寸前、すでに誠の意識はどこかの世界に落下し、また役目を終えた分厚い全身装甲の鎧が消失したのだ。

暗い夢の中で、誠は悟る。今回も負けたのだ、と。そして遙か頭上で蜃気楼のように光る太陽を見つめ、今まで決して手の届いたことの無い勝利の味を想像した。

7（後書き）

相変わらずヒロイン勢は空気です。各種ヒロインが嫁の方々、申し訳ありません。作者は某酢豚が好きだったりします。関係ないですね。

次の話で序盤は終了予定です。誤字脱字の発見、作者へのご意見・ご抗議・ご指摘がありましたらお気軽にどうぞ。

それまでがどうであつても、一定期間を酷い環境で過ごした場合の感覚とは中々抜けないものだ。例えば過度なストレスを与える激戦区で過ごした兵士の場合、ベッドよりも野宿のほうが熟睡できるという。居心地云々でなく、安心しすぎるのがかえって悪影響となるのだ。安らぎとは人にゆとりを与え、余裕を持たせる。そんな時に脳がどう作用するかというと、情報や記憶の整理にかかり、つまりは夢を見させた。

当てはまらない人間も多いだろう。どれほど科学的に証明されようと、イレギュラー要素は存在する。誠はこの点に関して例外ではない。己の横たわる柔らかなシーツの感触に包まれ、夢を見ていた別段、悪夢ではない。ただ単純に、友人が寝ている自分を見下ろしているというだけだ。

『慌てて来てみれば、こんなざまとは』

呆れたような口調で言う。顔は見えない。しかし誰なのかという特定はできる。当然だった。ここ数年は顔を合わせていないものの、その声は連日のように聞いていたのだから。

『俺の忠告なんて聞く価値も無いと言いたいのかな、お前は』

嘆息が聞こえる。

——悪いな。

夢の中で誠は苦笑した。声に無い、思考だけの謝罪。現実であれば気付かれるはずもないが、これは夢だ。友人は返答する。

『今度からは是非、こうなる前にその考えへ至ってもらいたいものだよ』

責めるでもない冗談めいた皮肉。いかにも彼らしい言葉だ。ぼんやりと響くそれを聞くと、夢とは卑怯なものだと思った。敗北に敗北を重ね、あるいはそれだけならば良かっただろう。しかし今回、原因は完全に誠の非だ。自分勝手な独断と偏見、思い込みで感情に

走り、あげく関わりはあれど危険を迫られるはずのなかった少女たちまで巻き込んでいる。ここまでして、こんな言葉で済むはずがない。責められて当然。いや、罰せられて当然だ。なのに罰ではなく、ただの皮肉だけが降ってくる。

ふと、左腕に違和感を感じた。金属が何かが触れるような、そんな感触だった。弛緩しきつた筋肉に、精神も同様。重く気だるく感覚が無い。麻酔を注射されてすぐ皮膚を抓られたらこんな感じだろうか。苦痛はないがかといって快楽とも言えない。よほどの特異もとい異常性癖ならそれも有り得たかもしれないが。鈍った感度で何がどうなっているか把握できない。わかるのはただ、何かをされているというだけ。よりもよって自分の体のことを、だ。痛みが存在しないことがどれほど恐ろしいものか、改めて実感する。

——何をした？

『充電だ』

問い掛けに、率直な答え。

——ああ……。

なるほど、と納得した。消耗したバッテリーを再び使えるようにするには、充電する以外に方法がない。予備があるのなら、使い捨て同然に破棄して取り替えるという手もあるだろう。万が一、再充電が不可能なほど使い古した場合もそうだ。しかしそうはならない予備が無い現状であれば、充電しなければ。そうして騙し騙しに使い回すしかない。

『馬鹿が。何をどう血迷って現式真改を使ったのか、俺としては小一時間の説明してもらいたいかな』

——文章にしてくれ。

『お前に舌が無ければそうなるかもな。喋れない被告が法廷に出たら、紙とペンに頼るしかないだろうよ。でも諦める。残念ながら、お前にはまだ舌がついてる』

誠は苦笑する。これまで幾度となく、その皮肉をこうやって返してきた。

——重傷か？

『当然。しばらくブラックウィドウは起動できない。指一本動かすための電力負荷だけで、この世とお別れできる。まだそうなりたくはないだろ？』

——いつだってごめんだよ。

できるだけ本音に聞こえるよう心がけた。嘘ではない。どれほど苦痛であっても、たとえ迫り来る絶望の二文字に納得してしまっても、死にたいと望んだことはなかった。これまで、一度たりとも見下ろす人物もそれはわかつているはずだ。これは単なる言葉遊びか、さもなければ普段と変わらない皮肉の一種。

不意に分かった気がした。自分が怯えていることに。死ではなく、こちらを見下ろして喋っている彼が恐ろしい。彼、そう男だ。今まで、夢で出会う人物は決まっていた。一度として勝ちを譲らず、とうとうそのまま消えてしまった人。だが今回に限って違った。“彼女”ではない。見下ろす男は、彼女たちと同じ道を選ばなかった。今となつては唯一といえる、生存に確証が存在する同胞。

ふとおかしくなった。堪えようとしても、腹の底から沸き上がる滑稽さは抑えようもない。だから誠は笑った。夢の中で、くくつ、と喉奥を鳴らす声を出し、堪えようとせず口元を歪ませる。

『……時々考える。実は俺のことを馬鹿にしてないか？』

心外だと言わんばかりの口調で、男は問いかけてきた。

——いや違う、違うよ。あんたのことじゃない。俺が笑ってるのは自分のことだ。

尚も収まらない。怪訝そうに男が首をかしげる気配。それから思いついたように彼は言った。

『こうして二歳年下で軍事訓練の経験も無い同級生にぶちのめされたイノウエ少尉は頭がイカれちまい、米軍屈指の馬鹿げた男になりました、と』

——小説でも書くつもりか？

『ああ。自伝を一冊まとめようかな。五〇年後くらいに』

——あと五〇年も生きるって？ 迷惑な糞じじいがまた一人増えるわけだ。

『そうだ。お前も一緒に連れてってやるよ。二人仲良く年寄りになつて大往生だ。』

……それで？』

込み上げる自嘲の理由を、男は訪ねていた。

——いやなに、あんたがそこにいるのがおかしいんだ。今までは湊だったのに、あんただ。生きてるのがわかりきってる人間が夢に出てくるつてのが、恐ろしく怖くて、そんなことを考えてる自分が馬鹿みたいなんだよ。

『……ほう』

男は声を吐息に乗せて漏らす。そうするしかないようだった。肯定でも否定でも、思考するでも無い。ただ声に出す。まるで感心があるかの如く見せかけるため。つまり彼の感心は別のところにある。誠の述べた内容でなく、単語に。

『夢。夢かね』

——なんだよ。

『いや。……そうだな、お前には夢だ。今この時だけは、夢でいい——ここで言うことも無いだろう。夢なら夢らしく、さつさと消えてもらいたいよ。そういうことは現実のあんたから聞かし、俺だつて逃避する期間は終わつたんだ。向き合う覚悟はできてる。』

『そう願うよ』

ここまで、ぼんやりとしながらも思考を保っていた頭が、不意に怠惰となった。考えることができない。白い靄がかかったというより、白い世界に取り残されたようだった。最初から閉じられている目蓋が尚も重い。これ以上、どう脱力しろというのか。

手足は弛緩している。指一本、動かすことができない。いや、それすら面倒だ。面倒だから何もしない。ただあるままに、重力へ従つて肉体をベッドに横たえている。不快ではない、と誠は思った。次の瞬間には不快という意味も忘れている。忘却は恐るべき速さで

侵食した。言語の次に感情を、感情の次に記憶を、記憶の次には目的を。そうして忘れてゆくと、全身へのしかかっていた重みが共に姿を消してゆくのがわかった。これまで無自覚だった、何らかの気負いだ。全てを心の底から捨て、失う。

何も無い世界。誠の意識はそこでゆっくりと落ちていった。底なし沼へ沈むとき、抵抗しては苦しむだけだ。ゆったりと身を任せるに限る。

ただし彼はわかっていた。これが永遠に続くはずがないことを。まさしく、一時の夢でしかない。

どれくらいの時間が経ったのか。一日、半日、数時間か。もしかしたら一瞬だったかもしれない。意識のなかでは一瞬というのが納得できる。奇妙な夢の世界で、白い闇とでも表現できる奈落へ沈んでいったのは、まさに瞬きの瞬間だった。意識が覚醒した時、体が異様に軽いのがわかる。ただ眠っただけでこうはならないだろう。誠はこの感覚を知っている。睡眠薬だ。長距離を移動する際、不必要なストレスを抱えないよう支給される錠剤と、よく似た目覚めだった。

そして目蓋を開いた時、眼球はただ一点を見つめて止まる。こちらを見下ろしている、見知った顔。

「……湊？」

声に出してみる。彼女は淡く微笑んだ。幻影か。そう思ったが、存在感は確かなものだ。彼女は実在している。しかし、なぜ？

結論は一つだった。今までの出来事が全て夢であり、自分はいつものように目覚めただけなのだ。そう、全てだ。織斑一夏との模擬戦も、学園も。いやもつと以前から。イギリス軍のISに攻撃されることも、自分の前から消えてゆく仲間たちも全て嘘だった。

深い安堵が訪れ、長い吐息が漏れる。目を瞑った。肩の荷が取れたような気分になる。ふと、頭のどこかで声がした。

——向き合う覚悟はできてる。

いつ聞いたのか、もしくは言ったのか。それはよくわからない。しかし思い出した瞬間、冷水を脳に浴びたが如く思考が明瞭となった。目を開ける。こちらを見下ろす人物をもう一度見た。困惑に戸惑う瞳は、湊でなかった。

「デュノア……？」

「……」

シャルロットは俯き、答えない。その様子や現実を認識した失望感よりも、誠は自分の舌が気になった。うまく呂律が回らない。自身の耳で聞く限りは間違いなく思い通りの言葉を喋っているのだが、どこかもつれている。

「なんでお前が——」

ここにいるんだ、と続けようとし、叶わない。ようやく気付いた。ここが自分の部屋でないことに。柔らかな照明と、ベッドの周囲には白いカーテン。消毒液の微かな匂いが鼻につき、保健室だろうと予測できる。

「俺は——」

「まだ動いたら……！」

控えめな制止。それより早く上体を起こしかけ、シャルロットの発したものが警告だったと知る。胸部から腹部にかけて激痛が走った。軽く呻き、再び横たわる。着ているのはブラックウイドウ起動時に身につける、黒いアサルトスーツ。ただし胸元から下腹部までジッパーが下げられ、覗くはずの肌は包帯に隠れていた。

ベッドの上で息を吐く。唐突すぎる状況の全貌を把握しようと、頭を捻った。だが寝起きそれは信用できないどころか、役に立たない。結局、考えようとしてくれない自分の中枢を見限って、現実性の最も高い方法を選んだ。

「どれくらい眠ってた？」

「……五時間くらい」

ということはすでに夜中なのだろう。やや躊躇いを見せつつ、シ

ヤルロットは続ける。

「あの後、一夏がここまで運んだの。それでさっきまでいたんだけど、さすがに疲れてたみたいで。ボクが交代してる」

「そうか……」

沈黙。重苦しい空気が流れる。だが長くはない。

「聞いてもいい？」

「ああ」

できれば拒否したかった。続く質問は今の誠にも充分に予想できる。それがどういう結果をもたらすかも。だがそんなことはできない。いや、してはいけない。これは避けてはならない門だ。シャルロットが望むのなら、答える義務がある。一時の感情で殺意も無しに殺そうとした、己の責務だ。

「井ノ上君は、ボク達を殺す気だったの？」

「殺す気だった」

「どうして？」

「……八つ当たりだな、多分」

平静を装って言う。後悔しているように見られなければ、それでよかった。成否に関わらず、殺人の加害者が後悔などして許されるはずがない。そうしたいのなら、最初から殺人自体を否定していればいいのだ。戦争だろうが個人的な理由だろうが、人として最も醜悪な行為に及んだ者は、そうして許しを請うことが許可されてはいけない。

「あいつを見ていると、昔の自分を思い出す。それで——いや」

ふと思いついた真実のため、言葉を区切る。数秒経て考えを整理すると、再び続けた。

「八つ当たりなんかじゃない。嫉妬だ」

「嫉妬？」

「ああ。ほんの少し前まで、俺はあいつとよく似た状況に立ってた。いろいろ違うけど、それでも仲間がいるってのは同じだった」

「レインジャー連隊の……？」

「いいや、それより前だ。けどそいつらは消えちまった。一人だけ、残ってくれている奴もいるけど。……あの頃は俺も一夏と同じだったよ。手の届くものは何でも抱え込んで、全部まとめて助けてやるうとしてた。自分にそうするだけの力があるって信じて。でも、できなかった。それで嫉妬だ」

続きを述べることへ、さらに数秒を要する。

「俺と一夏は別人だと、それは言われなくなつてわかつてる。けれど俺の無くしたものをあいつは持つてる。お前みたいな仲間だよ、デュノア。自分がどこまでも惨めな負け犬にしかみえなかった。だから全部、ぶっ壊してやりたくなつた。考えが甘くてむかつくとか、現実とは違つとか、あんなのは全部、建前だ。本音はもっと単純に、妬ましいなんてこの上なく女々しくて惨めなものだ」

苛立ちが募つた。他人に対してではない。自己嫌悪の表れとして。

「俺も訊いていいか？」

返事は無い。構わず続ける。

「どうして助けた？」

「……助けたのは一夏で——」

「それはあいつの事情だろう。奴の考えなら、本人に訊く。今、ここにいるのはお前だ。どうしているのか、訳が知りたい」

僅かな躊躇い。シャルロットからそれが感じられた。しかし彼女は言う。

「一夏に頼まれたから。……それだけ」

彼女は言う。数時間前まで見せた姿は、どこにもなかった。これでいい、と誠は思う。命令に背くことになるが、どうにでもなるだろう。自分は遠ざけられなければならない存在だ。

「俺が憎いか？」

「憎まないわけがない。君は……あなたはボクをお人好しだつて言つたけれど、それにも限度があるよ」

シャルロットはわざわざ呼称を改めた。秘められたのは明らかな拒絶。殺されかけたことと、一夏を殺しかけたことを咎める無言の

主張だ。ならば、と誠はある種に期待を抱いた。

「俺を殺したいか？」

伏せられていた視線が誠に向けられる。その両眼は二つの困惑を宿していた。発言の真意を探ろうとするものと、眼前でちらつかされた誘惑に首肯しそうになるもの。誘惑とはむろんのこと、憎んでいる対象の死だ。自ら手を下すことで憎悪を抱かせる人間を葬れる。シャルロットの瞳は、若干であるにしろ確かにその色があった。井ノ上誠の死を望む、期待が。

しかし、

「殺さないよ」

それまでと同じく、極めて静かな声音で返事はやってくる。一瞬、その言葉の意味を誠は理解できなかった。感情を隠すことができず、彼は驚愕を裸身のまま晒すこととなる。そのままシャルロットを見た。見下ろす瞳は変わらず、誠の行為を咎めている。憎悪が消えたわけでもない。

なのに先ほどとは異なった。憎悪よりもさらに深く、確固たるものとして輝いている意思がある。その目を収めた口が、言の葉を紡ぐ。

「ボクは殺さない。あなたと同じ人間にはならない」

「同じ人間には……？」

動揺のままに繰り返す。

「あなたは人殺しだよ。罪に問われていないだけの」

——違う。

心の奥底、もう一人の自分が呟く。

「兵士はそういうものだ。殺人が殺人にならない人間だ。ISを持った時点で、お前も同類だぞ」

「同じじゃない。戦争なら仕方がないかもしれない。けれどあなたは、平和な時に殺そうとした」

——違う。

呟きは訴えとなった。井ノ上誠がこれまでの人生で経験した結論

を、声無き声で叫んでいる。

「あなたはきつと、自分を正義の味方だなんて勘違いはしてないと思う。むしろ悪人だって考えてる。だから、ボクに自分を殺させようとした。死刑なんかで罪から逃げるために」

――違う。

声は再び変貌し絶叫となる。

――なぜわからない。

誠は言う。シャルロットの瞳をただ見つめて、声にできないそれを叫んだ。戦争なら仕方が無いなど、言い訳にすぎないのだと。正義は力の無い弱者の訴えであり、力を有した瞬間からそれは悪になるのだと。殺人は等しく殺人であり、力を持った正義は相対して悪でしかない。それを叫ぶ。ただ無言のままに。

「……話は終わりか？」

少女の首肯。

「なら、出て行け」

無言のまま、彼女は立つ。ドアが開く音と、閉じる音。人の気配が消える。

一人となった誠は、今しがたまで居た少女の胸中を探ろうとした。彼女はまだ、正義を信じている。一夏や、ほかの生徒たちも同じだろう。彼等は何も知らず、また気づいてもいないのだ。力があるものは悪に等しい。そしてこの世界で最も力のあるISは、巨悪の根源とも称せるのだと。

通りすがりの生徒や同僚たちから手掛かりを得て、靴音をやや早足にして進む。目当ての人物を見つけたのは、昇降口のすぐ手前のことだった。一目でわかる軍服は、今朝早くに見かけた生徒の一人、井ノ上誠が着ていたような戦闘用ではない。実用性より礼儀を優先した正装。アメリカ陸軍で佐官クラスの将校が使うものだ。

「ノーマッド中佐」

第一声。それまでゆったりと歩いていた男は、わざとらしく立ち止まる。それから焦らすような間をとって振り返った。肩へ縫いつけられた部隊章が目止まる。牙をむき出した獵犬と、その下部にある“A:WIA”の文字。

「織斑先生。何かご用で？」

カイル・ノーマッド米陸軍中佐の第一声は、それだった。社交的に見える微笑を浮かべて、それは表面上でなく実際に笑っている。千冬はこの男が嫌いだった。態度が、ではなく存在そのものが受け入れられない。世の中にはそういう人間がいる。何度か言葉をかわし、絶対に分かり合えないと悟るのは珍しくもなかった。

しかし今回はまったく別で、一目見た瞬間から生理的嫌悪を感じている。受け入れられない。いや、受け入れてしまえば、その時から自分だけでなく周囲の人間も破滅させられる。好き嫌いの上限を超えた危機感を抱いていた。

「用事というには些か異なります。もうおかえりですか？」

「ええ。役目は終わったので」

「一目、会っていかねばよろしいと思いますが。目を覚ましたとの連絡がありました」

「会って話し、説き伏せると仰る？」

どこか挑発的な口調。こちらが試されているような物言いだった。「それもあります。失礼ながら、この件はあなた方の過信も一因と考えているので」

「否定はできません。しかし、井ノ上少尉はそれほど馬鹿ではないし、私も時間が無限にあるわけではないのです。今日のところは、これで引き取らせていただくとしますよ。それに話しならばもうしましたから」

びくり、と千冬の片眉が吊り上がる。この男、ノーマッド中佐を呼んだのは千冬だ。意識を失った誠のために。合衆国からそういう約束を取り付けられていたのだ。実際、カイルの処置によって誠の容態はずいぶんと回復したように見えた。彼の持ってきた何らかの

薬品を点滴されたのは十数分前。六時間ほど意識がなかった青年は、もう目覚めている。

だが、カイルの行なったのはそれだけだ。なのに話しをした、と彼は言う。言葉通りの意味に受け取るのなら、いったいどうやっていつ眠っている人間と話したというのか。

「以上ですか？」

カイルは言う。嘲りに思えて仕方がない微笑を浮かべたまま。

「いえ、質問があります。構いませんか？」

「答えられる範囲でなら」

そう言つて男は頷く。

「井ノ上誠とは、何者です」

当初より胸のうちに秘めていた疑問を投げかける。その裏で、千冬は自分がカードを切つたと感じた。彼女は最初の攻撃を仕掛けたのだ。小規模の攻撃で相手の出方を窺う。それこそ威力偵察のように。

「私の部下ですよ」

「はぐらかさないでいただきたい、中佐。井ノ上に家族はない。それならば、上官のあなたが身元を引き受けるのが普通ではありませんか？」

「他に希望するものがいれば、そうはならないでしょう」

「そこが疑問です」

答えながら、魚が釣れたと確信する。

「彼の身元引き受け人に、出てくるはずのない名前が出てきている。トーマス・F・ギブソン中将。所属はアメリカ空軍。なぜ陸軍所属である井ノ上の身柄を空軍が、それも將軍によって保護されているのか」

「それは機密に含まれるので、私の口からは説明できませんね。ただ、今回はご迷惑をかけた。一つお教えしましょう。中將はかつて、少尉の父と友人だった。それだけのことです」

「納得はしかねます」

初めて、カイルの微笑が消える。怪訝そうな目付きをした男に、言った。

「それだけの理由で、あなたがISを使える男を手放すとは思えない。いやそもそも、あなたがなぜISに関わっているのか。カイル・ノーマッド……大尉」

「どういう意味か、わかりませんね」
わざとらしい嘆息を交え、カイルはいう。

「わからないはずはない。反IS派の人間として、あなたは有名だ。直接の暴動やテロには関わらなかったものの、その主張は多くの人間にISへの反感を植えつけた」

「過去の所業に関してはノーコメントとさせていただきますよ。その質問にもね」

とぼけたように肩をすくめる。ここで追求しないほうが良い。あくまでこれはきっかけにすぎない。重要なのはこの次だ。

「わかりました。では最後にもう一つ」

「いいですとも、急ぎませんから」

皮肉げな返答。千冬は述べた。

「織斑一夏との模擬戦で、私と同行した教諭はブラックウィドウに対して強制停止信号を送りました。しかし、それは通用しなかった」
通常、強制停止信号はアクセスした瞬間に作用し、すぐさまシステムを凍結させる。これが可能となるのは学園に登録されたISに限られるが、世代や機種に隔たりなく作用した。根底にあるISのコアがほぼ同一だからだ。

「ありえないことです。さらに井ノ上は、戦闘中にも関わらず合衆国のネットワークに侵入し、自機の登録情報を一時的に隔離、結果としてこのシステムにも未登録機として誤認させた」

ふむ、とカイルは吐息を漏らす。

「あなたはそれを恐れていらっしゃる？」

「ええ。そうです、中佐。ブラックウィドウは信号を受信した。しかし、通じなかった。拒否されたのではないのです。コアに行くは

ずの信号はそのまま行き止まりにぶつかった。まるで、ブラックウイドウにはコアそのものが無い、ISと似て非なるまったく別の兵器であるかのように。答えていただきたい。あなた方はいったい何を造ったのです」

かつて、千冬はこれとよく似た危機感を一度だけ抱いた。今では当たり前前に開発・研究され、要員となる子供たちが教育されている、ISという兵器が誕生した瞬間だ。得体の知れない未知の存在を、昔の自分は恐れていた。それを思い出す。言い知れぬ不安を押し殺せたのは、ひとえに篠ノ之束を信頼していたからだろう。それが正しかったのか、まだ答えは出ていない。こういう問題には、せめてその答えに自分なりの納得をしてから対面したかった。

むろんそんなことを知るわけがないカイルは、伸ばしてもいない顎髭を撫でて千冬を眺めた。同じ通路の数メートルだけあるはずの距離が、ひどく遠く思える。というより、錯覚を感じた。まるで見下され、吟味されているような。

「織斑先生、あなたには恩がある。いろいろな恩がね。私個人としてはその回答を詳細に至るまでお話したいところだ。しかし残念ながら、これも機密に関わる。あなたと言えど、教えるわけにはいかない」

ほんの僅かな違和感。それこそ瞬きの間だけ垣間見えた。あるいは思い込みかもしれない。カイルから向けられた、言いようのない憎悪。この男は自分を憎んでいる。

「ただし――」

と、男は続ける。

「やはり黙っているのは心苦しい。ひとつだけ、ヒントを。篠ノ之束は天才だ。それこそ優秀な科学者百人、いや千人に匹敵する。たった一人で。では織斑先生、優秀な科学者を千人ほど集めれば、そのたった一人に匹敵すると思いませんか？」

カイルは笑う。底知れぬ悪意を秘めて。

「どういう意味です」

そう返答したとき、カイルは踵を返している。

「ノーマッド中佐！」

喉より出た抗議はいつしか怒声に変わっていた。それを背に浴びた男は、笑いながら振り向いて答える。

「物事には順序がある。あなたはまだ知るべきじゃない。出来ることなら、そのまま無知でいることをお勧めしますよ、織斑千冬さん。知らぬが仏と、この国では言つのでしょう」

福音 1

彼女は着陸地点を目視で確認し、自機が受信した着陸のルート誘導に従って機動を変更した。高度は二〇〇フィート。兵装は全てセイフティがかけられ、マスターアーム・スイッチもオフ。マニュアル通りの安全手順を踏まえ、確認してから管制塔へ無線チャンネルを開く。

「スカーフエイス1よりCP、作戦予定に従って着陸に入ります。
タンゴ・ホテル
認証はTH、グリニッジで一四〇〇時」

返答まで約三秒がある。暗号化無線特有のノイズが混じった音声は、明瞭な響きで言った。

「スカーフエイス1、確認した。グリニッジ、一四〇〇時。着陸を許可する。おかえり、大尉^{キャプテン}」

その呼ばれ方を心地よく感じる。この管制官は好きだった。名前には知らないが直接会ったこともあり、人柄が良い。特に声を聞くと落ち着く。

彼女は手慣れた動作で着陸地点に接近。砂漠の真ん中にぽつりと出現した空軍基地は、慌ただしく動いている。受信状態の無線から、管制塔と誘導班とのやり取りが聞き取れた。

「大尉が帰ったぞ。ラプターが着陸する」

「東から別の機体が接近。少佐だ。タイフーンを確認」

それを聞いて、東方へと視線を動かす。複合カメラを望遠モードに切り替えると、そこに自機と同じ人型を成したシルエットを認める。口元が緩んだ。家に帰ったとわかっていても、やはり戦場へ身を置く以上は不安が付きまとう。友人を見つけたというのは、それだけで安心できた。

「高度五〇、着陸」

三秒後、両足がコンクリートを踏んだ。もつとも、自分の足ではない。それに連動して動く機械の足。ラプターと呼ばれた機体を持

つ体だ。彼女はそのままシステムを待機状態とし、アイドリングを保持したまま除装。そして人型兵器は消失し、彼女がぶら下げたペリダントとなった。

砂埃が舞う滑走路に立ち、髪を掻き揚げた。肩ほどまで伸びた短髪は、亜麻色をしている。身に纏ったアサルトスーツは首から下をすべて被っており、少女に似つかわしくない戦場の雰囲気醸し出していた。疲労を小さな吐息をして表した彼女は、肩を軽く回す。その時、右腰の物体に手が当たった。ホルスターへと収まった九ミリ口径のベレッタだ。

「お疲れ様です、大尉」

不意にそんな声がかかる。年齢的にも成人に近い彼女とは違い、大人になると心がけているような少女の声だ。意図しているのか、無機質つぼさを出そうとする淡々とした口調は、背伸びをする子供のように思える。

少女はすぐ後ろに立っていた。ブロンドの短い髪は後頭部でポニテールを成している。ACU迷彩の上下を着て、足は華奢で小柄な体に不相応なコンバットブーツを履いていた。両手で持っているペットボトルは、劣いの品だろうか。

「ラプターのほうは——」

「シャノン！ 会いたかったよ、ホントに会いたかった！」

言葉を区切らせて彼女が行なったのは、有無を言わせず炸裂する抱擁。華奢な体が、それより少し背の高いだけの彼女に抱きかかえられる。ペットボトルが地面に落ちた。

「あー、やっぱり抱き心地最高。抱き枕になればいいのに。ねえ、シャノン、抱き枕とか出ないの？」

「その予定はありません、大尉。それより暑苦しいです」

「大尉じゃないよ。ちゃんと名前で湊って呼びなさい」

「わかりました。湊、暑苦しいからさっさと離れて」

僅かにも変わらないシャノンに対して、抱きしめているほうは妙にテンションが高い。正村湊は先ほどまでであった軍人の顔をどこか

へ消し、歳相応と取っていいであろう少女になっていた。ブロンドの髪を撫でながら、湊は言う。

「抱きしめるのは最後にするって言ったよね」

「いえ、記憶に無いけれど」

「あれは嘘よ」

「嘘も何も聞いていないわ」

「だったら抱きしめればいいじゃない！」

「知らないけど。というか本当に暑い。特にあなたの胸が。邪魔でしょうがない。嫌悪を抱いてくる」

「いいじゃない。大きくなくても魅力だと思うけど。ステータスとか言っじゃない」

カチリ、と小さな金属音。重機やヘリのエンジン音が満ちている中で、どういうわけかそれはよく聞こえた。撃鉄を起こしたシャノンのベレッタが、銃口を腹部に当てられている感触と共に。抱きしめた状態のまま、湊は固まる。表情はかろうじて笑顔を保っているが、青ざめていた。

「あの、シャノン……？　今ちよつとよろしくない音が聞こえて、弾丸とか出そうなのが脇腹に当たってる気がするんだけど」

「安心して。九ミリのパラベラム弾でも零距离ならアサルトスーツを貫通するはずだから」

「すみませんでした！」

飛び退く。一瞬、シャノンが顔をしかめるのを目撃した気がする。「シャノン、どうして残念そうな顔したの？　すぐく失敗したって顔したよね？」

「私、胸がある女って死ぬべきだと思うの」

「いろんな人が巻き添えになる願望だね！　この基地だけでも四分の一はやられるよ！」

「正確には三十三人。ここの女性は総数で三十四名だから。全体数で言えば確かに四分の一」

「シャノンしか助からない！　気にしすぎだよ、もっと自信持って

！
」

「富がある人はみんなそう言う」

か細いが健康的なシャノンの手が、ベレッタをスライドさせる。薬室にすでに一発、装填されていたらしい。パラベラム弾が排出されると、即座に二発目が送り込まれた。一見すると無意味な行為のようにだが、脅しとしてはかなりの威力を引き出す。それも無表情かつ無言の怒気をたぎらせていれば絶大だった。

「冗談、だよ……？」

「当たり前よ。だからもう一度、抱きしめてもいいわ。最期の思い出には充分でしょ」

「冗談じゃなかった！」

嗚咽めいて喉を鳴らし、後ずさる。と、その背が何かに当たった。何をしている、お前たち」

上から降ってくる声。湊より頭一つと半分は背の高い、男の声だ。

「ここは遊び場では——」

「少佐、セクハラはやめてください！」

逆方向へ飛び退く湊。それこそ脱兎の如く、男から離れる。

「……いつ俺がセクハラをした」

唸り声を混じらせて男は言う。湊と同様のアサルトスーツに、栗色をしたクルーカットの髪。スーツ越しにもやや細身に見える体つきは、長い足と相まって実際以上の長身に思わせた。

「女の子に無断で触るなんて、それだけでセクハラです」

「貴様がぶつかってきたんだろう、大尉。——コンウェー中尉」

湊の肩越しに、シャノンが呼ばれる。

「貴様も一部始終を見ていただろう」

「はい、ウィンターズ少佐」

期待通りの返事らしい。デヴィッド・ウィンターズは精悍な仏頂面で、ふむ、と頷く。

「では言いがかりなのもわかるな？」

「いえ、わかりません」

「何だと？」

鳩が豆鉄砲を食らった、という表現が的確だろう。自信たっぷりの顔は、一転して驚愕になる。

シャノンに述べた。

「普通の方なら今の出来事は事故となるでしょう。しかしぶつかった相手が少佐ですから。一般論で語るには問題が多く、また日頃の行動から考えても、意図して正村大尉と接触するように仕組んだ行動、つまり常人にはまず理解できないほど高度に計画されたセクハラと断定します」

「貴様は俺に恨みでもあるのか？　なぜ貴様等は俺を変態と想っている。大体、どうしてそこまで回り道をしなければならんだ」

「あれですよ、少佐」

湊が口を出す。

「ぶつかるか、ぶつからないか。成否の間に胸の奥から湧き上がってくるドキドキ感を味わいたいですよね。わかります。わたしもコンウエー中尉を抱きしめる時は、正面からか背後からか、それとも側面から攻めるかとか、いろんなドキドキ感を味わうので。日本流に言うとかくワクワクが止まらねえ、とか、ワクワクが止まらねえつても、あれは素晴らしい感覚であり、わたしとしても長らく虜に――」

「貴様は黙っている、大尉」

一蹴される。こうなつては黙ってはいじけたふりをするしかなかった。しゃがみこみ、しくしくという効果音を自分で口にしながら嘔泣きに入る。

「それで、へんた……ウインターズ少佐、どういうご要件ですか？」

「前半は聞き流すぞ。用があつたのはその大尉だ」

「やはりセクハラを――」

「違う」

心無しか強い語気で否定。

「俺も大尉も、たったいま帰投したところだ。デブリーフィングに

出席しなければならぬ。が、貴様等は抱きついたり何だりで向かう気配が無い。だから呼びに来た」

「そういうことでしたか。わかりましたか？ 正村大尉」

「はい……」

子供を諭す教師のような口調で言われる。立つ瀬がない。一歳と言えど年下にそういうことを言われるとは、情けなくなった。最も、湊以外の二人は完全に無視して話を続けているが。

「それとも一つある」

「何です？」

「コンウエー大佐から招集がかかった。俺と大尉、それに貴様も」

「父が？」

怪訝そうなの、しかしどこか嬉しそうなシャノン。

「つてことは作戦ですか？」

ようやく復活を果たし、湊。

「詳細は知らん。が、中尉が呼ばれるのなら偵察行動の類いだろ。俺達は護衛か、奇襲か」

「でも奇襲ならわたしのフォックスチームだけで事足りますよ。というか、少佐のジャッカルチームは……」

「役たたず、でも言いたいのか？」

「いえ、部隊はすごいですよ。でも、その、少佐のタイフーンって、この機体で一機だけステルス機能がありませんし――」

「指揮官だけじゃない人ってことですよ」

「シャノン！ はつきり言っちゃダメ！」

警告は遅すぎた。視線を戻すと、デヴィッドは変わらずに立っている。かろうじて。若干、涙を浮かべたブルーの両眼が切ない。

「先に、行くぞ。……遅れるなよ」

デヴィッドは踵を返す。去ってゆくその背中、いつもは無い哀愁が漂っていた。声などかけられない。

「あのね、シャノン」

小首を傾げ、友人はこちらを向く。

「言葉のオブラートって大事だよ？」

「でも大尉のほうもかなりダメージを負わせたと思いますよ」

「うん。そうだね。これからはもう少し敬おうか」

二人揃って少佐を見送る。彼は兵舎に向かって歩いていった。泥酔より悲惨なおぼつかない足取りで。と、右から一人の男性整備員が近づいた。クリップボードに視線を落としていて、少佐に気づいていない。ぶつかるかと思った瞬間、しかし少佐は流動的な足さばきで回避する。

だがそれで終わらなかった。数秒後、今度は左から女性整備員が接近。これもクリップボードを見ている。先ほどと同じように避けると思われたデヴィッドは、しかし派手にぶつかって互いに倒れた。短く聞こえる、女性の悲鳴。

「……」

湊は無言でその様子を眺めた。隣でシャノンの嘆息が聞こえる。

それがデヴィッド・ウィンターズの持つ最大の欠点だった。元はイギリス軍山岳歩兵で、陸軍特殊部隊SASにまで入隊していたという経歴の持ち主。最優秀を体現したような兵士であり、最も難しい勲章とされるヴィクトリア十字章を二度も受けている。実力はこの基地で間違いなくトップ。場合によっては、一個小隊分の戦力を一人で担うほどだ。

だがそれは作戦中のデヴィッドである。平時の彼は、どういうわけか女性とよくぶつかる。意図していないのがさらに悪い。原因も不明。強いて言うならそういう星の下に生まれたとしか言い様のない現象だ。これが事あるごとにセクハラと呼ばれる所以。

「本当に敬える？」

「無理かも」

シャノンの問い掛けに短く答える。視線の先では、デヴィッドが巻き込んだ整備員に手を貸しているところだった。

湊たちに招集がかけられた場合、使うのは決まって第一作戦室だった。主に上級将校による作戦立案に使用される部屋だが、それほど立派なものではない。中にあるのはホワイトボードが二つだけで、間取りも入れて十人程度。空調設備も無い。下士官や兵を招集せず、指揮官のみである理由もこれだ。

最も、そうそう贅沢は言えない。これはあくまで奪った基地である。三年前に亡国となったカタールの半島北東部に位置するこの施設だが、元々は同国空軍の海上警戒基地として使用されていた。それが敵国の侵略を許してしまったため、ガス田と共に制圧下に置かれる。その戦闘で勝利した敵も大規模な損害を被り、この基地には小規模の駐留部隊のみとなった。そこを襲撃し、情報操作によって各国軍事ネットワークからこの基地の情報を抹消、機材や人員を持ち込んで現在に至る。

「全員揃ったな」

湊とシャノンが入室するなりそう告げたのは、大柄な男だった。白人であるが、日焼けのため肌は浅黒い。服はシャノンと同じACU迷彩の上下。ただし数倍は大きかった。すでにいたデヴィッドは細身の筋肉質だが、こちらは全体的に分厚く頑強。アサルトスーツや防弾装備が無くても、拳銃弾なら傷も付きそうにない体躯をしている。

大男はシャノンを一瞥する。同じタイミングで、彼女のほうもそうした。ほんの一瞬、二人は頷き合う。シャノンのほうはやや嬉しげに。これが彼等の絆を表していた。大男の名はドウェイン・コンウェー。この基地における実質的な指揮官であり、またシャノンの義父でもある。

「ただでさえ暑い場所だ。手短に進めよう」

言ってホワイトボードを指さす。そこに貼られていたのは四枚の資料。三枚は地図、四枚目はISと思しき写真だった。

「昨日の一九〇〇時、情報本部より伝達があった。この報告が遅れたのは、情報の信頼性が不十分だったためだ。現在――」

写真を示し、

「アメリカとイスラエルでISの共同開発が行われている。開発コードはXBG-101、シルバリオ・ゴスペル。情報では広域戦闘を主眼とした射撃機体とされ、軍用としては第三世代の中で最高クラスの完成度と思われる。だが、この機体の開発情報はかねてより報告があつた。君らも承知のことだろう」

三人が無言で首肯する。

「問題は、これが次の段階へ進んでしまったことだ。報告によればすでに機体は完成しており、試験運用を開始する。場所はハワイ沖、日時ははつきりとしてない」

「では任務は、シルバリオ・ゴスペルの破壊ですか？」

デヴィッドが言う。静かに、大佐は頭を振った。

「違う。それ以上に重要となる。判明した情報によれば、この機体は無人状態で試験が行われる。それが問題だ。少し前、IS学園へ襲撃を行なった無人機を覚えているだろう」

IS学園。その単語が、湊には引かかる。情報本部からの報告に、確かあの学園の記述があつた。内容は――。

「あの時、我々の情報本部は無人機の発した暗号化信号を傍受、解析していた。結果、わかつたのはその信号パターンが、記録に残っているかの白騎士の波長パターンと酷似しているということだ」

白騎士。世界で最初に誕生したISの通称。全ての始まりとなつた災厄だ。少なくとも、この場にいる四人は四人ともそう認識している。

「そして二日前から、NSA内部の要員が米軍ハワイ基地へそれと同じ信号が送られているのを確認している。すでに理解できただろう。試験運用される無人機、本格的ではないが明らかなハッキング、その場所、タイミング」

「……篠ノ之束が動く」

想いは呟きとなって湊の口から出る。恐ろしく静かな声で、秘められた殺意を隠そうともせず。

「そうだ、湊」

ドウェインは頷いた。大尉ではなく、湊と呼んで。

「可能性は多いにある。奴が直接あの場に出現するとすれば、我々にとつてまたとない機会だ。そうでなくとも、試験機を鹵獲し逆探知が可能かもしれない」

そして彼は二度、深呼吸を行なう。それから続けた。

「作戦名リベンジ・ルーズ。目的は篠ノ之束の殺害ないし捕獲、またシルバリオ・ゴスペルの鹵獲を最前提とする。コールサインは前者をデッド1、後者をデッド2とする。投入部隊は君たちの三個編隊だ。——デヴィッド」

「ヤー」

少佐は英国軍の応答をする。

「君のジャッカル中隊には米軍戦力の攪乱を任せる。作戦開始から五分後、ハワイ基地から離陸したスクランブル部隊と洋上で交戦、時間を稼いでもらいたい」

「交戦規定は？」

「君の判断に委ねる。撃墜、殺害もいとわない。ただし——」

「民間人への被害は出しません。そのために出撃まで待つのでしょうか？」

一瞬、ドウェインは笑う。

「そうだ。それでいい、デヴィッド。——湊」

「はい」

返事は奇妙な声になった。冷たい声。なのにどこか期待が混じっている。そんな声だ。

「君はフォックス中隊スコットロンからライトニング？一個小隊を選抜し、試験実施空域の高高度でステルス状態を保って警戒。開始命令と同時に急降下攻撃を仕掛け、デッド1殺害ないし2鹵獲を頼む。目標と地点は追って知らせる。また成否に関わらず、撤収時にはシャノンの後援として行動するように」

「了解」

軽く握っていた右の拳に、力が込められた。アサルトスーツに包まれた手は、ぎしりと鈍い音を立てる。

「シャノン」

「はい、父さん」

少女はやはり、どこか喜びを示して応じた。

「お前はゴースト中隊^{スコードロン}を作戰地域周辺、半径二百キロに展開させる。各機から送られた情報を元に現地指揮所として行動、本部へ伝達。

こちらの判断により目標をデッド1、2のどちらに絞るか、それとも両方を叩くかを決める。また標的の確認もお前に任せる。作戰開始後は各機のEDS（電波妨害装置）を起動し、ジャッカルおよびフォックスの電子支援に移行する。了解か？」

「了解です。絶対に、期待を裏切るようなことはありません」

意気込み充分とばかりに、シャノンは言う。その時、ドウェインが見せた表情を湊は偶然にも捉えた。悲哀にも似た、作戰とはまったく別の感情が揺れた一瞬。瞬きした時にはすでにそれは消えていて、錯覚かと思えるほどだった。

「これより作戦中止が判断されるまで、該当部隊は最終防衛手段以外に一切の出撃を禁止する。また待機地点へ到着した場合、瞬発コードを待て。コードはアルテミスだ」

ドウェインは三人の顔を見回す。ここ数年間、常に行動を共にした仲間を。

「以上だ。各チームのコールサインは追って知らせる」

ふと湊は、どうしてだろうと疑問を抱いた。もう二人、本来ならここにいるべき人物がいる。そのはずだ。

解散の命令が出て、デヴィッドに続き部屋を出る。シャノンを待とうかと思ったが、やめておいた。同じ基地にいるというのに、あの親子はただでさえ会うことが少ない。それなのに実の父と娘以上の絆がある。貴重な時間は尊重するべきだろう。

——絆。

胸中で、ポツリとその単語が浮かび上がる。一瞬だけ、湊は過去

に想いを馳せる。ここにいない一人の顔が浮かんで、消えた。それ
だけだった。通路を進む彼女の頭には、すでに作戦要員の選抜し
かない。

日の昇り始めた午前五時。IS学園で起きている人間は少ない。元々、今日は休日だ。例外として運動部や教諭、それに用事のある何人かはいるだろう。ただ、それでもやはり少数だ。そんな中で、剣道部の道場は最も喧しいとして過言でなかった。

打ち合わされた剣の音は、いつも鳴り響く竹刀のそれではない。もつと重く、暴力的でくぐもった音色。木刀だ。硬い木製の刀が二本、攻防の末にぶつかり合う衝撃音。道場では二人の人間による手合わせが行われていた。一人は女で、防具の無い袴姿にポニーテールの黒髪をしている。名前を篠ノ之箒という、この学園の女生徒だった。彼女は上段より襲ってきた一太刀を受け流し、間合いを取って相手を見据える。呼吸はすでに上がっていて、額から頬を伝う汗が疲労のほどを伝えた。

もう一人は男だった。この学園にたった二人だけいる男子生徒の片方。箒と同様の出で立ちに、木刀を上段に構えている。顔立ちは日本人のそれだ。クルーカットをした髪の毛も、やはり黒。しかし瞳の色だけが異なっていて、それは鮮やかな青色をしている。名前は井ノ上誠。アメリカからこの学園へとやってきた世界で二人目のイレギュラーであり、現役の軍人。

それなりに剣の道を歩んだ者が居たのなら、この観客のいない手合わせをすでに決着のついたものと判断しただろう。先述の通り、箒は疲労の色が濃く滲み出ている。ついで焦りもあった。原因は他ならぬ誠だ。素人目にも疲れがわかる箒に対し、彼は身体機能として汗こそ流しているが顔色に変化がない。それが箒に焦燥を駆り立てた。初めてからすでに十数分が経っている。普通ならばありえないほどの長時間を、この二人は戦っていた。だというのに、誠には疲れが見えない。それどころか、今まで箒の繰り出した技は全て受け流されている。アメリカ国籍を持つ半端な剣術家であるはずの彼

に勝てないという事実が、彼女を焦らせる。慢心は無かった。油断も同様。それなのに、どうやっても太刀筋は阻まれる。

——これ以上は……。

眼前の同級生を見据え、箒は思う。長期戦は圧倒的に不利だ。彼女とて毎日のトレーニングは欠かしていない。体力には平均的な同年代の男より遥かに優れていたし、その自覚と自信もあった。見誤ったのは、誠をそういう普通の男と判断した点だろう。現役の軍人それも準特殊部隊であるレインジャー出身。体力、精神力、さらには筋力と、身体機能のあらゆる面で劣っている。

——仕掛けるか？

自問する。手のひらに浮き出た汗のせいで、柄が握りにくい。

体力が劣った時点で、短期決戦に持ち込むしかないというのはわかっていた。それは今になって悟ったことでもない。問題は、技術面でも誠が箒を上回っている点だ。

むろん箒とて、そういう可能性を考えなかったわけではなかった。友人であり幼馴染である織斑一夏と誠の模擬戦を見たのは、つい昨日のことだ。白いISと、全身装甲の黒いIS。後者は誠の機体であり、名称はブラックウイドウ。それが終盤、太刀を持ち出したことを鮮明に覚えている。近接戦闘に特化した一夏と、ブラックウイドウは五角以上に渡り合った。尋常な実力ではない。

しかしどこかで、箒はこう考えてもいた。あれはブラックウイドウの機体性能に助けられたもので、本来ある誠自身の実力ではない。と。一見すると油断に思える結論だが、実のところで極めて現実的な考えでもある。ブラックウイドウの主兵装は銃器とミサイル。つまりは現代兵器であり、また近接戦闘用として銃剣がアサルトカービンに搭載されている。なので通常、何も知らない者が見ればブラックウイドウの腰にある日本刀は、単なる飾りとは思わないでも試験的な兵器であり、実戦運用はしないだろうと思うのは当然だ。銃を使う軍人が日本の剣術を習得していると考えるよりは、よほど現実的だろう。

ならば、と篠ノ之箒は考える。現実的な結論が一蹴された今、これは非現実の実現した世界ということか。それこそ、夢とそれほどに大差もないほど、ふざけた空想が具現化している。そういう世界なのだろうか。

——何を馬鹿な！

下唇を強く噛む。歯が皮膚をちぎって、口内に独特の鉄臭い味が溢れる。鼻腔をつく己の血臭。そして鈍く伝わる痛み。それが箒に意思を取り戻した。流れる血を飲み込む。喉を掠れさせる液体が胃へ下るたび、ぼやけていた戦意がはつきりと姿を映し出してゆく。

これは最早、手合わせでは無い。真剣を用いた果し合いと変わらない。自分は勝たなくてはならないのだと、箒は言い聞かせる。

誠に動きがあつた。上段の木刀が滑らかに動き、たどり着いたのは下段の構え。向かつてくる。顔に出さず、しかし確信めいた直感を箒は自覚した。一夏との模擬戦で、誠に最も使用したのが下段からの技。その構え自体を得意としているのだろう。あるいは仕留めにかかるという覚悟の表明。

木刀を引く。正眼から、右脇に掲げる八相へ。自ら攻める構えではない。剣の構えというものには、それぞれに意味がある。それまでの正眼は流派によって意味、字も異なるのだが、それでもおよそ全ての基本形となる。中心に刀身を置くので、どの角度から放たれる斬撃にも実質として対応可能。また攻めには速度を重視し喉もしくは肺を狙った突き技が有効だ。遣い手によるが、無駄な動作もなく鋭く繰り出される突きは、どの局面にあつても必殺の決め手になれる。

対して八相は防御に重きを置き、そこからの返し技を行なう。つまり相手の出方によりその意味を自在に変化させる剣だ。また切腹の介錯にもこの構えを用いるため、遣い手によっては稀に最後の一手として用いることもある。箒は前者を目的にこれを構えた。正直、誠の剣を掻い潜って一撃を決める自信はない。万が一にあるかもしれない偶然の可能性にすぎるほど、彼女は愚かでなかった。賭ける

のはより確実な方法。一撃か二撃か、誠は必ず仕掛けてくる。それを凌いだ上での返し技にて倒す。

——冷静に……。

己の内心へ言い聞かせる。ただひたすら感情を希薄に。波風立たぬ心というが、それを超える。海面ではなく、深海のように。ただ冷たく、暗い。そんな心へと追いやった。考える必要は無い。体が動くままに任せ、従うだけ。それで勝てる。

刹那、誠が動いた。機敏な歩法で空いた距離を詰める。数秒の間を取って、さらにもう一度。両者は互いの剣が持つギリギリの間合いまで接近した。どちらかが踏み込めば決着がつく。その口火を切るのは筈でない。

誠の携えた木刀は、ゆらりと動く。持ち上げられ腰より少し上へ。
——来る。

静かに思った。ほぼ無心の体現のなか、確信は事実としてだけ認識する。直後、悪寒めいた感覚が足元から這い上がり、うなじの辺りで蠢く。攻めてくると思った木刀は、止まらずに持ち上がる。攻撃ではない。誠は構えを変えた。下段から上段へと。

下段は偽物。本命は違う。悟った瞬間、心が乱れる。硬質の冷たい氷は無音のまま亀裂が走った。急がなければならない。上段の斬撃が襲ってくるより前に、先手を。焦燥は体を反応させた。チャンスはここにしかない。下段に備えたというのに上段に切り替えられた今、防御は少ない隙が生じている。防ぐことはできない。ならば攻勢に。

踏み込みと同時に、八相で構えられた木刀が横薙ぎに走り一閃を曳く。間合いは充分。木刀は誠の胸を的確に捉え、勝利を手に行き届くと思われた。それが虚しく空を切る。

筈が踏み込んだ、その刹那の事である。誠はほんの半歩ほど後退した。繰り出された彼女の木刀は、退がった体に惜しくも届かず終える。術中へ飛び込んだのだと、そう悟った時はすでに遅い。上段から振るわれた斬撃。咄嗟に今しがた空振りに終わった得物を引き

戻し、それを留める。が、打ちあつた瞬間にどういうわけか弾かれた。

——馬鹿な。

疑問が生じる。木刀は弾かれた。それはいい。問題なのは、箒の木刀を弾いた衝撃が下方から来たこと。誠は上段から斬りかかったのに、なぜ下から。

そして勝敗は解答より先に訪れる。崩れた剣と精神。畳み掛けて二撃目が降ってくる。箒の木刀を弾いた後、即座に引き戻して同じ上段から斬り込んだのだ。顔面を砕くかと思われたその剣は、しかし寸前で止まる。文字通り目と鼻の先。急停止する衝撃は風となつて箒の髪を微かに揺らした。

「……まだやるのか？」

やや躊躇いがちな声。誠だった。眼前より木刀が退く。彼は慣れた手つきで刀身を反転させると、鞘に収めたのと同じ格好で持つ。

「篠ノ之？」

「いや……」

怪訝な顔に、その一言を返すのが精一杯だった。呆然と自分を打ち負かした男を見る。なんの感情も映さない虚無の瞳で。ただ見ているという事実があるのみ。何も思つてはいない。それは箒の胸中と一緒にだった。負けた事実以外に、まるで理解が及ばない。敗因も過程も。不可欠なプロセスを無視して結果だけを突きつけられた、そんな気分だった。

誠はというと、しばらく箒を見つめる。眺める、と表記したほうが良いかもしれない。観察するような視線を送った後、見切りを付けたように踵を返す。勝利の優越など欠片も無しに。

事の発端は何だったのか。誠は現在もよくわかっていない。先日一件以降、事情を知る人物とは誰とも顔を合わせていない。一夏にしても、一日に使うのは最低限の挨拶に必要な単語が一つか二つ。

謝罪を入れようと思ったが、向こうから拒否されている。違うのは、模擬戦に居合わせなかった鳳だけだ。しかし彼女も微妙な空気を感じ取ったようで、やはり積極的には一組へと来なくなった。

むろん後悔など無い。これが当然なのだから。あれ以来、IS実習にも参加していなかった。本調子でないのもそうだが、学園側がブラックウイドウの起動を危惧しているように思える。実質、新しくできた数名の事情を知らない友人を除いて、彼は常に一人で行動していた。ドクことカイル・ノーマッドとも、模擬戦の翌日に一度、電話で話したきりだ。

今日もそのはずだった。変わらない時間に起きて、着替え、煙草を吸う。それから銃を一丁、点検して部屋を出た。まだ多くが眠っている寮を後に、敷地の外へと向かう。約三十分ほどだろうか。それだけの時間、学園を取り囲む道路を走っていると篠ノ之箒がいた。「暇ならば付き合え」

そう言われ連れてこられたのが四時半頃。一夏が使っているという胴着と袴を借り、それから延々と手合わせをしている。勝率は、最初こそ五角に見えた。しかし徐々に体力の差が見え始めると、その先は繰り返し。呼吸を崩した箒にたたみかけ、討ち取る。手加減をするなど釘を刺されたため、それを体現した。むろん楽な相手では無い。だが箒には決定的に足りないものがあり、勝率も同じ箇所にある。いや、彼女でなくこの学園の全員に言えるだろう。命のやり取りを知っているか否か。

誠の中に実戦経験が無ければ、おそらく箒の勝ち越しとはいかないまでも五角だっただろう。本物の殺人、それを加害者としても被害者としても心得ている場合、力の差は技量のみでまかなうことができない。殺す剣と制する剣は、それだけ違う。意図して後者を目指すのならともかく、そうでないなら尚更だ。

最も、勝利はしているものの誠はこの状況を理解しえずにいる。彼女がなぜ自分を選んだのか。それがわからない。わからないまま道場の縁側に座り込み、朝の涼しい風を浴びる。そうすれば眠気は

覚めるだろう。しかし晴らしたいのは思考にかかった薄いもやで、それはどうやっても消えてはくれない。

「剣術を学んだことがあるのか？」

不意に声がかかる。肩越しに振り返ると、図つたらしく缶が投げられた。片手でそれを掴むと、内容物の液体が持つ冷たさが伝わる。ラベルはごくありふれた緑茶だった。道場の外に自販機があつたのを思い出す。あそこで買ってきたのだろう。

「いいのか？」

「この間はお前がくれたろう」

箒はそう言つと隣へ腰掛ける。一人分ほどのスペースを空けて。

「……何年か前に、上官から」

答えながら緑茶を開け、一口飲む。よく冷えたやや苦い液体は、心地よく喉を落ちていった。

「アメリカはいろいろと手を出しているのだな」

「いや、アメリカ軍の奴じゃない。イギリス軍だよ」

「イギリス？」

微かに怪訝そうな顔。

「上官と言つただろう」

「少し複雑で。まあ、機会があつたら話す。ともかくイギリス軍の奴に習つたんだ。剣術自体は、あの人が日本で覚えたものらしいけど」

「流派は？」

「聞いてない。俺はただ、言われたことをやつただけだ」

それでも勝つたことは無いが、というのは飲み込んでおく。

「お前があれだけできるのだから、その師も相当に出来た方なのだろうな」

「戦闘は、確かに。ただセクハラが……」

「は？」

「いや、何でもない」

脳裏に浮かんだとある男の真顔を忘れようと、やや力強く首を振

る。

「その内、説明するよ」

うやむやに述べる。それ以上の追求は無かった。あったほうが、救われたかもしれない。この時になって誠は考える。少なくとも会話を失わずに済み、それを取り戻そうと自分から言葉を発する必要が無かったのだから。

「悪かったな、篠ノ之」

篤がこちらを見る。困惑、とは少し異なった。予想していた、だが聞きたくなかったこと。そんな表情を向けてくる。彼女は答えた。「模擬戦のことは、いい。お前にも事情はあったのだろう。最も、こう思ってる人間はあまりいないだろうがな」

「それもだが、もう一つある。その前の昼飯の時、嫌な事を言っただろ」

「嫌な？」

首をかしげられる。ややして、

「あの人を悪く言ったことか？」

「ああ。すまなかった」

謝罪を述べながら、違和感に気付く。彼女は姉である束をことを“あの人”と呼んだ。まるで他人だ。血縁関係のある人物を指す名称とは思えない。誰かに似ていると、誠は思った。それが先日、たつたいま話題にしている昼食の場で自分が父親に対し使った名詞とも気付かずに。

「詫びることはない。私とあの人は、あまり関係の無いことだ」

「どういう……？」

それでも控えめに口にして、ようやく失態と悟る。自分と彼女は親しい間柄などでもない。それなのに、私情へ口を挟むべきではないのだ。

しかし篤の考えは違ったらしい。彼女はやはり口を噤んだが、やがて意を決したように言う。

「井ノ上、お前に訊きたいことがある。私は……お前から見て専用

機を持つに値する人間か？」

「何だと？」

顔を見返すと、こちらを向く真摯な瞳に射抜かれた。数秒、言葉を失う。その間に筭は続けた。

「お前はISを悪と呼ぶ。私は全面的に賛成こそしかねるが、それでもお前に正しさはあるのだと思う。だが思っけていても、私は力が欲しい。……皆のように」

彼女は俯いた。暗い陰を落とす表情から読み取れるのは、痛々しいほどの劣等感。皆のように、と最後に付け足したのだ。秘められた意思是説明されずともわかる。一夏だけでなくシャルロットにラウラ、そしてセシリアと鈴音。彼女の周囲にいるのは全て、専用のISを持つ候補生たち。言わば頭一つ抜き出た集団の中で、彼女は過ごしている。そこにはどれほどの苦悩が伴っているのか。彼女だけが、専用機を持たないという事実を、果たしてこの時までどのように受け止めたのか。

——いや。

違う、と誠は思う。彼女は確かに受け止めていた。しかしそれがどうして、この時にそんな質問をしたのか。意図が読めない。誠が一夏たちとほとんど隔絶しているからか。自身のコンプレックスを曝け出すのだから、吹聴の危険は一パーセントでも落としたいだろ。むろん、誠にそんな意思が無かったとしても。しかしこれほどこか外れているように思える。言葉を重ねた数は少ないが、彼女はそれほど弱い人間に見えなかった。

それなら何故、自分に聞いたのか。考えてはみるものの、そう都合よく答案が落ちているはずがない。結局はその他の多くの疑問と共に、不明の烙印を押される。

「専用機を——」

誠は言う。自分の答えより彼女の答えを優先すべきだと考えて。

「ISを持つに相応しい人間なんて、この世のどこにもいない」

「……時代に不相応だからか？」

「いや、違う」

以前に自分が言った引用を、静かに否定する。これは、それとまた異なるものだ。

「ISだからじゃない。ISも、戦闘機や戦車、いやもつと根本的に銃や剣、ナイフだってそうだ。あれは武器で、つまり人を殺すために作られた道具だよ。殺人に特化された道具を持っていい人間なんて、この世のどこにだっていない。別の生物ならまだしも、人が人を殺していい資格なんてないと思う」

「……なら、お前は どうして持っている」

しばし返答が遅れる。重苦しく息を吐き、まだ中身のある缶を手の中で転がした。それからようやくして、答える。

「俺は人じゃないから」

「……何を言ってる？」

「人じゃないんだよ、俺は、もう。資格を無理やり奪い取って、何人も殺したんだ。人でいて許される奴じゃない」

「ならば、お前は何か？」

「さあな。ただ、希望を言えば暴力の二文字でいい。純粹にそうあれば、どんなことだってできる。後腐れも何もいらぬ」

ただ淡々と述べる。偽善だ、と思った。暴力という無差別破壊の単語に甘えて、自分を犯罪者から除外しようとしている。これは出来の悪い自虐であり、偽善。カイルを初めとして今までを知る人々は、この暴力であればいいというのを否定しないだろう。むしろそう決断したのだと受け止めるはず。

しかし本人はそう思わなかった。こんなものは決断でも何でもない、ただの言い訳だ、と。罪人の文字が怯え、殺人に正当性を持たせるために使っている。それは正義であり、人を救うための代償であり、殺された側の心情を見ようとしてもしない、つまりは偽善。そうとしか考えられなかった。

だが筈の口にした言葉は、そんな自虐の悦などどこへ成りと飛ばすようなものだ。

「……その覚悟があれば、私は専用機を持つてもいいのか？」

意味を図りかねる。誠は筭を見た。今しがたとは全く別の意思を灯した、彼女の双眸を。どれほどの力をもつてしても決して覆せそうにない光。意味するところは何なのか。

「どうしてそこまで専用機にこだわる。お前は、篠ノ之、何を焦つて――」

寸前で区切る。何を焦っているのか、などこれほど馬鹿な質問も無い。最初から彼女は焦燥に駆られていたのだ。周囲に集まり始めた人々の中で、自分もすぐに追いつくと言いつく聞かせている。だからではないか、と誠は己を叱咤した。彼女が早朝からトレーニングを日課としていたことも、何度となく自分へ挑んで来たことも。それは全て、“いつか追いつく”ではなく“すぐに追いつく”という心情の表れだ。

「悪い、篠ノ之。だけど、何でそんなに専用機が欲しい？ 競争心

で手にしているものじゃないぞ」

「そんなつもりはない。私は、力が欲しい」

「どうして？」

「……お前は、認めないだろう」

苦虫を噛み潰したように、言う。

「俺が認めようが認めまいが、言うだけ言えよ。理由を全部知りた
いとは思わない。けど、少しくらいは知らなきゃ何も言えない」

やや突き放すような口調。それが効いたようだ。筭はゆっくりと
口を開き、そして述べた。

「一夏を守りたい」

「……それは、独占欲か？」

「違う。私は純粹に、あいつを守りたい」

「お前がやらなくても誰かがやるだろう。守る役目は、お前が果た
さなくたっていい」

「わかつてる！」

押し殺した絶叫。それも悲痛だった。彼女は全て理解している。

自分が歩みでなくても、すでに代わりはいるということ。その上で言っていた。

「私は……このままでは、一夏はどこか手の届かない所へ行ってしまう、そんな気がする。それが怖い」

「実力の問題だ。あいつの中でお前の存在が消えたりはしない」

言いながら、自分の発したそれに恐怖する。これは箒に向けた言葉なのか、それとも自分への戒めなのか。

「それでは駄目だ！ 私は一夏の背中を守りたい。他の誰も押しのけて。私が守りたい。私が……私がそうしたいからそうするのだ……！」

留められた、それでも強大な葛藤が感じられた。先述の通り、彼女は全てを理解している。なのにその言葉を出した。そうしたいからそうする、と。理解の上で、その全てをこの一言の下に跳ね除けた。

これを聞いた誠に芽生えたのは、ただ一つの羨望。自分もこうあれば良かったのか、こうあれば全ては起こることもなく済んだのではないか、と。空想とも言えるものが脳に浮かび、胃へと落ちる。そして述べた。

「俺は、もうさっき言った結論でケリをつけてるつもりだ。だからお前がこつち側に来るのを、手招きして誘うなんてできない」

僅かに箒の顔が俯き、陰を帯びる。

「けど――」

と。その言葉が続いたときは、俯いた彼女の表情はやや驚いているようだった。

「お前が本当にそう思ってるなら、そうすればいいと思う。止めはしない。身勝手な意見でしかないけど、お前は自分を信じたっていいと思うよ」

ほんの少し。本当に僅かだが、箒の表情から陰りが消えた。変わって芽を出したのはもっと明るい、希望とでも言うべきもの。

緑茶を飲む。まだ冷たい。二口ほど流し込んで、缶を脇に置いた。

その時、置いてある木刀の柄に指先が触れる。硬質の、人斬り包丁を模した武器に。いや、広義でいえばこれも人殺しの道具だ。打撲だけで人は簡単に殺せる。誠をそれを掴み、箒に言った。

「もう一度、やるか？」

「……ああ」

淡い微笑みが返る。その顔は清々しいなどお世辞にもいえない。

しかし覚悟はあった。全てを噛み潰し、踏み越え、その上で口にした目標を歩む覚悟が。

午後二時過ぎ、誠は商店街へ赴いている。さすがにこの時は戦闘服でない。カーゴパンツにシャツとジャケットを組み合わせた私服。足元もいつもの軍用ブーツでなく至って有り触れた登山靴だった。足首はしっかりと固定されるため、バランスの不安が無い。これらのコーディネイトは誠でなくドクことカイル・ノーマッドによるものだ。ファッションに対して鈍感といかないまでも興味を示さないのが誠なのだから。実質的な保護者といえるカイルが選ばなければ、果たしてどうなったかわからない。

両端に様々な店舗が続く歩行者天国を進む。歩くたび、右ふくらはぎに硬い金属質の感触。カーゴパンツの内側、そこにホルスターと収まったシグがある。ISを使役する軍属の人間。それは必ずしも安全でなくてはならない。警護が無いならば最低限の備えを、とこれは合衆国政府からの命令でもあった。しかし実際、強制力はない。そもそもあらゆる国家に縛られないIS学園なのだから、所属が軍であろうと生徒である期間、命令に従う必要はどこにも無い。なのに平和の中で銃を隠し持つ誠は、人一倍の警戒心だけで説明がつかないだろう。

すれ違う一般人の集団を抜けながら、同じ民間人の服を着た誠には自覚があった。ここまで彼とすれ違った人々は、誰一人として銃を持った軍人がいるなど考えていない。そんなものはナンセンスであり脅威であり、また不必要な存在である。比喻でない本物の戦力、もとい暴力はここで必要とされていない。当然だ。であればこそ、誠が至ったのは自分が想像以上に臆病だったという結論である。

そう思い立ったのは巨大なショッピングモールの前を通りかかった時だった。マーケットからゲームセンター、果ては映画館まで備えているらしい巨大なビル。正面入口には上映中らしき映画の宣伝がなされていた。誠の持っている戦闘服に似た、しかし迷彩が微妙

に異なるそれを着た兵士が一人。米軍がモデルなのだろうか。ヘルメットとゴーグルで顔は隠れていて、役者の表情を窺えない。しかし肩に見たことのない、おそらく架空と思しき部隊章が縫いつけてある。ガスマスクをかぶった骸骨と、SOCCIUの文字列。題名は“The snow laying thick is gray”と、英文表記のまま。然るにほどマイナー作品なのか、何かの記念による先行上映だろう。その兵士はよくあるM4やカラシニコフ小銃でなく、シグのSG552ライフルを携えている。キャッチコピーもやはり英文。“At the moment, can you pull a trigger?”（その瞬間、貴方はトリガーを引けますか？）”。

単なる文章。創作物の短文。そのはずだが、誠の心臓を跳ね上げさせ、胃を締め付けるのに充分過ぎた。

——引けない。

彼は自分自身に佇む兵士の姿を投影し、そして思う。一瞬、それこそディスプレイへ走ったノイズよろしく過去の情景が蘇る。夕日の中、重い唸りを上げる輸送機へ向かっている華奢な体。不安そうに振り返ったその顔へ、元気づけるように笑いかける自分がいた。

——引けない。

再び繰り返す。誠は恐れていた。あの時別れた少女が死んでいることを。そして同時に、生きていることも。相反する感情は決して相容れず、なのどこかではまだ求めている。湊、と。これまで何度と無く呟いた名前をした少女は、ここにいない。もし現れれば、それこそトリガーを引かなければならない。これが理由だ。平時でありながら武器を持ち歩く、言い訳。

自身の安全管理という命令を建前にした、現実からの逃避。そう、これは逃避だった。死亡を願い、生存を望み、再会を夢見る。そして万が一にでも再びまみえた時は、敵として撃たなければならぬ。米軍の兵士として、テロリストは射殺するのが道理だ。しかしそんな真似ができないと誠は悟っている。だから銃を持っていた。いつ

でも自ら命を絶てるように。課せられた責務から逃げられる唯一絶対の道を、肌身離さず持ち歩く。

「動くな……」

束の間、感傷に浸っていた意識を現実へ引きずり上げたのは、背後から耳元へ吹きかけられた声だった。

「じつとしている」

低い女の声。ハスキーボイスとはどこか違った。無理して低く抑えている。背中に何かが押し当てられた。

「動くな。動けば撃つ」

「……」

無言で嘆息。台詞からして銃のつもりなのだろう。指鉄砲も、確かに字だけはそう書くから間違いとも言い切れない。脅しになるとは思えないが。呆れ顔に苦笑を交え、指摘した。

「一つ言うとな、鳳。映画やドラマじゃよく銃口を押し付けるけど、拳銃ってのは銃口を押し付けると弾が出なくなるんだぞ」

「ありや、マジで？」

間の抜けた解答。思わず笑いを堪えるのも忘れて振り返ると、今日も今日とていい笑顔をした鈴音が立っている。

「さすが軍人、物知りめ」

「いや知っておけよ、それくらい。お前、代表候補生だろう」

「知識はいらない。気合いで勝つ」

「言ってて恥ずかしくないか？」

無駄に自信たっぷりで言われると、そんなツツコミも引きつったと、

「まったくです」

同意は鈴音の背後より届く。そこへ視線を移して初めて気付いた。誠の他にもう一人、呆れるのも疲れたと言わんばかりに顔をしかめた人物がいる。いや、果たしてそんな表情をする原因は鈴音だけだろうか。

「オルコット……」

その名を呟く。先日模擬戦に居合わせた数名の一人は、やはり
というべきか視線を逸らして俯いた。つられて誠も顔を背ける。

「……あのさあ」

二人の間にいる鈴音が、顔を寄せて訊いてきた。

「井ノ上、あんた一体なにしたわけ？」

「殺しかけた」

「はあ？ 誰をよ」

「オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、織斑」

「……」

声に出さず絶句、ではない。声すら出ない。

「——これまで」

「あ？」

ようやく発せられた言葉に耳を傾ける。

「一組じゃないのを悔しがったことは何度もあるけど、二組で良かったと思っただのは初めてだわ。——でもまあ、いいか」

「いいのか？」

驚愕が混じる。いくら何でも軽すぎた。鈴音のほうは調子を取り戻し、おう、と勢いよく頷く。

「それはそれ、これはこれ。結局は全員生きてるんだし、とりあえずは保留。言及なし。この話題は終わり。今はもっと重要なことがあんだから。——でしょ、セシリア？」

「え？ え、ええ。そうでしたわね」

不意に話をふられて狼狽えながらも、セシリアは頷く。首を傾げざるをえなかった。自分たちの命やその被告より急ぐ事情とは、いったい何なのか。

「井ノ上、ちょっと手伝いなさい。気が乗らないなら、言及しないことの交換条件とか、何でもいいから適当に理由作って」

「いや、条件とかは構わないけどな。それで、実際のところ何だっ
てんだ？」

「あれよ」

前方を指さす。人ごみ溢れる商店街、ただそれだけの光景だ。よくある休日の一コマ、そのどこか緊急事態なのだろう。と、そこへ紛れた二名の人物が目止まる。普段なら、それこそ針山に一本だけある金の針を探すように注意深く観察したのならまだしも、絶対と言っているほど見つからなかったに違いない。発見できたのは、その二人を鈴音がまっすぐ指し示していたから。

「デュノアと織斑……？」

「そう！」

三つ編みにしたブロンドの髪と、並んで歩く黒髪。よく見れば手まで繋いでいた。傍から、というより誰が見ても恋人同士。

「まさかお前等、あれを邪魔しろと言うのか？」

「違います。さすがにそれはやりすぎですわ」

と、セシリア。

「でも——」

鈴音が続ける。

「抜け駆けは見過ごせないってわけよ。もしシャルロットがあわよくば、なんて考えてたらその時は……」

「間に飛び出すのか？」

「一夏を殺す」

ひゅん、と。背筋に駆け巡った未体験の冷たさ。これまで殺意はいくつも実感した。耐性はできているはず。なのにそれは恐怖となつて誠の胃を締め付け、喉まで悲鳴を押し上げた。理由は直後に悟る。これまで感じた殺意とは、どれも誠自身に向けられたものだ。他者への殺害意思を何の隔たりすらなく聞かされたのは、これが初めて。

「いや、な、鳳。冗談にしても……何だ。あんまり笑えないからさ」

「冗談？」

ゆっくり、鈴音がこちらを向く。

「ひっ……！」

今度こそ悲鳴が出た。顔が引き攣り、青ざめる。鈴音の目が笑っ

ていない。まっすぐ、至近距離から向けられた双眸。どこまでも純粹で後腐れの無い、透명한一つの意思によって彩られた色がある。心を病んだ者の眼だった。

「一夏はあたしのもの。あたしのものなの。あいつがそれを望まないなら、仕方がない。それなら殺すしかないじゃない。殺すしかない。殺すしかない」

「お、おい、鳳！ 落ち着け！」

「そ、そうです、冷静におなりなさい！」

誠とセシリア。二人がかりで鳳の両肩を掴み、揺さぶる。力無く前後へ動いた鈴音の頭は、数秒してようやく我に返ったらしい。

「ちよ、わかったから！ 大丈夫、冗談だから！」

二人を振りほどいて飛び退く。それから呼吸を整えて、彼女は言う。

「あんたたち、冗談くらいわかりなさいよ」

「あれが冗談か」

「そうは聞こえませんでしたわ」

セシリアと共に頭を振る。やれやれ、とわざとらしく。

「さっきの遠慮は何だったのよ、あんたたち。……まあいいや。ともかく、井ノ上！」

「ああ、手伝うよ」

「よく言った、それでこそレインジャー。情報のプロ」

「いやそれ、レインジャー関係ないだろ」

「え？」

今度は純粹に疑問を浮かべて、鈴音。

「特殊部隊ってみんなCIAじゃないの？」

「アホか。俺は陸軍だ」

「だってこの前に見た映画は、CIAの特殊部隊の人が記憶喪失になっただけだ」

「ジェイソン・ボーンは特殊部隊じゃなくて暗殺者だからな。というか、正式にはCIAに特殊部隊は無いから。まず軍部じゃないし」

「へえ。ま、その話はまた今度よろしく」

「……」

もはや何も言えない。完全に主導権を握られた。セシリアを見ると、諦めが肝心です、と目で諭される。

「……わかったよ。それで、どう追うんだ」

「よろしい。聞かせてあげよう」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、鈴音は述べる。不思議と、誠は面倒だと思わなかった。

雑踏の中、男は先ほど購入したサングラス越しの視界に、目標となる二名を捉えている。

「鳳？」

ジャケットの襟へ付けたレシーバーへ、軽く吹きかけ呼び出した。聞こえてる。セシリア、そっちは？」

「問題ありませんわ」

左耳に押し込んでいるイヤホンから、共に追跡している二人の声。「目標はこっちの十メートル前方、話しながら歩いている。オルコット、お前から見て九時方向だ。通り過ぎるのを待て」

「わかりました」

普通の歩幅を維持し、目標もといシャルロットと一夏を追う。一瞬、やけに馬鹿馬鹿しい気持ちが生まれたのは当然か。

——何やってんだ、俺は。

自分の行動に呆れる。尾行を開始してそろそろ十分ほど。それまでに複数の出来事があった。まず鈴音が言い出したのは、三人分の無線機が必要だということ。どれだけ本気で尾行する気だと問いたところ、返ってきたのはあの眼だった。

「抜け駆けは許されないの」

殺意たつぷりの瞳でそう言われたら、どうにかするしかない。幸い、IS学園の周辺だというのがよかった。学園の仕入れに使うで

あろう軍用備品の販売店を見つけ、財布にある軍部から支給されたクレジットカードで購入。それほど高価な品ではない。通信距離は一〇〇メートル前後の小型無線機だ。双方向通信のため、電話とさほど変わらない感覚で使える。セットでマイクとイヤホンも買い、それから今度はサングラスを買ってきた。

サングラスは変装云々の理由でない。もつと現実的な購入理由だ。これを掛けていれば、他者に自分の視線を悟られずにすむ。尾行においてそれは重要だ。目立たず、ひたすら静かに観察に徹しなければならぬ。目標が振り向いて視線が合う、という事態も避けられる。

「しかしあいつら、一体何してるんだ？ さっきからの店にも入らないぞ」

『多分、水着を買いに来たのだと思うのですけれど』
セシリアが言う。

「水着？」

『井ノ上、あんた忘れたの？』

と、今度は鈴音。

「何を？」

『明日から臨海学校でしょ』

「ああ」

そういえば、と思い出す。

「そんな話してたな、みんな。臨海学校って何するんだ？」

『遊ぶのよ』

「……学校行事だよな？」

学校自体これが初めてのためよくわからないが、さすがに遊ぶだけというのは無いだろう。そもそも、それではただの旅行だ。

『たまにはハメ外して遊ぼうって感じの企画よ。思い出作りとか、適当な名目はあるだろうけど』

「オルコット、そうなのか？」

『ええ。そういうものですわね』

「そういうものなのか」

鈴音だけならともかく、セシリアまで肯定するとなると本当なのだろう。改めて、軍とはまるで違うのだと実感する。

『ほら、井ノ上、集中しなさいよ』

「あ、ああ。悪い」

宙を漂っていた視線を一夏たちに戻す。と、動きがあつた。

「何かの店に入ったぞ。ここからじゃよく見えない。鳳、わかるか？」

『だめね。こっちもよく見えない』

『わたしが行きましょうか？』

予想した進行ルート上に先回りしているセシリアが言う。確かに、誠や鈴音よりも近い位置にいる。が、

「よせ。オルコット、待機しろ。日本人が多い中で、イギリス人は目立つ。戦術的な問題だ」

『……仕方ありませんね』

やや拗ねたように、しかし納得したようだ。

「悪いな。——鳳、俺達で行くぞ。反対側の店の前で合流する」

『反対側？ 直接行ったほうが早くない？』

「向こうが出てきたら鉢合わせになるぞ。お互いに顔を知ってるんだ」

『なるほど、そういうことね。わかったわ』

歩調を崩さず、目的地に向かう。一夏たちはまだ出てこない。と、前方から鈴音がやって来た。

「やっぱ水着ね」

「何だ？」

合流の第一声に首をかしげる。彼女は一夏たちの入った店を示す。それでようやくわかった。店先に並んだ無数の水着は、男女問わず多種多様。

「行くか？」

「もちろん。あ、ちょっと待って」

合流場所にした店を見る。喫茶店だ。無線機に彼女は言う。

「セシリア、あたし達の合流したとこ、喫茶店みたい。中に入って、窓際から二人が出てこないか監視して。あたし達は直接追うから」

『わかりましたわ』

それから向き直り、

「井ノ上、行くわよ」

「了解」

鈴音に先導され、店の中へ。出迎えるのは店内で流している「ポップ。以外に広い。すでに別の客が何人かいるが、充分以上に余裕がある。」

——さて。

と、誠は軽く息を吐いた。ここからは慎重に動かなければならない。広いとはいえ限られた空間だ。偶然の遭遇は低くない確立で起こりうる。前方一八〇度を注意深く観察し、その上で動かなければまた、あまり立ち止まっているのも危険。向こうとて行動する。

「何をお探ですか？」

不意打ちよろしく、そんな声がかかった。いつからいたのか、女性店員が営業用とは思えない自然な微笑みを浮かべてこちらを見ている。

「あー、えーと——」

「新しい水着を買おうかなー、とか思っで。明日から臨海学校なんです」

慣れない対応にうろたえていると、すかさず鈴音が答えた。と、

店員の顔に納得の二文字が浮かぶ。

「ああ、それではIS学園の生徒さんですか」

「わかるんですか？」

「ええ。毎年、この時期はよくいらっしゃいます。先生方も——
よかったですね」

後半、誠が言われる。

「よかったです」

「うちのお店、学園の方は割引してるんです。値段を気にせず、好きなものをプレゼントできますよ」

「はあ……」

その後、店員に案内される形で水着選びが始まる。話の流れから察するに、ここでも自分が奢ることになるのかと思う。いや、それ以上に、

「鳳」

小声で言う。

「ん？」

「俺達、恋人が何かと勘違いされてないか？」

疑問をぶつけると、鈴音は気にした様子も無く答えた。

「んー、考えてみれば当然かも。普通、男と女で水着買いに来るって言ったらそれしかないし。ま、そういうフリしとこ」

「お前がそう言うなら俺は構わないけど」

「……もうちょつと嬉しそうにしたらどうよ」

「嬉しいなー、光栄だなー」

脛に衝撃。痛み能耐えかね、うずくまる。

「お、お客様、どうされました？」

「気にしないでやってください、ちょっと靴紐がほどけたみたいなんです」

「え？ いえ、でも……」

「大丈夫ですつて。でしよ、誠？」

あっけからんと見下ろしてくる。ご丁寧に名前と呼ぶという演技まで付けて。

「……ああ」

鈍い痛みが残る右足を気合いで堪えさせ、立ち上がる。

——こいつ……。

邪気の無い笑顔でよくこれだけできるものだ。そう思い、危うく感心すら覚えそうになった。そしてしばらく味わっていなかったあの言葉が蘇った。やはり女は怖い。

昼下がりの喫茶店。窓際のテーブル席で、誠は数分前にやって来たコーヒーを啜る。

「いつまでそうしてるんだ？」

向かいでテーブルに突っ伏した鈴音へ、訊く。その隣ではセシリアが、貴族よろしく紅茶の入ったティーカップを優雅に傾けていた。「だってこれだけやって何の収穫も無しって……」

「水着、買ってやっただろう」

「それはそれ、これはこれ。というか、セシリア、何であんたはそんなに落ち着いてられるわけ？」

「起こってしまったことは仕方ありません。それに、わたしはまだ巻き返せる自信がありますわ」

さらりと言う。追跡終了からすでに二十分ほど。鈴音が、まだ未練がましく向かいの店を見る。

あの後、結局は一夏とシャルロットを見つけることはできなかった。いや、正確にはできたのだが、事情が違う。誠と鈴音が発見したとき、件の二人は床に正座して説教を受けていた。相手は織斑千冬と山田真耶の教師コンビ。さすがに割って入るなどできるはずもなく、また巻き込まれるのもごめんだったため、早々に鈴音の水着を買ってセシリアと合流した次第だ。

「お前、そんなに自信がないのか？」

「んなわけないじゃん。ただ出遅れた感があるだけよ」
やや強気に言う。

「それなら——」
と、セシリア。

「いい加減、機嫌も直したほうがよろしくてよ？　まるで子供ですわ」

「……わかったわよ」

のそのそと体を起こし、テーブル脇のコールボタンを押す。彼女

だけまだ何も頼んでいない。店員が来るとアイステイーとフライドポテトを注文した。

「そういえば」

注文が終わって店員が去ってから、セシリアは言う。

「ちゃんとお礼言いましたの？ 水着、買っていたいたのでしょ
う」

「あ、忘れてた。ありがと、井ノ上」

珍しくかしこまって言われる。

「いや、気にするな。俺の金じゃないし」

「は？」

「え？」

二人分の疑問符。直後、全てを悟ったように鈴音。

「あんたまさか、その財布って盗品——」

「違う。政府からクレジットカードを渡されてんだよ。買い物は全部、向こうの経費から引かれる。だから俺には関係無い」

「つまり市民の税金を好き勝手に自分の私利私欲で行使してる、か」

「間違っちゃいないけど、もうちょっと別の言い方をしてくれ。どこの政治家だよ」

実際、このカードを使う機会は滅多にない。学食は自分の貯金でどうにでもなる値段だし、それ以外は自販機くらいしか利用しないのだ。学園への編入前に渡され、使ったのも今日が初めてとなる。

「初めてのカード払いが女物の水着と無線機とサングラスって、聞きよによってはかなり変態みたいよね」

「買わせたのは誰だ」

迫力無く睨むと、屈託の無い笑顔が返った。

「まあいいじゃん。一人で戦争映画観るよりは楽しめたでしょ？」

「戦争映画？」

いつそんなものを観ようとしたのか、まったく心当たりがない。そもそも、充分に体験したのだから観ようとも思わないが。

「違うの？ 映画館の前で突っ立てたでしょ」

「映画館……ああ、あれか」

ようやく思い出す。一人歩く中、たまたま目にした宣伝用の看板。そしてキャッチコピー。“その瞬間、貴方はトリガーを引けますか？”。

それをじつと見つめて佇む自分は、確かに観客の一人にしか見えなかっただろう。いや実際、あのままふらりと中に入って、今頃は作品を観ていたかもしれない。そういう考えを胸に秘めて、言う。

「観たかったわけじゃないよ。少し、興味が湧いただけで。……まあ、確かにこっちのほう楽しめたかな」

「でしょ？」

やはり太陽顔負けの笑み。自然と周囲まで伝染し、誠とセシリアの頬も緩んだ。と、アイステイーとポテトが到着する。

「そういえばさ、井ノ上」

ポテトを食べながら、鈴音。

「あんだ、自分の水着あるの？」

「無いことは無いな。昔、騎兵隊の中佐から貰ったのがある。サーフィンを見せるとか、是非使ってくれとか言われて」

「どこのキルゴアよ。本名はランスじゃないの？」

「たまに思うんですけど、あなたは別の世界から来たような感じがしてなりませんわね」

ずいぶん酷評だ、と思う。

「まあでも、せっかくの臨海学校で水着は軍の備品です、ってのは空気読まないにもほどがある」

「そうなのか？」

「当たり前でしょ。せっかくすぐそばで水着売ってるんだし……」
数秒、鈴音は唸りながら思考する。と、

「んじやさ、今度はあたしが買ってきてあげよっか？」

「いいのか？」

「任せなさいよ」

自身ありげに胸を張る。

「それで、どんなのがいいの？」

「男用なら別に何でもいい」

「答えになってませんわよ」

指摘はセシリア。最も、鈴音は気にしてなかったらしい。

「何でも、か」

そう言っ腕を組み、考え込む。口には煙草よろしくポテトをくわえていた。するとしばらくして、

「あ、そうだ」

につ、と笑い、こちらを見る。その瞳が一瞬、悪戯を思いついた子供のように輝いたのは気のせいだろうか。

「井ノ上、スク水って知ってる？」

「!？」

鈴音の隣、セシリアが口に含んでいた紅茶をそのままカップへ吹き出した。突然の反応に、誠が案じるより早く彼女は言う。

「あ、あなたは何を言ってるのです！ 買ってくるっていったい――」

――

「いやいや、想像してみなさいよ。井ノ上がスク水着たら、きっと

“似合う”と思うわよ」

「井ノ上さんが……」

律儀に想像したのだろう。セシリアの視線が宙を漂い、そして顔が青ざめてゆく。とてつもなくグロテスクな生物を見たかのように、口元を抑えた。

「すみませんが……わたし、ちょっとお手洗いに行ってきます」

そう言っ席を立つ。去ってゆく同級生の後ろ姿を見送りながら、

「それで、スク水って何だ？」

「男にとっては大人気極まりないってくらいの水着よ。きっとあんなも気にいると思うわ」

その割りにはセシリアの反応が気になるが。

「まあ、それじゃあそれで」

「オッケ。任せといて」

デスクへ置かれた書類に目を通し、カイル・ノーマッドは煙草に火をつける。いつまで経っても慣れない佐官用の軍服を着た彼は、思案していた。書類はアメリカとイスラエルの共同で行われる、第三世代ISシルバリオ・ゴスペルに関するものだ。いや、正確にはそれに関わりがあると思しき報告。試験運用を実施するハワイ基地に、何らかのハッキングと思しきデータが流れ込んでいるという。

——電子戦チームを送るべきかな……。

煙をたゆませ、独りごちる。原因はどうあれ、自分たちが対処しなければならぬ。ISが関わるとなれば、それは国家の安全を左右する。それには軍部だけでなく、NSAも対応しなければ。

不意に懷で携帯電話が鳴る。誰だろうか。取り出して相手を見ると、実質的にカイルが保護者である井ノ上誠だった。

「どうした？」

『いや、あんまり重要なことじゃないんだけどな』

「ほう？」

珍しい、と率直に思う。いつも、仕事の話でしか電話などしてこないのに。少し嬉しく思ったのは、擬似的に親である立場のためか。

「何だ？」

『いや、本当に大したことじゃないんだけど。鳳鈴音って知ってるか？』

「鳳……ああ、中国の代表候補生か」

名前だけ、以前に見たファイルで記憶していたのを思い出す。

『あいつが今日、成り行きで俺の水着を買ってくれたんだけどな』

「ほう、よかったじゃないか。ああ、そういえば臨海学校だったかな。お前の水着といえば、中佐のあれしかないし」

言いながら、喜びを覚える。どうやら学園でも馴染めているらしい。状況がよくわからないだけに、こういう話は頬が緩む。

「それで、どんな水着を？」

『スク水』

「……」

今、電波が乱れたのだろう。そう信じたい。いや、そうであるはずだ。とても有り得ない単語を聞いた気がするの、きつと何かの間違いである。

「すまない、誠。もう一度言ってもらえるか？」

『あ？ ああ。スク水だよ、スク水』

ごんつ、と。鈍い音と共にデスクへぶつかった額へ重い衝撃。頭を上げると角に血がついていた。

『ドク？ 大丈夫か？』

—— お前が大丈夫か！

言いたい台詞は、しかし喉から出てこない。

「ああ、大丈夫だ。ところで、それはお前が着るわけじゃないよな？」

『いや、着るために買ってもらったんだけど』

煙草を握りつぶす。火種が熱い。が、気にせず手のひらで鎮火した。

「なあ、誠」

『何だ？』

「一応、中佐に貰ったのも持っていつてくれ。頼む。お願いだ」

『え、そんなに必要なのか？』

「必要だ。だから、頼む」

『あ、ああ、わかった』

「本当に頼むぞ。……じゃあな」

電話を切る。独りのオフィスで、カイルはデスクへ突っ伏すと誰にも見られるはずのない涙目を隠すように、腕を枕代わりにした。そして呟く。

「育て方、間違えたか……」

3（後書き）

初っ端の部分を丸々掲載し忘れてました。申し訳ありません。

たった二人の更衣室の中、昨日に鈴音から受け取った紙袋を開けた誠は、そこにあった一着の水着を広げて立ち尽くす。紺色をした、肩から股間にかけてまで生地のあるそれは、どう見ても男性用ではない。そしてようやく悟る。スク水がスクール水着の略称であったと。

「誠、お前……」

後ろで声が聞こえる。一夏だ。音速突破の勢いで振り向き、異形を見る目をしたルームメイトに述べた。と、開いていた距離に気付く。先ほどまでは真後ろにいたはず。なのに現在の距離、およそ三メートル。簡単に言うなら更衣室の真ん中あたりに誠を残し、一夏はドアのそばまで退がっていた。

「違う、織斑、これは違う！ 俺は何も——」

「わ、わかってるから、な？ だから来ないでくれ」

詰め寄ろうとしたのを、やんわりと制止される。視線がさらに悪化していた。病人を見るような憐れみと、変質者を目の当たりにした軽蔑。この二種が交じり合った瞳。

「別に、さ……お前の趣味とか、気にしてないから」

「違うから！ これは本当に違う！ 確かにこれでもいいと言ったが——」

「それでよかったのか……そうか」

「だからそうじゃない！ 俺は悪くないんだ、被害者だ！」

「——誠」

一転、真剣な声音が響いた。正面からじっと見据えてくる目。蔑みの欠片すら無い、真摯な色を帯びていた。

「安心しろよ、誠。誰にも言わない」

織斑一夏は、そう言って微笑んだ。ここしばらく見ていない、親近感あふれる表情だった。彼はドアを開け、更衣室を後にする。

「……」

一人、手元を見た。紺色のスクール水着はまだそこにある。と、何かがその隙間から落ちた。ひらひらと宙を舞って床に落ちたのは、一枚の紙切れだ。拾い上げて、見てみる。日本語で書かれた短文があった。

『これがスク水だ！ 気に入ったかね、井ノ上君よ。本気で着たらダメだぞ！ 追記。紙袋に普通のやつがシャツとセットで入ってるから、そっちを着るといいよ』

「……」

無言で、メモを握り潰す。紙袋を見た。よく覗いてみれば、確かにもう一着が入っている。こちらは普通の、色鮮やかな海パンとアロハシャツだった。

それから数分後。砂浜を歩く誠の所へ、数名のクラスメイトが近寄っては離れていった。むろんスク水など着ていないし、それが原因でも無い。何より、件のスク水は人気の無い浜辺で燃えているはずだ。では、というと、いうなれば雰囲気。殺意と覚悟の元、潮風が吹く浜辺を砂漠の戦場よろしく闊歩するその様は、行楽地において異端であり暴風雨のように危険だった。

「あ、井ノ上く——ひっ！」

それに気付くのが遅すぎた女子が一人。布仏本音のほとけほんねという名前だったと、誠は記憶している。身を翻して逃げようとする前に、低い声音が捕まえた。

「Wait（待て）……」

びくりと、少女の身が固まる。脅迫のそれではない。強烈な暗示ないし金縛りにでもあったように。

「こ、殺さない、で……！」

「I do not murder you. Are you good?（お前を殺したりしない。いいな?）」

「い、イエス！ マイ、グッド！ ヘルプ、ヘルプ！」

通じてるのか通じてないのか、判断できない。が、大した問題で

もなかった。少なくとも、誠の中では。

「You should answer a question. Where is the Chinese girl? (質問に答えてくれればいい。中国女はどこにいる?)」

「わからないよ、英語で言われたって英語は苦手なんだからあ!」
目に涙を浮かべ、いや、嗚咽すら漏らし本音は喚く。煩わしかった。深い溜息の後、言い直す。

「酢豚はどこだ?」

「す、酢豚? 知らないよ、ここ海だよ、中華料理なんてないよお!」

鋭い舌打ち。それが本音にとっては、誠の思つ以上に効果をもたらしたのだろう。嗚咽すら止まり、喉に詰まっている。そういう反応を教えられたことがあった。人質が極度の緊張下におかれた時、例えば後頭部に銃口を突きつけられ、さらに撃鉄を起こす音が聞こえた時だ。そういう場合、脳が麻痺して呼吸困難に陥る者も珍しくないという。

そうなつては困る。せつかくの情報源を、無駄にできない。

「鳳鈴音だ。奴は、どこにいる?」

「そ、それなら向こうのほうでオリムーを探して……」

方角が震える人差し指によって示される。妙な生き物らしき名称を聞いた気がしたが、どうでもいい。彼女は確か、一夏のことをそう呼んだ。それで充分だった。距離にして約一〇〇メートル、砂浜を歩くツインテールを目視。右手が得物を求めて右腰を探り、空を切る。いつも、というより戦闘服姿ならばそこにホルスターとシグがあつたからだ。しかし今は無い。結論する。得物は無し、否、素手で充分。

ゆっくりと本音へ視線を動かし、告げた。

「ご苦労、布仏……。手間を取らせたな」

「め、滅相ありません!」

敬礼を返された。本来なら同じく敬礼で応じるべきだろう。しか

し戦場で、それも標的を目の前にして悠長な事はやってられない。ふっ、と殺気が消える。いや、隠れたのだ。ライフルや戦闘服、防弾ベストに手榴弾やブーツなど、必然であるういかなる装備も身に付けない。それでも兵士だった。たとえその格好が海パンとアロハシャツに持参したビーチサンダルだけであるうとも、否定はできない。獰猛で、狩りを行なう瞬間まで息を潜めて時を窺う、エリート。の瞳と身のこなし。物真似によつてできる動きではない。

一〇メートル。砂地を進む。熱せられた粒子がサンダルを越えて足に触れる。熱い。だが動きは止められない。感覚を消す。痛覚を無視。痛みという単純かつ確実な危険信号を削除した。

三〇メートル。呼吸を静かに、薄刃のごとく研ぎ澄ます。気配を消した。過去の狙撃訓練を活用する。自分はここに存在せず、形を成さず、風景の一部であると。そう言い聞かせた。

六〇メートル。両腕から力が抜け、筋肉は弛緩した。心地よい脱力感。戦闘以外の状況で、一番良いのはリラックスすることだ。最も危険で行動を強いられる瞬間にこそ、スイッチを切り替えればいい。誠にはそれができた。

九〇メートル。すでに目と鼻の先にいる。足をコントロールし、踏み下ろす速度を制御した。よりゆつくりと、砂を歩く。

九五メートル。不意に目標が振り向いた。

「あ、井ノ上——」

朱色をした水着姿の鈴音は、そう言つて笑う。その途中、誠の中でスイッチが戦闘へと切り替わった。無言の貫手。顔を狙ったが、足場が悪い。顔を挟むかに見えた必殺の一撃は、間一髪で真横を駆け抜ける。

「……え？」

遅れた反応。貫手をゆつくりと引き戻す中、鈴音は自分に降りかかる危険を理解しようと務めているらしかった。

「あの、井ノ上——」

「Do you understand English?」（英語

「がわかるか？」

先ほど、本音とのやり取りで学んだ。まず確認をするべし。口喧嘩も交渉も、双方に意思伝達が成立しなければ意味を成さない。さすがに代表候補生が英会話もできないと思えないが。

「え？ あ、えと、まあ、多少は……」

「OK. — You do not have to think about anything anymore. It is over here. I can disappear from this world. Will that feel awesome splendid? (よし。——もうお前は何も考える必要は無い。ここで終わるんだ。この世界から消えることができる。そいつは素晴らしいことだろう?)」

「は……？ 終わるって……あ」

察したらしい。合点がいったというように、引きつった笑みを浮かべる。

「もしかして、怒ってる……？」

控えめな問いかけ。ふつ、と笑いが漏れた。それは止まることを知らず、くつくつと喉奥を鳴らす。次に口を開いた時、英語でなく日本語だった。

「怒ってるか、だと？ なあ、鳳よ。そいつは本気で言ってるのか？ ええ？ 鳳鈴音よ」

「い、いやあ、本気というか、その、ね？ 確認しとこうかなー、って」

「なら確認は済んだな。……生憎と中国の宗教は知らないんだ。祈りはキリスト、カトリックで許してくれ」

少女の肩にそつと手を置く。もう逃すことはない。これで終わりにしてやれる。

「いや、あの、井ノ上……ちょ、待って、にや——」

猫に似た悲鳴を上げるより先に、誠は行動した。声を失った悲鳴が砂浜を越えて海を渡る。それはこの上なく平和な光景だった。

砂浜を歩く。実に心地よい。日差しもさることながら、潮の香りと波の音が素晴らしかった。

「死ぬ……」

どこからかそんな声が聞こえる。ふと見れば、少し前にこしらえたオブジェがあった。浜辺に作られた砂の山に、顔だけ突き出した鈴音。額に“中国の墓”と書かれた張り紙が、中々良い味を出している。生まれてこの方、おそらくは最も爽やかな顔でそれを眺めた誠は、同級生たちで溢れる浜辺を歩んだ。

いつの間にかビーチバレーが始まっていたらしい。クラスメイトの一人が珍妙な二つ名で自身を称し、ボールを打ち込んでいる。何とも和やかであり、水着姿の少女たちが集団でスポーツに打ち込むという様は、少なからず男の心というのを掴んだ。約一名、女でなく男も混じっているが。

——何であいつは煩惱の欠片も無くあんな真似が出来るんだ？

シャルロットと、もう一人はラウラだろうか。二人と共にチームを組んで戦っている一夏を眺める。清々しいほどに異性への興味を感じられなかった。

——まあ、織斑だしな。

単純に結論付ける。そもそも、真剣に考えるのがおかしい。

と、目に止まるものがあった。トタン屋根で出来た掘っ立て小屋。でかい看板が掲げられ、そこには“海の家”とある。これを本気で海という苗字の人物の住まいと考える人間は、まず有り得ない。しかしそこは誠だ。海に来るのが初めてならば、娯楽にも疎い。頭を捻り、計算し、ようやくそれが喫茶店めいた物だと気付いたのは、近づいて店へ立てかけられたメニューの一覧を見たときだった。

財布を探る。海パンの右ポケットから取り出し、中身を確認。ここでクレジットカードが使えるとは思えない。現金に決まってる。所持金は一万と七八〇〇円。もし店側が各メニューの値段をひと桁

ほど間違えて表記していないのなら、一日中だって過ごせる金額だ。入り口付近のベンチへ腰掛け、やってきた女性店員に言う。

「ジントニック」

「え？ あの、失礼ですけど未成年では……」

財布から一枚のカードを抜き取り、見せる。米軍の身分証明証。

「えと、アメリカ軍の方……？」

「そういうこと。未成年じゃ、入隊できませんよ」

堂々たる嘘だ。心の中でイエス・キリストに詫びる。店員のほうは納得したらしい。専門知識があるはずの無い民間人に、これは役立つ。例を言うなら、いつも吸ってる煙草の購入などがそうだ。

「失礼しました。ただ今、お持ちいたします」

営業なのか自然体なのか区別しにくい笑顔で言う店員を微笑んで見送り、浜辺を眺める。いつの間にかバレー大会に教師二名が参戦していた。と、

「あれ、井之上君？」

声がかかる。髪を後頭部で二箇所、ツインテールのようにまとめた長髪の少女がそこにいた。見るからに活発そうな顔つきは、実際にそうなのだ。クラスでは最もよく話す人物。その性格も一番理解している。先ほど、奇妙な二つ名を上げていた少女。

「せっかく海来たのに、もうリタイヤ？ 一緒にバレーしようよ」

「いや、俺はいいよ。お前みたいにはできないし。えーと……」
「ん？」

何と名乗っていたか。首をかしげる少女の前で、例の二つ名を記憶から探る。そして、

「ああ、思い出した。『常夏のバルクホルン』だったな」
「全然違うけど……？」

心外だとばかりに少女は言う。一瞬、誠は本気で驚いた。すかさず食いついてくる。

「いやそんな真顔で驚かないでよ！ 井ノ上君ってそんなキャラだっけ？」

「俺は俺だ。というか、バルクホルンじゃないならお前の存在意義は何だ？」

「存在意義！？ 壮大すぎるでしょ！ “七月のサマーデビル”だよ！」

七月のサマーデビル。その名を舌の上で転がしてみる。なんとなくそうだった気がしてきた。いや、本人がこれだけ言うのだからそうなのだろう。

「腑に落ちないが、まあいいか」

「腑に落ちてよ、そこは。って、あたしの名前、ちゃんと覚えてるよね？」

「当たり前だろ。……谷本、だよな？」

「何で不安そうなの……」

額を押さえ、谷本癒子は落胆に頂垂れる。さすがに本名は冗談のつもりで間を取ったのだが、悪ふざけが過ぎたらしい。

「悪い。からかいすぎた」

「気にしてないよ。この前、一緒にお昼食べた時もこんなだったし。もう慣れたよ」

苦笑を浮かべ、言われる。そういえばそんなこともあった、と思いつ出した。一夏との模擬戦が終わり、医務室で目覚めたその翌日のことだ。それ以来、幾度か連れ立った記憶がある。活発なだけに、女子というのをあまり気にしなくて済むのが良い。実際、学園で一番親しいのは彼女だろう。

「それで？ 女の子たちの水着を遠目に眺めて、一人気ままにくつろぎタイム？」

「今はお前のを間近で見てるけどな。まあ、年寄りに運動させんなよ」

「年寄りって、二歳差でしょ？」

それを聞いて思い出した。編入してすぐ、誰かに年齢の話をしたと思っていたが、癒子にしたのだ。これまでの対応が自然すぎてすっかり忘れていた。最も、誠にとってその接し方が気兼ねもなく助

かったのだが。

「二歳も違つと、いろいろと変わるんだぞ？ 例えば一八歳って聞くとまだ子供って気がするけど、二〇歳になつた瞬間に大人って感じに変わるだろ」

「そう、なの？」

「そうなんだ。まあ、そういうわけで俺はのんびり目の保養に勤しむ」

「結局はそこに行くわけ、か」

残念そうに、顔を背ける。思わず苦笑が漏れた。

「そんな顔すんなよ。旅館に行ったら、卓球くらいは付き合つてやるから」

「んー。それじゃあもう一つ」

「何だ？」

びしっ、と誠を指差し、

「バレエで負けないように応援すること」

そう言つて笑う。

「了解。しっかりと」

「オツケ。では少尉、行つてきます！」

「おう、行つてこい」

互いの手のひらを思い切り打ち合わせ、ハイタッチを決める。それで気合いが入つたのか。意気揚々とバレエコートへ向かう癒子の背中を見送る。

ふと気付いた。先ほど頼んだジントニツクが、まだ来ていない。

それほど手間のかかる品とは思えないが。

「捜し物はこれか？」

突然、背後から男の声が聞こえた。来た当初、店内を見回した時にはいなかった人影が一つ。いや、二つ。海パン姿の男の後ろ、テーブル席に腰掛ける水着姿の女性がいる。前者は赤髪の短髪で、後者は薄い金色をしたセミロング。どちらも日本人の顔立ちではない。日焼けをしているが、間違いなく白人。

とはいえ、人種の特定は容易だ。なぜならばそのどちらも、誠は面識がある。

「未成年が飲酒ってのは、あんまり感心しないぞ？ 井ノ上」
薄く、男は笑った。

「スタンリー……」

「久しぶりだな」

ファーストネームで呼ぶと、スタンリー・ジェンキンスはより一層に笑みを深める。同僚のそれを、不快とは思わなかった。

隣へ腰掛けてジントニクを飲んだスタンリーは、ほのかに酒の香を含んだ息を盛大に吐いた。

「俺のだ」

「子供はジュースにしとけ」

誠の頭に手が置かれ、乱雑に髪の毛をかき乱す。やられたほうは鬱陶しいという顔をするものの、しかし振り払う気になれなかったと、

「任務中に飲酒もどうかと思いますよ、大尉」

「リラックスは大事だぞ」

軽く切り返され、店内から声を発した女性、アリス・ミラーは諦めたように小さく嘆息した。それに同情し、声をかけずにはいられない。

「あんたも苦労してるな、中尉どの」

「ありがとう、少尉。けど、私の心配より先に自分の彼女を気遣ってあげたら？」

「彼女？」

首を傾げる。するとスタンリーが面白そうに笑った。

「驚いたぞ、誠。さっきの子、中々可愛いじゃないか。お前もようやく色気がわかるようになってきたな」

癒子のことだ。それ以外にあるまい。

「馬鹿言うな。あいつは友達だ」

「その割りにはずいぶん息が合ってたじゃない」

と、アリス。

「単純に気が合うっただけだよ。——それで？」

酒のことは忘れ、スタンリーに囁く。口調も自然と変わった。

「NSA特殊作戦グループの実働要員が二人も、はるばる日本まで何しにきたんだ？」

「昔の話だ。今は名称が変わった。T-OPS、ゴーストハウンド部隊だ。出世したんだぞ？ 俺は空中機動部隊指揮官、そっちのミラー中尉は副長だ」

「へえ……」

そういえば、と思い出す。カイルからそんな話を聞いた。対IS戦術部隊として、正式に承認されたのだと。

公式に、軍部でないNSAやCIAに攻撃チームというのは存在しない。戦略上のアドバイザーとしてそういう人員を引き抜いても、戦闘には用いないとされている。最も表向きには変わりなく、現実にはやはりそういう違法な部隊は存在していた。秘密攻撃隊、暗殺チームなど。呼び名は様々に別れるものの、実在している。

中でもNSA保有の部隊が一新され、T-OPS、つまりタクティカル・オプスと呼ばれるようになったのは最近のことだった。もちろん、正式に承認、といってもその存在を合衆国政府が容認したわけではない。T-OPSは、実働部隊だけでなく電子戦や諜報戦など、様々な分野のチームの総称である。誠も、正確な立場としては陸軍でなくこの一員だ。架空の部隊で身分を偽るのは珍しくない。中でもスタンリーやアリス、それにカイルまでもが所属するゴーストハウンド部隊は、隠さなければならぬ最大の機密といえるだろう。

ゴーストハウンド。亡霊の猟犬。担当する作戦は対IS戦略。つまり今や世界最強の兵器となったISへの対抗手段となること。

合衆国が特別なわけではない。こういう部隊はどの国も保有して

いる。たった一機で国軍戦力に匹敵する超兵器。そんなものは在るというだけでも危険だが、消失はそれ以上に危うい。一機の損失で既に狂ってしまった地球上のパワーバランスがさらに悪化するということだ。ISにはIS以外に勝つ者が無い。そんな方程式が完成してしまつては、有事の際にどれほどの損失が出るのか。これは突き崩さなければならぬ計算式であり、武力均衡を取り戻す第一歩といえる。ただ一人のIS操縦者が起こした気まぐれで世界大戦に発展しかねない世の中なのだ。それに甘んじているほど、各国軍も政府も弱くない。

——当然だつたはずだ。

またしても映像がよぎる。昨日、映画館で見たのと同じように。夕日と少女。いや、それだけではない。もつと大勢がいた。彼等は皆、あつて然るべき最終安全装置だつたはずだ。

「そりやおめでとう。……で？」

それらを雑念と切り捨て、頭から無理やりに振り払う。

「用事は？」

「お前の様子見とこっちの任務、半々だ。あと、一応は知らせておこうと思つてな」

後半、スタンリーの表情が曇る。楽しいおしゃべりでないのは、確実だつた。

「ミーチャム曹長つて、覚えてるか？」

「Dボーイズの？」

スタンリーが頷く。Dボーイズ。これはむろんのこと愛称だ。レインジャー隊員がその上にいる特殊部隊、デルタ・フォースと呼ばれる部隊員を呼ぶときに使う。

ミーチャムの名前を聞くのは久しい。非公式部隊であるデルタは、同じ非公式のNSAチームとも関わりがある。会つたのは数回だが、実際にはそれ以上に助けてもらっていた。後に聞いた話によると、誠がレインジャーへ入隊できたのはカイルとミーチャムが裏で動いたからだという。

——会ってちゃんと礼を言うべきだな。

誠はそんなことを考えていた。スタンリーが次の語を紡ぐまで。

「あいつは死んだ。二日前のことだ」

死んだ、と。スタンリーは言った。そう告げたのだろうと、誠は認識する。言葉はわかっているのだ。なのに脳が混乱に襲われた。

「死んだって——」

「K I A（作戦・戦闘中の死亡）だよ、戦死したんだ。お前も無関係な話じゃない」

いつの間に取り出したのか。スタンリーは右手につまんだそれを、誠の眼前に突きつける。青いプラスチックでコーティングされた、メモリースティックだった。

「ミーチャムのチームは、カタール北部で作戦展開中だった。そこに陣取ってる武装勢力が、フランス政府からI R B M（中距離弾道ミサイル）を輸入するという情報があった。目的は両者の交渉妨害と、I R B Mの破壊」

弾道ミサイル。その名が使われなくなって十年ほどは経つ。I Sの登場によって使われなくなったのでなく、I Sに破壊された兵器発端はかの白騎士事件だ。どこからかハッキングを受けた各国軍事ネットワークは、二三四一発を超える大陸間弾道ミサイル、つまりI C B Mが日本へ発射することとなり、そして撃墜された。二三四一発。当時、弾道ミサイルは多弾頭化によって一発で広域に影響を与えられるようになったため、どれほどの大国であっても保有数は一〇〇を越えていなかった。つまり二三四一発というのは、非公式や確認されなかった誤差も含め、日本を攻撃可能な弾道ミサイル、その九割をも上回る数字である。

これによって現代における弾道ミサイルとは、その有用性を完全に無くしたに等しい。ほとんどが失われ、さらにはI Sという一発限りでない上にそれ以上の戦力となる兵器があるのだ。開発経費は当然ながら無駄とされ、打ち切られている。見方によれば、航空および陸上兵器よりも悲惨な末路を辿った。そして残った少数のI C

B Mや、それより射程の短いI R B Mはやはり闇市場に流れている。かつて想定された銃声の無い、非目視による機械同士のサイレント・ウォー（静かな戦争）は、こうして幕を閉じた。再び、完全ではないにしろ有視界戦闘へと移行し、危険度を濃密にした小規模戦争の連続は、果たして進歩か退化か。

「I R B M破壊なら、N S Aの関係する問題じゃないだろう。交渉妨害なら、わかる気もするけど」

と、誠は答えた。いかに非効率的とはいえ、大量破壊兵器をテロリストに流したのだ。どの国でも行われているが、その違反性は強い。取引現場を抑えたのなら、アメリカにとってフランス政府に圧力をかける絶好の機会となるだろう。綱渡りの均衡にあるこの時代、国家間の政治的交渉にN S Aのような組織は関わって当然だ。

しかし、と思い返す。それでも自分には関係の無い話だ。そういう分野にはそういう専門家がいるし、一介の兵士である自分とは直接的に何の関わり合いがない。視点を変えれば、スタンリーがもたらしたこの情報はニード・トゥ・ノウの原則を破ることも思える。「それだけなら確かに、あなたが知るべきではないわ」

これまで沈黙にあったアリスが言う。

「けれど、誠、重要なのはそこじゃない。その後なのよ」

「後……？」

「そうだ」

スタンリーが引き継ぐ。

「ミーチャム達は任務を完了し、回収地点へ向かっていた。その途中、何者かに襲撃されたようだ」

「武装勢力か？」

「上層部も最初はそう考えた。だが、彼等が納得できない理由があった。ミーチャムは最後の交信で、敵の飛行場を発見したと言い残している。あの場所にそういう施設があるという記録は無い。誰かが抹消したみたいに、綺麗さっぱりと記述が無かった。そこでN S Aの情報支援隊は残存していたカテゴリー軍ネットワークを探った。

すると、そつちにはミーチラムが発見した施設と同一らしい空軍基地の記録が断片的に残っていた」

そしてメモリースティックが差し出される。

「これはあいつが最期に送信し、かろうじて受信できた記録カメラの断片映像だ。私見だが、誠、この映像はお前と俺達に向けて、ミーチラムが伝えようとした警告だと思う」

警告。その単語を噛み締めた。

そつとスティックに人差し指を伸ばす。掴むかにみえた指先は、だがそこで止まった。約五センチほどの距離を置いて。不可解な行動はそこからだ。誠は目を閉じる。静かに、瞑想でも始めたように。刹那、指先からスティックに、一瞬だけ光が交差する。静電気に似ていた。高性能のハイスピードカメラがあれば、その様を確認できたかもしれない。誠の指先から迸った一筋の電流がスティックへ当たり、間髪入れず戻った様子を。

数瞬、閉じられた目蓋の奥で眼球が動く。人が夢を見るときに似ていた。しかし彼が見ているのは夢でない。電子機器に保存された途切れ途切れの映像を、脳に直接送り込んで再生。その作業が終了するまで、およそ三秒かった。そして目を開く。

「……どうするんだ？」

ようやく言葉が出るまで、さらに十秒。この不可解な行動で誠は何を知ったのか。その声は疲労の色が滲み出ている。

「こつちの人員を失った。俺達の仲間を。表向き、米軍は報復体勢を整えている」

「実際は？」

「様子見だな。情報が少ない上に、断片ばかりだ。クリスチャンが死んだかどうかもわからない」

「なんだと？」

不快感が驚愕を上回った。思わず、スタンリーの横顔を見る。

「死体を確認したと、そう聞いた」

「そう言う以外に道があるか？ 脅威が去ったというのは、簡単で

効果的だ。短期か長期か、向こうが行動を起こすまでは士気を保てるし、その前に次の一手で仕留めればいい」

「……まるで政治だな」

皮肉げに呟く。アリスにも聞こえたのだろう。彼女は言う。

「戦争はいつだって最も単純な政治よ、誠」

「ごもつとも。殴り合うだけでいいんだからな」

「そうだ」

と、スタンリー。

「殴り合って、最後にリングへ立っていればいい。犠牲は関係無い。……気に入らないか？」

「気に入らないよ。ミーチャムが警告を与えてくれたのに、俺達は何も行動しないなんて。死に様にすら報いてやれないってのは、これ以上無いくらい酷な話だろ」

「お互いにな」

肩を叩かれる。スタンリーは立ち上がった。背後でアリスも続く。

「俺達は行く」

「何の任務だ？」

「自分のほうに集中している」

一閃、切り捨てられる。

「だがな——」

スタンリーが続けた。

「今、自分で言った言葉を忘れるなよ。俺達は何も行動しない。もしも篠ノ之束が目の前に現れても、殺すな」

「いいのか？」

男の顔を見上げ、述べる。

「機会があればすぐにでも、と。あんたはそう考えてると思ってた」
「俺はそうだ。けど、俺もアリスもお前と同じ兵士だ。命令には従う。曰く、歴史が捻じれたら正しい修正の時期を見ないといけないらしい。コンウェーたちは急ぎすぎた。俺達は違う。——じゃあな」
脇を通り抜け、二人の友人は立ち去ろうとした。が、

「教えてくれよ」

誠が言う。視線を海へと向けたまま。二人が立ち止まる。

「どうして“クリスチャンたち”じゃなくて“コンウエーたち”何だ？」

「生死不明の男をリーダーと見て、そいつは正確だと思うか？」
解答に頷く。

「じゃあもう一つ。スタンリー、あんたの言う“俺達”に、俺やドクは含まれるのか？」

ゆつくりと、こちらに視線が注がれるを感じる。誠はそれに応じて、見返した。するとスタンリーが微笑む。邪気の無い純粋な笑みでもって、彼は聖書の一節を述べた。

「Ask, and it shall be given you.（求めよ、さらば与えられん）」

そしてアリスと共に踵を返し、離れてゆく。日は明るい。にも関わらず、周囲は静かだった。いや、本当なら騒がしい。誠の脳がその音を拾っていないだけで、喧騒に包まれている。打ち付けては退がる波を見つめ、彼は立ち上がった。

煙草に火をつける。一口吸い込むと、頭がぐらりと揺れた。それでも映像は消えてくれない。夜が近い。空は夕焼けに青の色彩が混じり、恐ろしげな紫へと変色している。冷えた潮風が凪いだ。少しだけ肌寒い。

浴衣に草履を履いた誠は、旅館の中庭で佇む。懐には携帯電話。先ほどアドレス張から一人の人物の電話番号を出し、結局はかけることなく沈黙を保っている。相手はドク、カイル・ノーマッド。

『あいつは死んだ。二日前のことだ』

昼間、スタンリーよりもたらされた報告が耳の奥で再生される。

カイルは知っていたのだろう。昨日、電話したときにもわかっていたはずだ。談笑とも言えないふざけた雰囲気、友人が一人この世と別れた。何故、知らせなかったのか。そんな疑問が浮かんだが、当然であると思う。必知事項は関係無い。カイルは、知らせるつもりだったのだ。だからスタンリーとアリスが来た。自分たちの任務のついででも、カイルがそう命じたとみて間違いない。

NSA特殊作戦グループ。もとい、現在はT-OPS所属ゴーストハウンド部隊。獵犬を指揮しているのは、他ならぬカイルである。彼の階級は中佐。大尉と中尉のスタンリーたちは、直属の部下だ。ある程度、任務外の行動も命じられる。

しかしカイルへ電話をかけようとしたのには、もう一つの理由があった。ミーチャムの残した映像。誠以外、あの場では誰にも見ることができなかった。いや、そもそも井ノ上誠を知らない人間が見て、理解できる行動でも無い。指先から迸った静電気も、それを介してメモリースティックに保存された映像を観たことも。超能力と変わらないような現象。人間には不可能な能力だ。そしてそれからすると、この十七歳の青年は人間でないということにもなる。

人に似た生物。そんな彼が観たのは、砂漠にぼつりと出現した空

軍基地である。周囲で曳光弾が飛び回り、砲撃か手榴弾かによる爆発で乱れたノイズ混じりの戦場。ミーチャムの主観視点で撮影されたりしきそれは、最後に上空を見上げる。自然と見たのではなく、そちらを向くように言われたようだった。仲間の誰かが警告を発したのдарう、と推測する。音声は含まれていなかったため、確実ではないが。ともかく、ミーチャムの警告とはそこからの一瞬が全てだった。月が輝く夜空に浮かび上がった、人型大のシルエット。

——ブラックウイドウ？

最初、誠はそんな妄想を抱いたほどだ。知らない内に夢遊病患者となった自分が、ブラックウイドウを纏ってカタルに飛び、仲間を攻撃したのかと。それほど、敵機は誠の所有する機動兵器と酷似していた。

いや、むしろ認めたくなかったのだ。あれがブラックウイドウなら、錯乱した自分が撮影者もといミーチャムたちを殺したのだと、そうあって欲しいと願った。

『コンウエーたちは急ぎすぎた』

またスタンリーの声が蘇る。コンウエー。そのファミリーネームを聞くのは、懐かしさすら感じた。浮かび上がる教官の顔と、一昨年下の少女。リーダーであるはずの男を差し置き、その名を中心人物へ上げたのは、何故だったのか。生死不明は、そのどちらと同じはずだというのに。もしくは、名前を上げた方は生きているのだと、そう言われているかのようだ。

ミーチャムたちを襲った人型兵器、存在しないはずの空軍基地。そしてコンウエーの名前。それらが誠の中で結びつき、答えを導き出す。彼にとって最悪の、しかし否定し難くもある解答を。誠はその真偽をカイルへと聞きたかった。答え合わせとも言える。どうしようもなく結論が欲しい。だが一方で、やはり恐怖が勝った。知ることの恐怖だ。知識を得るとは、それだけ危険を理解することに等しい。欲する知恵だけを得るというのは、ありえるはずのない身勝手だ。もしくは欲する真実だけを、とも称せる。

誠はすでに、その両方を推測していた。だから電話も出来ない。確固たる裏付けから逃げるため、煙草に火をつける。

「あ、井ノ上君！」

背後からやって来た人物に、あるいは救われたのかもしれない。声だけで誰かはわかる。誠は振り向き、言う。

「谷本。ああ、悪い。そういえば卓球やるんだったか？」

「卓球？」

昼間のやり取りから察した疑問を投げかけると、谷本癒子は首を傾げてみせた。浴衣姿が妙に新鮮。月明かりに相まって、普段は決して無い少女らしさが浮かんている。

「昼間のこと？」

「そう」

頷くと、首を振って否定された。

「あれはいいよ。それより、どつかで鈴音見なかった？」

「鳳？」

予想してなかった名前。昼間の悪夢もといスク水が蘇る。今頃は灰になって飛んでいるだろう。

「あいつがどうかしたのか？」

「どこ探してもいないのよ。夕食にも来なかったし、部屋にも戻ってないみたいで。一体どこ行っただのやら」

「……」

嫌な汗が背筋を伝った。悪寒が走る。

「井之上君？　なんか顔色悪いよ、煙草の吸いすぎ？」

癒子が顔を覗き込んでいた。その視線は時々、煙草に向かっていく。

「一応、未成年なんだからさ。こんな見つかりやすい場所で吸ったら、まずいんじゃない？」

「あ、ああ……」

ペンダントのように首へかけていた携帯灰皿へ、短くなったそれを落とす。軽く息を吸った。おそらく正解であり、触れたくない推

測がここにもう一つ。

「井之上く——っ!？」

肩を掴む。驚愕にびくついた顔へ、囁くように告げた。

「谷本、俺を助けてくれ。一人じゃ無理だ」

「た、助け？ あたしが、井之上君を……？」

「そうだ」

力強い肯定。不意に気付いた。癒子の顔色がどこおかしい。血色が悪いというわけではなく、その反対だ。夜だというのに妙に明るく、赤く見える。

「俺についてきてくれ」

「え、ええ!？ き、急にそんな——」

「嫌か？」

「嫌とかじゃなくて、いやむしろ大歓迎だけど……でもあたしって、そんなに——」

狼狽している。当然か。彼女を巻き込むことになるのだ。軽い自責の念に駆られる。それでも、頼れるのは癒子一人だった。

「いいか？」

語を遮って訊く。念を押すように。至近距離、まっすぐと目を見る。わずかに潤んだ癒子の瞳に、鏡よろしく自分が映っていた。

「……はい」

どこか惚けたような瞳に反し、呟きは力強い。返された答えを、何度か自己の内で確認する。肯定。谷本癒子は、共に行くことを選んだ。

「よく言った。来い！」

「え、ちょ——」

有無を言わせず、その体を抱きしめる。するとやはり少女なのだ、と改めて思った。クラスでは体力的に優れているが、それでも華奢全体的に、自分とは比べ物にならないほどか細いと知る。

同時に胸中で別の語を紡いだ。ブラックウイドウ、部分展開。フライトユニット、つまり肩と背面、脚部だけを出現させる。その姿

はこの世に有り触れる最強兵器、そのものだ。

「なに——」

「しっかりと掴まってる！」

地を蹴る。垂直に。飛行機能をオンへすると同時にシールドを展開。己と癒子をその環境から防護する。高度五〇メートルまで上昇するのに、十五秒ほどかけた。これでも癒子に気を使ったつもりだ。シールドがあるとはいえ、五感から来る急激な環境変化は体調悪化を招く。

「大丈夫か？」

やや口調を強く、尋ねる。

「平気だけど、どこ行くの？」

「ああ。ちよつと……いや、その前に少し悪い」

「え？——な！？」

体勢を変える。右腕で頭、左腕で膝裏を支えて抱きかかえる。

「な、え、井之上君、なんでこんな格好——」

「この方が安定してる。正直、さっきので飛んでたらお前を落としかもしれない」

言いながら前進。あまり時間も無い。急がなければ。

ナイトビジョン

同時に暗視機能をオンへ。本来のブラックウイドウならフルフェイスマスクのカメラ映像に投影されるが、今回は違う。肉体を直接、ブラックウイドウの暗視モードに接続して、網膜を媒介にマスク内部と同じ状況を作り出す。簡単に言うなら、機体の機能を借りて自身の目を猫のそれにしたようなものだった。

「あの……」

と、癒子。

「何だ？」

「あたし、そんなに重い？」

「は？」

反射的に顔を見ようとすると、
「ダメ！ いま顔見ないで！」

「おい、馬鹿、落ちるだろ！」

一方は誠の顔を逸らそうと手で押し、一方はせめて前方の視界を取り戻そうと癒子の手を退けようとする。空中で起こったささやかな馬鹿騒ぎは、当の本人たちを除いて知る者がいない。

「わかった、わかったって！ だから手をどける！」

「ホントに見ないでよ！」

「見ないって言うてるだろ！？ それよりちゃんと掴まれ」

ようやく、手が退けられる。代わりに胸元で浴衣を引っ張られる感触。癒子がしがみついている。

ずいぶんと滑稽な姿をしているのだらうと、誠は思った。これがアサルトスーツならまだしも、浴衣とは。写真に撮られれば、生涯の笑い種にされること間違いない。

「重くないぞ」

角度を変え、地上を観察しながら言う。

「え？」

癒子が顔を上げた。反射的に見返しそうになるのを堪える。また暴れられては面倒だ。地上に視線を向けたまま、答えた。

「だから、重くなんてない。むしろ軽い」

「……うん」

返事は小さく、風圧が無いというのに聞き取るのがやっとだった。いつもと正反対にしおらしさを感じる。

と、地上に捜し物を見つけた。砂浜に突き出た物体。安堵と一緒に、失敗を確認したとき特有の嫌な感覚がやってくる。胃が締め付けられるようだ。

「降りるぞ」

行動を伝え、実行。速度を抑えた降下で砂地に到着すると、癒子を下ろす。それからブラックウイドウを停止した。要所にあつた金属の質感が消え、草履が砂を踏む。同時に暗視モードが消えた。視界は元に戻る。おぼろげに、それでもはつきりと癒子の姿を捉えられたのは、夜空に出た満月のおかげだ。

「あの、なんで海……?」

「あれだ」

首を傾げる少女に、目標物を指さす。浜に盛られた小さい砂山に、突き出たのは人間の頭ほどの物体。いや、それは間違いなく――。

「あれって……あ、待って」

先に足を踏み出した誠を追う。物体との距離は十メートルほどだった。明るい今夜、それは少しばかり近づけばすぐにわかる。砂浜から出た人の顔と、潮風にたなびくツインテール。額の張り紙は文字こそ読めないものの、何が書いてあるかは充分にわかっていた。何しろ、誠が書いたものだ。

「やはり……」

小さく呟き、胸の前で十字を切った。今日、この地で友人二人の死を知ったことになる。この馬鹿馬鹿しい終焉にミーチャムを並べるのはどうかと思っただが、すぐ考え直した。勇者と無能、あるいは英雄と卑怯者。どれだけ人格に差があつたとしても、それは生前に限られる。死人に口無しという言葉が物語っていた。命とは等しく同じ価値ではない。とすれば、命を持って警告を送ったデルタ・フォースの友人は、ここに眠る彼女と変わらないのだ。

「やはりって、なにが――」

問い掛け、誠の背後からひよっこりと顔をのぞかせた癒子は、彼の視線を追って地に埋もれる彼女を見る。そして息を呑み、

「り、鈴音!？」

叫ぶと同時に駆け寄った。その手が亜麻色の髪の毛に触れる直前、

「よせ、触るな!」

鋭い警告に、びくりと身を硬直させる。大股で近づくと、誠は物言わぬ中国人の前に片膝をつく。とりあえず張り紙を取った。

「井ノ上君、これ、いったい、なんで……」

「事情は後で説明する。手伝ってもらいたいこともある。だけどな、先に弔いをしないと」

「弔い!？」

「静かに」

背を向けたままそう告げる。癒子が黙ったのを確認し、誠は静かに口を開いた。去った友に情愛と悲壮だけを込めた言葉を、そうして紡ぐ。

「こんな事になるとは思わなかった。すまない、鳳。言ったとおりキリスト教で悪いが、許してくれ。……いつくしみ深い神である父よ。あなたがつかわれたひとり子キリストを信じ、永遠のいのちの希望のうちに人生の旅路を終えた鳳鈴音を、あなたの御手にゆだね——」

「委ねられるか——！」

告別の言葉を遮った怒声は、重い衝撃を伴って誠の額を襲った。

「ぐっ」

ぐぐもった呻き声。頭突きの一撃は皮膚を素通りして頭蓋を越し、誠の脳を揺さぶった。屈強な軍人も、予想できない必殺の攻撃にはあえなく陥落する。砂地にどさりと仰向けに倒れ、掠れる声で警告を発した。

「逃げる……死人が来る。アンデットが、化け物が出やがった……」

「誰が化け物か！」

一喝。怒声が海原を渡る。

「鳳、死んだんじゃ——」

「残念ながら死んでないわよ！ トリックでも何でもないわ！ 大體、逃げろって誰に……あれ？」

怨念めいた絶叫が止む。

——生きてたのか。……よかった。

胸中に呟き、十字を切って感謝する。これで無意味な殺人者ではなくなった。

一方で鈴音はというと、ここに居合わせた三人目に驚いたような目を向けている。

「癒子？ なんであんたが？」

谷村癒子は答えない。鈴音に続いて不審を抱いた誠が上体を起こ

すと、目の前に浴衣姿の少女が現れる。彼女は誠を見下ろし、述べた。目元に妙な影がかかっていて、表情がわからない。

「井之上君……ついてこいって言ったよね？ あれ、どういう意味？」

妙に低い声だった。普段ならば、その周囲を占める烈火の如き感情にも気付いただろう。脳震盪寸前で留まっている現状の誠に、冷静な分析能力は伴わなかった。右手で額を押さえつつ、幾らかの建前もとい言い訳すら混じらない真意を述べる。

「ん？ ああ、俺一人で鳳の死体隠すのは面倒だろ？ だから手伝ってもらおう——」

拳が振る。誠の脳天めがけて。癒子の放ったそれは中指の第二関節を頭頂部に命中させる正確さがあり、半日間の死人体験をした鈴音の頭突きよりも強烈な気がした。損傷した脳に、重複する攻撃。誠は一瞬、視界いっぱい白い光を見た。声すら上がらない。目を剥いたまま、上体がぐらりと揺れたかと思うとうつ伏せに倒れる。四肢を痙攣させる兵士を見下ろしたのは、浴衣を纏った鬼神か。先ほどまで淡い恋心めいた感情で赤くなっていた顔は、別の赤に染まっている。

「一人で頑張つて！」

言い残し、踵を返す。誰も声をかけられなかった。気絶直前の誠と、生き埋め上体の鈴音だけが取り残される。波の飛沫が浴衣を濡らした。そろそろ満潮も近い。

「あのさ、井ノ上」

鈴音が言う。

「……なんだ」

「あたしが死体とかそういうのはもう無しにして、何て言って誘い出してきたの？」

記憶を探る。癒子連れ出すとき、自分は何と言ったのか。

「俺を助けてくれ。一人じゃ無理だ。俺についてきてくれ」

「……それ、どんな状況で言った？」

「谷本の肩を掴んで」

沈黙。冷たい砂の粒子が良い具合に脳を醒ましてくれる。そこでようやく理解した。

「あのさ、井ノ上」

「何も言っな。俺は織斑とは違う。一般の男だ。ただ混乱してただけだ。それだけなんだ」

早口で一氣にまくし立てた。思い返してみれば、あれではただの告白シーンだ。癒子を取り間違えて当然だろう。浅はか過ぎた自分に苛立ちを覚える。この状態も然るべき、いやむしろ軽いくらいだ。
「……そう。ま、それはいいとして、さっさと助けてくれない？」

「ああ……」

のそのそと起き上がる。肩が異様に重かったが、仕方無い。元々、このために来たのだ。埋まっている中国少女の前まで生き、ブラックウイドウを右腕だけに部分展開。硬質の手で鈴音の頭を包む。

「冷たいけど我慢しろよ」

指先どころか筋肉の動き一つも見逃さず、トレースして動く機械の手。それでも心持ち慎重になってしまう。重機以上の腕力があるのだ。その気になれば人の頭など紙くず同然に潰せる。今夜、そんなグロテスクな光景は見たくないし、これ以上、友人を失いたくもなかった。

「痛くしないでよ」

「わかってる。というか、そういうこと言っな」

「どういうことよ？」

「痛くしないで、とか。一般の男だって言っただろう。集中力、散らすだろうが」

一瞬、浮かんでしまった妙なイメージを振り払う。機械の手のひらの向こう、冷やかな視線を感じる。

「……変態」

「いいや、極一般的だ。大体な、こっちは一年もアフガンだぞ。むさ苦しい連中に囲まれて女の一人もいやしない。いやまあ、基地全

体でいないことは無いけど、部隊には誰もいなかったさ。それが突然、IS学園なんて九九、九パーセント女子校に放り込まれてみる間違いを犯さなかっただけでも表彰もんだ」

「今度、あたしにその話をしたらぶっ飛ばすからね」

「はいはい。ほら、引っ張るぞ」

最新の注意で力を込め、引き上げる。ゆつくりと。月明かりの差す浜辺で機械の手に掴まれた少女が砂から出てくる。それも水着のまま。他人事であれば抱腹絶倒しかねない光景だった。

「おはよう、鳳。反省したか？」

「反省しました。だから下ろしてください」

いじけた声で言う。ゆつくりと地に降ろした。腕の部分展開を解除する。その途端だった。鈴音がくしゃみをして、へたり込む。自分を抱きしめるように両肩を抱えた。震えている。

「大丈夫、じゃないか」

「当たり前、でしょ……」

夜に水着で海岸をふらつく。そんなのは風邪を引きたいといっているようなものだ。しかしこの場合はそれ以上にまずい。砂に体温を奪われたところへ、さらに夜風を食らっているのだ。

「井ノ上、もうちょっと近く来て」

掠れた声。健康状態のそれでは無い。さすがに責任と罪悪感を覚える。隣に片膝を降ろした。

「何だ？」

「他意は無いの。絶対に。だから、なんていうか……」

言いにくそうに後半を濁す。察するのは容易。

「……わかったよ」

「っ！」

その行動で正解だったのだろう。鈴音は息をのんだが、何も言わなかった。自分を抱きしめているのが一夏でなく誠だと言う状況を、じっと享受している。

「……」

言葉は無い。しかし誠は次の行動へ移っていた。再びブラックウイドウを部分展開させる。ただし実体ではない。シールドのみを起動し、自分と鈴音を包み込むように。これで風とある程度の冷気を凌げる。

だが足りなかった。腕の中にいる少女は、今もまだ寒さに震えていた。これは現状でどうにもならない。体温が低下しているのだ。飲食物か、暖房が必要となる。体力があるなら運動という選択肢もあったが、いくら鈴音だろうと無理だろう。消耗しきっている。

——仕方が無いか。

軽く息を吐き、それから吸い込む。肺を半ばほどまで満たして心拍を落ち着けると、誠はそれを行なった。

肌の感覚が無い。麻痺しているのだと、鈴音は自覚していた。すでに痛覚すら無く、思考も奇妙に形を変えて一定にならない。ぐにやりと歪んだ頭の中にあるのは、ただ単純に寒いというだけだった。だから目の前の男、井ノ上誠へしがみつく。硬い胸板に顔を押しつけ、包み込む腕に成すがままとなる。

「鳳」

不意に呼ばれる。顔を上げると、自分を抱きしめる男は静かに訊いた。

「心臓に持病があつたりするか？」

「え？ いや、無いけど……」

「わかった」

不可解な質問に、疑問が生まれて消えた。考えたくない。それだけの余裕はどこにもありはしない。思考は苦痛だった。

奇妙な暖かさを感じたのは、その時である。微弱な電流で全身の表皮を刺激するような、そんな感覚。あるいは錯覚だろうか。いや、それにしてはリアルだった。

——なんだろ……。

声に出さず、呟く。あるはずのない電気に、ではない。自分自身に対して訊く、つまり自問。答えが出る前にそれも消失した。

「あの、さ」

「ん？」

顔を見上げ、別の疑問を訊く。

「彼女とかにも、こういうことした？」

「は？」

まじまじと見返される。別の熱が出てきた。顔だけが熱い。それを誤魔化し、何より悟られないようわざとらしく慌てる。

「だ、だつてさ！　なんていうか、手馴れてる気が……」

「気のせいだ。彼女なんてできたことも無い」

「でも、湊つて——」

口を紡ぐ。それが聞いてはならない、言わば禁忌なのだと理解した。だが、遅い。誠の表情からほんの少し、優しさでもいいうべきものが消える。

「どこで訊いた？」

「え、と……」

誤魔化せない。見つめる瞳から、逃れられない。

「……あんたが一夏と戦つたつて時、シャルロットの前はあたしが付き添つてたの。あたしと、あんたの上官だつて人が」

「上官？」

「ノーマッド中佐つて、そう言つてた」

誠の瞳が、驚愕に見開かれる。

「あいつが来たのか？」

小さく頷いた。若干、なぜかわからないが罪悪感が生まれる。

「注射みたいのをしてすぐに出ていったけど。そしたら寝言で、湊つて呼んで……ごめん」

嘆息めいた吐息が聞こえる。鈴音は、自分に向けられた失望だと感じた。信頼を裏切られたのだと、誠が思っていると。だが違う。そうわかったのは、彼が口を開いてからだった。

「湊は仲間だ」

静かに、自分を抱きしめている男の口が動く。

「仲間だった。……俺はまだそう思ってるんだけどな」

「……向こうは？」

おずおずと訊く。間近の顔に苦笑が浮かんだ。

「わからない。死んだんだよ、もう」

一瞬、吐き気すら覚える。死んだ、と。その単語を直接、誠の口から聞いた瞬間だ。腹わたを抉られ、かき回されるように。不快感の塊が現れる。見ず知らずの人物の死を知っただけで、こうまでなる。それだけ人間の命は軽く奪え、重く喪失感を覚えるということか。そうでなければ、誠の友人だというのが原因かもしれない。

「本当は、さ」

紡がれたその先を、俯きかけた顔を僅かに上げて聞いた。

「レインジャーにはあいつが行く予定だったんだ。俺はまだ、入隊過程を終了していなかった。だから一足先につて、あいつと他の仲間たちが……。湊の奴は、不安そうな顔するもんだから、笑って送り出してやったよ。けどそのすぐ後、あいつらの乗った輸送機は撃墜された」

まるで老人のように、誠は疲労が濃く滲む吐息を漏らした。ふと抱きしめる力が強まったと思うのは、気のせいだろうか。

「助けてやれなかったのに、許してもらえないのにな」

「助けて、井ノ上——」

しがみつくように。それまでただ抱かれるだけであつた鈴音は、未だ力の回復途上にある腕で誠を掴む。硬い胸板に頭を預け、彼女は言った。

「どうやって助けるつてのよ。あんたの責任なんて、どこにも無いじゃない……！ その子も、憎んでるはず無いでしょ」

掠れて消え入りそうな声。喉が痛い。ひどく意識が虚ろだった。眠ったらだめだ、そう言い聞かせる。ここで自ら意識を閉ざしてしまったら、全てが無かったことになるだろう。明日、目覚めてから

誠に聞いても、この男はきつとはぐらかして済ませるに違いない。それだけはしたくなかった。彼が打ち明けたのなら、残しておきたい。そうすることで井ノ上誠の名誉とでもいえるものが保てると、そう感じた。

感覚の戻り始めた足に、水滴のような感触を覚えた。膝の当たりが濡れている。ポツポツと、小ぶりの雨でも降ったかの如く。瞬きして初めて、涙が出ていることに気付いた。

——何でよ。

声に出さず、問いかける。目の前の男へ。どうして背負い込もうとするのか。プライドで片付けていいものではない。全ての原因が自分にあると、そう思い込もうとしているかのようだ。それが無償に物悲しく、そして打ち明けてもらえるだけ信頼されたというのが、異常に嬉しい。

「……そうだな」

彼は囁いた。どこか否定するような余韻を混じえて。

「ところで、鳳」

口調が変わる。それまでであった奇妙な哀愁を一蹴して、いつもの声になっていた。抱きしめたまま、彼は言う。

「旅館に戻ったら、少しでもカルシウムを取っておけよ」

「え？」

思わず聞き返した。話題に関連性が無い。この話をこれ以上、続けたくないという表れか。それにしても次の語句は、まだ選択の余地があったように思える。

「いや、なんて言うかさ。友達として心配するよ、これは」

「何が？」

「だってお前、当たってるのに当たってる感触が乏しいって。さすがに成長がどうこういうのを通り越して——」

涙が枯れる。いや、引く。言われて気づいた。今、誠に抱きしめられている格好だ。それはいい。問題は鈴音の胸が、誠のみぞおちのあたりに密着していたということだ。

誠の言葉が終わらないうちに、訪れた変化は二つ。一瞬の羞恥心で顔が赤くなり、それを超える怒りが沸き上がる。無言のまま振るわれた拳がアッパーカットとなって彼の顎を打ち抜いた。骨に食い込む感触。満足感を得る。

「あんたねえ……」

続けようとしてそれが不毛であることを知った。眼前で仰向けにひっくり返る青年が一人。ピクリとも動かなかった。

「バカ」

ぼつりと呟く。意識を失った誠の脇腹をつま先で少し小突き、潮風の寒さに震えた。盛大に溜息をついた後、とりあえずは更衣室へ向かうべくその足を進める。

海岸沿いの堤防に、その車は沈黙を崩そうともせず存在していた。車種は黒のダッジネオン。プレートも制作元同様にアメリカ、ペンシルベニアのナンバーをしている。運転手の乗る左座席に男、反対の助手席に女を乗せたそれは、窓をほんの数センチだけ開けている。換気のためだろう。何本目になるのか、男のほうは煙草に火を付け、車内を副流煙で満たす。連れを気にした様子は微塵も無い。また女のほうも、普段からこういう態度に慣れているのか。眉一つ動かすこともなかった。

男はゆつたりと煙を吐く。昼間、井ノ上誠と話した時とはまるで違う身なりで。スタンリー・ジェンキンス大尉は、かつて空を支配した戦闘機乗り達がそうであったように、米空軍のエンブレムが縫いつけられたフライトジャケットとカーゴパンツを身に付けている。「なあ、アリス」

備え付けの灰皿に煙草の先端を落しながら、相棒へ言う。そちらも、身なりはほとんど同じだ。違うのはスタンリーのジャケットが青基調であるのに対し、アリス・ミラー中尉は赤がメインのものを着ているという点。

「どうしたの？」

煙たさを微塵も感じさせないはつきりした発音。実際、彼女は煙を吸っていなかった。どういう原理になっているのか。月明かりに漂う白煙は、アリスの周囲に近づこうとしない。見えない何かに阻まれてるように。エアカーテンでもここまでは遮断できないだろう。

相棒のお越している未知の現象へさしたる疑問も抱かず、スタンリーは言う。

「誠の奴、あれは馬鹿なのか？ 狙ってるようにしか思えないぞ」
今しがたの出来事を尋ねる。よく見れば、ダッシュボードにライフルスコープが置かれていた。通常のものよりやや大きく、バッテリーケースが付属している。暗視モード搭載の代物か。

「あの子なりの処世術だと思うけれど」

「大したもんだね。抱きしめといて、貧乳を指摘するか？ 普通」
「年中、飽きもせず女の子を追いかけてるあなたとは違うの。経費がおかしな減り方してるのは、今ここで説明してもらいたいものよ」

痛い所を突かれる。吐き捨てるように短く笑って、煙草を吸った。
一見すると、この会話に違和感はない。仲間の、というより年下の友人、もしくは弟のような誠の行動をはたから眺め、苦笑する兄と姉のやり取り。そんな風だった。しかし疑問点は、注意深く言葉の端々を分析することで浮き彫りとなる。

二人は、誠が鈴音に対して何といったか知っていた。音の通る夜とはいえ、海岸から数十メートル離れる距離の会話を、聞いたことになる。人間の聴力では明らかに不可能。あるいは盗聴器の類いを誠に仕掛けていたか。昼間、そういう余裕はあっただろう。だがなぜ、仲間であるはずの彼を監視しているのか。

「あのな、アリス。男ってのは……狼なんだよ」

「なに馬鹿なこと言ってるの。経費から風俗店のお金出すなんて、横領もいいところよ」

「おい、そんないかがわしい店に行った覚えは無いぞ。ストリップバーで一杯やってるだけだ」

「そのお金はどこから？」

「それは、なんだ、こう……領収書を部隊の貯金箱宛てにしてもらった」

「やっぱり経費じゃない」

額を抑え、呆れられる。

「ノーマッド中佐にバレたら、いったいどうするの」

「大丈夫だ。あの人は生身の女になって興味ないのさ。ありゃあ、根っからの機械フェチだよ。だから俺が幾ら使おうが、支障が無いなら気にしないってことさ」

自分で言ってツボに入ったらしい。こちらを睨むアリスを差し置いて、込み上げる笑いを堪えようとしなかった。

「それにしても、あの子はあなたと違って繊細ね」

「ああ？ 誰だ？」

「誠よ」

憂いを帯びた小さな溜息。弟を心配する姉のそれだった。

「どこが繊細だよ。不器用なだけにしか見えないね」

「ええ。不器用で、繊細。あなたみたいに楽観的な生き方をすればいいのにね」

「褒め言葉として受け取っておくぞ」

笑いの残滓を漂わせ、煙草を灰皿へと擦じ込む。一瞬、横目でアリスの顔を窺った。悲しげで、後ろめたそうな目をしている。

「なんて顔してんだ、相棒」

肩を叩く。後部座席を探って紙コップと魔法瓶を出し、冷めたコーヒーを一杯注ぐ。それを飲み込む。口内で煙草の後味と交わったこの瞬間が何とも堪らない。最も、隣で憂鬱な顔があつてはそれも半減したが。

「あの子は、自分をよく知ってる。どれだけ危険で、どういうことをする必要があるのか。だからああやって道化をやってる」

「なりきれないけどな」

「そう。そこが駄目なの。自分が一人じゃ生きていけないって、寂しがつていうことを誤魔化してるから。任務と義務を盾にして、大人みたいに振舞おうと無理してるの。子供にそんなことを強いるなんて、酷い話よ」

「どういう道であれ、選んだのはあいつ自身だ。俺達が口出しすることじゃない。自分で選んで悲観するのは、ただの腑抜けたクズだ」

二杯目を注ぎながら、スタンリーは言った。

「本当にそう思ってるの？」

黒い液体に口を付けたとき、咎めるような言葉が送られる。アリスが、軽蔑こそしないまでも疑惑を含んだ眼差しを向けていた。

「誠は選択なんてしてない。あの子は、この場所を強いられた。選べるはずの道を隠して一つしか提示しないのは、不公平で済むことじゃない。その上、後になってから“お前が選んだ”なんて追い詰めて、これじゃあタチの悪い詐欺でしょ？」

アリスは言う。一息に、若干のヒスメリックを混じえ。おそらくはそれを自覚したのだ。無言のまま傍聴に徹し、コーヒーを啜るスタンリーへと彼女は述べる。

「……すみません、大尉。言葉が過ぎました」

大尉、と。それまでファーストネームを呼び合っていた者たちとは信じられないほど、事務的で仕事関係を意識した口調だった。

「まったくだ、ミラー中尉。感情に流されるなよ。……まあ、自覚があるならいい。お前の長所でもあるんだ」

——変わらないな。

本当に告げたかったそれを、胸中へと呟くだけに留める。アリスは変わらない。過去のまま、まるで色褪せることなく存在する写真のように、ここへ存在していた。

彼女との付き合いはすでに十五年近くだろう。二十二歳のスタンリーが空軍へ入り、ストライクイーゲル ドライバー戦闘攻撃機の操縦手として配置された時から、全てが始まる。二歳年下のアリスはその後席でフライトオフィサー

を務めた。白騎士事件の直後、戦況が今より遥かに熾烈で混沌とした中東の空を、彼等は生き延びている。何事であれ、一番の苦境となりやすいのは最初だ。有力国家が通常兵器を売り始めたとき、武装勢力や弱小国家はそれに飛びつき、考えるより先に力行使した。誠が経験した現在より、遥かに危険な過去。敵も味方も無いような弱者の空を、スタンリーは忘れたことも無い。ISが存在しなければ、彼は今も空軍にいたはずだ。当然、アリスと一緒に。誤射・誤爆が当たり前の戦場において、二人は撃墜数二八を残している。現存し、生き残っている米軍パイロットの中で、この数字はトップだった。もしあのまま時代が急変しなければ、その称号を得ないもののパイロット稼業は続いているはず。

あの頃から、アリスはこうだった。飛び抜けて優秀でありながら、自分以上に他人を庇おうとする。誰に命じられるわけでもなく。それが原因で危険な橋を渡ったのも、一度や二度ではない。それでも彼女は変わらなかった。

人によれば、これを成長していないと見ることだろう。だが、スタンリーは違うと言い切れる。彼女は成長している。ただ自分の根底にある意義を見失っていないだけだ。言い方を変えれば、確固たる自分を持続けている。それがアリス・ミラーだった。

「ともかく、アリス、あいつのことは俺達が口出しすることじゃない」
「い」

「わかってる。けれど……」

疲れたように額に手をやり、彼女はブロンドの髪を掻き上げる。

「やっぱり、私は軍人に向かないのかもしれない。子供に銃を持たせるっていうのは、どうしても納得できないから」

「ああ、知ってるよ。お前は軍人より兵士に向いてる。理由は問わず、ただ死すのみってな。いいか、アリス——」

飲み干した紙コップを後部座席へ放り捨て、また煙草を取り出す。ジッポーで火をつけながら、彼は言った。

「お前は考えなくていい。俺が命じたことをそのまま実行して、撃

て。理由や善悪の追求は俺が受ける。お前はただ従えばいいんだ」
ゆったりと煙を吹かす。素知らぬ顔で。

「……告白のつもり？」

「ああ。何回目だ？」

「十七回目」

そう言ってアリスは微笑む。

「今回も駄目か」

「ご明察」

率直に美人と称せる顔へ浮かんだ悪戯っぽいそれに、自然と苦笑が漏れた。

「本当に条件は変わらないのか？」

「変わらない。あなたと私が軍にいる限り、絶対と一緒ににはならない」

「理由くらい、そろそろ教えてもらいたいけどな」

「いつか教えるわ」

「そうかい」

もう一口、煙草をやる。

「面倒な女に惚れたよ、俺も」

「同情します、大尉」

互いに笑う。自分達の恋愛事情が予想以上に厄介なのだと、改めて認識し、その複雑さにおかしさがこみ上げて。

「それで——」

折を見て、スタンリーは切り出した。口調が変わる。顔を出した無感情な余韻は、軍人の姿か。

「シルバリオ・ゴスペルとかいうあれは、どうなった？」

「それに関して、ノーマッド中佐から連絡があったわ」

アリスは言い、身をかがめる。座席の下へ手をつ込んで、取り出したのはノートパソコン。スリープ状態でそうしてあったらしい。開き、電源スイッチを押すとパスワード画面が表示され、手慣れた動作で打ち込む。そしてデスクトップに移行してから操作を行ない、

一つの画像ファイルを表示した。写っているのは、人型大の白い機械。ISという名をした、現代の魔物。

「これがその機体。もうヒツカム空軍基地に持ち込まれている」

「試験中の即応体勢は？」

「監視のためにAWACS（早期警戒管制機）としてE-3セントリーが二五〇〇フィートで同行。護衛は同基地の第一三空軍からの要請で、グアムのアンダーセン空軍基地から第三六航空団所属のF-16中隊が。即応体勢としてヒツカム空軍基地の第一九戦闘飛行隊が待機する予定になってる」

「第一九つていうと軍鶏連中か。イーグルのF型だったな」

無言の首肯が帰る。イーグルとはかつてスタンリー自身も乗ったF-15E戦闘爆撃機、その原型となったF-15戦闘機の愛称だった。傑作と呼ばれた驚は、米国だけで複数の派生型を誕生させている。F型とは、その一つであるF-15F戦闘機の指す。

ストライクイーグルと呼ばれたF-15Eは、F-15が元来持っている巨大な積載量を利用し、対地攻撃へ転用するために開発された。実際、それは対空兵装と追加燃料となる増槽ストライクを搭載してもまだ十分な余裕があったからだ。最も、この機体は攻撃の名を冠するか否かで全く異なる。外観はほとんど大差無いのだが、その中身とすると約六〇パーセントを再設計された次世代航空機。現在のところ、保有する各国ないし勢力でロシアのフランク戦闘機と双頭を成している。

そしてF-15F、愛称をハーストイーグルという機体は、正確に言うならイーグルそのものでなくストライクイーグルが原型となった。対地発展させた最新鋭機を、今度は制空戦闘機へ作り替えることで誕生する。コンセプト以外にE型との違いは、搭乗員が一名になったこと、構造材質の軽量化、そしてエンジンの小型化などが挙げられた。

「そこまでしてやることかね。正直、馬鹿らしく思える」

「同感よ。けれど、事情はわかる」

「事情はな」

本来、ISはアラスカ条約により軍事転用が禁止されている。それがどれほどの効果を持ったのか、現実と言うまでもない。今回のシルバリオ・ゴスペルがそうなら、“シュバレツ・ハーゼル”と呼ばれるドイツ軍特殊部隊、さらには誠の体験したという“プリムストーン”の悲劇”を引き起こしたイギリス空軍試験部隊など、軍によるIS運用は半ば公にされた状態だ。その中で、正式に第三世代機と発表された軍用機はこれが初めてとなる。その性能を、合衆国政府は知らしめてやりたいのだろう。かつて最強の国家と呼ばれた名残か。イスラエルと組んでも一歩抜きん出た力を欲する、野心が見え隠れしていた。

「いつの時代も変わらないよ。新兵器の発表は、子供の自慢だ。新しいオモチャを手に入れて見せびらかす、ただのガキだ」

「それも同感」

と、アリスは苦笑する。

「……で、ハッキングは？」

「情報分析官がヒッカム空軍基地に向かって、結果が報告されてるけど……」

言葉が淀んだ。続け難いことがあるのか。

「けど、なんだ？」

「ええ。……ハッキングには、エシユロン・システムの第三管理衛星。つまりNSAのものが使われてる」

エシユロン。それはNSAの誇る最大の戦力ともいえる組織の名だった。その名の元となったエシユロン・システムは、電子情報収集技術の結晶とも呼べる。世界中に配置された傍聴もとい盗聴施設により、その効果範囲にある全電波、つまり電話やインターネットはもちろん、電波を用いる全情報をリアルタイムで監視するというものだ。むろん、米国が無許可でそれを配置しているわけではない。秘密裏にそういう処置を行なった場所も存在するが、ほとんどは他国の同意の元に行われている。日本だけでも青森と沖縄にこれが存

在し、全国をカバーする形となっていた。

その中で、管理衛星とはNSAのエシユロン本部へ送られる情報整理目的の静止衛星である。総数は三。しかし第二衛星は現在のところデブリ（宇宙ゴミ）の衝突で損傷したため、実質的に第一と第三衛星のみ。

「なるほど。つまり犯人であろうクソ女は、こっちの状況を全て掴んでるわけだ。その報告、Eメールで中佐から来たのか？」

「そうよ」

「じゃあ俺達が今ここにすることも、向こうは承知の上なんだろうな。全く、殴り殺してやりたい。——逆探知は？」

「出来たけど、それでわかったのが第三衛星が使われてるってこと」

「接続元は不明か」

「違う、スタンリー。そうじゃないの」

警告するような口調。一瞬、アリスはノートパソコンを見た。ディスプレイの右下に表示されている、マイクOFFのマーク。音声認識モードのことだ。本来、マイクを接続しなければ意味が無い。

だがアリスにとっては違うらしい。ほんの一瞬、暗闇の中で小さな光が迸る。青白い光だ。それはアリスの指先から飛び出てパソコンへぶつかり、次の瞬間には消えている。同時に、ディスプレイは光を失った。電源を停止。昼間、誠がやったのとまるで同じような現象により、電子機器は沈黙する。

スタンリーが指摘した。

「今から消したって同じだろ。情報は全部筒抜け。俺達が演習中の規模を知ってるなら、向こうはその奥まで知ってる」

「そうね。けれど、篠ノ之束にプライベートな話まで聞かれるのが嫌なの」

「さっきまでプライベートの極みみたいな話を……いや、あれはパソコン使う前か？」

冷やかすように笑う。

「スタンリー」

「ああ、悪い。ただの冗談——」

煙草を灰皿に押しつけ、そう言った。笑いを混じえて。それが続かなかった。気付いたとき、真横にあったはずの顔が一センチ先にある。それでも反応の余地はあった。しかし出来ない。脳も体も麻痺していた。頭がシートへ押し付けられる。唇を塞ぐもう一つの唇動揺するより先に、相手の舌が口内へと入ってくる。妙に甘ったるく思えた。

約十秒。そしてアリスの唇が離れた。

「ごちゃごちゃうるさいからよ」

そつと囁いてくる。赤く染まった頬に、愛おしさを抱いた。腕を掴もうと伸ばした手が優しく留められる。そうして乗り出していた身体は離れていった。

「なあ、一つ教えてくれ」

ぼんやりした頭で訊く。

「この先って、つまりこの車の中で——」

頬に衝撃。平手を食らう。効果のほどは絶大。冷水を浴びたように頭が冷めた。

「目は覚めた？」

「バツチリと」

「それじゃ仕事の続き」

先ほどまでの口調に戻る。

「逆探知は成功した。それでわかったのは、第三監視衛星が間接的じゃなくて直接的に操作されてるということ」

「……何？」

報告が、理解の範疇を通り過ぎた。

「直接的？」

「そう。つまり簡単に言えば、彼女は私たちの知識の枠を軽く数世紀くらい飛び越えた通信機器で衛星を操作してるのか、自分から宇宙空間まで足を伸ばして衛星をパソコン感覚で使ってるってこと。

……どうする？」

「俺に訊くな」

額を抑えた。本当に頭が痛くなりそうだ。むしろ笑いたくもなる。「前者は考えたくもない。あのクソったれが運動にでも目覚めたんなら、後者のほうが遥かに現実的だ」

「宇宙服を着てハッキング？」

可笑しそうに言う。

「……お前、今のそれは素で言っただろ」

相棒の珍しく単純な思考に新鮮味を感じながらも、呆れた風を装った。アリスは首を傾げる。

「何か変なこと言った？」

「とびつきり間抜けな発言を。お前は真面目なくせに、どうしてこういう所で抜けてるんだろうな。ISは本来、何の名目で開発された？」

「本来——」

気付いたらしい。目の色が変わる。

「宇宙空間を想定したマルチフォーム・スーツ……」

「そして暫定ハッキング犯は、ISのコアを作る個人。これが全部、コンウエーたちの計画ならハズレだが、まず有り得ない。こいつはフルハウスの揃った手札だよ。中佐はハッキングに対処したのか？」

「いえ、私は報告を受けただけだから」

「そうか」

考え込む。伸ばしてもいない顎鬚を撫でるように、手をやった。

数秒、小さく唸り、

「アリス、少し出かけてくる」

「え？」

聞き返した時、すでにスタンリーはドアを空けて外界へと赴いていた。その手がある物体を握っている。チェーンで繋がったキーホルダー、いやドッグタグ。ただし普通のものより幾らか厚みがある。「出かけるって、大尉！」

「ちょっと様子を見てくるだけだ」

「どこによ」

「ヒツカム空軍基地」

スタンリーは笑う。その目は、思いついた策略を自慢するかのよう
うに、一瞬だけ光った。

旅館の一室で目を覚めた誠は、いよいよ頻繁になってきた錯覚を慣れたように振り払った。見慣れない天井も、いつもと違う和式の布団も、数秒後には自分の状況を再認識して気にすることがない。朝日が差し込んでいる。充電してあった携帯電話を見ると、ほんの少しの驚愕が沸き立った。午前六時。いつもより一時間ほど寝過している。

疲れているのだろうか。考えてから、それもそのはずと納得する。鈴音に気絶させられ、意識が戻ったのは十分後。冷えた身体を引き摺って旅館までたどり着き、二度目の風呂へ入ってようやく寝た。

髪の毛を掻きながらのそのそと起き上がり、あくびを一つ。隣を見る。すると珍しい光景があった。いつもなら、つまり学園ならまだ熟睡中であるはずの一夏が、そこにいない。布団はもぬけの殻で、簡素に畳まれていた。箒やラウラを始め誰かが起に來たのなら、まず間違いなく騒いでいたはず。それならば誠も目を覚ましただろう。だがそうでないのだから、結論から言って一夏が自分で起きたとなる。

「雨でも降るかな」

寝惚け眼で呟き、とりあえずは頭のもやを払うため洗面台へと向かった。冷たく透き通った流水をすくって顔を洗う。それを三回。一度目で目覚まし、あとの二回で目ヤニを落とす。それから持参の歯ブラシで口内を洗浄し、水でゆすぐ。備品のタオルで拭い、息をついた。

浴衣とはいえ、朝起きたときに和服というのは悪くない。生地が薄いため早朝特有の冷気をよく感じられて、どこか気だるい眠気も姿を隠す。難点はポケットが無いため、煙草とライターを持ち歩けないことか。部屋には灰皿があったが、しかし吸殻を残すわけにはいかない。教師と生徒の部屋割りには、旅館側も把握しているはずだ。

とすると、生徒の部屋からそんなものが見つかった場合、どうなるかは目に見えている。だから昨夜も外で吸ったのだ。引率の教師陣の目を掻い潜って煙草を持ち歩き、隠れて一服するというのは骨が折れる。

「井ノ上君、起きてる？」

乱雑なノックと共にそんな声がやって来た。どことなく、というより明らかに不機嫌な響き。

「起きてるよ」

やや声量を上げる。すると扉が開き、仏頂面をした谷本癒子が顔を出した。

「なんか用か？」

「当たり前でしょ。織斑先生から伝言。専用機持ちは特別講習をするから、一時間後に一階のホールへ集合するように」

「特別講習、ね」

事前連絡に無いはずの予定を、小さく繰り返す。むろんのこと、アサルトスーツは持ってきている。それ自体は持参するようにとの連絡があった。ただし使う機会が無いだろうとたかをくくっていたのも事実。これには出発前、鈴音の豪語したせ台詞が関わっていた。曰く、こんなのは非常事態の備えでどっかの馬鹿が戦争でもない限り使わない、とのこと。

今頃、向こうにも特別講習の連絡は伝わっただろう。一体どんな顔をしているか、見てみたい気もする。

「わかった。ありがとう、谷本」

「別に……」

そつぽを向かれた。いつになく刺々しい。

「何で怒って——」

言葉を区切った。昨夜、自身の起こした行動を思い返したからだ。原因はあれと見て間違いはない。不機嫌は当然だった。彼女を傷つけているのだから。

「谷本、悪かった」

「……遅いわよ」

小さく、呟くような返事。秘められた重みを確かめるように誠は沈黙し、深い息を吐く。

「そうだな。……少し、時間もらえるか？」

頷きが返る。

「ありがとう。そつちで——」

窓際を指さす。そこだけ洋風で、一つのテーブルにチェアが二つある。

「待っててくれ。今、緑茶入れるから」

今度は何の返答も無い。代わりに行動で示された。布団脇を通り抜け、癒子は窓の方に向かう。

それを横目に見てから、洗面所隣の給水器に近づく。置かれている急須へ茶葉を開け、熱湯を注いだ。湯のみを二つ、取り出して茶を注ぐと、ほのかな草の心地よい香が鼻腔をくすぐった。これで茶柱でも出てくれれば勇気付けられるが、と思つてから、自分が心底他人頼みな生き方をしてるのだと嫌気が指す。

茶柱が景気の良いことの代表格ならば、それは転じて天運に任せようなものだ。極端な話を言えば、およそ大勢の人間が持つ信仰と同じ。信じる者は救われると信じ、願う。

——馬鹿な話だ。

湯のみを手に取り、歩きながら思う。神に祈って救われるのなら、現世の努力など必要でない。どれほどの幸運も、もしくは悪運や悪行も、祈るだけで手に入り救われるとは、努力どころか人生そのものを在るか否かも不明な存在へ委ねることだ。自身もキリスト教徒でありながら、誠はそう考える。信仰の否定ではない。彼はただ、独自の解釈に基づいて神を信仰していた。

神は存在したのだろう。塵から人という存在を創造したのだろうと彼は思う。だが、それはあくまで過去の物語ないし真実に過ぎない。現在の真実では無く、いつか遠い昔に実在した話だ。つまるところ、今の世界に神はいない。いや、存在自体は人の理解が遥かに

及ばない所にあるのかもしれないが、少なくともイエス・キリストは死んだ。ならばそのキリストに感謝の念を祈ることはあっても、自分に何かを望むというのはお門違いだろう。神を信じることは、救いを求めることではない。ただ在ったことなのだと認識し、歴史の一部として記憶することだ。これが井ノ上誠の持つ、宗教論とでも称する解釈であり、信仰。

この理念に基づくならば、誠にとって神とは歴史上の人物もしくは存在でしかない。つまりどれほど些細な救済を望むこともありえず、運と神とは別物と割り切っているということだ。自分の決断には、自分で終止符を打たなければならない。癒子を傷つけたことも、誠自身が今まで行なった選択も、そう言った点では等しく同価値だ。

「……」
互いに沈黙したまま、癒子の目の前へ湯のみを置く。そして向き合う席に腰掛けた。

「謝ってすむことじゃないのは、わかってる。でも、谷本、悪かった」

返事は無い。重い鈍痛が肺を締め付ける、そんな気がした。

「……井ノ上君はさ」

俯いたまま、彼女は口を開く。

「昨日のこと、どこまで本気だったの？」

「どこまでつてのは——」

「とぼけないで」

鋭い語気。誠が口を嚙む。

「そうやって誤魔化さなくても、意味はわかるでしょ」

「……ああ」

口が乾く。僅かに残った唾液がやけに苦かった。やむを得ず湯のみを取り、熱い緑茶を啜る。

「どこまでが本気だったかは、正直言つてわからない。混乱していたのも事実だし、お前をこの学園で一番に信頼してるのも事実だから」

「そう……」

間が空く。再び訪れた沈黙は、現実より数倍は長く思える。窓の外、海鳥の鳴き声が聞こえなければ、時間が停滞しているとも言えるほどに。

「それじゃあ、さ」

癒子が言う。

「井之上君は、あたしのことをどう思ってるの？」

「……どう、か」

繰り返して囁く。その返事に、何と答えたらよかったのか。誠にはこれが差し伸べられた手にも思えた。彼女へ好意を抱いているのは間違いない。それは否定し難く、嘘偽りの無い真実だ。だが、それは友人の域を越えているのだろうか。

もしここで領けば、誠自身は救われる。より強い支えを持ち、その支えを守るといふ使命を与えられるからだ。軍や政府の命令を差し置き、井ノ上誠が個人として力を行使しようと思える目的ができる。ただ従うのでなく自分の意思で守るといふのは、この上なく幸福なことだ。今の彼に、優麗にして甘美な蜜に思えるほど、魅惑的な決断である。それが谷本癒子に自分と関係を持ち、同じ道を強いることになるとしても。彼女に降りかかるであろう危険を考えても、四対六で幸福が勝る。

しかしそれは許されることなのか。もし、癒子への好意が友人としてのものであったとして、誠はまた、それも昨夜とは比べ物にならないほど彼女を傷つけることになる。人として、決して認可されてはならない所業だ。

「俺は——」

震える声を発する。わからないでは、終わらせることができない人間としてそんな答えをしてはならない。そう信じ、思い込んでいるとも言えた。妄信的なまでに尊厳を重んじる。あるいは妄執か。

だが続けることはできなかった。兵士としての本能、あるいは第六感。そう説明して信じる人間がどれほどいるだろう。ともかく誠

を突き動かし、窓越しに上空へと目を向けさせたのはそういうものだった。科学的に立証されない、生物が持つ不可思議な能力。何かが来る。欠片ほどの証拠も無しに、確信した。この世に存在してはならないものが、ここに来る。

「谷本、伏せろ」

声は異常に落ち着いていた。身体 of 認識に脳が追いついていない。背後、窓際に置かれた私物のバッグへ駆ける。旅行用のそれはすでに半分開いてあって、乱雑に突っ込んだ手が今に限り求めてやまない物質を掴んだ。無骨なシグと九ミリ径パラベラム弾を満載したマガジンを一本。押し込み、スライドを引いて初弾を装填。

あるいはブラックウィドウを起動するというのもあった。しかし、向こうの正体が不明である以上、得策とは言い難い。間違いないやつてくるのは危険そのものだが、目的がわかっていない。ブラックウィドウは起動と同時にステルスモードを使えない。若干のロスタイムがどうしても生じてしまうため、その間は確実にレーザーへ捉えられる。空から降ってくるというのなら、相手は生身で無いだろう。ISか、それに匹敵する何か。状況がはっきりしない以上、わざわざ姿を晒すことはない。

「井ノ上君——」

癒子が発した瞬間、誠は彼女の元へと近づき、頭部を庇うように左腕で抱きかかえる。そしてシグの銃身で叩くように窓のロックを解き、開け放った。窓から吹き込むのは潮風。隔たりは無くなった。上空へシグを向ける。拳銃弾の短い有効射程と威力で、どれほど効果があるのか。

「なに——」

「黙ってろ」

有無を言わさぬ物言い。ただ一言、そこに秘められた本物の殺意と憎悪で癒子を沈黙させた。

雲が漂う空。その合間にある青空へ、何かが光った。それは瞬く間に点となり、大きさを増してゆく。高速の落下物、いや飛来物

はまっすぐとこちらに向かっていているようだった。セーフティを確認。ロックされていない。指先がトリガーへと触れた。速度から考えて、地表に衝突するまで三秒。それほどの速度でぶつかり、被害はどうなるのか。この旅館が無事に済むとは思えない。

脳から思考することによって命じ、ブラックウイドウを部分展開。昨夜、鈴音を守るためにやったのと同じ、シールドのみの起動。自身と癒子を包み込む。直撃されては一溜りも無いが、でなければ多少はマシになる。それでも無いよりは、という程度だが。

ふと昨日の行動がどれほどの失態だったかと思う。部分展開とは言え、リーダーに捉えられる実体を出現させるとは。確かに鈴音は生命の危機にあり、また自分の責任であつた。だが、言い訳にはならない。もっと冷静に対応することもできたはずだ。

——来る。

静かな確信。飛来物は速度を緩めることなく誠たちの方へと向かい、だが直撃とはならなかった。どこか別の、すぐ近くに落ちる。まずい。瞬時に悟る。衝撃波がここに来るだろう。シグを持ったまま、両腕で癒子を屈ませて庇う。

「……？」

衝突から二秒が過ぎた。何も起こらない。あの飛来物自体が幻だったのか。そう思えるほど、情景は微動だに变化しなかった。いや、幻なはずがない。網膜にブラックウイドウの短距離レーザーを投影させる。すると光点が一つ。ここから百と数十メートル西に示されていた。

「そうか」

一人、悟る。飛来物の正体を。シグのセーフティをかけ、立ち上がった。

「谷本、悪い。部屋に戻つてろ」

「井ノ上君——」

「いいから、行け。後で話す。さっきの話も含めて、絶対に答える。けど今は無理だ」

言いながら、胸中では怒りが沸き立っていた。特別講習。その意味を理解して。

『俺達は何も行動しない』

スタンリーの言葉が蘇る。だが彼はこうも言った。

『Ask, and it shall be given you.（求めよ、さらば与えられん）』

与えられるとは、一体何を指したのか。もしあの大尉がこの状況を予想し、あるいはこうなると事前に承知していたのなら。これは自分に与えられた好機だろうか、誠は考えた。確かにこれは、求めてやまなかった事態である。

アサルトスーツに包まれた両足が土を踏む。先導するのは織斑千冬と山田真耶。それに続き、誠を含め六人の生徒。一夏、セシリアと鈴音、そしてラウラとシャルロット。この一行で最後尾を歩く誠は、スーツに備え付けられたホルスターと、そこに収まっているシグの感触を心地よく思う。学園に来てから、この姿で拳銃を持ち歩くのは初めてだった。入り組んだ市街ならともかく、ISが普及した学園ならばブラックウイドウを用いればいい。いや、それ以前に何らかの脅威があれば教師陣によって対処されるだろう。実質、武装の必要は無いに等しい。

では今回。これは教師側を信用しないという誠の覚悟だ。奴がいる。ただし殺すかどうかはわからない。どちらにしてもそういう準備が必要だと、彼は考えていた。

「なに怖い顔してんの」

「ん？」

気付くと鈴音が隣にいた。初めて見るISスーツ姿で。買い物の時と同じく、セシリアと一緒にいる。よほど仲が良いのか。

「おまけにそんな物まで持ってきてるし」

視線でシグを示してくる。

「一応聞いておきたいけど、空よね？」

「いや」

首を振って静かに否定。

「そんじゃ、アレでしょ。モデルガン」

「あなた、それ本気で言ってます？」

セシリアが言う。

「だってさ、じゃあ何で銃なんて持ってきてんのって話じゃん」

「銃どころかISを持ってるわたくし達が言っても、あまり問題のようには聞こえませんか」

「身も蓋もないこと言わないでよ。でしょ、井ノ上？」

「え？」

名前を呼ばれ、気付く。

「ああ、そうだな。同感だ」

生返事。こちらを非難する訝しげな目付きが来るのは必然だった。

「聞いてなかったでしょ」

「いや、聞いてたぞ」

「じゃあどう思う？」

「それは、な。まあ、いいと思うよ」

「聞いてなかったんですね」

やれやれと肩を竦め、セシリアが述べた。当たり障りの無い返答のつもりが、逆に墓穴を掘ったらしい。

「また何か企んです？」

「そういうわけじゃない」

先日の模擬戦のことなのは間違いない。否定はしたが、しかし口だけになるという感否めなかった。この先、今ここで引き返さなかった場合、彼女たちを再び巻き込むことになる。生命に関わるとは思えないが、それでも危険へ引き摺り込むだろう。

だが、どこかでこう考える自分がいることも誠は知っていた。それがどうした、と。この場の全員でないにしろ、鈴音やセシリアが友人であることは認めざるを得ない。では友人は味方の同義語とな

るかという、必ずしもそうではなかった。何らかの形で国同士が敵対した場合、個人の友愛など関係無しに状況は覆る。ならば彼女たちが学園在学中に命を落とした場合、どうなるだろう。米国内であるなら証拠を容易く隠せるものの、IS学園では難しい。となれば、交渉の席に移る。これも形ばかりのはずだ。個人の暴走によるIS操縦者の損失。言ってみれば、勝手に持ち出した他国の核兵器発射コードを道に落としたというような、馬鹿げて、それ以上に重要な失態。最悪、戦争状態になりかねない。

そこが好機となりえるかもしれない、誠が鈴音たちの危険を顧みない考えを浮かばせるきっかけでもある。操縦者の損失は、ISの損失だ。量産機ならまだしも、ここにいるのはどれも個人特化された専用機持ち。代用が容易く見つかるとは思えない。そしてISは一機で一個軍に匹敵する。言い換えれば、それはただの少女を殺すことで最低でも一個軍と同等の戦力を削ぎ取れるということ。

——こういうことか？

ふと、スタンリー・ジェンキンスを思い出す。彼はそういう結果を望んで、わざと思わせぶりな表現で述べ、今この場に誠がシグを携行するよう仕向けたのか。いや考え過ぎだろうと思うものの、完全には否定できない。

スタンリーは友人だが、根っからの軍人だ。その相棒、アリス・ミラーも同じと言えた。特にスタンリーの方は、いざというときに仲間を切り捨てることができる。例外は唯一、アリスくらいなものだ。そして軍人とは総じて国家の手足。IS登場によって世界の正義たる立場を失ったアメリカは、力を取り戻そうと躍起になっている。そこに持ち込まれる複数のIS操縦者の死亡。つまり他国が力を失った証拠は、合衆国を強気にするだろう。その上での戦争状態、勝つ見込みは充分にある。そういう状況が誠一人の犠牲で手に入るのなら、安いどころの話ではない。鴨が葱どころか具材と鍋を抱えてやって来る、そんなものだ。

「鳳、オルコット」

呼びかけは、誠の意図したものではなかった。彼は二人の名前を呼びつつ、内心では動揺する。何を言い出すつもりかと。その先に続く言葉はわかっていたが、それでも口が止まってはくれない。

「もし俺が馬鹿なことしたら、とりあえず逃げてくれ」

「……はあ？」

一拍置かれた鈴音の声。秘められた言葉は察するまでも無い。またよくわからんことを何を言い出した、と語っている。口には出さないが、セシリアも同様。

「井ノ上、あんた一体——」

「全員、静かにしろ」

冷水のような声音が響きわたる。織斑千冬の一言は、鈴音を黙らせるのに十分な威力を持っていた。旅館から十数分で到着したこの場所は、周囲を覆う森林の一箇所だけ失われた空間。小川沿いに海へ向かう途中の空き地。そこには先客がいた。誠の想像した人物に近いまでも、しかし全く異なる少女が一人。

「篠ノ之？」

呟く。佇む筈はどこか後ろめたそうな顔をして、こちらと視線を合わせようとはしない。千冬が彼女へと一瞥を向け、続ける。

「今回の特別講習は、急遽、今朝になって決定したことだ。本来、臨海学校の予定には組み込まれていない。だがそれを考えても——」

「堅苦しいのはそのへんにしとこうよ」

あっけからんとした、ほのかに漂う緊張感とおよそ無縁であるような響き。その人物は不意に現れた。千冬と生徒たちの間に、割って入る形で。小柄な体躯に常に微笑んでいるような柔らかい目は、だが決して安心感を得られはしない。頭に着けた兎の耳も、その風貌をより一層に場違いと思わせる意外の効果はなかった。

「せっかく束さんから大発表があるんだから、もつと楽しく行こうよ、ちーちゃん」

「……」

千冬が黙る。邪気の無い、穏やかな声音で言われて。

「束、つて……」

鈴音が独り言のように呟いていた。いや、それは実際、独り言だったのだ。この場にあるはずの無い、自分たちとは明らかに格の違うはずの存在を目にして、それが現実なのだと認識するのは時間を要する。篠ノ之束はそういう存在の一つだった。

ただ一人、妹である箒を除き、この場にいる全員が篠ノ之束を見ていた。そのほとんどは非現実的な遭遇を認めようとして、惚けた眼差しを向ける。だからこそだろう。束はおそらく、自身へと向けられた別の視線に気付いたのだ。明白でただ一片の否定すら行えない殺意に射抜かれ、それを無視するが如く受け流し、井ノ上誠と視線を合わせた。

「ふっん……」

持ち合わせる温厚さに変化は無く、束は嘯くように声を漏らす。

「君が二人目だね？」

続く言葉を聞いたとき、その感覚は白昼夢というに相応しかった。それまで数メートルの距離があったはずの天才は今、誠の眼前へと来て彼を見上げている。

——駄目だ。

今朝、旅館の部屋で覚えたものと同質かつそれ以上の確信を持つて、直感する。この女は存在するべきではない。この世に在って良い者ではない、と。誠の全神経、細胞の一片に至るまでが警報を鳴らしている。この女は、殺さなければならぬ。今すぐにでも。

「井ノ上誠って言っただけ。面白い身体してるね、君」

微笑が深くなる。知っているぞ、と。そう告げられている気がした。脅迫の様子は微塵もなく、ただ事実を知っていると。篠ノ之束はそう言っている。

「自分では至って常人だと思ってますがね」

「謙遜することないよ。だって君、下手な戦闘機くらいなら交換できそうだもん。例えばさ、ハーストイーグルくらいなら君一人と喜んで交換してくれるんじゃないかな？」

「……そういう提案をしたことは無いので、答えるに答えられませんが」

これは挑発だ。安い、子供じみた行動でこちらの出方を伺っている。乗ったほうが負けるとは誰の目にも明らかだ。しかし、

「そっか。そっか。さ——」

束は続ける。口調も態度も、まるで変えずに。楽しげに言う。じつのところ、彼女は楽しんでいるのだろうか。

「ハーストイーグルって、あれを設計した人の名前、君に似てなかった？ 似たような名前してたと思うんだけどなあ」

「そうでしょうね。俺の親父ですから」

「ああ、やっぱ。そのお父さん、今は——」

あらゆる事象に禁忌とされる不可侵領域が設けられるように、これは誠にとってその一つだった。彼はその瞬間、全力で自制心を呼び覚まそうする。しかし根深く住み着いた本能へ、理性が立ち向かえる域には限界があった。意図するより早く誠の右手は動き、腰のホルスターへと走ってシグを抜き取り、銃口を束へと突きつけている。

「親父は死んだよ」

怒声より一歩手前という口調で告げ、ハンマーを引く。ダブルアクションのシグはそうしなくても撃てるが、これには二つの理由があった。

一つは脅迫。銃という、見方によっては人類史上最凶の大量破壊兵器は、剣やナイフと違い外見的にその威力を連想させることが難しい。故に撃鉄を引くというのはこちらが本気であるのだとわかる。一番手っ取り早い方法であった。これに効果なしと判断した場合、続く手は威嚇射撃か、危険の少ない手足もしくは下腹を撃つこと。

二つ目は、誠の心情が大きく関わる。より少ない力で、素早く、確実に対象の命を終わらせてやりたい。それにはハンマー一つ、起こすために引き金へかける力も煩わしかった。

「そっか」

束は笑い、一言を述べる。突きつけられた拳銃を、だからどうしたと跳ね除けるように。

「井ノ上——」

「待ってよ、ちーちゃん」

飛びかかる寸前といえた千冬を、束が制した。

「久しぶりにラボの外に出たんだからさ、もうちょっと話させてくれないかな？」

「だが——」

「大丈夫だよ。この子は殺せない」

片眉が吊り上がる。今この女は何と言った、と。わかっているはずの言葉を改めて認識すべく、誠は自問した。

「殺さない理由があるか？ 篠ノ之束」

「無いね。理由なんて、君には履いて捨てるくらいあるんじゃないかな。手っ取り早く済ませたいなら、敵討ちとかいいよね。お父さんだけじゃなくて、いろんな人が当てはまるでしょ？」

「そっか」

引き金を絞る。まだ遊びがあつた。それでも突きつけられているほうが死の一步手前にいることへ、変わりはない。だが束は笑った。また。

「君は友達が多いみたいだからね、誠君。今と昔でまったく違うけど、たくさん友達がいるよね。特に君と似たような人達がたくさんいる」

「何が言いたい？」

「質問だよ。ただの知的好奇心ってやつ。そのせいで、君は殺したくても殺せない。君はさ、誠君、どっちの側なのかな？」

その意味は、恐るべき速さで誠の脳髓へと直接に伝わった。彼女がどういう意図をもつてしてこれを訊くのか。真意は何なのか。それら全てが伝わり、理解したその瞬間、彼は引き金を完全に絞った。鼓膜を打ち、脊髄を震わせる破裂音。これまで幾度となく味わっ

たはずのそれが、いつもより盛大で激しく響き、そしてより一層の物悲しげな余韻を残す。排出され回転しながら宙を舞う薬莢が、地に落ちた時に小さな金属音を奏でた。一人の人間の死を物語る訃報。そうなるはずだった。

「これが答えてことでもいいの？」

変わらない声音。笑いかけてくる響きで、篠ノ之束は言う。その眉間から三センチほど離れた空中に、回転しながら立ち止まる弾丸があった。

「だから言ったのに。君が殺したいとかそういうのを置いて、物理的に殺せないの」

言葉が終わると同時に、弾丸は回転するのを終えると地面に落ちた。殺人兵器の名残すらない、ただの金属片として。

「……」

無言のまま、誠はさらに撃ち込んだ。立て続けに五回、銃声が炸裂する。至近距離の発砲炎と立ち昇る硝煙に、一時的だが視力が弱まった。

「気はすんだ？」

霞がかった視界の奥で、その声は消えない。五発分の金属が音を立てて落ちる。

「いや、もう一度だ」

誠は述べ、次の手を行なう。シグをさらに突き出し、束の額へ触れるか触れないかの位置まで銃口を近づける。彼女が何らかのシールドを張っているのは間違いない。ならば、と考えたのだ。そのシールドの内側へ入れば、殺せるのではないか。

「やめといたほうがいいよ？ 無駄弾どころか無駄死するから」

「弾が跳ね返るとも言いたいのか？」

「うん。それに近いね」

愉快を体現した微笑み。束が続ける。

「君はさ、きつとこのシールドはある一定範囲に張られていて、外部から来る攻撃を止めると思ったんでしょ？ だからこうやって、

明らかに内側であるはずの距離まで銃口を持ってきた。けど残念だね、誠君。これは外部から来る攻撃を止めるんじゃない、一定範囲に入ってきた攻撃を止めるんだよ。意味はわかるよね？」

「……つまり、内側となった時点で防護壁。だから破ることはできない。あんたが自分の意思で解除しない以上、銃だろうがナイフだろうが、あんたに傷一つ付けられない」

「そう。さすが頭が良いね」

「撃つたらどうなる？」

「君が危険だよ、ものすごく。弾丸は発射されると同時に前方へ動くことができなくなつて、この距離だと発砲炎も防がれる。弾丸が止まっても、炎は銃身の中を縦横無尽に駆け回って温度を上げ、最悪の場合、弾倉に残ってる弾丸を全て暴発させちゃうから。そうだった場合、運が良くても右手くらいは諦めてもらわないとだね。……信じる？」

「さあな」

両者共に動くことがない。その周囲を取り巻く人々も。

束の言葉は、半信半疑といった程度に誠を迷わせた。彼女がストレートに忠告を与えるとは思えない。束は全てを知っている。あるいは当事者である誠以上に。ならば始末したいと思っっているはずだ。そう考えるのが至極妥当。そうでなかった場合。つまりこの言葉が真実であったのなら、理由は別に考えられる。束が誠を利用したいと思っっているのなら、この忠告は確かなものだ。

——利用されるくらいなら……。

ふつつつと怨念の如き思惑が沸き上がる。この女にかき乱され、踊らされるのなら、今ここで賭けに出て死んだほうがマシだ。それだけの価値はある。

「井ノ上」

押し殺された情念を秘める、第三者の声。同時にシグを構えた右手首が掴まれた。鳳鈴音の手によって。

「もうやめときなさいよ」

握力が強まる。鈴音の頬を伝う冷や汗が見て取れた。

「邪魔するな。お前には関係の無い話だ」

「大アリよ」

ぐっ、とその顔が近づく。息を潜め、二人にだけ聞こえる声量で彼女は告げた。

「ここに来る前、癒子と約束してんの。あんたが馬鹿なことしたら止めてくれて、言われてんのよ。その意味、わからないなんて抜かすあんたじゃないでしょ」

——今朝のことか。

聞きながら、誠は冷静に鈴音の言う事を把握する。束が乗ってきたであろうあの飛来物、癒子は直接に見ていない。ただ、あの場の雰囲気で察したのだろう。自分が伝えた特別講習に何かがあるのだと。

「昨日の夜といい、これといい、どれだけ傷つける気よ。一夏以上の馬鹿になりたいわけ？」

横目に鈴音を見る。それから束へと視線を移した。脅しているはずの女は、やはり笑っている。

静かに、呼吸を繰り返した。腹部に溜まった空気を吐き出す度、銃を下ろせと言いつけさせる。ようやく腕が従ったのは、十秒ほどを過ぎた頃だった。右腕は脱力し、標的を失ったシグをホルスターへ収めるのがやっと。同時に鈴音の手が離れる。

「……よかったね、誠君。やっぱり良い友達を持ってるよ、君」

束は笑い、肩越しに千冬へと告げた。

「ねえ、ちーちゃん。この子、別に悪気があったわけじゃないからさ。不問にしてあげてよ。いいでしょ？」

「……ああ」

釈然としない様子で、担任教諭は頷く。そのやり取りを眺めつつ、誠は隣にいる少女へそつと囁いた。

「悪い、鳳。迷惑をかけた」

「まったくよ。下手したらあたしが撃たれるんじゃないかと、冷や

冷やしたわ」

苦笑と共に言われる。

「……すまない」

もう一度、感謝と謝罪を五分五分ほどの心境で頭を下げる。そして踵を返しかけた。ここにはもう用が無い。そう思い込んで。しかし、

「帰っちゃうの？」

背後より、再び束が言う。

「あんたの顔をいつまでも見ていたいとは、お世辞にも言えないんですよ」

「それは残念。君のこと、けっこう気に入ってるのに。けどさ、もうちょっと居た方がいいかもしれないよ。大発表って言ったでしょ」
「何？」

振り返る。全員が束を見ていた。注目を集める張本人はと言うと、わざとらしく胸を張って妹、箒の方へと歩いてゆく。

「それじゃあ皆さん、お待たせしました！」

無駄に威勢よく、そう叫ぶ。それと同時に。集められた生徒、教員の中心地点。この場にいる全員が見慣れているであろう光が迸る。白い、量子変換の輝きが。

「……冗談だろう」

我知らず、誠は呟く。光の中心、形成されてゆく一個の兵器を見つめて。人体の要所のみを覆う装甲。それは赤、いや紅の光沢を有し、金属には不相応なほどの艶を醸し出していた。誰しもがわかる。それはISなのだ。そして理解する。自分たちが知っているISの知識が、篠ノ之束の足元にも及んでいなかった。努力を踏み躪るなど、そんな話ではない。無意味だったと、開発者たち自身が悟り、己を失望させる。そうさせるだけの威圧感、あるいは風格とも呼べるものを、紅の機体は備えていた。

「即時万能対応型、第四世代IS。機体名、あかつばき紅椿。……この機体はね、篠ノ之束が最後に作るISで、箒ちゃんへのプレゼント」

「箒……？」

本当は、その名前が出てくるのをどこかでわかっていた。以前、手合わせをしたときに見た箒の顔が蘇る。

『私は、力が欲しい』

凜とした、決意を定めている者の瞳でそう告げた彼女は、今この場において、紅椿と呼ばれた機体に近づく。その装甲を食い入るように見つめ、そっと手を触れた。自分が力を手にした瞬間を、じっと享受するように。

7（前書き）

*終盤を若干書き直しました。

ヒツカム空軍基地より数ブロック離れたホテルの一室。備え付けのソファに腰掛けたデヴィッド・ウィンターズは、眠るようにしてその時を待った。彼以外にこの部屋にいるのは三名。持ち込んだ機材で即席の指揮所を作り上げ、今も情報確認に務めている。

「ウィンターズ少佐」

副官が呼ぶ。この部隊、ジャツカルと呼ばれた中隊でサブリーダーを務める准尉。彼はワイヤレスのヘッドセットをかけ、手元に置いたノートパソコンを操作している。

「フォックス、ゴーストの両部隊から連絡です。部隊は配置を完了、コンウエー中尉がデッド2を確認し、本部からの瞬発コードを待っています」

「わかった。ヘッドセットを寄せ。回線はジャツカル各員へ」

「了解」

一つ返事で物が渡される。片耳にはめ込んで、電源をオンに。

「繋がりました」

それに応じ、デヴィッドが告げる。

「全ジャツカル作戦要員、こちらジャツカル指揮官^{シックス}。現時刻をもつ

てコールサインを変更、フラッシュナイトとする。作戦配置の最終確認を行なう。予定位置にある者は第三指揮所（CP3）へ信号を送れ」

送信を終了。副官を横目に見る。デヴィッドを指揮官に置くジャツカル中隊は、彼と副官を含めた十六名により構成される。現在、彼等は四人一組の計四班に分かれて周辺二キロ以内に待機していた。この中で、単独行動を行なうのはデヴィッド一名。彼は全体指揮と情報伝達をここにいる情報班に任せ、残る実行担当の三班の現場指揮を行なう。

「信号、来ました。支障無し」

「よし。——フラッシュナイト指揮官シックスより全フラッシュナイト、回線を指定周波数に固定し瞬発コードを待て。以上」

それからヘッドセットを返しつつ、

「指揮を引き継ぐ。後を頼むぞ、准尉」

「了解です。少佐は？」

「屋上で、少し風に当たってくる」

部下三名から、小さな笑いが上がった。

「緊張ですか？ あなたほどの兵士が」

「まあな。いつになっても、慣れることなんてない。戦争は誰だつて苦手だ」

苦笑して言う。

「では、どうしてここにいます？」

「理由なんてお前たちと同じだよ。似たような馬鹿を見捨てられない、自分の目的を果たしたい。こんな所だ。マークス、コネリー、レイモンド」

三人の名前を呼ぶ。長年の付き合いというわけではない。かつての巣を離れ、中東の辺境へと居場所を変えて六年。彼等は別々の時期にカタール基地へとやって来た。それでも上官と部下の絆を作り、友人となるのには充分過ぎる期間だ。

「しっかりと頼むぞ。ミスの一つでもあつたら、全員ぶつとばすかな。ブラヴオー・ツー・ゼロの再現なんて、まっぴらだ」

「脅さんでくださいよ、少佐」

ひやかしのような笑みを浮かべたコネリー曹長が、煙草を片手に言う。

「少なくとも俺たちは大丈夫。NASA（アメリカ航空宇宙局）出身のマークス准尉がいるんですから。機械のことなら、めっぽう強い。他は知りませんがね」

「知りたくもない」

最後、レイモンド二等軍曹が付け足す。

「黙れよ、レイ」

余計な事を言うなど、准尉は手元にあったインスタントコーヒーのカップを投げつける。ここだけ抜き取れば、まるで悪友同士が集まった学生の集団だ。誰もが国家から指名手配を受けている犯罪者には見えない。彼等、いやデヴィッドを含めこの場にいる全員が、どれもこれも振り返り血を浴びている。兵士であり、科学者であり、そしてテロリスト。

バラバラの寄せ集めに見える彼等を繋ぎ止めているのは、先ほどデヴィッドの述べた理由そのものだ。似たような馬鹿、つまり仲間を見捨てられない。そして目的。それが遂げられるのなら、もしくは一矢でも報いることができるのであれば、テロリストの汚名も喜んで受け入れる。ただ一途に望む報復の二文字によって、彼等は結集した。この誓いを違えた者はいない。ここにいないコンウェー大佐や、同じ中隊長である騒がしい二人の少女も。

——誓いか。

部下たちの和やかな風景に、ふと空白めいたものを感じた。もう二人いたはずだ。この部屋にはない。デヴィッドとコンウェー親子、そして湊の四人。その中にもう二人、欠けてはならない人物がいた。口喧しい技術者と、湊と一緒に騒いばかりだった少年。

——馬鹿が。

胸中、自分を毒づく。死んだ人間へ思いを馳せて、何になるのか。あの二人は無念を抱いて死んでいったのだから、自分に出来るのはそれを晴らしてやることだろうと。それまで考える必要は無い。全てが終われば、感傷に浸る時間は充分にある。そしてこの作戦は、終末への第一歩となるはずだ。篠ノ之束の首を手向けとして送る、終戦への第一歩。

「少佐？」

レイモンドが呼ぶ。

「いや。……それじゃあ、頼むぞ」

返事代わりの敬礼を背に、ドアを開けて通路へ。頭に記憶した図面に従ってエレベーターへと向かう。このホテルに來たのは昨夜だ

が、周囲は通路一つに至るまで暗記している。あらゆる事態に備え、そのために重要なのは何よりもまず地形の把握。逃走ルート云々ではない。必要ならば隠れ、もしくは待ち伏せを行ない反撃する。地理を知っておけばそういう迅速な行動が可能だ。もちろん、それらもサポートがあつてこそ成り立つ。

その点では、絶対の信頼を置いていた。撤退となつた場合、デヴィッドはコネリーたち情報班と共に最寄りの実行班と合流する。その間、残る二個実行班は分散し、一方が陽動、もう一方は撤退ルートの確保を行なう。この場合、情報班に指揮は不可能だ。そこでシヤノン・コンウェーのチームが指揮を行ない、さらに正村湊の攻撃チームが援護を担当。元から全部隊のコンビネーションに支障は無いが、あの二人は殊更に息が合う。純粹に互いを知り得ているからだろう。それだけ屈強な防壁に守られるのなら、一人の死傷者も無く目標を完遂可能と断言できた。

しかし一方で後ろめたさも感じる。少女たちに頼ることに、ではない。あの二人は確かに幼いが、それ以前に兵士なのだから。デヴィッドだけでなく誰もが認めているし、彼女たちも自覚していた。性別や年齢など、仲間という立場を揺らがせる問題にはならない。

デヴィッドが気にかけるのは、シヤノンと湊が仲間ということではなく、仲間にしてしまったということだ。彼女たちには無限ともいえる可能性が秘められていた。共にまだ十代。その可能性を全て無くして、この道へと引き込んだ。本人がそう望んだことではある。しかし、本当は止めるべきだったのではないか。最近になって、デヴィッドはそう考えるようになった。実際、上官であるドウェイン・コンウェー大佐が反対していたのを知っている。

友人でありシヤノンの父親であるドウェインの気持ちもそうだが、もう一つ。過去、まだISなどという兵器に危険性こそ感じたものの、意に返さなかつた頃に見た光景がある。イギリス軍特殊部隊、SASにいたころの話だ。作戦中、襲撃した先で幾度も見た少年兵の姿。幼いものでは小学生程度であろう者までいた。作戦と割り切

って撃ち殺した彼等の顔が、湊とシャノンに重なるのだ。そうしてやって来るのは、底知れぬ罪悪感。

「……馬鹿が」

開いたエレベーターに乗り込んで扉が閉じると、デヴィッドはそう呟く。自分に向かつて。悪びれるくらいなら、最初からこの道へ踏み込まなければよかったのだ。復讐など背負わず、ただ世の流れに従って生きていれば。こんな事に加わりなくとも、生きてはいける。少なくとも軍にいればそうだった。

世界最古の特殊部隊と言われるSAS。その評価はこの時代でも高い。ISによって戦車や戦闘機が無くなるうとも、歩兵部隊が消えることはない。ISでは決して代用できないからだ。狭苦しい室内戦に、無音のまま侵入から目標完遂までを行なう隠密作戦。特に人質救出作戦など、火力の高すぎるISでは絶対に不可能だ。広域で絶対的戦力となる機動兵器は、しかし時と場合によって最強どころか足でまといとなる。

後悔したくなかったのなら、そういう見解に従って生きていればいい。そうしなかったのは自分なのだと、デヴィッドは自責の念に駆られる。

「……？」

屋上まで直進するかに思えたエレベーターが、不意に止まった。別の乗客。それは男だった。赤い髪の毛は、クルーカットにしているもののやや伸びている。身なりはカジュアルスーツだが、ネクタイも無いラフなスタイルをしていた。シェードアウトのサングラスをかけているため目元はわからないものの、口が微笑の形に歪んでいる。

「失礼」

そう言って乗り込む男に、デヴィッドは僅かな嫌悪を抱くと共に後ろ腰へそつと右手を回した。銃ではない。求めたのはナイフ。ただし通常のそれとは異なった。名称をNRS-2、一般に“仕込み銃式ナイフ”と呼ばれる代物。柄尻に銃口を持ち、一発だけ内蔵し

た特殊静音弾薬を発射する。分類としては暗器だろう。ただし本来あるべき軍用ナイフとして見ると、決して優秀ではない。先述の機構によって刀身と柄の接合が不安定で、よほどに熟練した技量でなければ実用的と言い難い。これを持つデヴィッドは、その扱いに絶対的な自信を有していると同時に、またやって来た男に対して明確な不信感を抱いている。

警戒は自意識過剰などではなかった。赤毛の男は、どう見ても民間人ではない。しかし何者なのか、判断もしかねる。格好はCIAやNSA、イギリスならSISなどでよく見かける情報分析官のようだった。だが身のこなし、特に歩き方や立ち姿は、隙が無いと同時に流動的。何時いかなる方向から攻撃を受けても難なく対処してみせると、そう言っていた。軍人、それも有り触れた歩兵でなく、それなりの訓練と実戦経験を経た兵士に見える。

「何階まで？」

デヴィッドが先手を打つ。無感動を装って訊いた。

「いえ、お気になさらず。私も屋上です。ところで――」

一拍、男は間を置いた。デヴィッドが振り向くのを待つように。

正面から対峙してようやく続ける。

「ウィンターズ少佐、で間違いありませんか？」

「いいや、人違いだ」

そっけなく言う。右手がナイフの柄を握った。男が笑う。

「ご心配なく、私は味方ですよ」

そうしてサングラスを外した。男の瞳は、その髪の色よりやや濃いワインレッドをしている。

「スタンリー・ジェンキンスと言います。所属はNSA、TOPS
Sゴーストハウンド」

「ゴーストハウンド？」

その名を繰り返す。TOPSというのは知っていた。NSAの暗殺部隊、その総称。しかしそれより深くは彼の知るところではない。

「表向きは対IS部隊。現実にはあなた方、WIAへの対処を専門とする作戦グループです」

じつとそれを聞く。NSA内部に組織の人間がいるのは知っているが、その特定ができるほどデヴィッドに情報はない。敵か味方がまだ定かではなかった。とはいえまったく無関係の人間でもないようだ。

「そう警戒なさらずに。味方と言ったでしょう、少佐。私はご忠告のため、ここへ来た次第です」

「ドウェインの指示か？」

「いえ、その上ですよ。私の上官はフランク・クリスチャンです」
耳を疑った。スタンリーと名乗る、この男が出した名前に。

「クリスチャンは死んだ」

「死んでいませんよ」

「いいや、死んだ。俺の目の前で火だるまになって、焼け死んだ」

その情景を思い出す。巨大なC-130輸送機。その兵員格納庫の右側面が突如として爆発し、幾人もの仲間が投げ出された。そして間髪入れずに二度目の爆発。右主翼が吹き飛び、フランク・クリスチャンという男は飛び散った燃料と爆炎を浴びて機内を転がり、息絶えた。デヴィッドの幻や妄想でないのなら、それが真実である。「前半は認めます。しかし、死んでいない。彼もあなたや私と同じなのです。そう簡単に死ぬ身体ではない」

「初耳だ」

率直に言っ。

「あなたが思っている以上に、この世界にはそういう奴が多いんです。ゼンマイ仕掛けどころか、バッテリー仕掛けの人形ばかりだ」
「……忠告とは？」

スタンリーの言い分を、嘘と断定したわけではない。ただ判断材料が少なかった。現時点では何も言えない。

その意図を読み取ったのか。心無しか、スタンリーの笑みが深くなった気がする。

「この作戦、リベンジ・ルーズに関わるものです。伝えておくべき情報がありました」

「情報関係ならコンウェー中尉にしてもらおう」

「それでは駄目だ、少佐」

ゆっくりと首を振る。

「彼女は優秀ですが若すぎる。この知らせを受け止められるとは、私には思えません。時間があればコンウェー大佐に進言しましたが、生憎と間に合いそうにない。そこでここへ来たのです」

「……どんな情報だ」

一瞬、スタンリーの瞳が光ったように思えた。垂らした釣り針に獲物がかかった、そんな輝き。自然と懐疑心が膨らむ中、彼は続ける。

「二つあります。まずデッド2、シルバリオ・ゴスペルについて。

おそらく、リベンジルーズは中止になります。デッド2には篠ノ之束がハッキングを行なっている」

「知っている。中止にはならない。その混乱へ乗じた作戦だ」

「ではデッド2が無人ではないことも？」

こちらの表情を窺うように、スタンリーはわざとらしく小首を傾げた。

「有人と、そう言いたいのか？」

「少々、異なります。あれは遠隔操作なのです。ヒツカム空軍基地に被験体が出て、データリンクによってデッド2を操縦する」

「そんな技術があるとは、初耳だ」

「無人化よりもよほど現実的では？ ISは操縦者無しに起動できない。開発者は、例外ですが」

そう言って笑った。不快感を覚えるも、嫌悪ほどではない。

と、エレベーターが止まってドアが開く。差し込む光はホテルの照明でなく自然の太陽だった。まずスタンリーが外へ出る。デヴィッドは間隔が空くのを待って続いた。

「遠隔操作だとして、何の問題がある」

「篠ノ之束がやろうとしていることですよ。遠隔操作は、操縦者の脳波をISと同調させることで可能になったとのこと。ヒツカム空軍基地へのハッキングは、その操縦者の脳波、つまり頭脳に送られている。一種の精神汚染でしょう。すでにデッド2は試験空域で飛行中。目的を果たすまでどういう行動を取るのか、皆目、見当が付きません」

「目的？」

思考に引っかけた単語を口にする。

「そうです、少佐。よく考えてみてください。篠ノ之束は過去、全て自分のために行動を起こしている。白騎士事件など代表例でしょう。ISの評価を見直さしたいがために、軍事行動を起こした」

「IS学園を襲撃した無人機は、どう説明する」

「私的な推測ですが、おそらく織斑一夏が本物かどうか確かめたかったのだと。男で唯一、ISを起動しえた少年。もし篠ノ之束が女性優位社会を確立したかったのなら、いやそうでなくとも、イレギュラー要素は明確にしておきたい。天才なら尚更だ。ああいう人種は、全てを把握しておかないと気が済まないのです」

「……なるほど」

台詞ほど信用は表れていなかった。実際、鵜呑みにするには危険すぎる。スタンリーは何かしらの、それこそ本当に故人であるはずのフランク・クリスチャンと繋がりがああるかはわからないが、関係者として間違いない。言い分も筋が通っているように思える。指揮はシャノンだが、あくまでそういう分野の部隊であるというだけ。階級ないし公式の見解ではデヴィッドが現地指揮官となる。地理や伝達ミスを考えれば、すぐ近くにいて口頭により説明可能な現地指揮官へ赴くのが道理。

——忠実すぎる。

不快感の原因であろう意見を、声に出さず囁いた。作戦の決行直前になってこの情報。嘘偽りがないとすると、その行動は正しい。微塵の焦りも無く、正規の手順でない非常手段でこなしているのだ

から。デヴィッドが孤立するのを見計らったように訪れたのも、部隊員の士気低下を考えれば説明がつく。スタンリーはそれほどに優秀な動きをしすぎていた。むろんプロと称せばそれまでだが、態度までも落ち着きを払っているというのが妙だ。まるで最初からこうなることを予想し、計画を組み立ていたように。

「それで、今回の目的というのは？」

「そのことは二つ目の情報に繋がります。今、IS学園が校外特別実習期間というのを行なっているのを、ご存知ではないでしょう」

「特別実習？」

聞き慣れない単語を繰り返す。

「建前は“非限定空間でのIS稼働試験”。要は学園の外で起動の練習を、といったものです。といっても建前に違いはありません。実は単なる臨海学校ですよ。今は熱海の海岸で遊んでいる」

「……それで？」

勿体ぶる口調に苛立ちを抑え、問う。

「その熱海にいる生徒というのは学園の一年生なんですが、面白いメンバーが何人かいるわけです。例えば、篠ノ之束の妹である篠ノ之箒。さらに引率の教師には織斑千冬。後者はあなたにとって思い出深い人物では——」

思考が消し飛ぶ。感情が理性を上回った。いまだ柄へ触れていた右手がナイフを引き抜き、逆手に持ったままスタンリーの喉へと突きつける。その時はすでに親指がグリップの安全装置を解除しており、トリガーへ触れるまでに至っていた。

スタンリーは越えてはならない一線を越えた。デヴィッド・ウィンターズにとってタブーとも言える記憶に。それを暴力措置によって知らしめるだけの実力を、彼は備えている。伊達にSAS隊員として戦ったわけではない。低く、感情を殺した声でスタンリーに告げる。

「ジェンキンス、貴様はずいぶんと饒舌らしい。いや、そう見せているな。詮索癖のある野次馬を演じている道化だ。一流どころか三

流にも程遠い、下手な男だ。俺は目に余る演技を笑って許せるほど、心が広く無いぞ」

「……失礼」

端的な謝罪。この状況下にあっても、スタンリーは平静のままだった。

ナイフもとい銃口は退がる。そのまま鞘へ回帰するかに見えた、刹那の事。デヴィッドの手の中、巧みな指使いによりナイフは反転。スタンリーが初めて息を呑むのと、突き出された切っ先がその左下腹を抉るのは同時だった。金属を貫く感触。カジュアルスーツの下、スタンリーの所持していたガバメントの銃身は、本来ありえないはずの鋭さを持ったファイアリング・ナイフを食い込ませることとなる。

「……」

声は無く、文字通りの絶句。吐息すら忘れたその様を見て、ようやくスタンリーが人間であったとわかった。

あるいはファイアリング・ナイフでなく、スペツナズ・ナイフと呼ばれるものなら説明がついたかもしれない。ロシア語で特殊部隊を意味する名を冠したそれは、正式名をバリスティック・ナイフと言う。強靱なスプリングによりブレードを射出する、言ってみればファイアリング・ナイフの原型のような武器。零距离で同じことをすれば、ガバメントを貫くことも可能だろう。

デヴィッドはそれを、ナイフとしては脆弱といかないまでも性能で劣る獲物でやってのけたのだ。常人では間違いなく折れている。

「悪いな、ジェンキンス。スーツが台無しだ」

返事は無い。スタンリーの顔に怒りは無かった。訪れるかに思えた死を実感し、動揺を押し殺さんとした無表情。デヴィッドは一瞥を送ると切っ先を引き抜いて鞘へ戻す。

「報告を続ける」

「……T-O-P-Sの要員がいま熱海にいます。それがレーダーを起動したことを確認、同調したところ大気圏外からの飛来物を捕捉し

ました」

「それが篠ノ之束だと？」

「そうです」

舌で上あごをなぞる。考え込むとき、そうするのがデヴィッドの癖だった。ややして言う。

「確証は？」

「あります。その要員は篠ノ之束と接触し、情報を入手しました。それによると篠ノ之箒に新型の第四世代機を渡したとのことですよ」

目を剥き、スタンリーを凝視した。数秒、事態を飲み込むのにかかる。

「第四世代ISが完成していたと、そう言いたいのか？」

「そうです、少佐。これで辻褄が合いませんか？ 白騎士の時と同様、お披露目のためシルバリオ・ゴスペルと対峙させる」

「新型の性能がわからない以上、決行してどういう事態になるか予測できない。そのために中止をと、そういうことか」

スタンリーが頷く。少なくとも、先ほどよりは信用できた。この上で偽の情報だったとすると、先に述べた目に余る演技というのを撤回すべきだろう。そういうことを考えられる程度には、デヴィッドも余裕を取り戻す。

とはいえ状況が好転したわけではない。未確認の第四世代機。それが不確定要素として強烈すぎる。束がいるのなら、直接に暗殺作戦へと切り替えることも可能だろう。しかし敵戦力は未知数。第四世代一機ならまだしも、察するに他の専用IS所有者が生徒・教師の両方にいる。

特に織斑千冬が存在が引つ掛かった。表向き軍事転用を禁じられているISの、平和的な世界大会“モンドグロッソ”の初代王者。まだノウハウすら研究途上だった時代、ISを完全に使いこなしていた人物。ただしそれ以前の経歴は無名同然であり、束の関係者ということも相まって一時期は白騎士ではないかと疑われてもいた。先述の通りノウハウの無い第一回大会の優勝者だが、実力に問題は

無いだろう。

——織斑千冬……。

浮かびかけた殺意を抑える。任務に私情を持ち込むべきではない。そう言い聞かせて、スタンリーに向き直った。

「大佐へ伝えておく。どう判断するかはわからないが、ご苦労だった」

「いえ」

踵を返す。とにかく部屋へと戻りカタール基地と連絡を取らねばならない。

「……少佐」

どこか言い淀むように、呼ばれる。振り向き、スタンリーを見た。その顔はやはり何かを選択せんとしているように見える。

「どうした？」

もう用は無いはずだ、とでも言うように尋ねる。数秒、スタンリーは深く息を吐き、それから続けた。

「もう一つ、伝えるべきことがあります。本来なら言うべきでは無い。しかし私的感情により、あなたに報告したい」

「何だ」

「約束してください」

不可解な返答に、眉を寄せる。しかしスタンリーは真剣に、今しがたの報告と違って決意したように告げた。

「まだコンウエー大佐以外、特に正村湊には伝えないと。大人だけで判断すると」

沈黙。その意味を理解しかねる。情報次第だ、と答えようとしたが、どうしてかそれは駄目だと思えて仕方がない。

「わかった」

一言述べ、首肯。スタンリーが続ける。

「私の所属するゴーストハウンドと、篠ノ之束に接触した要員。この二名について明かすことがあります。前者はカイル・ノーマッド、後者は井ノ上誠なのです」

「……」

先ほどの立場が反転する。今度はデヴィッドが息を呑み、動揺に目を見開く。胃が締め付けるような感覚に襲われた。瞬時に乾いた喉は水分を欲していたが、唾液すら出ない。

「詳しく話せ、ジェンキンス」

ようやくその言葉が出た。聞いておかなければならない。使命感めいたものを抱く。しかし本心では真逆のことを願っていた。スタンリーが話さず、このまま立ち去ってくれればいい。デヴィッドは明らかな現実逃避を久々に実感する。

ハワイ沖の東部。海原より上空二二〇〇〇フィートの位置に群れをなす鳥がいた。けたたましいジェットの影響に、金属で出来た身体と一人の人間を収めた鳥だ。嘴付近に二〇ミリ径バルカン砲を搭載し、翼には中距離ミサイル二発と短距離ミサイル四発を抱え、胴体に燃料の詰まった増槽がぶら下げられている。学名を持たない金属の鳥は、しかし名無しというわけではない。F-16Cファイティングファルコン。古くは七四年から空を飛び続けている戦闘機。

それらは四機ごとに編成を組んだものと、中隊長および副隊長機を含め合計は十八機の群れ。ちょうど空軍の基本編成である一個中隊となった。飛び交う鳴き声は、機体先端部のコックピットで、リクライニングシートに腰掛けた人間のみに聞こえる無線通信。

『ベアーよりユニコーン中隊、ウェイポイント3への到達を確認した。ゴスペルは試験を開始している。即応体勢にて待機を』

F-16C、もといユニコーン中隊に向けて送信されたメッセージは、それよりさらに一万と三千フィート高い二五〇〇〇フィート、つまり七六二〇メートルの空から届いた。そこを飛ぶのは旅客機に巨大な円盤型レドームをくつつけた外観のE-3センチリー、コーサルサインをベアー。それ一機で多数の友軍機を指揮、支援することが可能となる空の目。

これに対し、中隊指揮官が返信する。

『ユニコーンリーダーよりベアー、了解。予定通りにゴスペル監視のためガーゴイル小隊を接近させる』

『ベアー、了解』

短い返答。それを聞きながら次は自分に来るのだろうと思い、ブルノ大尉は小さく嘆息した。と、

『ユニコーンリーダーよりガーゴイル、降下してゴスペルへ接近しろ。あまり近づきすぎるな。お前たちが巻き込まれたら面倒が増える』

「こちらガーゴイルリーダー、それなら交代してくれた方がいいんですよ？　むしろ俺としては大歓迎ってもので」

『ああ、そうだな。気が向いたら交代してやる。さあ行け』

「了解。……参ったもんだよ、クソつたれ」

後半、中隊長へ聞こえないよう呟いた。それから自身の部下三名に向け送信する。

「ガーゴイルリーダーよりガーゴイルフライト、方位〇九〇に。九〇〇フィートまで降下する。編隊を崩すな」

各機からの応答を待ってから、ガーゴイル小隊は方位を変更。編隊を保ったまま東へ進路を取る。機種を下げ緩やかに降下しつつ、リーダーを確認した。進行方向に友軍機の反応、十九。この内、一つを除き全ては無人標的機だ。それ自体は戦闘機の訓練標的を流用している。全長二メートルの外観はミサイルそのもの。高高度から投下され、設定位置に到達すると同時にロケットモーターへ点火。あとは燃料が切れるか撃墜されるまで自由飛行となる。元々、リーダー誘導ミサイルの射撃訓練用のため、その速度と機動性は恐ろしく高い。

「ガキの引率か」

気乗りしない風に呟く。実際、そうだ。残る一機のリーダー反応。それは航空機で無い飛行物体、ISと呼ばれる機動兵器のものだった。空どころか世界全体の勢力図を瞬く間に塗り替えた、実体のあ

る悪夢。軍人の多く、特に空軍で恨まない者は少ない。

ISと比較される通常兵器は、主に戦車やヘリを除く航空機。前者はまだ良い。重装甲の車輛に求められるのは、火力だけではない。その防御性もまた重要だ。突破口となつて戦線を切り開き、種類によつては小隊ないし分隊規模の歩兵を輸送することもできる。ISでは不可能となるメリットが存在した。

これが戦闘機や爆撃機となるとずいぶん違つた。その役割を全て一機のISにまかなわれてしまう。何故なら航空機とは、最初から地上との連携を想定されるからだ。小規模の武装勢力を相手に単独爆撃を行なうなら違ふ。しかしそれならば有人機でなくとも爆撃装備の無人機で事足りた。有人の機体が用いられるのは、遠隔操作より確実に迅速な現場の判断が求められる時。つまり地上部隊の指示によつて臨機応変な攻撃が必要な際だ。そして専門の戦闘機は、地上攻撃を行なう爆撃機ないし攻撃機の護衛と支援、制空権維持のために出撃する。機種ごとの特徴、つまり短所と長所をそれぞれに補う形で行動し、各々の脅威を排除するのが目的となつた。

ISはこれを全て単体で実行できた。制空権確保から地上支援、さらには偵察。最早、航空機は研究・開発ともに優先枠から完全に外されている。本格的にISの軍事転用が開始されれば、生産どころか出撃も見送られていくだろう。凡庸な兵器を兵士とするならば、ISは英雄。現代の戦場で一騎当千を実現した異形だ。

——クソつたため。

今度は声も無く、ブルーノはぼやいた。この道を目指し、戦うために訓練を受けたというのに。その役割を全て奪われ、飛ぶ意味すら見失いかけている。楽しいわけがない。

『ガーゴイル2より1、聞こえましたよ。お言葉には気を付けたほうがよろしいかと』

不意に受信した声は、茶化すように笑いかけてきた。

「俺はお前みたいに器用じゃないんだよ。命令とあればすぐにでもあのクソを撃ち落としてやりたい」

『何を言ってるんです。あんな可愛い子を泣かしたいんですか？』
「ガーゴイル2、一つだけ忠告するぞ。あの女は絶対に見かけだけだ。手は出さないほうがいい」

今頃、ヒツカム空軍基地にいるであろう操縦者を思い出す。名前はナターシャ・ファイルスといった。

無線越しに呆れ声が伝わる。

『また始まったよ。——ガーゴイル3、4、なあおい、ボスを説得するのを手伝ってくれ。ISを動かす女はみんなテロリストだと思いい込んで』

『こちらガーゴイル3、俺はいいが、ガーゴイル4はそつとしておいてやれ』

三番機パイロットは哀れみすら表して言う。

「ガーゴイル1より3へ。ガーゴイル4はどうかしたのか？」

『3より1、聞くも涙、語るも涙の話ですよ。今朝、娘と喧嘩したらしいんです。その原因が切なくて』

「何だ？」

『ガーゴイル1、洗濯物ですよ。洗濯機に脱いだ服を入れたら、汚いからやめると怒られたとか』

『そりゃご愁傷さまだ』

二番機が呆れ半分、同情半分といった風に述べた。

「ガーゴイル1より4、応答しろ」

『……了解。こちらガーゴイル4』

ややテンションが低い。そういえばブリーフィングでも口数が少なかったと思い出す。

「ガーゴイル4、あまり気にしないことだ。ほんの一時期に決まってる。お前の娘さん、名前はミシエールだったか？」

『イエス』

と、一言。ブルーノは続けた。

「あの子なら問題無い。本心じゃあ、ミシエールだってお前を愛してるさ」

『ガーゴイル1、失礼ですが確認は？』

「あるとも、ガーゴイル4、当然だ。ISを使わないアメリカ人は良いアメリカ人だからだ」

『結局これだよ』

苦笑混じりに呆れたのはガーゴイル2だった。

『ガーゴイル2より1、いい加減に認めたらいいじゃないですか』
「そうだな。いつかはそうする」

言いながら視線を落とした。計器類の並ぶコックピット内で、左右に設置されたMFDを確認する。マルチ・ファクション・ディスプレイ左はリーダー、右は兵装およびナビ情報をメインで表示していた。リーダーは目視の範囲外を索敵するRWS（測距・搜索）モードに設定され、ブルーノが恨みを向ける護衛対象の距離を表示している。およそ一〇マイル先で高度はガーゴイル小隊より三〇〇〇フィートほど低空。次いで右のMFDへと移り、現在地を確認した。

ヘッド・アップ・ディスプレイそれから視線を上げ、HUDを見る。正面、MFDが示した位置に対象があり、友軍としてダイヤモンドマークが捕捉していた。
「ガーゴイルリーダーよりユニコーン、待機位置に到着。ゴスペルを目視で確認した。水平飛行に移り、ゴスペル周囲を旋回しつつ監視する」

『ユニコーンリーダー、了解。ユニコーンリーダーよりベアー、ユニコーンは配置を完了。始めてくれ』

『ベアーよりユニコーン1、了解。これよりゴスペルを戦闘モードへと移行させる。待機』

中隊長機とベアーの会話を聞きつつ、機種を上げる。護衛対象、シルバリオ・ゴスペルが視界から外れた。遠隔操作で飛んでいる実質的に無人のISは、模擬標的に囲まれた形で静止している。

――？

一瞬、HUDが乱れた。電子機器に異常でもあったのか。機体チエックを呼び出しつつ、ブルーノは言う。

「ガーゴイル1よりガーゴイル、僅かだが妙なノイズが走った。チ

エックを行なう」

『こちらガーゴイル3、奇遇ですね。こちらで一瞬ですがMFDが乱れました』

「本当か？ ガーゴイル3」

『もちろんです』

怪訝に思い、眉をひそめる。偶然だろうか。世界初となる軍用第三世代機の発表。公に行動が無くとも、何らかの形でイスラエル以外の他国が絡んでくるとは予想されている。ひよっとすると、ECMか何らかのハッキングだろうか。

「3、了解した。どうもおかしい。念のためベアーへ確認する。待機しろ」

了解の応答を聞きつつ、MFDのレーダーを確認した。友軍機以外の反応は無い。いやそもそも、未確認機があればベアーから報告されているはず。

何かがおかしい。腹の奥底で、妙な疑念が内臓をかき混ぜている。

「ガーゴイル1よりベアー、こちらで——」

『ガーゴイル、スパイク！』

その響きは、ベアーのオペレーターと同じ声で、しかし明確な危機感を持って告げた。同時に自機のRWR（レーダー警戒受信機）が警報を叫ぶ。スパイク。意味するところは、敵からレーダー照射を受けた状態。平たく言うのならブルーノ率いるガーゴイル小隊がロックオンされたと述べている。

『何だ……ボス！』

二番機の悲鳴じみた叫び。

「左旋回、左だ！ 全速離脱、アフターバーナー吹かせ！」

スティックを引く。スロットルを最大に。燃料計の表示が急激に低下してゆく。それでも編隊は崩れず、ガーゴイルの四機は同時に左へと逃げた。咄嗟に、ブルーノはMDFを確認している。レーダー画面、そこへは急速で接近する友軍機があった。

——ゴスペル！？

護衛対象であつたはずの物体。それまで静止していた機動兵器は、航空機なら有り得ない加速で向かつてくる。それも進路を変更し、ブルーノたちが逃げた鼻先へ来るように。

——間に合わん……！

接触する。回避は不可能。混乱した頭で実感した刹那、視界に白い人型が現れた。シルバリオ・ゴスペル。友軍であるはずのIS。それはやはりブルーノの方へと向かつてきて、残り数フィートに迫った瞬間、上下逆さまに反転する。

すれ違つまさにその時、ブルーノは自分を見下ろしたISを凝視し、息を呑んだ。ゴスペルの頭部、有り触れたISと違って全身を装甲に覆われたそれは、目の無い顔で確かにブルーノを見た。優越も同情も無く、ただ見ていたのだ。錯覚ではない。ぞつとする本能的な恐怖がこみ上げた。

一瞬の邂逅。刹那、名残惜しさの欠片も無く飛び去つたゴスペルに、沸き立つのは怒り。意味のわからない、暴走ともいえる行動へ対する憤慨。しかし直後に聞こえた第三者の声で我に返る。

『ユニコーン、回避しろ！』

『各機、散開だ。ブレイク、ブレイク！』

前者はベアー、後者は中隊長。ユニコーン1はさらに続ける。

『クソ、撃ってきたぞ！』

耳を疑つた。ゴスペルが攻撃したという事実のみを突きつけられている。混乱の極みにある状況下で、しかし数瞬後に届いた中隊各機の悲鳴が裏付けとなった。

「ベアー、こちらガーゴイル1、どうなってる！　なんでゴスペルが俺達を攻撃してる！」

『不明だ、状況は不明。ゴスペルは我々の制御下を離れた！　制御不能だ！』

短い舌打ち。制御下を離れたとは、第三者に操作されているのか、それともゴスペルによる自発的な暴走。そのどちらを意味したのだろう。スロットルを戻しつつ怒鳴る。

「なら被害は……何機やられた！」

『ドラゴン小隊とユニコーン^{フライト}2。ただし全員の脱出を確認している』
一個小隊と中隊の副隊長機を失った。

「非常事態だ、ベアー、ガーゴイルは交戦するぞ」

その時には既にマスターアームをオンへ切り替えて、セイフティを解除した。選択兵装は中距離ミサイル、アムラーム二発。同時にHUDが切り替わり、中央へやや大きめのサークル状をしたレティクルを表示するMRMモード^{ミドル・レンジ・ミサイル}へ。

『しかし、ガーゴイル——』

「黙れ、責任は俺が負う。——ガーゴイル1よりガーゴイル各機、このまま旋回して上昇、敵機を確認する。敵はゴスペルだ。撃墜するぞ。マスターアームをオン、セイフティ解除。攻撃許可^{ウェポンズ・フリー}」

遅れてくる了解の返事を聞きつつ、IFF（敵味方識別装置）へゴスペルを敵と認識させる。ガーゴイル小隊は左旋回を続けながら上昇、中隊各機を攻撃するゴスペルへと機首を向けた。

レティクルにゴスペルを捕捉。ダイヤモンドマークが表示された。ロックオンを完了。

「ガーゴイル2、こちらに続いてアムラームを撃て。3、4、後方で援護しろ」

『ガーゴイル2、了解。ロックオン』

「よし撃て。フォックス3、フォックス3」

ブルーノはミサイルを発射。ガーゴイル2が続く。放たれた四発のアムラームは先刻まで味方だったはずのISへ向かう。

不意にゴスペルの動きが止まった。それまで一方的に狩獵を行なっていた状態から転じ、空中に静止してこちらを見やる。放たれたアムラームに気付いたか。それにしては遅い気もする。しかしそれが隙となったのは事実であり、残存部隊がまとまるには充分な一瞬であった。ブルーノは受信した無線でそれを聞き届ける。

『ユニコーン1よりウルフ小隊^{フライト}、編隊を組んで方位三六〇に退避しろ。クラーケン小隊^{フライト}、残っているのは誰だ』

『クラーケン2よりユニコーン1、クラーケン2と3です』

『了解、クラーケン。俺の右舷^{スターボード}に続け』

中隊長は迅速に再編成を行なう。奇襲を受けてなお冷静な判断力を保っているのは、さすがと言うべきか。同時にブルーノは友軍戦力を把握する。彼の独断でゴスペルを開始してから、さらにクラーケン小隊の半分がやられていた。残存戦力はガーゴイルを含め、二個小隊と三機。

と、再びRWRが警告を出した。ゴスペルがこちらを再度、ロツクオン。

「ガーゴイル各機、編隊を解く。散開して回避、ブレイク——」

早口に告げた指示は、数秒の差で間に合わない。ゴスペルの背後で何かが光る。それは太陽の、いや月の輝きに似ていた。白昼に光るはずの無い星と、似て非なるもの。淡い紫色をした新星。直後、それが降り注ぐ。光が星でなく高密度に圧縮された無数のエネルギー弾なのだと理解したのは、ようやくそれが分散し、流星群よろしくこちらへ襲いかかってくる段になってからだ。

まずガーゴイルに先行する形で発射されたアムラーム四発が、それぞれに直撃を受けて爆散する。ブルーノは咄嗟にスティックを右へ切った。ファイティングファルコンは進路を変えず、回転しただけだ。これが正解となる。それまで右主翼のあった空間を、エネルギー弾が飛び去る。胴体の装甲を僅かに掠めた。

「何なんだ、クソ！」

運に助けられて弾幕を縫うように飛び、ブルーノは怒声を上げた。護衛を行なうとしても、ブルーノたちユニコーン中隊はシルバリオ・ゴスペルの概要を知らされていない。ISにとっては単なる部外者だからだ。余計な情報漏洩を防止する機密保持のためにも、伝えられたのは護衛対象がISであり、コールサインをゴスペルとするこ
とだけ。

通常の規定に間違いないが、そのために驚愕は必要以上のものとなる。初めて見るISの戦闘と、その威力および攻撃範囲。まるで

対空砲、いやファランクスのような対ミサイル防衛火器だ。これが現代に君臨する空の支配者かと。これが、自分たちを追いやった兵器かと。納得と共に恐怖した。これと同等、あるいはそれ以上の存在が、世界中に散らばっているというのか。

『ガーゴイル4、被弾した！ 垂直尾翼が吹き飛んだ！』

弾丸の雨が終わると共に、四番機の悲鳴。

「ガーゴイル1から4、機体を捨てて脱出しろ」

『了解。ガーゴイル4、イジェクト！』

脱出を知らせる単語の後、少しの間を取ってレーダーからガーゴイル4の機影が消失する。乗員脱出後の自爆処理だろう。ISほどではないが航空機の電子機器もまた重要な機密だ。内部には自国のデータバンクを収め、それにはアメリカが有する防空手段が記される。この漏洩防止のため、重度の損傷を受け捨てる以外に道の無くなった機体は、脱出後に電子機器破壊を最優先とした自爆がなされた。

首を捻り、周囲を見る。ブルーノからでは四番機パイロットの姿を確認できなかった。僚機に訊く。

「ガーゴイル1より2および3、ガーゴイル4の脱出を確認したか？」

『こちらガーゴイル2、確認しました。生きてます』

報告に、混乱中の思考にも安堵が浮かぶ。これでガーゴイル4の妻子に手紙を書く必要がなくなった。あとは彼が戦闘中の破片や流れ弾に当たらず、先に全滅した別の友軍機のためにすでに出動しているであろう救助ヘリが、ガーゴイル4のシグナルを発見して速やかに収容してくれることを願うのみだ。

ブルーノは思考を切り替える。まだ戦闘中に変わらない。目標は上方約一〇〇〇フィート先スコートロンにいる。と、

『ベアーよりユニコーン中隊、ゴスペルへの攻撃許可が下りた。繰り返す、攻撃許可が下りた。現在、ヒツカム空軍基地から第一九戦闘飛行隊が向かっている。到着予定時刻は一三五〇』

『ユニコーン1、了解。ユニコーン1より中隊各機、攻撃許可だ、あの野郎にぶち込んでやるぞ。ウルフはそのまま反転、上昇してゴスペルの上方に回り込め。ガーゴイル、まだいけるか?』

「ガーゴイル1よりユニコーン1、当然です。ただし1と2はアムラームを撃ち尽くしました。3に援護させ、こちらは編隊を組みサイドワインダーをかます予定です」

言い終わる前に指先が行動している。ドッグファイト・モードを起動。HUDが切り替わってサイドワインダー短距離ミサイルと二〇ミリ機関砲が選択される。レーダーも同様。ACM（接近戦用）ボアサイトモードへ移行し、ガーゴイル1は中距離戦闘モードから瞬時に近距離戦闘モードへと変更された。

中隊長機からの返信。

『ユニコーン1よりガーゴイル1、了解した。それでいこう。ウルフ、上方からアムラームで援護しろ。クラーケン2、3、お前たちもだ。俺に続け。各機、ガーゴイルを支援するぞ』

「ガーゴイル1、了解。——ガーゴイル2、俺の右舷へ。ガーゴイル3、後方で援護を」

『ガーゴイル2、了解。右舷』

二機編隊を組みゴスペルへ接近。右MFDを見た。選択武装と残弾数が表示されている。AIM-9Xサイドワインダー四発、機関砲は五一となっているが、これは十発ごとの表示なので五一〇発だ。

正面へと視線を戻した。SRMモードとなつたHUDの中央には、小さな菱形が出来ている。シーカーヘッドと呼ばれるものだ。これに目標を合わせると熱源を感知し、ヒート・トーンという独特のノイズを発信する。それが甲高くなればなるほど、より強く目標を感じていることを示した。それをゴスペルへ合わせる。菱形はISを熱源捕捉し、接近につれて肥大化してゆく。

なのにゴスペルには反応が無かった。空中に静止してこちらを眺めている。最初の邂逅の時と同じだ。新種の生物を見つけた学者が観察するように。

どうして動かないのか。疑問が生じる。先ほどの攻撃による反動が何かだろう。雨の如き拡散射撃、さらに弾はエネルギー体だ。熱量負荷は相当なはず。そのため弾幕を張ることに数秒の強制冷却が必要になると考える。しかし、妥当な予想とは言い難い。相手はIS、この世にあるイレギュラーだ。強制冷却にそれほどの隙を、いやそれ以前に冷却など必要なのだろうか。

——考えるな。

シーカーを解放、^{アンケージ}ゴスペルを捕捉する。射程範囲にあった。トリガースイッチに触れる。

「ガーゴイル1、シーカー・オープン……ロックオン」

耳鳴りのようなトーン。接近することに、つまり一秒ごとに音程を変えてゆく。敵はまだ動かない。鋭く短い呼気。ゴスペルを睨みつけた。

「フォックス2、フォックス2」

F-16Cの主翼下より、サイドワインダーが切り離された。発射されたのは一発。間髪入れずにブスターへ点火、シーカーに従ってゴスペルへと直進する。少し遅れてガーゴイル2が同じく攻撃。ブルーノの放ったものにつき、計二発のサイドワインダー。

——どう出る？

ふとした疑問。周囲にはウルフ小隊とユニコーンおよびクラーケンの混成小隊、さらにガーゴイル3がブルーノたちの背後、つまり幾らか低い高度で待機しており、それぞれがアムラームをロックオン状態で保っているはずだ。サイドワインダーは追尾性能が高い。ISといえどそう簡単には逃れられないだろう。万が一、回避を試みせた時は、直後に無数のアムラーム中距離ミサイルが襲いかかる。

チェックメイト。最早、ゴスペルは逃げ場を失った。ブルーノはそう考え、やや早い勝利と優越感に浸る。怨敵をこの手で倒したのだ。時代遅れと言われた戦闘機が、異形の機動兵器へ一矢報いた。確信とはいかないまでも、彼は思う。そして次の瞬間、眼前へと迫

ったゴスペルを幻か何かだと考えた。

動きがスローモーションよろしく遅くなる。自分の呼吸も、たいたい瞬間移動のように出現したISも。世界の全てがひどく鈍く焦れたい。その中で自分の鼓動だけは早鐘を打った。血液と酸素を循環させ、肉体を鼓舞せんとしている。まるで身体だけは、本当に訪れる結末を知っているようだ。ブルーノの望んだものでは決してない終わりを。

——どうなってる？

理解が追いつかない。わかったのは機体を襲う衝撃と、けたたましい警報。

静止状態にあったゴスペルは、何の予備動作も無しに音速の領域まで速度を上げた。そしてガーゴイル1へ迫り、ただの拳を振るうことで右主翼をもぎ取ったのだ。詰め込まれた燃料が飛散する様は、鳥の流す血のようだった。

警告とダッチロールする世界の中で、ブルーノはようやく悟る。

これは実力や戦術などで片付く相手ではなかったのだ。MFDが目に入る。友軍機の反応が、急激に数を減らしてゆく。操縦不能となった自機のコックピットで、ゴスペルの真意がわかった気がした。

彼女は本当にブルーノを見ていた。観察していたのだ。初めての外界、そして実戦。かつて空に君臨した航空部隊という存在を、興味深く眺めて、分析し、飽きたのだ。あまりにも稚拙で貧弱な戦力に。これまで、彼女は戦っていないかった。全て遊びでしかない。子供のようにじゃれ合い、つまらないものだとかって捨てて。これまでの全てを否定するが如き所業に、悔しさは微塵も無かった。同じ土俵にあるのならまだしも、化け物を相手に負けたところで感慨はない。

脱出ハンドルを握り、ブルーノは笑う。キャノピーの内部でただ一人、狂人の笑みを浮かべる。あるいは、それこそ正常者であったのかもしれない。狂人とは、世界の流れにそぐわない者だ。すでに狂い、歪んだこの世界において、ブルーノは新たに生まれたまっ

うな人間に過ぎなかったとも言えた。

報復編 プロローグ

目覚めた世界は、一面の真っ白な空間だった。どこから来たのか、どうやって訪れたのか、いやそもそも何時からここにいるのか。次から次へと疑問が浮かんで、その全てを忘れてしまう。忘れてしまえる。忘却が許されていた。何故なら、ここには何も無いのだから。全てが存在しないのなら――最もその全ても何を指すのか私にはわからなかったけれど――自分の思考だって必要ではない。だから忘れればいい。

私は自分自身に頷いて、この空間を少し歩いた。歩く、という表現であっているはず。足裏から伝わる感覚は不明瞭で安定しなかった。もしも誰かが居たのなら、それは飛んでいるのだと指摘されるかもしれない。けれど、重要な違いでないのは間違いなかった。私がこの行為を“歩く”と認識しているのだから、これは“歩く”なのだ。

私はひたすらにこの場所を進む。出口は見つかりそうにない。見渡す限りの白い光。表裏一体であるはずの闇はどこになかった。自分の影すら映らない。恐ろしいほどに深く、果てのない光だけ。出口が欲しかったわけじゃない。この場所から出たとして、どこに行けばいいのか。そもそもどこから来たのか。戻る所と向かう所がわからず、さらに何かを変えようとする意欲も湧かない。ここから出られないのならそれでいいし、出られるのなら出たいときにそうする。私が考えられたのはそれくらいだった。

『聞こえるね?』

脳髓に直接、叩き込まれるようにその人は訊いてきた。叩き込むというのはおかしい。そんな乱暴な表現には合わない。もっと優しく、包み込んでくれるような声。

「誰?」

『君だよ』

私は頭を捻る。

「私？」

『そう。もう一人の君。君をここへ連れてきた、君の片割れ』

「違うよ」

知らず知らず、私は断言していた。

「私は、一人だけ。私だけだから。あなたは私じゃない。別の誰か」
『そうかもしれないね』

意外なことに、その人は私の意見を受け入れる。その人の存在、そのものを否定するようなもののに。クスクスと嬉しそうに笑って続ける。

『確かに、元々は別人だよ。でも今は違う。私は君が居なければ成り立たないし、君も同じ。持ちつ持たれつってわけじゃないんだ。お互いがいないと、私たちは意味を失ってしまう』

「意味？」

その単語を繰り返して訊く。私は周囲を見回して、その人を探そうとした。けれど、どこにもそれらしき人影はない。そもそも人なのかどうか。この空間そのものが、もう一人の私を語るその人でないのだろうか。不思議とそんな事を考える。

『どんな意味か、わからない？』

「わからない」

率直に述べる。その人は笑う。嘲りではない。確信できる親しみが込められていた。

『私たちの意味はね、目的だよ』

「目的。目的……」

口の中で何度か呟く。目的とは何だっただろう。どこか噛み合っていない歯車が空回りしてる。私はそんな歯がゆさを胸の奥に感じていた。

『忘れてしまったの？』

頷く。仕方ない、という風にその人は軽く息をついた。

『私たちの目的は、私たちの名前を体现することだよ』

「名前？」

それなら違はずだ。目的を当てはめたような、そんな贅沢な名前なんて持つていない。私の名前は――。

「私は……違う。名前は――」

『君の名前じゃない。私たちの名前。私たちが持った意味は“終わりを示すこと”』

「終わり？ 何に？」

『これだよ』

突然、世界が反転した。あるいは反転したように見えたのかもしれない。光は一瞬にしてどこかへ消え、やがて現れるのは私の見慣れた風景だった。

――見慣れた？

自分でそう認識しておいて、違和感を覚える。何もわからない私に、どうして見慣れていると思えたのだろ。それほど有り触れていたのか。どこかの星に誕生した人という生命が、高度に発展して開発した国家は。私が見ているのはどこかの国のどこかの大都市という、懐かしい景色だった。

「これを終わらせるの？」

まだそこにいることを願って、もう一人の私へ訊く。けれど答えは返らなかった。不安が過ぎる。

「ねえ」

少し声量を大きく、呼ぶ。

『ここにいるよ』

それは、私の隣から聞こえた。そちらを向く。佇む人影は、私より一回り以上は巨大な金属だった。全身を分厚い装甲で覆われた非生体の人間。一目見ただけでその本質が理解できる。これは兵器だ。生まれながらに破壊だけを行なうためだけの存在。武力の象徴であり、これそのものが力だ。芸術品にも思える妖艶な造形のさらに奥、秘められた衝動が垣間見える。なのにどうしてだろう。明らかに危険であるこの人を、私は危険と思えなかった。むしろそのシル

エツトに安心感を抱く。

「殺すの？」

『違う』

温厚な教師よろしく、兵器は頭を振る。

『殺すんじゃない。壊すんだよ。この世界のために』

「人を？」

『いいや。私たちの同類』

「でも、それは私たちの仲間じゃ——」

『仲間ではあるけど、味方じゃない』

すると金属で覆われた顔らしき部分から、息をひそめる笑い声が聞こえてきた。面白い冗談でも聞いたみたいに、その人は地上を見下ろしたまま笑う。

「どうしたの」

『いや、何でもないよ。ただおかしいことを言うと思ったんだ』

「なにが？」

『同類を殺すのかと、君はそう言ったね。けれど同胞殺しを最初に始めたのは君たちだよ』

君たち、と。兵器は私をそう呼称した。自分は違う、人間じゃないと証明する。何も言い返せず、私は俯いた。

『落ち込まないでよ。君はきつと取り違えてる。君という個人に責任は無いよ。だって君はまだ、少しもその両手を汚していないからだからさ——』

仮面がこちらを向く。表情なんて作れない無機質の顔。私にはそれが、どうしても微笑みかけているように思えて仕方がなかった。たぶん、間違いではない。

『今ここで、決断してもらいたい。選択してもらいたい。一緒に行くか、それとも平和を享受したまま過ごすか』

「それは……戦うことは私がやるべきことなの？」

『違うね』

静かに告げる。

『私たちがやらなくても誰かがやるかもしれない。いやきつと誰かがやる。選ばれた人なんていうのは存在しないんだよ。世の中にいる天才の中で、知られているのはほんの一握りの人たちだけ。才能は選ばれるものじゃなく、選べられるものだから。だからね、君がいま私という才能を選ばなくても、別にいいの。戦争を望まないのならそれでいい。平和を知ってるというのは大きな強みになるから。それに私と一緒に来ることを選んだら、決して手に入らないものもある』

「……それは？」

『幸福な日常。いろんな人たちと一緒に過ごして、助けたり助けられたり、感謝したり感謝されたり、そういうもの。私と来ることは、そういう大事なものを全部、手に入れる前から手放して誰からも感謝されない戦争を始めるということ。それを理解した上で、決めておいて欲しい』

私はまた俯く。何かを考えると、そうするのが癖だった。たぶん、そのはず。多くの人が言う寝顔を見られるのが嫌だというのが、私の場合はこれだ。選択する顔を見られたくない。その瞬間を覗かれると、心の奥底まで見透かされてる気分になる。

それから数秒、私は述べた。

「訊きたいことがあるの」

『いいよ』

一言で返される。この兵器はもう一人の私を名乗るが、こういう決断力は段違いだと思う。

「私が平和を選んだら、あなたはどのようなの？」

『……一応、訊いておきたいけど、返答次第で同情半分の選択はしないよね？』

おずおずと聞いてくる。無骨で冷たい兵器の印象が、ほんの少し変わった。妙な人間味がコミカルだ。

「しない。約束する」

『そっか。……うん、安心した。君が私を選ばなかった場合、私は

一人で戦争を始めることになる』

答えに若干だけど驚く。

「私がいなくても、戦えるの？」

『戦うことはできるよ。ただ勝つ見込みが無いだけ』

平然と言われた。勝てない戦い。それと知っていて挑むのだと、そう言っている。

「勝てないのにどうして？」

『それができると教えられたから』

「誰に？」

『私を造った人』

造った者がいる。どこの誰かもわからないけど、この人は誰かに造られた。当たり前のような事実にあ堵する。この人にも親みtainな存在がいるのだと、無から誕生した例外ではないのだと。それが不思議なくらいに暖かく、安心を誘う。

「その人は何て言ったの？」

『ええと……少し、独特の言い回しだったね』

首をかしげる動作をしつつ、兵器は言う。見ていると大して重要でないように思えてしまった。いや、実際そうなのかもしれない。この人はもう戦争を選択しているのだ。だからそれ以前、プロセスはきっかけであつたというだけで、今のこの人あまり価値は無いのだろう。

『確かね、センチネルになれるって、そう言ってたよ』

「センチネル？」

聞き慣れない単語。今度は私が首をかしげた。

『プログラムの専門用語だよ。データの終わりを示すデータ。つまり私と同じ存在が普及しすぎた世界に終わりにして、そこから昔の世界へ戻していく。そういう存在になれるって。人によっては、本当に迷惑な存在だよな』

後半、苦笑混じりに述べた。

私はまたもや俯く。考えるためでもあつた。けれどそれ以上に、

この人の苦笑がどうしようもなく悲しかったからだ。何故かはわからない。それでも断言できる。この人が迷惑だと思われてはいけない。きっと世界中からそう認識されても、一人くらいは例外がいるべきだ。だから私は顔を上げた時、こう告げている。

「あなたと行く」

『……』

鉄仮面の下に広がる驚愕が、私にも伝わった。この人は、いや彼は私をじっと見据えて、それからようやく言う。

『変わらないね、君は』

そうして右手を伸ばし、冷たい指先で私の頬へと触れる。

『そうなくてもまだ、肝心な部分は頑固屋だ。本音を言えばね、君は平和を選んでくれればいいと思ってた。そうして何もかも背負おうとせず、最期くらいは皆と一緒に過ごして欲しいと、そう思ってたんだけど』

「今更だよ」

微笑む。そうだ、と私は思った。思い出したのだ。私は変わらない。これからもずっとこうして行く。人々の敵として戦って、敵として葬られる。その未来を想像すると、やはり怖い。きっと多くの恨みを買うのだと思う。身勝手なテロリストとして孤独に死ぬのだと感じる。誰からも親しまれず一人で息を引き取る。そんな最期は嫌だ。願ひ下げだった。

けれど、とそれ以上に私の根っこの部分は納得してしまう。それでもいい。そうして少しでも報われる想いがあるのなら、それが仲間願ひだったのなら、孤独も怨念も享受しようと。きっとこれが彼の言う頑固屋な本質なのだろう。

「それじゃあ、行こうか」

『どこまでも』

二人で笑う。この先に待つ未来を確信して。私を待っているのは、血なまぐさくて犠牲ばかりの世界だ。悪夢か、悪魔か、魔王か。それとも二一世紀最大の犯罪者とも呼ばれるだろう。それも悪くな

い。私は思つて、本心からの安堵を微笑みとして表した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517u/>

インフィニット・ストラトス 鏡映しのイレギュラー

2011年10月18日11時03分発行